熊本県文化財調査報告　第187集

灰塚遺跡（I）

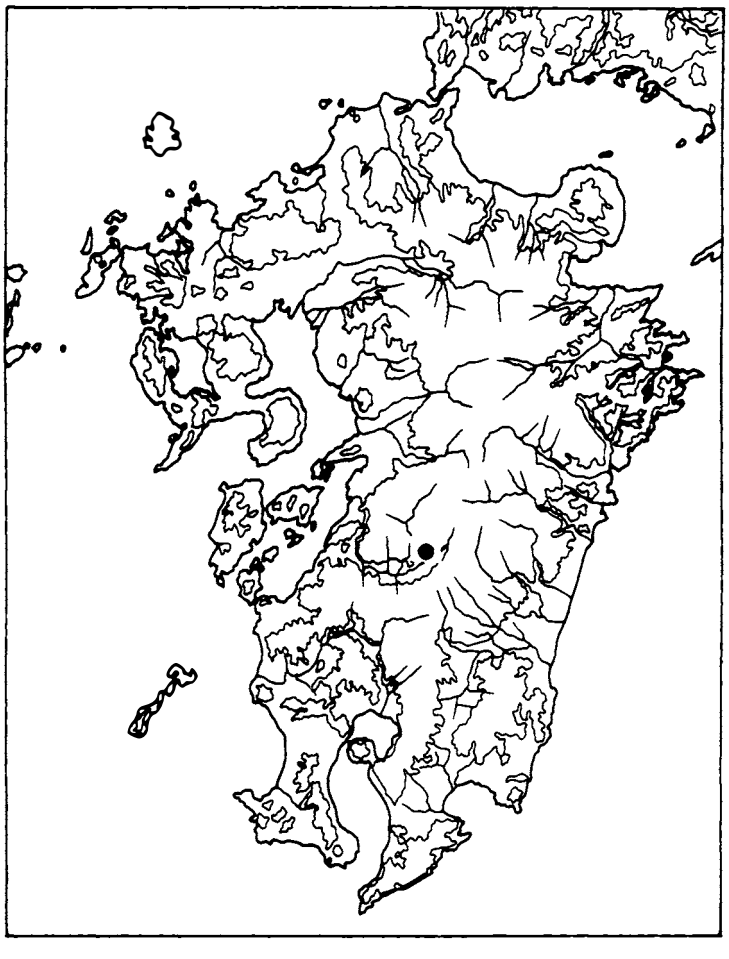
――熊本県球磨郡深田村字灰塚所在の遺跡――

2000

熊本県教育委員会

灰塚遺跡(I)

―― 須恵・深田地区県営畑地帯総合整備事業に伴う文化財調査 ――



2000

熊本県教育委員会

序　　文

今回、発掘調査報告書を刊行しました灰塚遺跡は球磨郡深田村に所在します。球磨郡は県南に位置し、悠久の流れを持つ球磨川はその文化を育んできました。

本書は平成５年度から９年度にかけて県営緊急畑地帯総合整備事業（須恵・深田地区）に伴って発掘調査を実地した報告書です。調査の結果、旧石器～近世の遺構・遺物が出土しました。今回報告するのは主に縄文時代の成果です。約３万点を超える膨大な出土遺物の遺跡で、特に彩色耳栓や異形土器・石器など、当時の精神文化の充実を伺わせます。

今回の成果が学術のみならず、県民の皆様をはじめ多くの方々に広く活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解を深めていただく一助になれば幸いに存じます。

最後に埋蔵文化財の発掘調査に御協力いただいた県農政部・県球磨事務所耕地課・深田村役場・深田村教育委員会、および、地元の方々に対し心より感謝申し上げます。

平成12年３月31日

熊本県教育長

佐 々 木 正 典

例　　言

1　本書は、県営緊急畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査の調査報告書であり、平成５～９年度に実施した灰塚遺跡調査報告の第１冊分で、主に基本土層Ⅳ層出土の遺構・遺物を掲載した。

2　調査は熊本県農政部から委託を受け熊本県教育委員会が実施し、遺物の整理・保管は熊本県文化財収蔵庫で行った。

3　現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは各調査員が行い、遺構実測・遺物取り上げの一部、及び分布図は㈲埋蔵文化財サポートシステムの委託事業とした。遺物実測は井上美保・濱田智美・可児真由美・横山明代・山下義満が行い、石器実測は主として㈱エーティック環境文化研究所の委託事業とし、一部、岩谷史記・山下義満が行った。遺物撮影は福田信子が行った。

4　本書の地形図は県農政部から提供を受けたものをもとにして作成した。また遺跡空中写真は深田村教育委員会より提供を受けた。

5　本書の執筆は下記の者が行った。

木﨑康弘　（第Ⅱ章　第２節）

濱田智美　（第Ⅴ章　第１節　第１・２・７類）

岩谷史記　（第Ⅵ章　第１節）

山下義満　（上記以外）

6　本書の編集は熊本県文化財収蔵庫で行い、山下が担当した。

凡　　例

1　現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。

集石　１／20　　土坑１／20

2　本書作成の際には以下の縮尺とした。

集石　１／30　　土坑１／30

3　遺構の方位は真北である。

4　遺構内での特徴的な痕跡についてはスクリーントーンを使用した。

焼土　火受石　灰

また彩色遺物はそれぞれの彩色をもって表現した。

5　遺物分布図では一括遺物、及びグリット取り上げ等を除いたドット取り上げ分のみを提示した。

6　コンタのレベルは遺物分布の密集地点に設定した。

7　写真のスケールは編集の都合により任意とした。

本 文 目 次

序文　例言　凡例

第Ⅰ章　調査の経過
　第１節　調査に至る過程 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の過程 …… 2

第Ⅱ章　位置と環境
　第１節　地質と地形 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の概要
　第１節　調査の方法 …… 9
　第２節　層位と包含層 …… 9

第Ⅳ章　遺構
　第１節　集石 …… 13
　第２節　土坑 …… 43

第Ⅴ章　遺物（土器）
　第１節　縄文時代早期 …… 65
　第２節　縄文時代前期～後・晩期 …… 126

第Ⅵ章　遺物（石器）
　第１節　旧石器時代 …… 137
　第２節　旧石器時代以降 …… 139

第Ⅶ章　科学分析 …… 181

第Ⅷ章　総括 …… 185

写真図版
編集後記

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図……5
第２図　灰塚遺跡周辺主要遺跡分布図……6
第３図　灰塚模式土層図……9
第４図　灰塚遺跡周辺地形図……10
第５図　調査グリット図……11
第６図　集石遺構配置図……14
第７図　１・２号集石実測図……18
第８図　３号集石実測図……19
第９図　４・５・６・７号集石実測図……20
第10図　８・９・10号集石実測図……21
第11図　11・12・13号集石実測図……22
第12図　14・15・16・17・18号集石実測図……23
第13図　19・20号集石実測図……24
第14図　21・22・23号集石実測図……25
第15図　24・25号集石実測図……26
第16図　26・27号集石実測図……27
第17図　28・29号集石実測図……28
第18図　30号集石実測図……29
第19図　31・32・33・34・35号集石実測図……30
第20図　36・37・38・39号集石実測図……31
第21図　40・41・42号集石実測図……32
第22図　43号集石実測図……33
第23図　44・45号集石実測図……34
第24図　46・47・48・49・50号集石実測図……35
第25図　51・52号集石実測図……36
第26図　53・54・55号集石実測図……37
第27図　56・57号集石実測図……38
第28図　58・59・60・61・62・63号集石実測図…40
第29図　64・65・66・67・68号集石実測図……41
第30図　土坑遺構配置図……45
第31図　１・２・３号土坑実測図・
　　３号土坑出土土器……46
第32図　４号土坑実測図……47
第33図　５号土坑実測図・５号土坑出土土器……48
第34図　５号土坑出土土器・
　　６・７号土坑実測図……49
第35図　８・９・10号土坑実測図……50
第36図　11・12・13・14・15号土坑実測図……51
第37図　16・17・18・19号土坑実測図……52
第38図　20・21号土坑実測図……53
第39図　22号土坑実測図・22号土坑出土土器……54
第40図　23・24・25号土坑実測図……55
第41図　26号土坑実測図……56
第42図　27号土坑実測図・27号土坑出土土器……57
第43図　27号土坑出土土器・28号土坑実測図……58
第44図　28号土坑出土土器・29号土坑実測図・
　　29号土坑出土土器……59
第45図　30・31・32・33号土坑実測図……60
第46図　34号土坑実測図・34号土坑出土土器……61
第47図　35・36・37号土坑実測図……62
第48図　第１類土器実測図（１）……66
第49図　第１類土器実測図（２）……67
第50図　第１類土器分布図……68
第51図　第２類土器実測図（１）……69
第52図　第２類土器実測図（２）……70
第53図　第２類土器分布図（楕円）……71
第54図　第２類土器分布図（山形）……72
第55図　第３類土器実測図（１）……76
第56図　第３類土器実測図（２）……77
第57図　第３類土器実測図（３）……78
第58図　第３類土器実測図（４）……79
第59図　第３類土器実測図（５）……80
第60図　第３類土器実測図（６）……81
第61図　第３類土器実測図（７）……84
第62図　第３類土器実測図（８）……85
第63図　第３類土器実測図（９）……86
第64図　第３類土器実測図（10）……87
第65図　第３類土器実測図（11）……89
第66図　第３類土器実測図（12）……90
第67図　第３類土器実測図（1
第68図　第３類土器実測図（14）……92
第69図　第３類土器分布図（１）……93
第70図　第３類土器分布図（２）……94
第71図　第３類土器分布図（３）……95
第72図　第４類土器実測図……96
第73図　第４類土器分布図……97

第74図　第５類土器実測図……99
第75図　第５類土器分布図 ……100
第76図　第３・５類土器変遷概念図 ……101
第77図　第６類土器実測図 ……102
第78図　第６類土器分布図 ……103
第79図　第７類土器実測図（１） ……106
第80図　第７類土器実測図（２） ……107
第81図　第７類土器実測図（３） ……108
第82図　第７類土器実測図（４） ……109
第83図　第７類土器実測図（５） ……110
第84図　第７類土器実測図（６） ……111
第85図　第７類土器実測図（７） ……113
第86図　第７類土器実測図（８） ……114
第87図　第７類土器実測図（９） ……115
第88図　第７類土器実測図（10） ……117
第89図　第７類土器分布図（貝殻） ……118
第90図　第７類土器分布図（撚糸） ……119
第91図　第８類土器実測図（１） ……121
第92図　第８類土器実測図（２） ……122
第93図　第８類土器分布図（１） ……123
第94図　第８類土器分布図（２） ……124
第95図　第９類土器実測図（１） ……125
第96図　第９類土器実測図（２） ……126
第97図　第９類土器実測図（３） ……127
第98図　第10類土器実測図（１） ……128
第99図　第10類土器実測図（２） ……129
第100図　第９・10類土器分布図……130
第101図　縄文前中後晩期土器実測図（１）……131
第102図　縄文前中後晩期土器実測図（２）……132
第103図　前期～後・晩期土器分布図……133
第104図　旧石器実測図……138
第105図　石器実測図（１）……141
第106図　石器実測図（２）……142
第107図　石器実測図（３）……143
第108図　石器実測図（４）……144
第109図　石器実測図（５）……145
第110図　石器実測図（６）……146
第111図　石器実測図（７）……147
第112図　石器実測図（８）……148
第113図　石器実測図（９）……149
第114図　石器実測図（10）……150
第115図　石器実測図（11）……151
第116図　石器実測図（12）……152
第117図　石器実測図（13）……153
第118図　石器実測図（14）……154
第119図　石器実測図（15）……155
第120図　石器実測図（16）……156
第121図　石器実測図（17）……157
第122図　石器実測図（18）……158
第123図　石器実測図（19）……159
第124図　石器実測図（20）……160
第125図　石器実測図（21）……161
第126図　石器実測図（22）……162
第127図　石器実測図（23）……163
第128図　石器実測図（24）……164
第129図　石器実測図（25）……165
第130図　石器実測図（26）……166
第131図　石器実測図（27）……167
第132図　石器実測図（28）……168
第133図　石器実測図（29）……169
第134図　石器実測図（30）……170
第135図　石器実測図（31）……171
第136図　石器実測図（32）……172
第137図　石器実測図（33）……173
第138図　石器実測図（34）……174
第139図　石器分布図（１）……175
第140図　石器分布図（２）……176
第141図　石器分布図（３）……177
第142図　赤色顔料のＳＥＭ像と
　　Ｘ線スペクトル図……183
第143図　遺構配置図……186
第144図　早期土器分布断面図（１）……187
第145図　早期土器分布断面図（２）……188

表　目　次

第１表　調査経過表……２
第２表　灰塚遺跡周辺主要遺跡地名表……７
第３表　集石一覧表……42
第４表　第３類土器分類表……73
第５表　円盤状土製品観察表 ……127
第６表　第10類土器観察表 ……129
第７表　早期土器参考表（１） ……134
第８表　早期土器参考表（２） ……135
第９表　早期土器参考表（３） ……136
第10表　旧石器観察表 ……138
第11表　石器観察表（１） ……178
第12表　石器観察表（２） ……179
第13表　石器観察表（３） ……180

写　真　図　版

図版１（カラー）
　１　遺跡空中写真
　２　耳栓・彩色土器
図版２（カラー）
　Ａ型　集石
　Ｂ型　集石
　Ｂ－１型　集石
図版３（カラー）
　Ｃ型　集石
　Ｄ型　集石
　Ｅ型　集石
図版４（カラー）
　１　土坑
　２　土坑
　３　土坑
図版５
　縄文時代早期土器（１）
図版６
　縄文時代早期土器（２）
図版７
　縄文時代早期土器（３）
図版８
　１　異形土器
　２　縄文時代前～後・晩期
　３　石器（１）
図版９
　石器（２）
図版10
　石器（３）

第Ⅰ章　調 査 の 経 過

第１節　調査に至る過程
第２節　調 査 の 組 織
第３節　調 査 の 過 程

第Ⅰ章　調　査　の　経　過

第１節　調査に至る過程

本遺跡の調査は須恵・深田地区緊急畑地帯総合整備事業によるものである。この事業は農産物輸入自由化に耐えられるように畑地帯の整備を行い農業経営の合理化と安定を図ることを目的として農道網の整備と区画整理を行うことを目的としている。この事業による受益者は153名に及び、受益面積は38haである。着手は平成２年、完了は平成14年を予定している。

事業の実施に先立ち事業地区内に文化財が所在する可能性が高いことから、試掘調査を実施し遺跡の存在が確認され、文化課と農政部局で設計変更を行い、文化財に影響の及ぶ範囲を確認し調査区を設定した。

第２節　調査の組織

調査は平成５年～９年に渡り、長期間の調査であるため調査責任者・事務局は調査最終年度を提示した。

調査主体者　熊本県教育委員会

調査責任者

豊田　貞二（文化課長）
丸山　秀人（教育審議員）
石原　昭宏（課長補佐）
松本　健郎（課長補佐　調査第２係担当）

調査事務局

小斉　久代（総務係長）
岸本　誠司（主事）
川口　久夫（主事）

調査担当

木村　元浩（学芸員　試掘担当）
野口　龍彦（文化財保護主事　平成５年度）
水野　哲郎（文化財保護主事、平成５年度）
山下　義満（文化財保護主事、平成６～９年度）
木﨑　康弘（文化財保護主事、平成６年度）
中村　幸弘（学芸員　平成８年度）
北川賢次郎（嘱託　平成５～６年度）
戸田　清恵（嘱託、平成７年度）
中川　裕二（嘱託、平成７年度）
高見　　淳（嘱託　平成８～９年度）
宮崎布美子（嘱託　平成８年度）

報告書担当

山下　義満（文化財保護主事）
隈部　香織（嘱託）
戸田　清恵（嘱託）
井上　美保（嘱託）
濱田　智美（嘱託）
福田　信子（嘱託）
横山　明代（嘱託）

専門調査員（順不同・敬称略）

佐藤　伸二（八代高等専門学校）
新東　晃一（鹿児島県埋蔵文化財センター）
高倉　洋彰（西南学院大学）
陳　　國慶（中華民国　吉林大学）
工藤　敬一（熊本大学）
大久保浩二（鹿児島県埋蔵文化財センター）

調査指導及び協力者（順不同・敬称略）

深水　一雄（深田村在住　郷土史家）
山本　信夫（太宰府市教育委員会）
狭川　真一（太宰府市教育委員会）
木村幾多郎（大分市歴史資料館）
泉　　拓良（奈良大学）
鶴嶋　俊彦（人吉市教育委員会）
和田　好史（人吉市教育委員会）
出会　宏光（相良村教育委員会）
溝下　昌美（湯前町教育委員会）
松舟　博満（人吉市在住　熊本県文化財保護指導委員）
渋谷　　敦（錦町在住　熊本県文化財保護指導委員）
成瀬　正和（宮内庁正倉院　保存科学室）
横手浩二郎（鹿児島大学大学院）

第３節　調査の過程

発掘調査は平成５年８月24日から平成９年８月28日まで実施した。調査の経過については経過表（第１表）を参考とされたい。

年 区	5 8	9	10	11	12	6 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	7 1
A	Ⅲ層調査 表土剥ぎ 清掃			Ⅳ層調査														
B				表土剥ぎ 清掃	Ⅲ層調査				Ⅳ層調査									
C													表土剥ぎ 清掃	Ⅲ層調査				
D															表土剥ぎ 清掃			

年 区	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	8 1	2	3	4	5	6	7
C			Ⅲ層調査				Ⅳ層調査								Ⅳ層調査			
D					Ⅲ層調査 表土剥ぎ 清掃										Ⅲ層調査			
E							Ⅲ層調査 表土剥ぎ 清掃						Ⅳ層調査					
F										表土剥ぎ 清掃								

年 区	8	9	10	11	12	9 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
C									Ⅳ層調査								
D									Ⅳ層調査								

第１表　調査経過表

第Ⅱ章　位 置 と 環 境

第１節　地質と地形

第２節　歴史的環境

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地質と地形

本遺跡の所在する球磨郡深田村は東部から北部にかけて須恵村・南部に免田町・西部に錦町・北部から西部にかけて相良村と周囲を各町村に隣接している。球磨地方では大きく東を上球磨・中央を中球磨・西を下球磨と称する。深田村は球磨盆地のほぼ中央に位置する中球磨に所在し、本遺跡に設置したローリングタワーから中球磨が一望できたことは遺跡の持つ立地条件の一つであった。

球磨盆地はＥＮＥ方向に伸び、この盆地の中央部を二分するように日本３大急流の一つである球磨川が西流し、球磨川及びこれに注ぐ80に及ぶ支流沿いに低地（堆積物）が分布している。調査は長期間に及んだため年間を通した球磨川の表情を見ることができ、特に梅雨時期の水量及び水流は自然の脅威を感じたものであった。

本遺跡の所在する深田村は地質分帯上、南西日本外帯に属し、およそ１億万年の地層である白亜系四万十層の分布する四万十帯内に位置する。また球磨盆地は断層角盆地といわれ、盆地北岸では未固結堆積物および火砕流堆積物よりなる小起伏丘陵地が発達、南岸では段丘が広大な分布を示すという地形的特徴に差異が見られる。その両側、特に南東側では複合扇状地帯が発達し段丘堆積物よりなっている。段丘堆積物の下には加久藤・阿蘇・入戸の各火砕流堆積が分布し、これらの火砕流は直接地表面を覆い、シラス及び加久藤火砕流の分布が特に広く、傾斜面工事等にてその状況を観察することができる。

第２節　歴史的環境

歴史的環境での使用番号は熊本県遺跡地図（平成10年３月31日発行）に従った。

【先土器時代】球磨・人吉地方の先土器時代遺跡については、今日までに50箇所が確認されている。その所属時期毎の内訳は、ナイフ形石器文化以前２遺跡（深田村中里遺跡）、ナイフ形石器文化33遺跡、細石器文化12遺跡、不明６遺跡である。

ナイフ形石器文化の中でもっとも古い石器文化には、湯前町潮山遺跡・クノ原遺跡・人吉市血気ケ峰遺跡・山江村狸谷遺跡・球磨村久保遺跡がある。この中でその状況が明らかにされているのは、潮山遺跡・クノ原遺跡・狸谷遺跡・久保遺跡である。潮山遺跡では、ナイフ形石器、刃部磨製石斧、削器等の石器が出土した。その出土層位や内容から球磨郡最古のナイフ形石器文化であると考えられる。クノ原遺跡では、ナイフ形石器、掻器、削器、磨石・敲石等の多くの石器が出土した。狸谷遺跡や久保遺跡では、ナイフ形石器、掻器、削器、抉入石器、彫器、磨石・敲石等の多くの石器が出土した。クノ原遺跡や狸谷遺跡、久保遺跡は、その出土層位や内容からみて、潮山遺跡の次の時期、姶良Ｔｎ火山灰（以後、「ＡＴ」という。）降灰直前に位置付けられる。

ＡＴ降灰以後のナイフ形石器文化は、球磨郡内でも多く確認されている。それらは、剥片尖頭器や三稜尖頭器の存在に特徴付けられ、灰塚遺跡周辺には、須恵村中尾遺跡（508－011）、沖松遺跡（508－026）がある。また細石器文化関係では、須恵村別府遺跡（508－025）がある。

【縄文時代】灰塚遺跡では早期に属する遺物が出土した。早期の遺跡では出土点数が少ないが、須恵村堂園遺跡（508－027）・中尾遺跡・別府遺跡・沖松遺跡がある。この中で堂園遺跡では、当時の集落構造の分かる貴重なデータが得られている。この他、周辺では、上阿蘇Ｂ遺跡（508－012、塞ノ神式土器）・諏訪原遺跡（押型文土器、塞ノ神式土器）・馬場遺跡（508－014、押型文土器）・小春遺跡（508－015、押型文土器、塞ノ神式土器）・浜ノ上遺跡（508－029、押型文土器、塞ノ神式土器）・古城遺跡（押型文土器）などが検出されている。

前期の資料としては、人吉市八峰遺跡や湯前町浄心寺（登録名称は城泉寺）周辺で玦状耳飾りが採集されている。轟式土器に伴うものであろうか。なお、この轟式土器を出土している遺跡としては、球磨村久保遺跡や人吉市射場ノ本遺跡がある。

曽畑式土器は人吉市棚平遺跡や鼓ケ峰遺跡や水上村岩野でも検出されている。

中期の遺跡としては、阿高式系土器の遺跡がある。主な遺跡には、諏訪原遺跡（南福寺式土器）・馬場遺跡（南福寺式土器）・小春遺跡（南福寺式土器）・別府遺跡（南福寺式土器）などがある。

後期の遺跡としては須恵村堂園遺跡・沖松遺跡・柿ノ木遺跡（508－013）・諏訪原遺跡・小春遺跡・馬場遺跡などがある。

なお、先に紹介した沖松遺跡では、晩期になっても集落が継続している。埋甕の他に、天城式・古閑式・黒川式などの型式の土器が大量に検出されている。主な出土遺物では、各型式の土器の他に土偶に似た土製品・玉類などがある。

また周辺の遺跡としては、黒川式土器が出土している柿ノ木遺跡・諏訪原遺跡・馬場遺跡及び小春遺跡、並びに黒川式土器や凸帯文土器と共に孔列文土器が出土している別府遺跡がある。

【弥生時代】弥生時代の周辺の遺跡では、松尾遺跡（508－002）・上阿蘇遺跡・阿蘇遺跡（508－005）・柿ノ木遺跡・諏訪原遺跡・中島遺跡（508－023）・別府遺跡・沖松遺跡・上手遺跡（508－032）がある。

この中で、柿ノ木遺跡では、中期の黒髪式土器と後期の重弧文土器や石庖丁が見つかっている。沖松遺跡や上手遺跡では、球磨・人吉地方の後期を特徴付ける重弧文土器が検出されている。なお、別府遺跡では、シカをかたどった線刻がある石製品（石庖丁？）が検出されている。

この他、近くの遺跡としては後期の集落の跡が見つかっている深田村高ノ原遺跡や後期の集落遺跡として著名な錦町夏女遺跡がある。また、錦町大原天子遺跡では、球磨・人吉地方でももっとも古い弥生式土器である前期の終わり頃の亀ノ甲式土器が検出されている。

【古墳時代】沖松遺跡では、5世紀代と6世紀代の集落跡が検出されている。また堂園遺跡でもこの時期の竪穴式住居跡が1基検出されている。

横穴としては、石坂横穴群（508－022）と浜ノ上横穴群（508－030）がある。石坂横穴群では直刀1本と鉄鏃7本、馬具1式が発見されている。また浜ノ上横穴群からは、6世紀後半代の須恵器高坏が出土している。

球磨・人吉地方の中で大型の古墳は、錦町や免田町など中球磨（球磨盆地の中央部）に集中する。これらは堂園遺跡周辺から眺望できる範囲にある。

錦町亀塚古墳群には、前方後円墳3基がある。錦町四塚古墳群は、球磨・人吉地方の中ではもっとも規模が大きな円墳群（3基）である。免田町才園古墳群では、かつて2号墳から、直刀などの武具や馬具類、鉄鋌などの工具類、鍍金したが画文帯求心式神獣鏡、玉類、金環などの豊富な副葬品が出土していた。免田町鬼ノ釜古墳は、巨石を使った貫り抜き玄門に特徴がある古墳である。この他に、高塚古墳としては、多良木町夫婦塚古墳群・赤坂古墳群が有力な遺跡として挙げられる。

球磨・人吉地方では、装飾のある横穴墓もある。相良村小原横穴群・錦町京ケ峰横穴群・人吉市大村横穴群がそれである。なお、相良村の高原台地では、小型の古墳が群集した吉野尾古墳群がある。この古墳群は、球磨・人吉地方最古のものである。

灰塚遺跡の近くには、南九州の特徴的な墓である地下式板石積石室墓群の遺跡がある。それは、深田村にある新深田地下式板石積石室墓群である。また、この種の墓は、多良木町大久保台地や免田町本目遺跡、人吉市荒毛遺跡等でも検出されている。

【古代・中世前半期】古代における球磨・人吉地方の中心地域は、依然として球磨盆地中央部にあったと考えられる。灰塚遺跡は、この中央部に位置している。そのことが窺えるように、灰塚遺跡からも10世紀代の掘立柱建物跡と輸入陶磁器や湖州鏡を供献した墓などが検出されている。

近隣の遺跡としては、堂園遺跡や沖松遺跡、別府遺跡がある。堂園遺跡では、移動式竈や10世紀代の越州窯系青磁や緑釉陶器片、土師器を供献した墓が検出されている。沖松遺跡では、掘立柱建物跡が検出されている。その年代は、はっきりしないが、平安時代の初め頃であろう。また、別府遺跡では、掘立柱建物跡が検出されている。

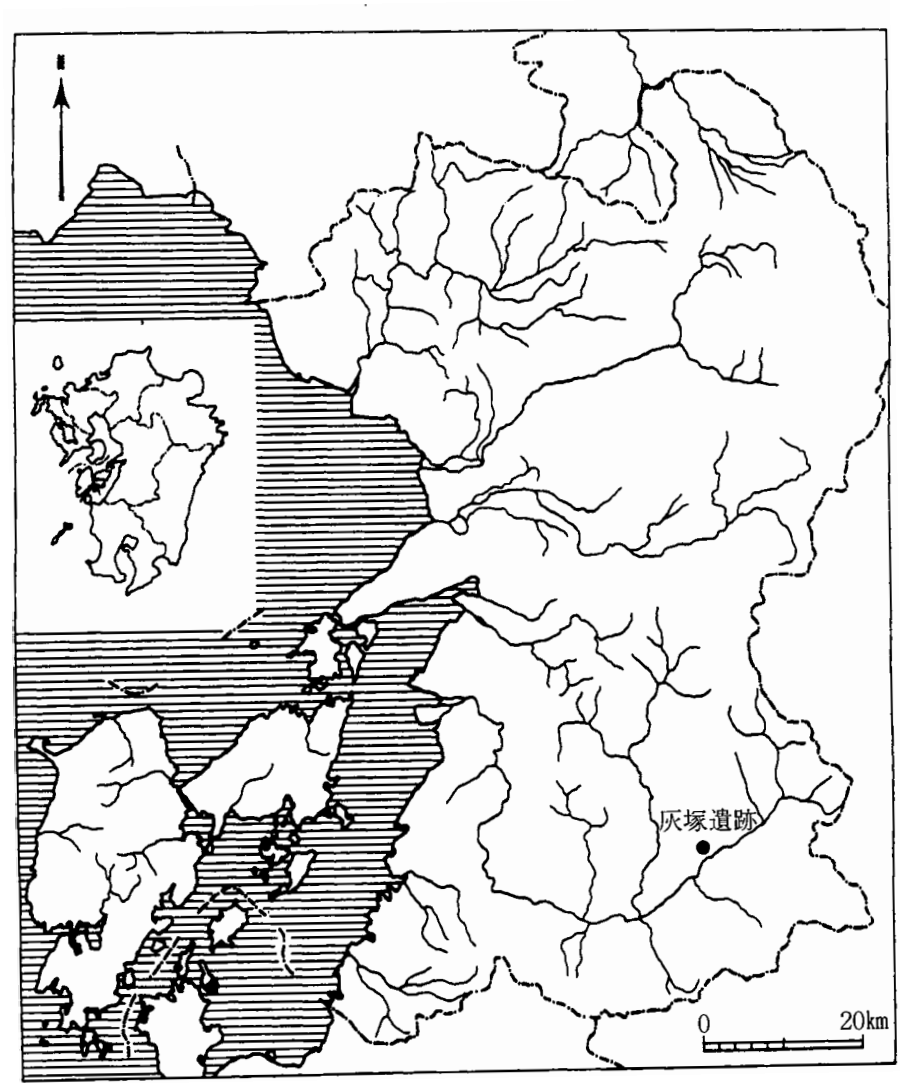
また、須恵村屯所遺跡（508－020）・浜ノ上遺跡・寺池遺跡・山の口遺跡でもこの時代の遺物が採集されている。

さらに、中世期の球磨・人吉地方に登場する相良氏関係の遺跡として、多良木町伝相良頼景館跡（505－023）と蓮花寺跡（505－034）、灰塚遺跡に隣接する須恵村浄蓮寺跡がある。また、今日においても機能を残している上相良氏ゆかりの寺である多良木町青蓮寺がある。

なお、灰塚遺跡については、古代末から中世前半期にかけての須恵氏居館跡と推定され、併せて、古代末から中世前半期の郡衛跡とも推定されている（木﨑1996、木﨑・山下1997、山下1998）。

この灰塚遺跡の周辺には、球磨・人吉地方の政治的な中心人物の経済的な基盤を保証した生産遺跡や彼らの墓の遺跡が見つかっている。例えば、生産遺跡としては、須恵器や瓦の窯跡の遺跡である須恵村上阿蘇周辺、上村上の原遺跡・深田村高山遺跡・錦町下り山遺跡・同町七中口遺跡などがある。墓の遺跡としては、蔵骨器が出土した上村宇土谷遺跡・伊勢尾遺跡・栩登遺跡・東小原遺跡・西小原遺跡・（石帯の丸鞆が出土）、廻り迫遺跡など、銅板製墓誌が出土した黒田遺跡などがある。

さらに、古代の郡衙比定遺跡としては、免田町前田遺跡・錦町尼ケ土手遺跡がある。



第１図　遺跡位置図

第２図　灰塚遺跡周辺主要遺跡分布図　２万5,000分の１

第２表　灰塚遺跡周辺主要遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
505－002	岩川内立石	多良木　岩川内	縄文～古代	石器・土器
505－003	新山	多良木　新山	縄文・弥生	縄文後晩期・十字形石器・弥生土器・須恵器
505－004	里城跡	多良木　里城	中世	
505－005	里城	多良木　里城	縄文～古代	
505－006	小林	黒肥地　小林	縄文	石鏃
505－007	長平	黒肥地　長平	縄文・弥生	縄文中期・後期・晩期土器・磨製石剣・弥生土器
505－008	栖山	黒肥地　栖山	縄文	縄文晩期土器・石剣
505－009	小椎野古墳	黒肥地　小椎野	古墳	
505－010	小川	黒肥地　小川	縄文	石鏃
505－011	土屋横穴群	黒肥地　土屋	古墳	
505－012	東光寺経塚	黒肥地　東光寺	中世	金銅製経筒８・経巻の残欠
505－013	東光寺	黒肥地　東光寺	縄文	縄文後晩期土器・石鏃・石匙
505－014	鍋城跡	黒肥地　鍋城	中世	
505－015	諏訪神社	多良木　里城		
505－016	長運寺薬師堂	黒肥地　小川	中世	
505－017	内城城跡	黒肥地　土屋	中世	
505－018	東光寺跡	黒肥地　東光寺	近世	
505－019	大塚横穴群	黒肥地　大塚	古墳	
505－020	東光寺磨崖梵字	黒肥地　東光寺	中世	
505－021	内の城横穴	黒肥地　土屋	古墳	５基以上
505－022	長運寺跡	黒肥地　小川	中世	
505－023	相良頼景館跡	黒肥地　蓮花寺	中世	
505－024	蓮花寺跡古塔碑群	黒肥地　蓮花寺	中世	
505－026	蓮花寺跡方柱石塔婆	黒肥地　蓮花寺	中世	
505－027	百太郎溝取入口樋門跡	多良木　百太郎	近世	
505－031	妙法寺跡	多良木　上鶴	中世	
505－033	弥勒寺跡	黒肥地　茂原	古代	
505－034	蓮花寺跡	黒肥地　蓮花寺	中世	頼景菩提所
505－035	青銅製経筒	多良木	古代	銭貨及び経巻も県指定
505－036	大久保ヤリカケ松	黒肥地　槍掛松	弥生～古墳	
505－037	細型銅剣出土地	黒肥地　槍掛松	弥生	細型銅剣
505－045	小田	久米　小田原	縄文	紡錘車石・縄文晩期土器
508－001	平山	平山	縄文	
508－002	松尾	松尾	縄文	
508－003	上阿蘇Ａ	上阿蘇	古墳・古代	土師器
508－004	上阿蘇洞窟	上阿蘇	弥生	弥生土器
508－005	阿蘇	諏訪原	縄文～弥生	縄文中・後・晩期土器、弥生土器
508－006	阿蘇スワノオドー	諏訪原	縄文	縄文土器・石斧
508－008	平等寺釈迦堂	釈迦堂	古代	木造釈迦如来坐像及び両脇侍坐像
508－009	平等寺釈迦堂古塔碑群	釈迦堂	中世	
508－010	須恵の城ケ尾	城ヶ尾	中世	
508－011	中尾	中尾	縄文	
508－012	上阿蘇Ｂ	上阿蘇	縄文・弥生	土師器
508－013	柿ノ木	阿蘇	縄文	
508－014	馬場	阿蘇	縄文	
508－015	小春	諏訪原	縄文	
508－016	馬渡	浜上	縄文	
508－017	八日	浜上	縄文	
508－018	毛谷	浜上	縄文	
508－019	京塚	浜上	縄文	
508－020	屯所	屯所	平安	
508－021	加茂	上手	縄文	石器
508－022	石坂横穴群	石坂	古墳	馬具・須恵器
508－023	中島	中島	弥生	弥生土器
508－025	別府	別府	縄文～古墳	縄文土器・古墳時代土器
508－026	沖松	沖松	縄文～古墳	縄文・古墳時代集落
508－027	堂園	堂園	縄文	
508－029	浜の上	浜の上	縄文	縄文土器・石器
508－030	浜の上横穴群	浜の上	古墳	
508－031	今村城跡	今村	中世	
508－032	上手	上手	縄文	
509－008	荒茂横穴群	荒茂	古墳	
509－009	荒茂勝福寺跡	荒茂	中世	古塔碑群及び木造毘沙門天立像外７立像県指定、仁王門村指定
509－010	深田加茂	上加茂	縄文	石器
509－011	高山窯跡	高山	古代	瓦窯、平瓦・軒平瓦
509－019	前平	高山	縄文	縄文土器・石器
509－026	灰塚	灰塚	旧石器～中世	
509－027	高山	高山	古代	平瓦・軒平瓦
509－028	勝福寺古塔碑群	荒茂	中世	

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

第1節　調 査 の 方 法

第2節　層 位 と 包 含 層

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

第１節　調査の方法

調査は球磨事務所川辺川土地改良推進室及び施行業者と協議を行い施行関係により順次調査を行い、Ａ～Ｅ区の調査区が設定された（第４図参)。調査は表土剥ぎから開始、清掃を経て基準作りとして１辺が10mのグリット設定を行った。グリットは地形に則した任意で、東西軸をアルファベット・南北軸をアラビア数字で示した（第５図参)。

遺構は平面プラン確認後、土層堆積状況確認のためセクションベルトを設定し、検出作業を行った。平面図・断面図・土層図を作成し、写真撮影はモノクロ・カラースライドの２種を用い、遺物出土検出時・完掘時に行った。包含層調査では各グリットを単位とし掘下げを行い、平板・光波を用い遺物取り上げを行った。

調査は３層調査後、４層の掘下げを行った。３層からは主に古代～中世の遺構・遺物が、４層からは縄文早期の遺構・遺物が出土した。調査期間中、関連部局との協議により調査区の変更等もあり、複数の調査区の併用もあった。

第２節　層位と包含層

本遺跡の基本的な土層は第３図のとおりである。

第１層　灰褐色砂質土

表土層であり現耕作地である。かなりの撹乱を受けている。

第２層　黒褐色砂質土

古代～中世以降の遺物の出土が認められるが、撹乱が激しい。

第３層　黄褐色土

アカホヤ火山灰で基本的には無遺物層である。土質により２層に分層ができ３a・３bとした。３aはアカホヤ火山灰の二次堆積土で縄文時代後・晩期～中世の遺物を含む。３bはアカホヤ火山灰の１次堆積土である。第４層との入り乱れが一部に見られ早期遺物出土が認められる。

第４層　暗褐色土

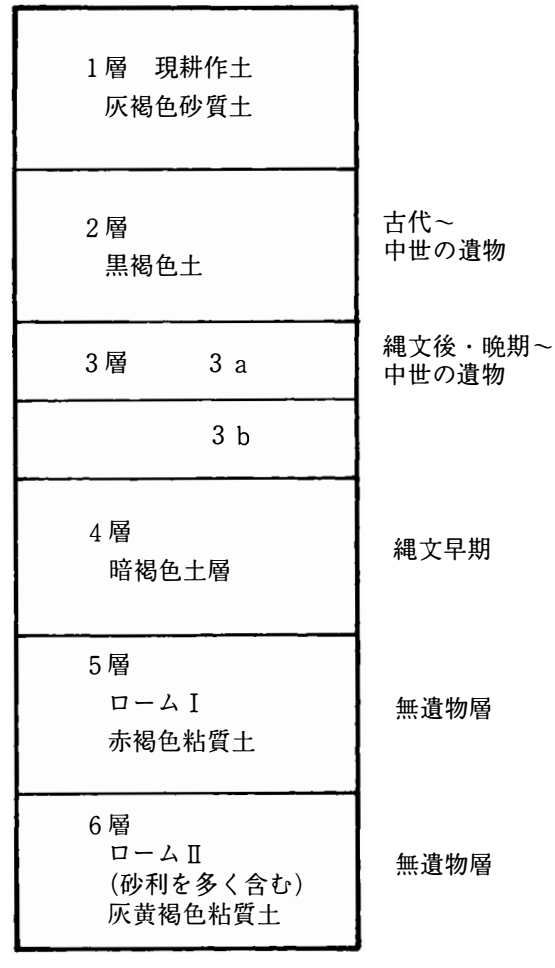
縄文早期の包含層で暗褐色土である。一部に苦土と呼ばれる凝固した黒色のブロックが認められる。

第５層　赤褐色粘質土

粘性を持つ無遺物層できめ細かい。

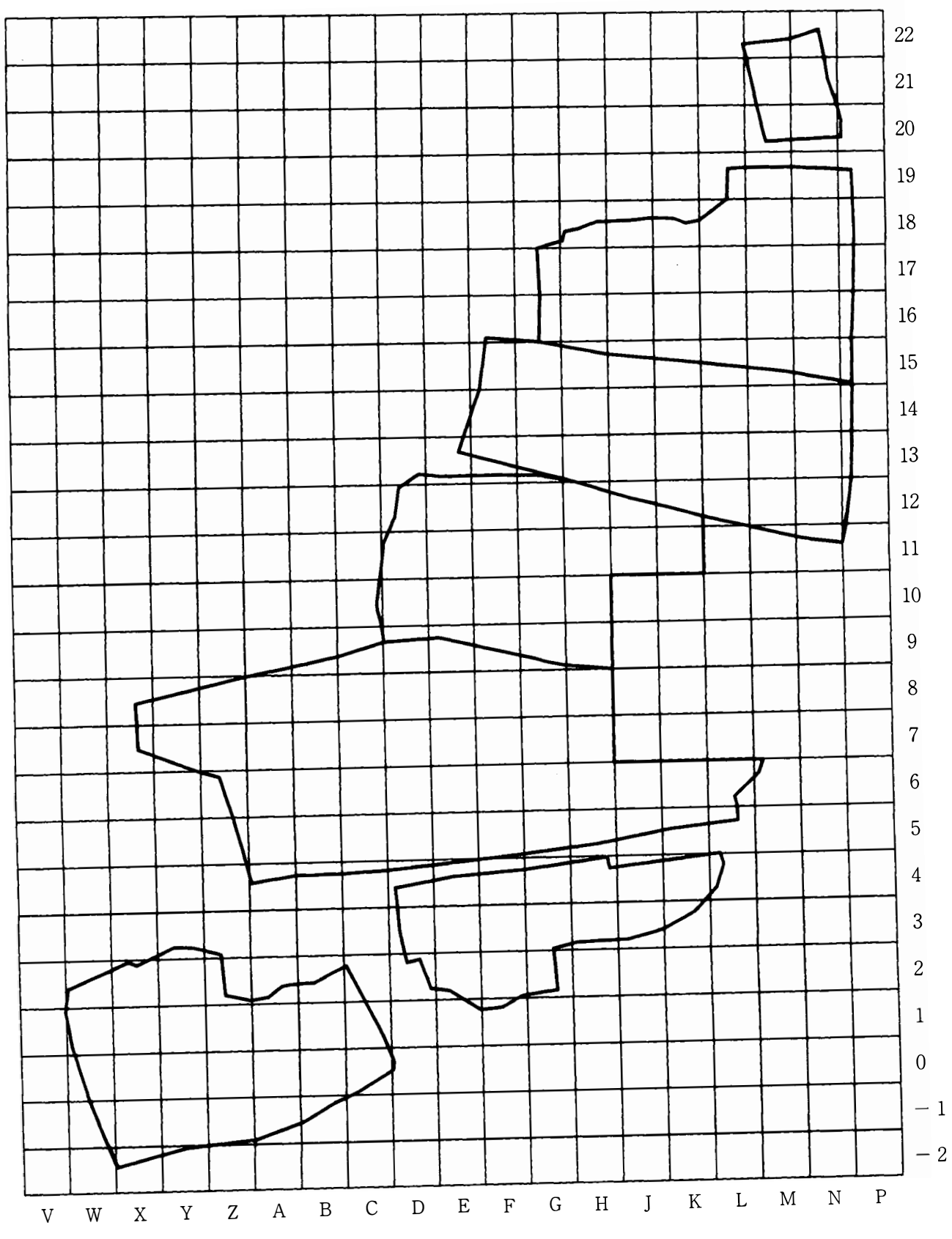
第６層　灰黄褐色粘質土

無遺物層で粘性を持つが、砂利を多く含む。



第３図　灰塚模式土層図

第4図　灰塚遺跡周辺地形図


22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
－1
－2
V
W
X
Y
Z
A
B
C
D
E
F
G
H
J
K
L
M
N
P

第５図　調査グリット図

第Ⅳ章　遺　構

第1節　集　石

第2節　土　坑

第Ⅳ章　遺　構

本遺跡の遺構は集石68基・土坑35基が検出された。各遺構の時期は基本土層第３層の検出と遺物から縄文時代早期と比定できる。集石は一覧表（第３表）としても提示した。出土遺物の土器は風化が激しく細片であるため数点は図化したが、本遺跡での土器分類（第Ⅴ章参照）を述べるに留め、石器は可能な限り図化した(第Ⅵ章参照)。土坑は遺構によりその性格把握のため主に検出状況を提示した。出土遺物は復元可能土器等については図化し他は形式（第Ⅴ章参照）を述べるに留めた。各遺構配置は集石（第６図)・土坑（第30図）に示した。法量は長軸・短軸・深さの順で「×」を使用した。また、後世の撹乱を受けている遺構も多く、その部分はアミフセで図化した。尚、早期土器での沈線文は第３類と５類に見られ、破片ではどちらの類か不明であるため沈線文という名称で提示した。

第１節　集　石　（第７図～29図）

集石はその形態で以下の６タイプに分類した。

Ａ類　浅い土坑の底部に人頭大の礫（底石）を配置しているもの

Ｂ類　浅い土坑の底部に礫が集中しているもの

Ｂ－１類　Ｂのうち土坑外に石を投棄しているもの

Ｃ類　土坑を伴わず人頭大の礫（底石）を配置しているもの

Ｄ類　土坑を伴わず礫が集中しているもの

Ｅ類　埋没土坑上に集石しているもの

また現地では肉眼観察ではあるが火受石をカウントしその比率を提示し(表３)、その状況をアミフセで図化に示した。礫の構成は拳大（径10㎝～20㎝）を基準とし、それ以下を小石（10㎝未満）・以上を人頭大（20㎝以上）と大別した。

１号集石　（第７図）

底石を配置したＣ類の形態で0.8ｍ×0.7ｍの範囲に安山岩礫が集中し、その周りに礫が点在する。底石外では拳大28・小石28で構成されていた。第３類山型文が集石間に出土している。

２号集石　（第７図）

Ｄ類形態で、0.8ｍ×0.7ｍの範囲に礫が集中する小規模な集石である。集石として厚みがなく礫は平坦として集中している。安山岩・凝灰岩から構成され角礫が多い。小石が多くその構成は拳大15・小石39である。

３号集石　（第８図）

Ｃ類の形態で、人頭大石を中心とした1.0ｍ×0.8ｍに礫集中区あり、遺構の北側と南側に散在が見られ、遺構は3.9ｍ×2.8ｍの広範囲に礫が散乱している。遺構内は後世の攪乱を受けているがこれらの範囲にも礫の存在は想定され、人頭大４・拳大44・小石101で構成され、安山岩は角礫が多い。また中央部で若干の焼土が確認され、火受石の比率は40％であった。集石間に第３類土器山形文11点・菱形２点・縄文１点・撚糸文２点と沈線文５点・チャート破片３点が出土している。

４号集石　（第９図）

形態はＤタイプ。0.8ｍ×0.7ｍにＵ字形に集中が見られる。第３類山形文・チャート破片３点が集石内に混在していた。拳大21・小石29で構成され、石皿破片・摺石叩石第７類 **244**が含まれていた。

５号集石　（第９図）

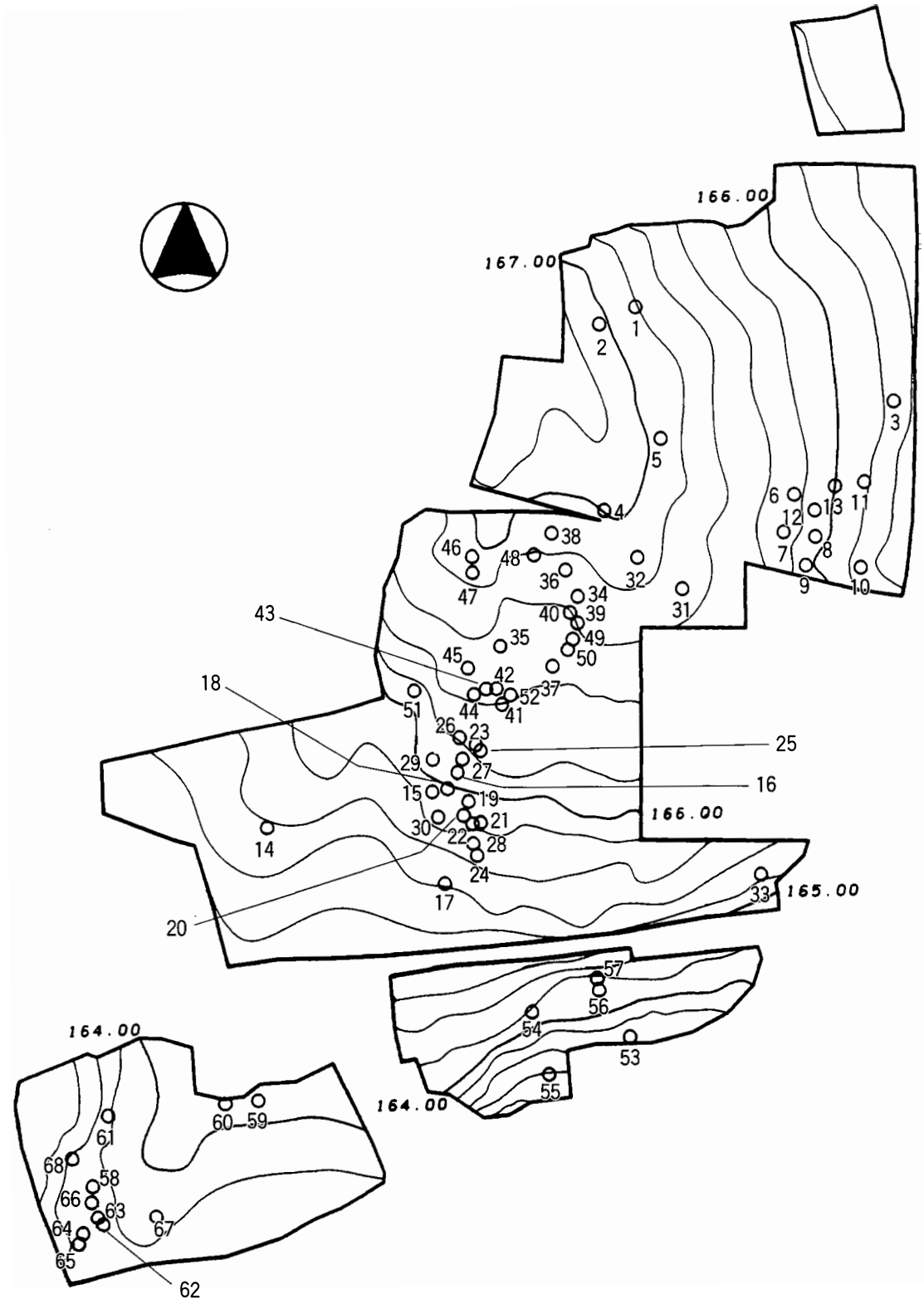
Ｃ類形態で、中央の径0.3ｍの赤変した平石があり、これを中心として1.7ｍ×1.3ｍの範囲に小石礫が散石している。人頭大４・拳大23・小石42で構成され、第３類山形文が集石間に出土している。

６号集石　（第９図）

集石上部に赤変した小石が散っており、下部に底石と思われる凝灰岩の大石が配石されている。Ｃ類形態で2.4ｍ×1.6㎝の範囲に散石しているが「エ」字状の集中が見られる。掘りすぎているため本来は掘り込みを持つタイプであったかもしれない。人頭大11・拳大37・小石43で構成され、火受率が高く79％である。第３類山形文・撚糸網目文が集石端部に出土。

７号集石　（第９図）

Ａ類形態で楕円形の浅い掘り込みを持ち、その法


166.00
167.00
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
31
32
34
35
36
38
39
40
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
37
41
18
25
16
166.00
26
23
29
27
15
19
21
30
22
28
14
24
17
20
33
165.00
57
56
54
53
55
164.00
164.00
60
59
61
68
58
66
63
64
67
65
62

第 6 図　集石遺構配置図

量は0.7m×0.6m×0.1mである。掘り込み東西に散石が見られる。人頭大４・拳大26・小石28で構成され、石匙 158が掘り込み外より出土している。

８号集石　（第10図）

Ａ類形態で円形の掘り込みを持ち､その法量は0.9m×0.6m×0.2mを量るが、若干、掘りすぎたため本来は広がるのであろう。この掘り込みに沿い大型（径約30～40cm）の平胆な底石が花弁状に配置され周囲には小石が散在している。人頭大９・拳大18・小石102で構成され、2.2m×1.8mの範囲に散石し、散石状態までの範囲を入れると本遺跡では大型の集石である。全体に占める火受石の比率は43％で、第３類山形文１－（１）型２点・撚糸１点が掘り込み外の集石間で出土している。

９号集石　（第10図）

円形の浅い掘り込みを持つＡ類形態で、その法量は0.7m×0.7m×0.1mを量る。掘り込み周囲に散石が若干見られ、人頭大６・拳大22・小石32で構成されている。全体に占める火成石の比率は43％である。出土遺物は第３類土器山形文が２点 83、掘り込み外より出土している。1.1m×0.8mの範囲に集石している。

10号集石　（第10図）

Ａ類形態で楕円型掘り込みがあり､その法量は0.7m×0.7m×0.1mである。掘り込みの底部に径20cm程の比較的大型石が数点見られ、掘り込み外に散石も見られるが比較的集中している集石である。人頭大５・拳大31・小石34で構成され、第３類ミミズばれ文(１)型が掘り込み内の集石間より出土している。

11号集石　（第11図）

斜行方向に配石の傾向、径20～30cmの底石が数点見られることから、本来は掘り込みを持つ集石の可能性も想定されるが現時点での分類でＤ類形態とした。1.0m×0.5m間に集中区が見られ、底石を中心として1.7m×1.7mの範囲に小石が四方に散石し、遺構東側に灰ブロック面が存在する。人頭大３・拳大39・小石79で構成される。第３類土器山形文・撚糸文・菱型文が散石間に出土している。焼土面が見られないがこの集石が火気使用であったならば灰を掻き出した痕跡とも考えられる。

12号集石　（第11図）

Ａ類形態で楕円形掘り込みに礫は集中している。掘り込み法量は0.7cm×0.6cm×0.2cmで、明確な底部を持たない逆三角錐状に掘り込まれ、赤変した大型底石がこの斜面に沿うように配置されている。後世の攪乱により遺構の一部が失われているがこの位置まで集石は存在していたものと思われる。人頭大２・拳大19・小石20で構成され、1.2m×0.8mの範囲に散石している。

13号集石　（第11図）

土坑上に集石しているＥ類形態で、土坑の法量は1.2m×0.9m×0.1mの不定形掘り込みを持ち、埋土は単層である。土坑外にも若干の散石が見られる。拳大26・小石69で構成され、掘り込み内から第３類山形文・ミミズばれ文が出土している。

14号集石　（第12図）

Ｅ類形態で円形の掘り込みがあり､その法量は1.0m×0.8m×0.3mであるが南側に部分的な落ち込みがある。集石は0.8m×0.7mの範囲に集中し散石は見られない。拳大36・小石39で構成され、出土礫全てが火受石であった。

15号集石　（第12図）

遺構東側と中央を後世の遺構で切られており、残存する範囲は1.6m×1.4mでＤ類形態である。1.2m×1.0m範囲に集中が見られ、その周りに散石が点在し、拳大41・小石181で構成されている。火成石の比率は86％である。第３類山形文と沈線文と石匙 144が散石間に出土している。

16号集石　（第12図）

Ｂ類形態の遺構の北・西を後世の撹乱で切られている。残存部から1.2m×0.8mの範囲に散石し、Ｂ類である。出土礫は全てが火受石であり、拳大35・小石39で構成されている。

17号集石　（第12図）

Ａ類形態で円形の掘り込みがあり、その法量は、0.8m×0.7m×0.1mである。人頭大２・拳大３・小石３で構成としては少数であるが約半数が火受石である。火受石の比率は56％で、0.6m×0.4mの範囲に集石している。

18号集石　(第12図)

密集ブロックが見られず、2.9m×2.5mの範囲に散石しているD類形態である。人頭大49・拳大96・小石107で構成礫数は多数である。第3類山形文2点、第4類山形文1点、第7類貝殻系・撚糸系が12点、沈線文2点が散石間に出土している。全体に占める火受石の比率は83%と高率である。

19号集石　(第13図)

楕円形の掘り込みを持つE類形態で、その法量は、1.9m×1.4m×0.2mである。四方に散石している状態でその範囲は2.3m×1.6mを測る。人頭大6・拳大49・小石112で構成されている。掘り込み直上に沈線文1点、散石部から第3類山形文1－(1)、第7類貝殻文系11点、他に沈線文2点が出土した。その全体に占める火受石の比率は87%と高率である。

20号集石　(第13図)

D類形態の集石で、1.8m×1.3mのドーナツ状の礫ブロックが見られ、ブロックの東・南方向に散石している。集石の範囲は3.5m×2.3mで、人頭大12・拳大83・小石440と構成礫数は本遺跡最大で、また火受石は93%と高比率である。第3類山形文4点の内、1－(1)型1点・撚糸1点・撚糸十沈線の(1)型1点・ミミズばれ文1点、沈線(1)型、第5類1点、第7類貝殻文系1個体・撚糸1点、沈線文5点出土。他に摺石・叩石1点 **239**が出土している。

21号集石　(第14図)

後世の遺構で数カ所破壊されているが2.2m×1.5mの範囲に散石している。明確な集石ブロックは不明であるが整理上D類形態とした。火受石の比率は高く、人頭大3・拳大30・小石40で構成されている。第3類ミミズばれ文1個体、第7類撚糸文1個体が散石間から出土している。

22号集石　(第14図)

後世の遺構で数カ所破壊されているが残存では2.5m×1.3mの範囲に散石し、拳大10・小石90で構成されている。火受石の比率は100%で、21号集石に隣接しその状態も類似し、D類形態として区分した。第3類山形文・縄文・沈線十地文と沈線文と第9類ポリープ状突起物土器 **548**が散石間に出土している。

23号集石　(第14図)

D類形態で1.0m×0.5mの範囲に礫が集中し、拳大64・小石245で構成されている。火受石は84%と高く、土器が4点出土しているが風化が激しく類別は困難であった。

24号集石　(第15図)

D類形態で1.0m×0.8mの範囲に礫が集中し南方向に散石が見られる。楕円形のピット状の小規模の掘り込みがあるが遺構に伴うものではなく、この位置まで散石したと思われる。人頭大22・拳大55・小石210で構成され、火受石比率は95%と高い。第3類山形文4点・撚糸1点、第7類土器 **484**が7点、第8類条痕文1点、沈線2点と石匙 **148**が1点出土している。

25号集石　(第15図)

B－1類形態で東側を攪乱により削平され残部として1.2m×1.5mの範囲に散石している。西側に不定形の掘り込みがあり、その法量は、1.7m×0.8m×0.2mを測る。集石の位置と掘り込みにずれが生じているが掘り込み内で使用後、ポイントA方向に石を廃棄したものであろうか。人頭大7・拳大16・小石50で構成され、火受石97%と高比率である。第3類山形文が1点確認されるが他は風化が激しく類別できない。

26号集石　(第16図)

D類形態3.5m×3.2mの範囲に散石しているが集石ブロックが数カ所見られる。人頭大10・拳大57・小石177で構成されている。第3類山形文3点と1－(1)型が1個体・撚糸文2点・縄文1点、第7類撚糸系5点、第6類1点が散石間に出土している。全体に占める火受石の比率は86%と高率である。

27号集石　(第16図)

D類形態1.7m×1.6mの範囲に散石している。人頭大8・拳大9・小石72で構成され、第7類貝殻文系が1点確認できるが、他は風化が激しく類別は困難であった。全体に占める火受石の比率は86%と高率である。

28号集石　(第17図)

D類形態3.1m×2.1mの範囲に散石しているが、その状態から南側が集石の中心と思われる。人頭大

24・拳大43・小石158で構成され、火受石は84％と高比率である。散石間から第３類山形文、第７類土器３点、第９類ミニチュア土器山形文系が１点が集石端部より出土。他は風化が激しく類別は困難であった。

29号集石　（第17図）

中心部0.6m×0.4mの範囲に礫が集中する。底石を持つＣ類形態で2.1m×2.0mの範囲に散石している。人頭大８・拳大23・小石88で構成され、礫の全てが火受石である。第３類山形文１点・縄文１点・撚糸１点、第７類撚糸 **491**が２点散石間より出土している。

30号集石　（第18図）

Ｂ－１類形態。1.3m×0.9m×0.2mの平坦の掘り込みに径0.5mピット状の掘り込みが東方向にオーバーハングしている。集石はピット状の掘り込みから混在している。火受石の比率は92％と高く、人頭大３・拳大21・小石167で構成され摺石叩石第７類 **245**が１点含まれる。第３類山形文12点内２個体・菱型文２点・縄文１個体・櫛状施文３点、第７類撚糸系１点が出土している。

31号集石　（第19図）

Ｃ類形態で1.6m×1.0mの範囲に散石しているが２地点において集石が見られる。これまでにない粘板岩を使用しこれらが斜行状態で配石し、肉眼観察では火受が見られない。この遺構これまでのものとは異なる性質を持つ集石であろうか。人頭大25・拳大46・小石41で構成されている。

32号集石　（第19図）

不定型の掘り込みを持つＡ類形態で、その法量は1.1m×0.8m×0.2mであり、礫は堀り込み内に存在している。人頭大11・拳大11・小石11で構成される小規模の集石であるが火受石は94％で高比率である。埋土下層は黄褐色土ブロックが混在していた。

33号集石　（第19図）

Ｄ類形態で0.6m×0.3mの範囲で集石が見られ、北・東方向に散石している。拳大３・小石46で構成されているが、石材が玄武岩系の河原石であるため肉眼での火受の観察が困難であった。第３類山形文１点と２類山形文１点が散石間から出土している。

34号集石　（第19図）

円形の掘り込みを持つＥ類形態で、その法量は、0.7m×0.7m×0.2mである。堀り込み外に散石も見られる。東側をピット状の遺構で切られているが散石はこの範囲まで広がる可能性もある。礫は全て火受石であった。埋土中に微量のカーボンが検出された。

35号集石　（第19図）

円形の掘り込みを持つＥ類形態でその法量は1.5m×1.4m×0.1mである。東西に散石を見るが礫はほぼ掘り込み内で人頭大11・拳大20・小石20で構成されている。埋土内に小指大のカーボンがブロックとして出土。第３類山形文２点、第７類貝殻文系・沈線文２点が集石間に出土した。火受石割合不明。

36号集石　（第20図）

Ａ類形態で２層に分層される円形の掘り込みである。その法量は1.7m×1.6m×0.4mである。集石は上層と下層とに二つのブロックが存在し、人頭大10・拳大14・小石107で構成されている。堀り込み下層から第１類条痕文１点、第３類山形文１－（１）・変型撚糸文１点・菱型文１点、第７類撚糸系１点、第８類沈線文１点が出土している。

37号集石　（第20図）

不定形の土坑を持つＥ類形態で、土坑外に散石も見られるが礫は土坑上に集中して、埋土内にカーボンを少量含んでいた。集石構成は人頭大16・拳大44・小石60である。土坑法量は1.2m×0.8m×0.2mで1.0m×1.1mの範囲に集石している。

38号集石　（第20図）

Ｅ類形態。ピット状の掘り込みを持つ不定形の土坑上の集石で、土坑外に散石も見られる。ピット状の掘り込み上部の密集が高く、全体の集石構成は人頭大６・拳大12・小石25である。掘り過ぎているため本来の土坑法量は検出より拡大するであろう。第７類撚糸系が集石上面から出土している。

39号集石　（第20図）

楕円形の掘り込みを持つＢ類形態で、東西に数点の散石が見られるが、土坑内に礫は集中している。全体の集石構成は人頭大１・拳大４・小石56であり、約その半数が火受石である。第７類撚糸系が掘り込

み下位に、上位に第３類山形文１点・撚糸文１－（１）型・縄文２点が出土した。

40号集石　（第21図）

0.4m×0.5m×0.1mの小規模な円形の土坑を持つＥ類形態で、明確な集石がなく礫は土坑より北側に散石している。拳大４・小石40で構成され、土坑外から第３類山形文６点が出土。

41号集石　（第21図）

深さ0.2mのピット状の掘り込みがあるがＤ類形態で区分した。礫は三方に拡散されているように散石し明確な集石を持たない。全体の礫構成は人頭大15・拳大16・小石52であり、散石間に第２類山形文１点、第３類ミミズばれ１点、第７類貝殻文１個体394、撚糸文２点が出土している。

42号集石　（第21図）

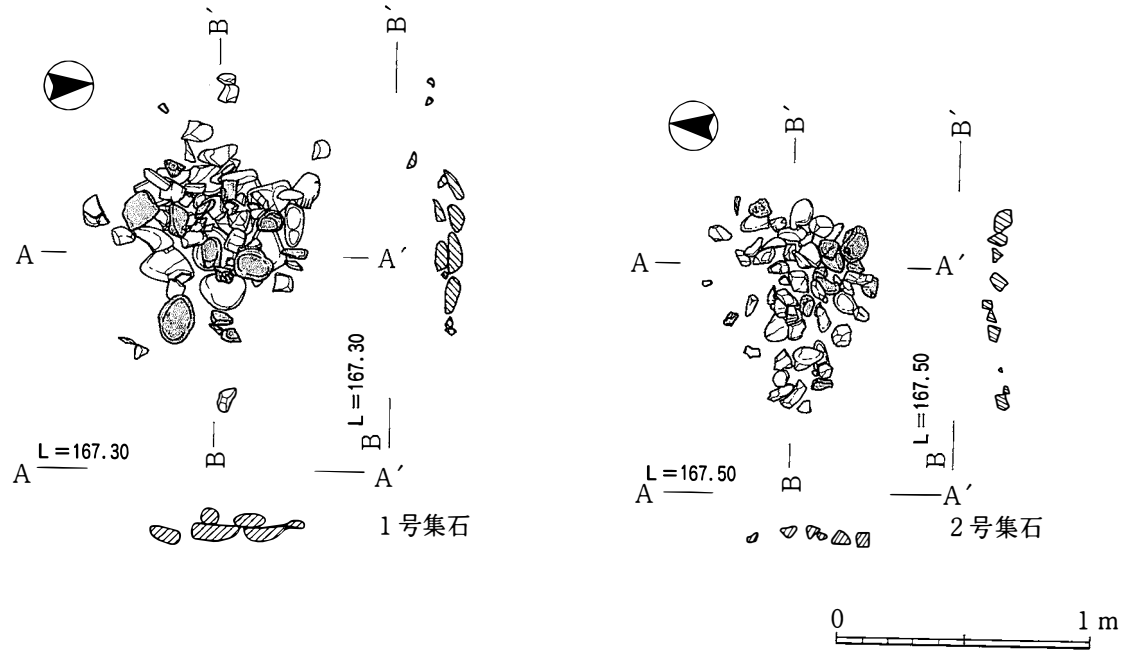
Ｅ類形態で不定形土坑上に礫があるがブロックが明確でなく、2.6m×2.1mの範囲に散石している。礫は人頭大３・拳大６・小石97で構成され、その火受石率は75%である。土坑内から第３類山形文２点・縄文１点、他に沈線文１点が出土している。

43号集石　（第22図）

4.3m×2.0mの広範囲に散石しているＤ類形態で４ケ所のブロック礫とその散石があり、密集区は東・西に大別でき、断面等からも二つの集石に分かれると思われる。整理上、東側を43号－Ａ、西側を43号－Ｂとするが、各散石の境界が不明であるため、一括して43号集石として提示した。全体に占める火受石の比率は86%と高く、また構成は人頭大23・拳大110・小石437であった。出土遺物は土器が７点。内訳は東側43号－Ａ集石に３類山形文２点、沈線文１点。西側のＢ集石に沈線文、ＡＢ間にピッチ幅の狭い第２類山形文が出土している。

44号集石　（第23図）

不定型土坑を持ち土坑外に礫が散石しているＢ－１類形態で、土坑内に礫密集の痕跡があり主に南側に散石が集中している。遺構の散石範囲は1.8m×1.3mであり、礫は人頭大38・拳大26・小石76で構成されている。埋土は２層に分層され第３類土器山形文２点・撚糸１個体・撚糸文６点・菱型３個体・縄文２・雷文 165・第９類土器ミニチュア土器雷文１点が集石上面より出土した。



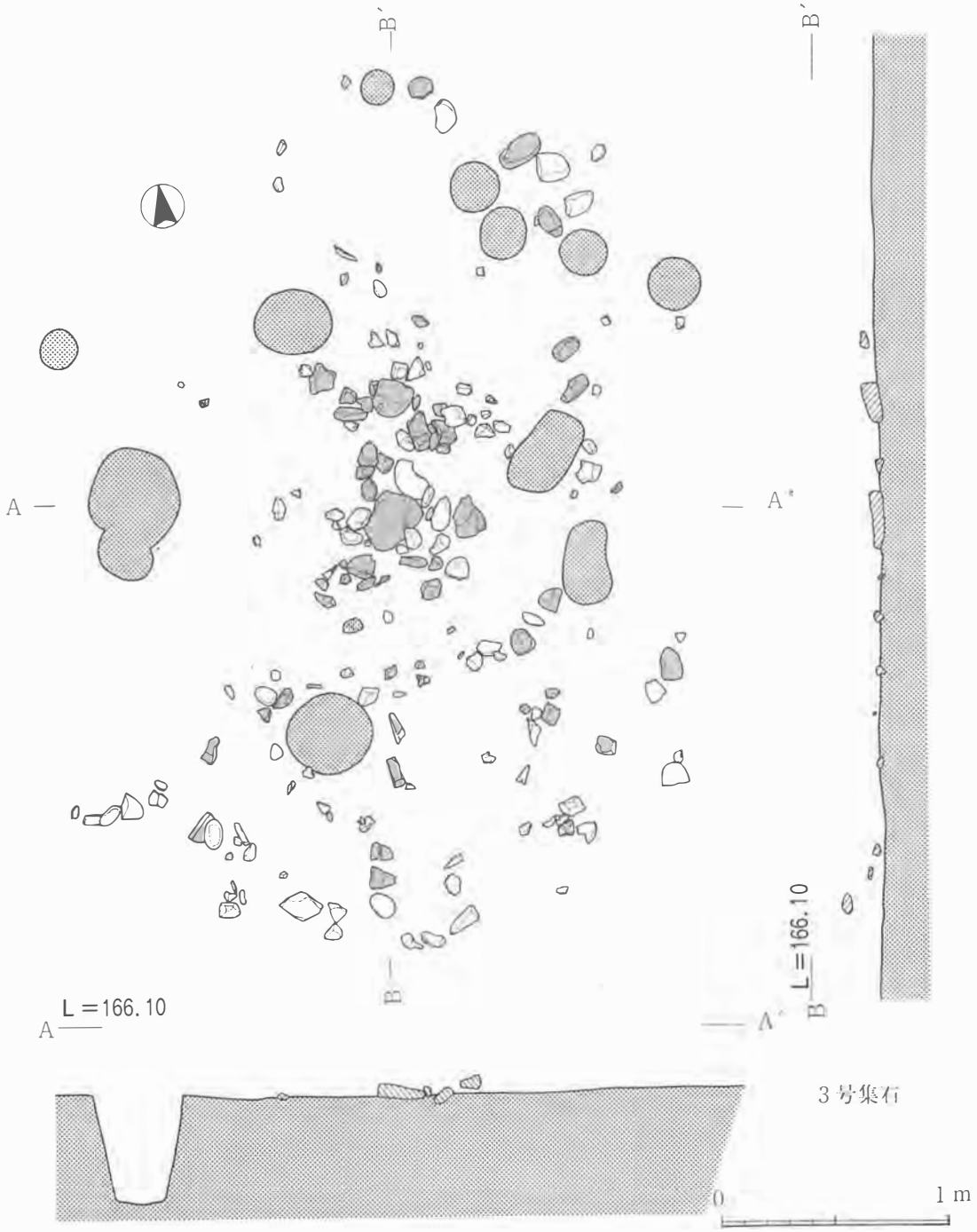
第７図　１・２号集石実測図

45号集石　（第23図）

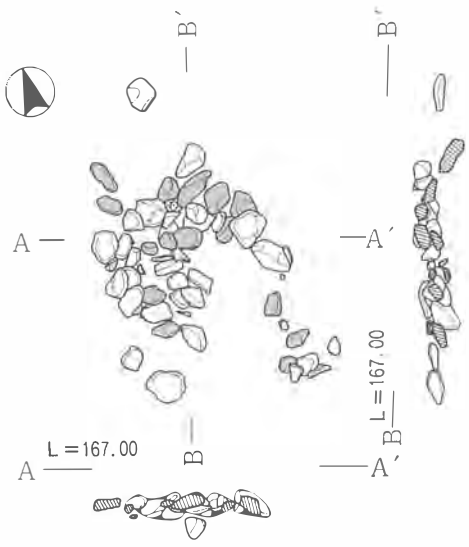
ピット状の遺構に切られているが不定型土坑を持つB－1類である。44号集石と状況は類似しているが、本遺構は土坑内に0.9m×0.9mの集石が見られる。礫は人頭大10・拳大55・小石84で構成されている。集石上面から第3類山形文2点・撚糸文1点・明確にできない押形系＋沈線1点、第7類撚糸文1点が出土している。

46号集石　（第24図）

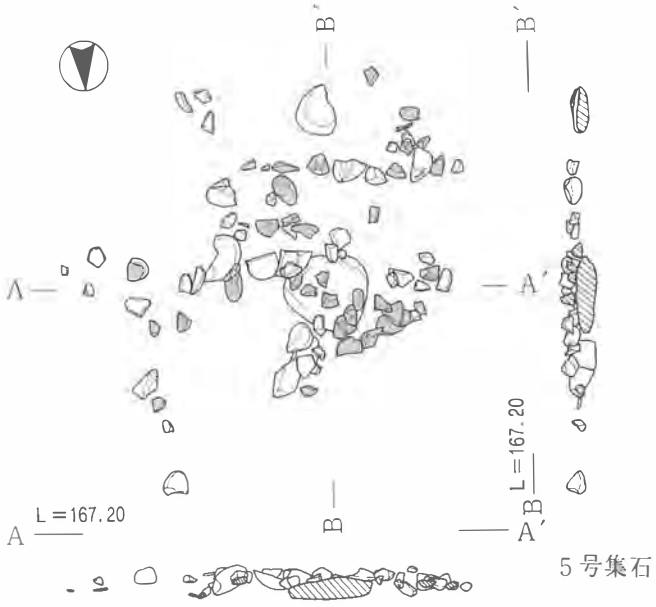
円形の掘り込みを持つC類形態で、土坑外に数点の礫が見れるが、土坑内に礫は集中し、南北に礫ブロックとして集石する。礫は人頭大3・拳大6・小石25で構成されている。第3類山形文1点・撚糸文3点，菱形文1点と沈線文1点が土坑上面から底部にかけて出土している。



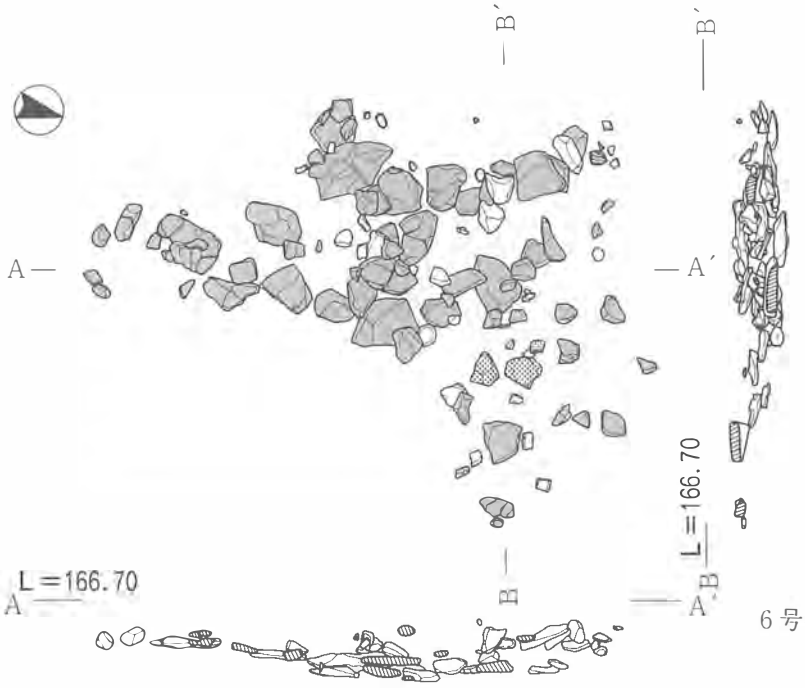
第8図　3号集石実測図



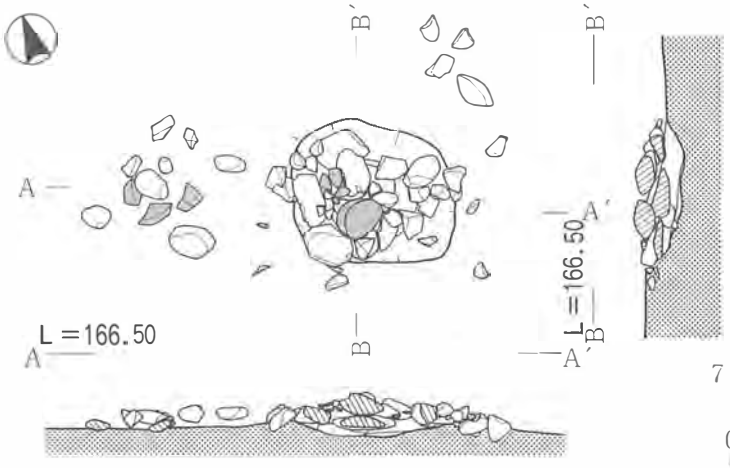
4 号集石



5 号集石

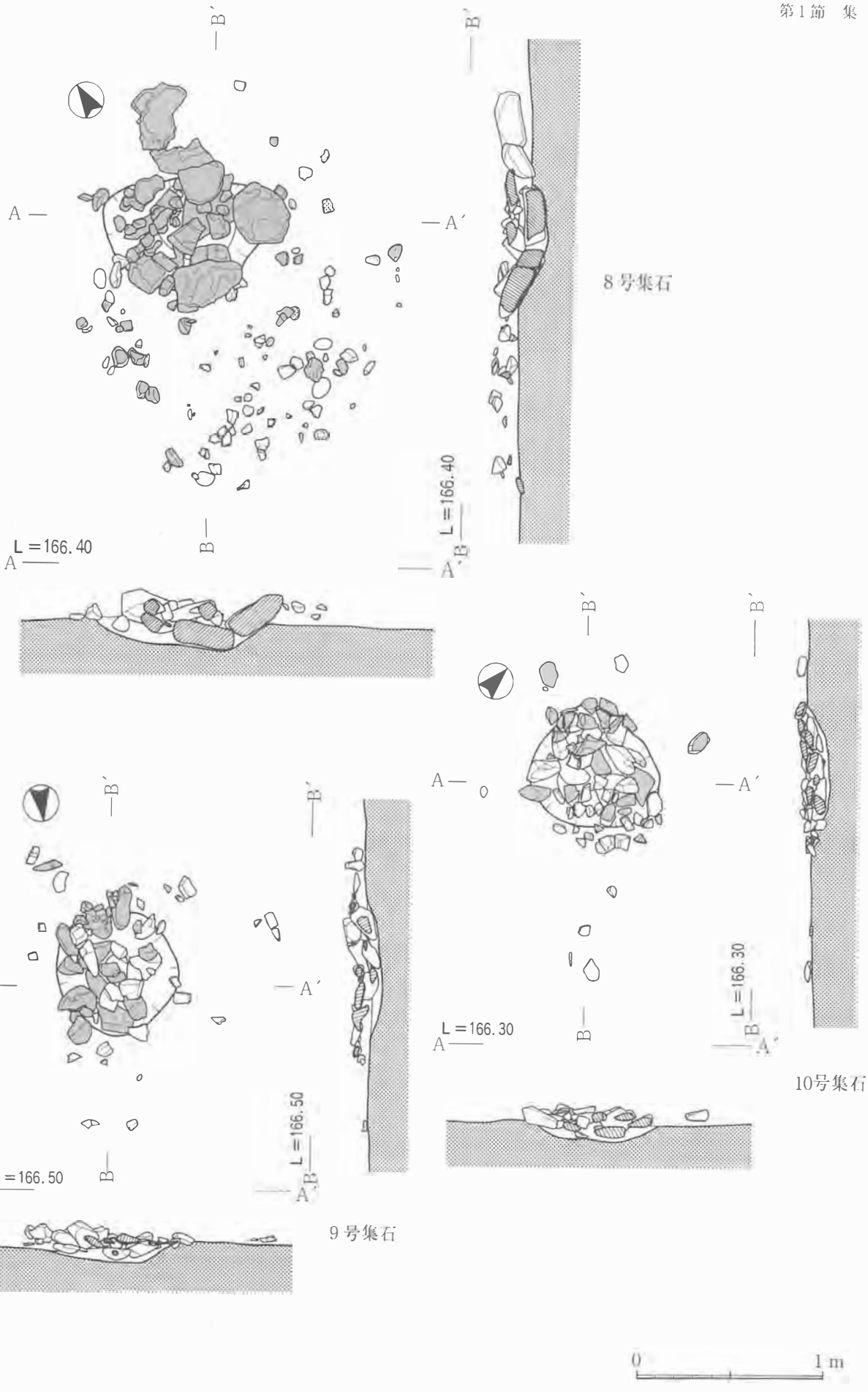


6 号集石

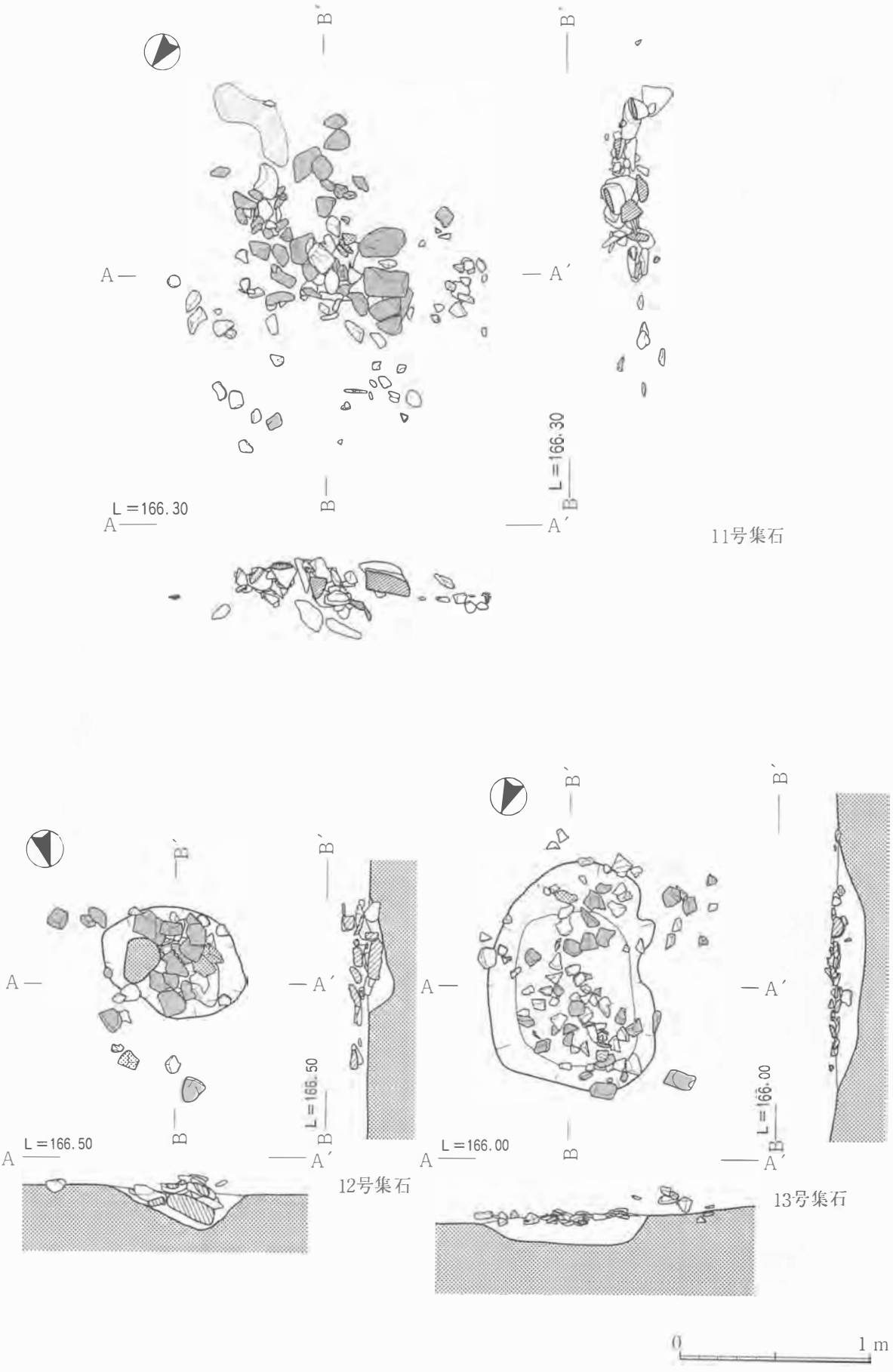


7 号集石

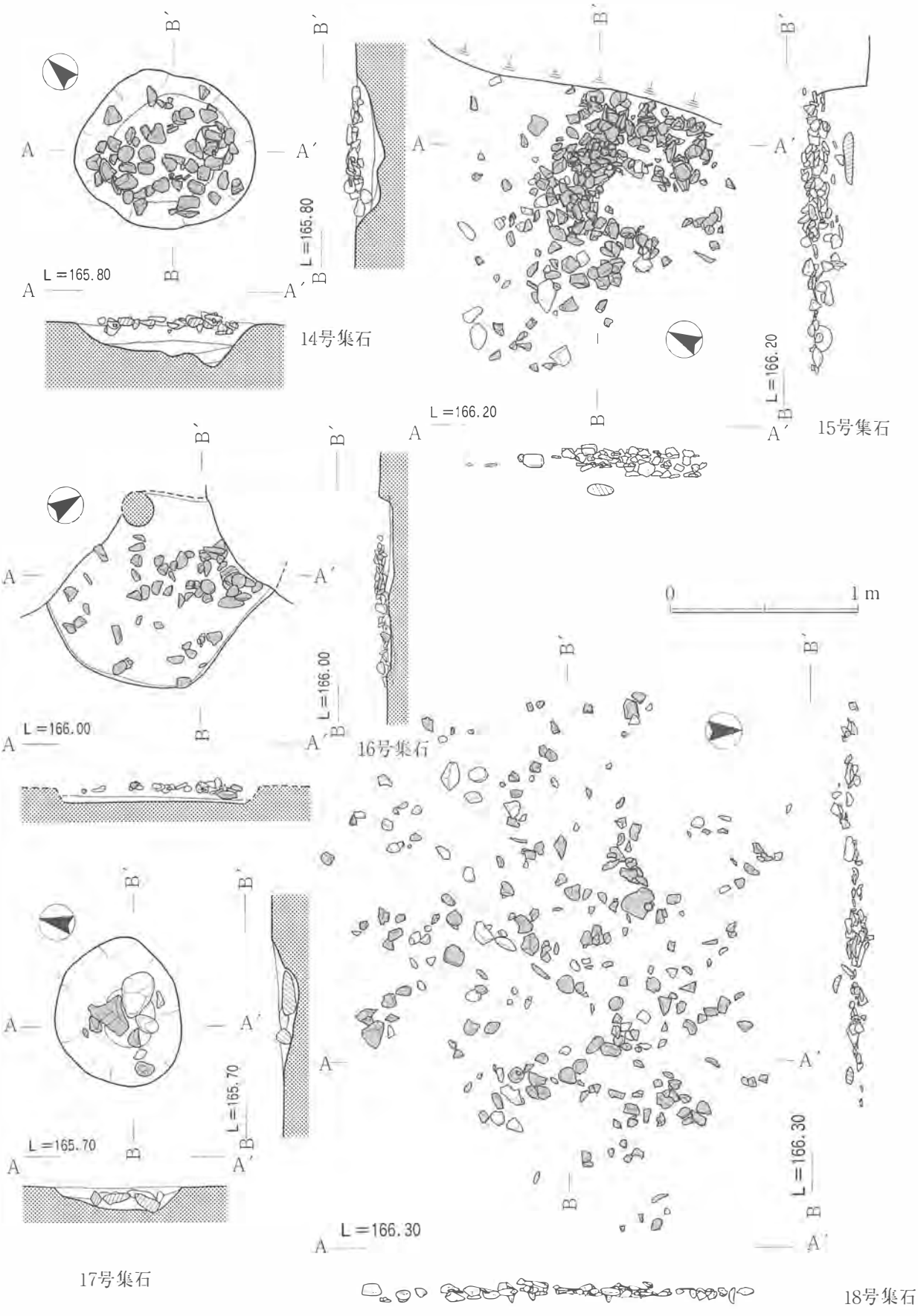
第 9 図　4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 号集石実測図



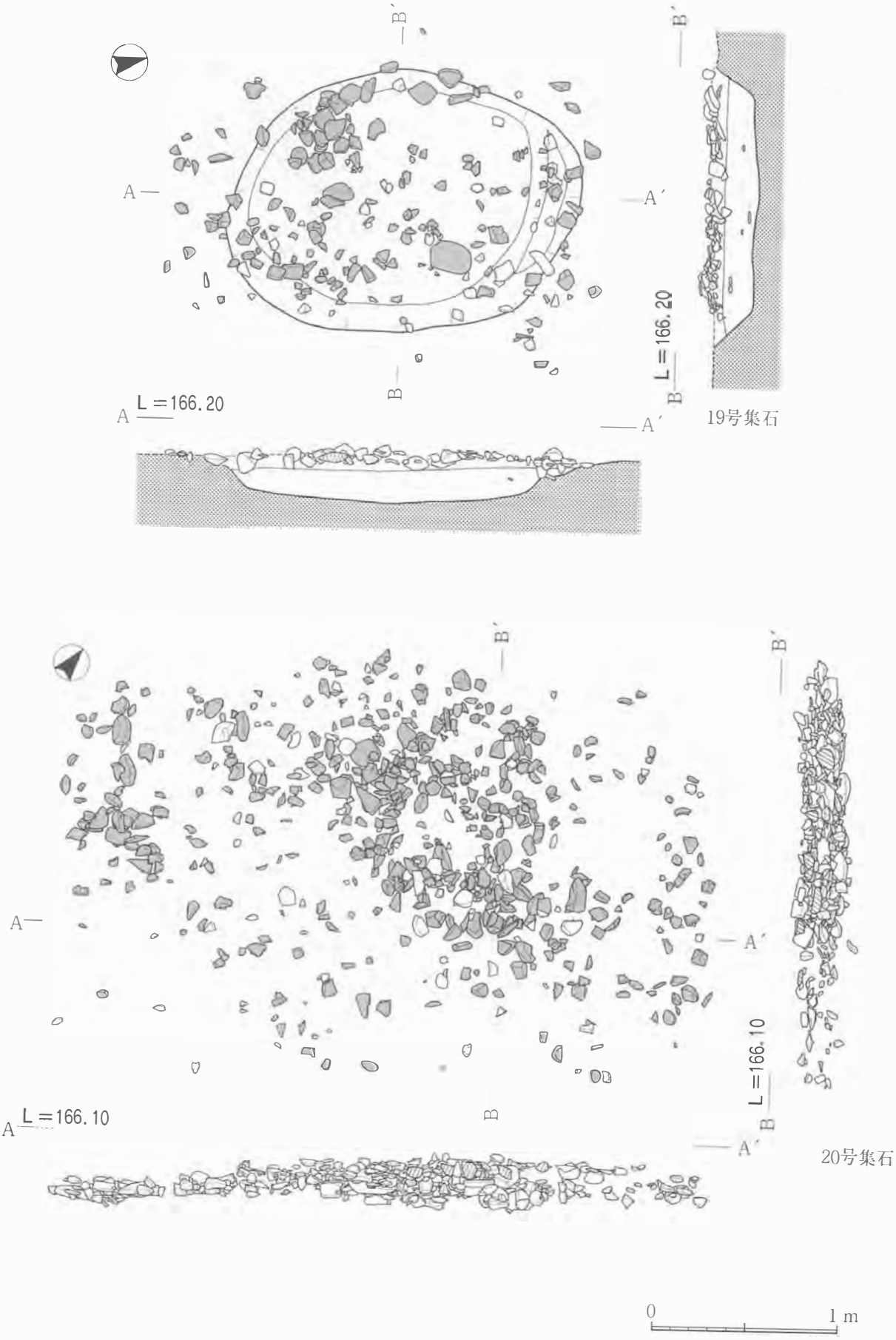
第10図　8・9・10号集石実測図



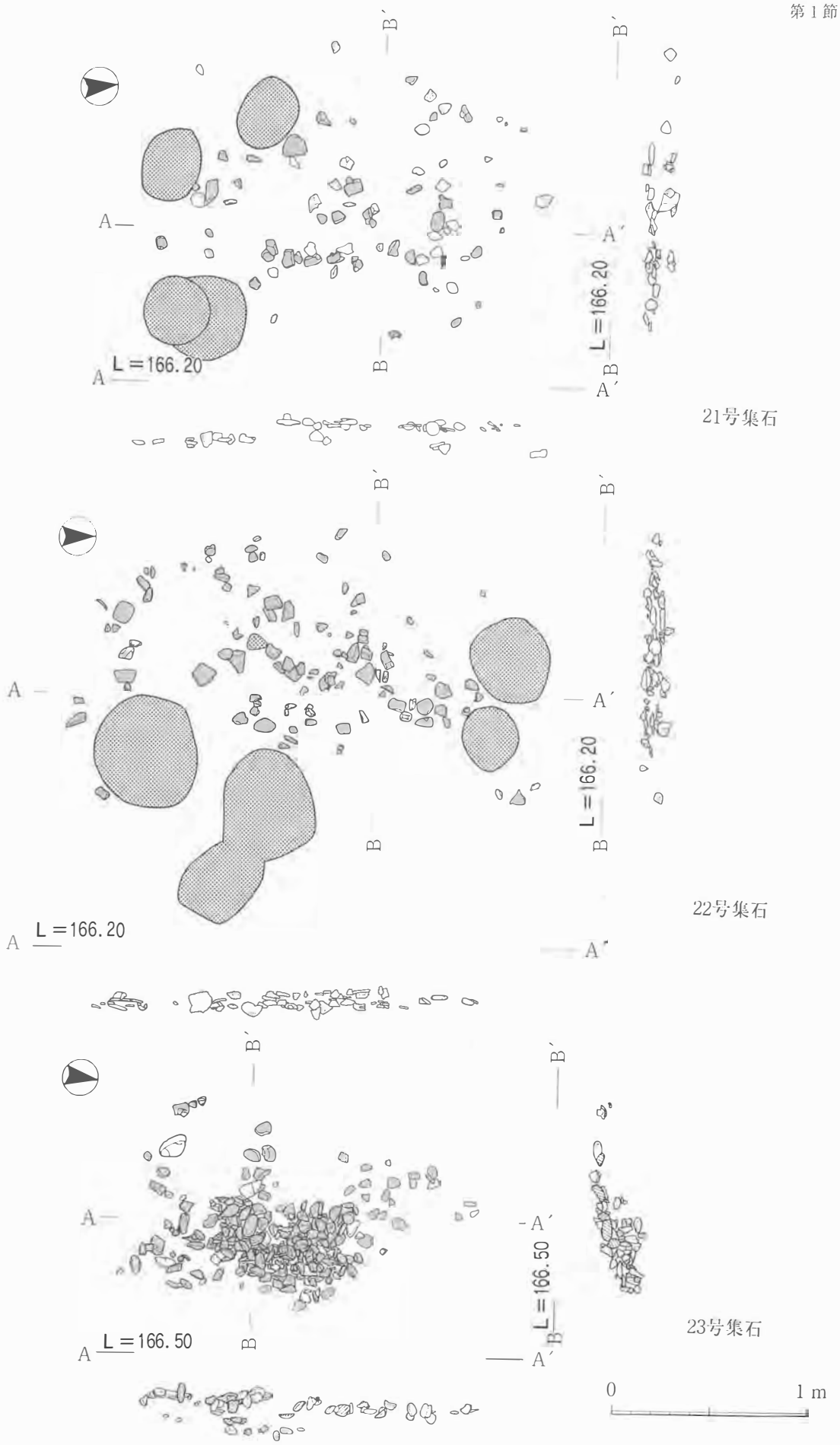
第11図　11・12・13号集石実測図



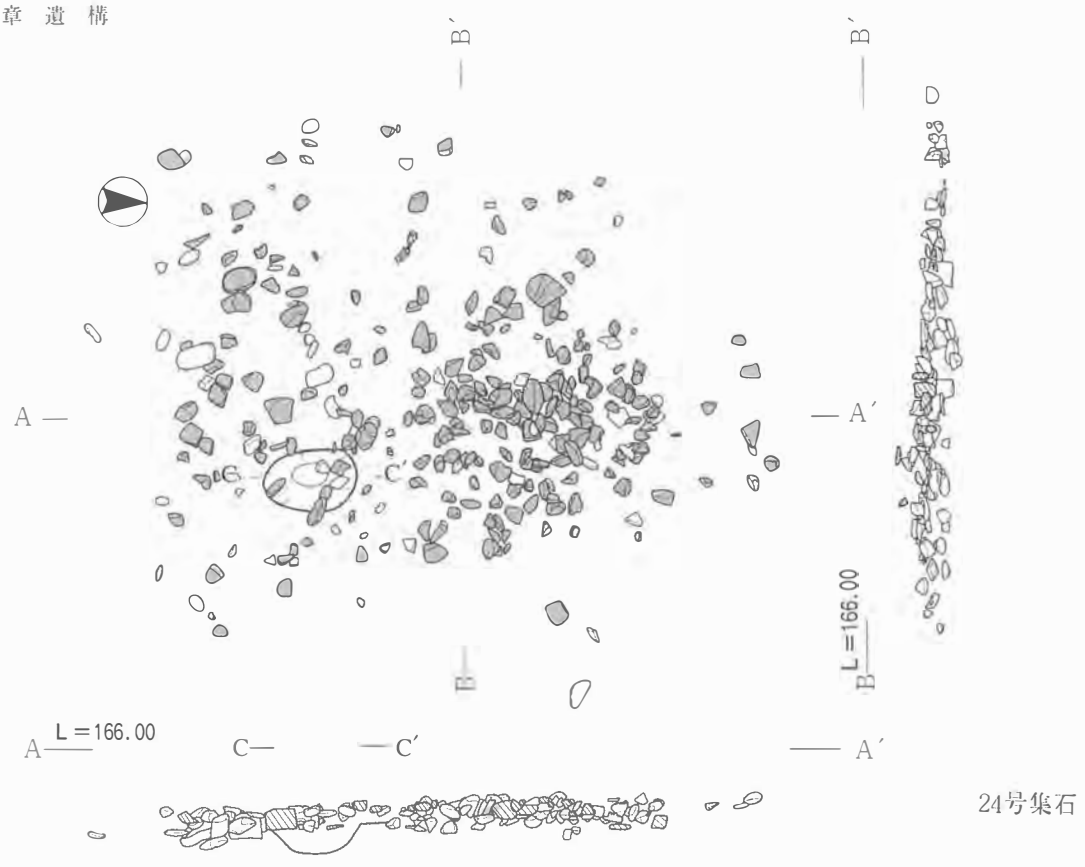
第12図　14・15・16・17・18号集石実測図



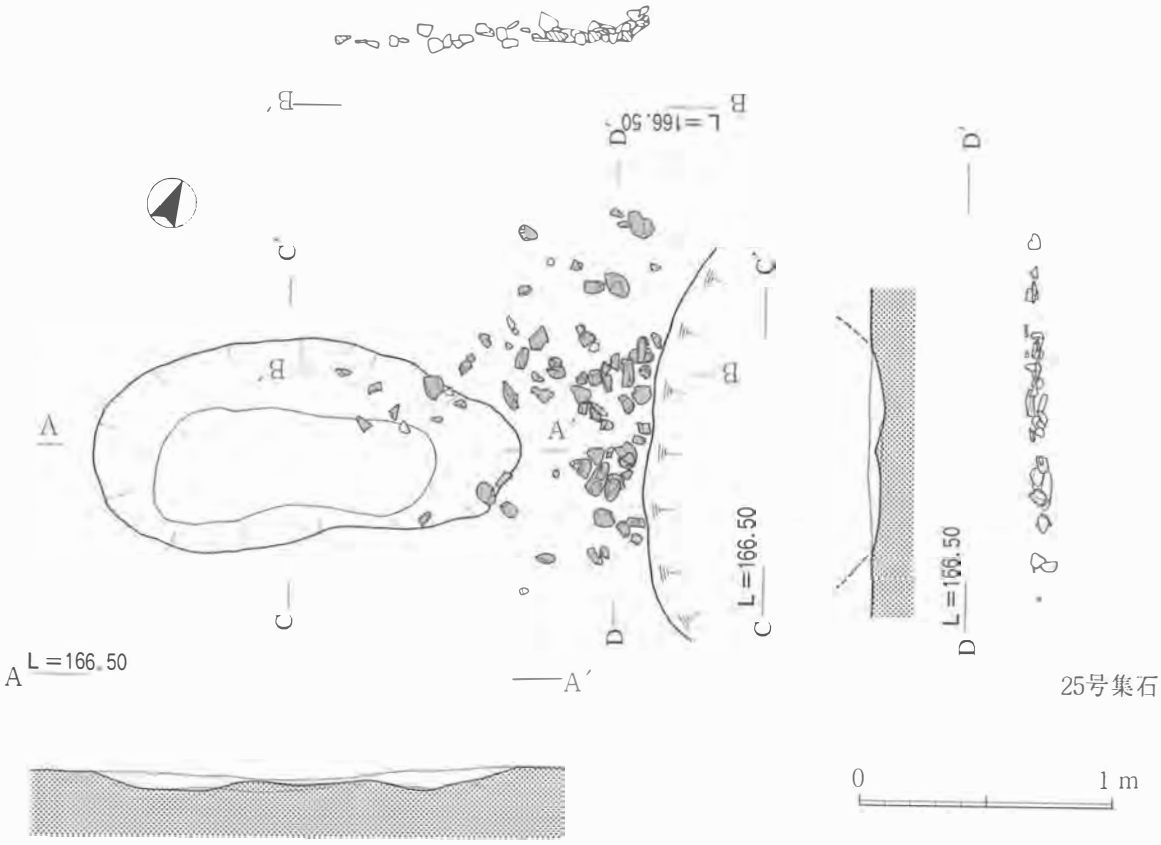
第13図　19・20号集石実測図



第14図　21・22・23号集石実測図

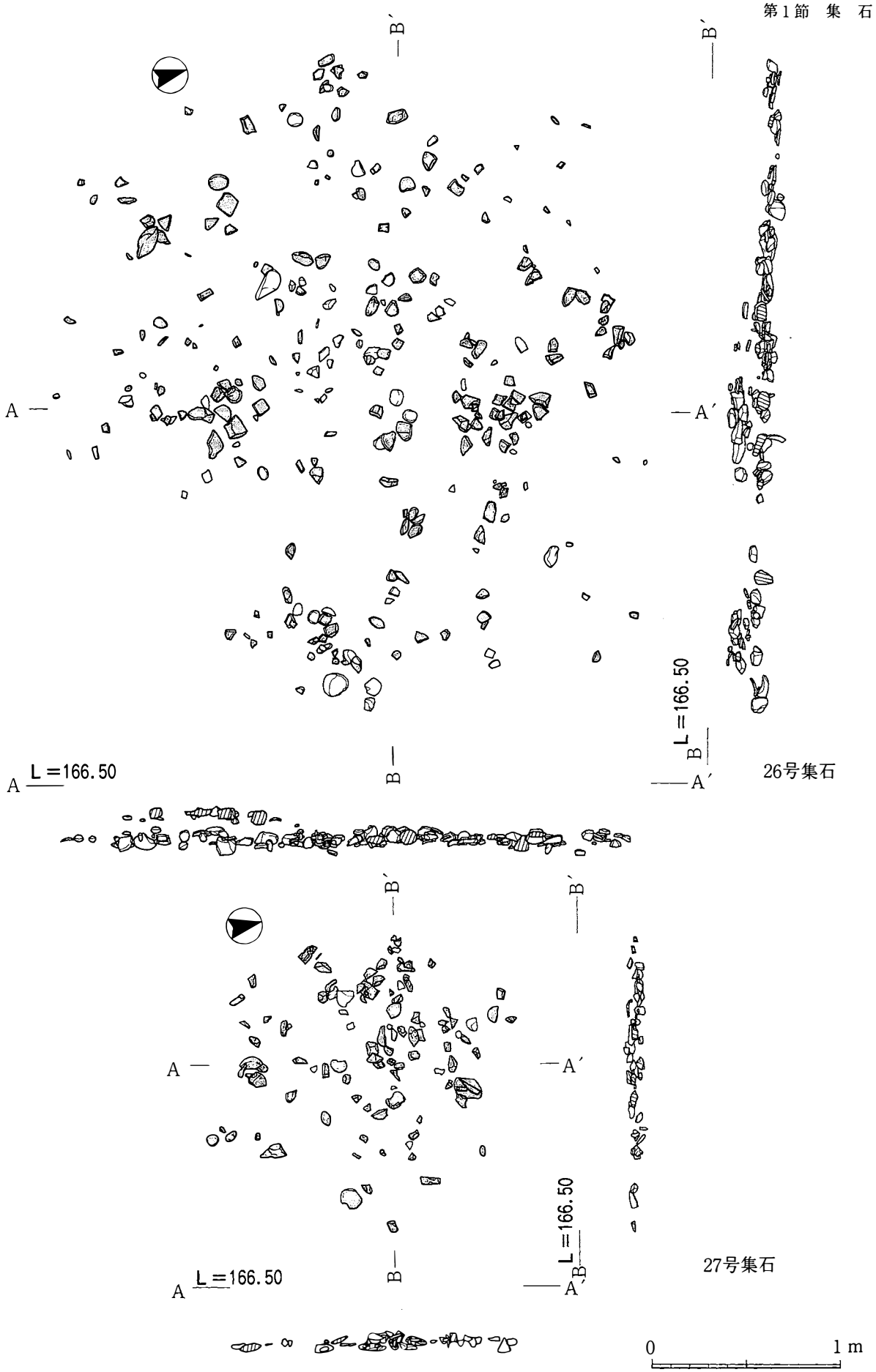


24号集石

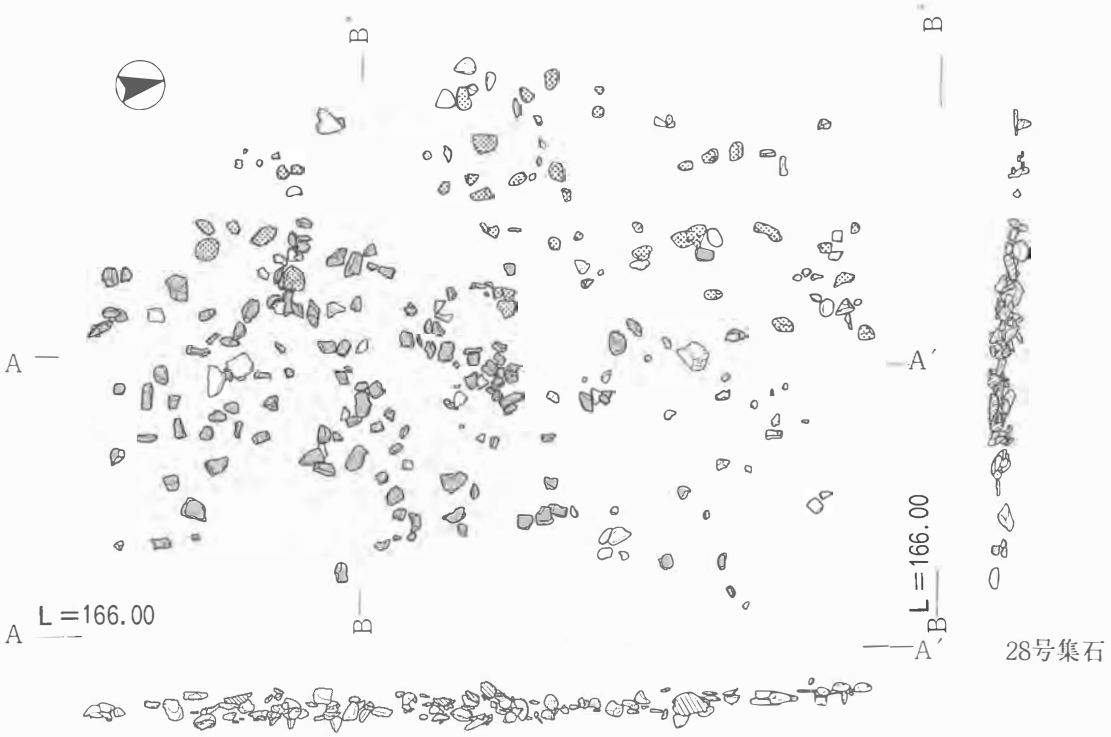


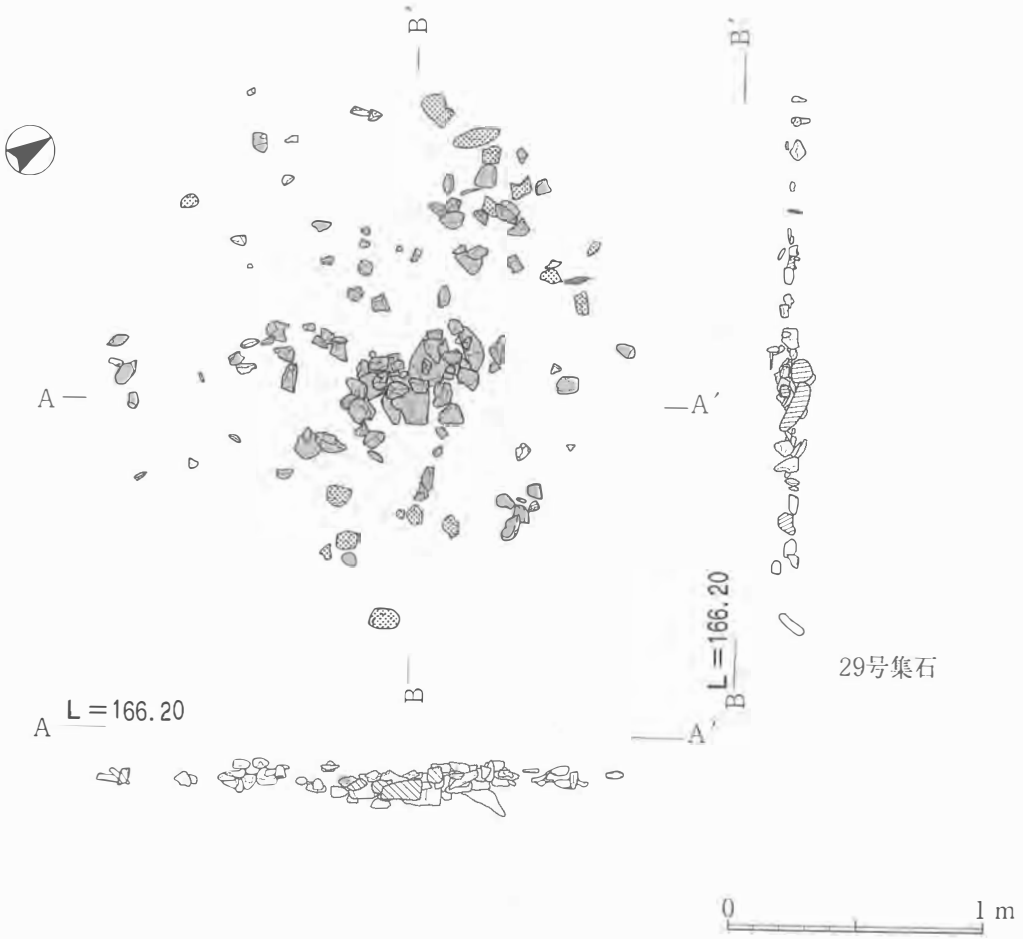
25号集石

第15図　24・25号集石実測図

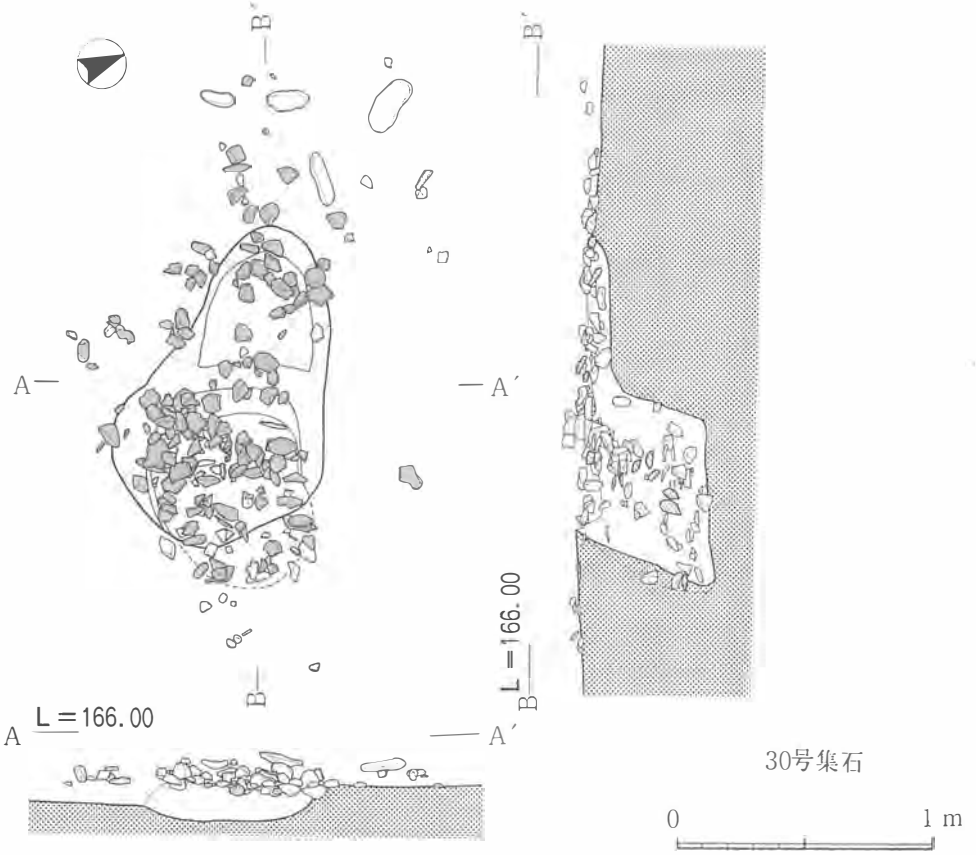


第16図　26・27号集石実測図





第17図　28・29号集石実測図



第18図　30号集石実測図

47号集石　（第24図）

1.0m×0.9mの範囲に散石している。上位を掘りすぎているが遺構には土坑が存在したと思われB類形態の可能性がある。想定される土坑法量は、1.1m×1.0m×0.2m程であろう。0.8m×0.4mの礫ブロックが見られる。礫は人頭大2・拳大9・小石30で構成され、火受石の比率は86%と高い。

48号集石　（第24図）

不定形土坑を持つB類形態で南側を後世のピットによって切られている。礫は土坑内で集石しており礫は人頭大9・拳大10・小石173で構成され、全体に占める火受石の比率は78%である。土坑上中層にカーボン、下層に焼土が検出された。燃焼土坑にその形態が類似しているが火受石の高比率と礫中心の遺構であるために集石として区分した。

49号集石　（第24図）

D類形態で0.5m×0.4mの範囲に集石、東側に散石が見られる。0.7m×0.9mの範囲に散石している。人頭大6・拳大6・小石8で構成された小規模の集石であるが火受石は88%と高率である。

50号集石　（第24図）

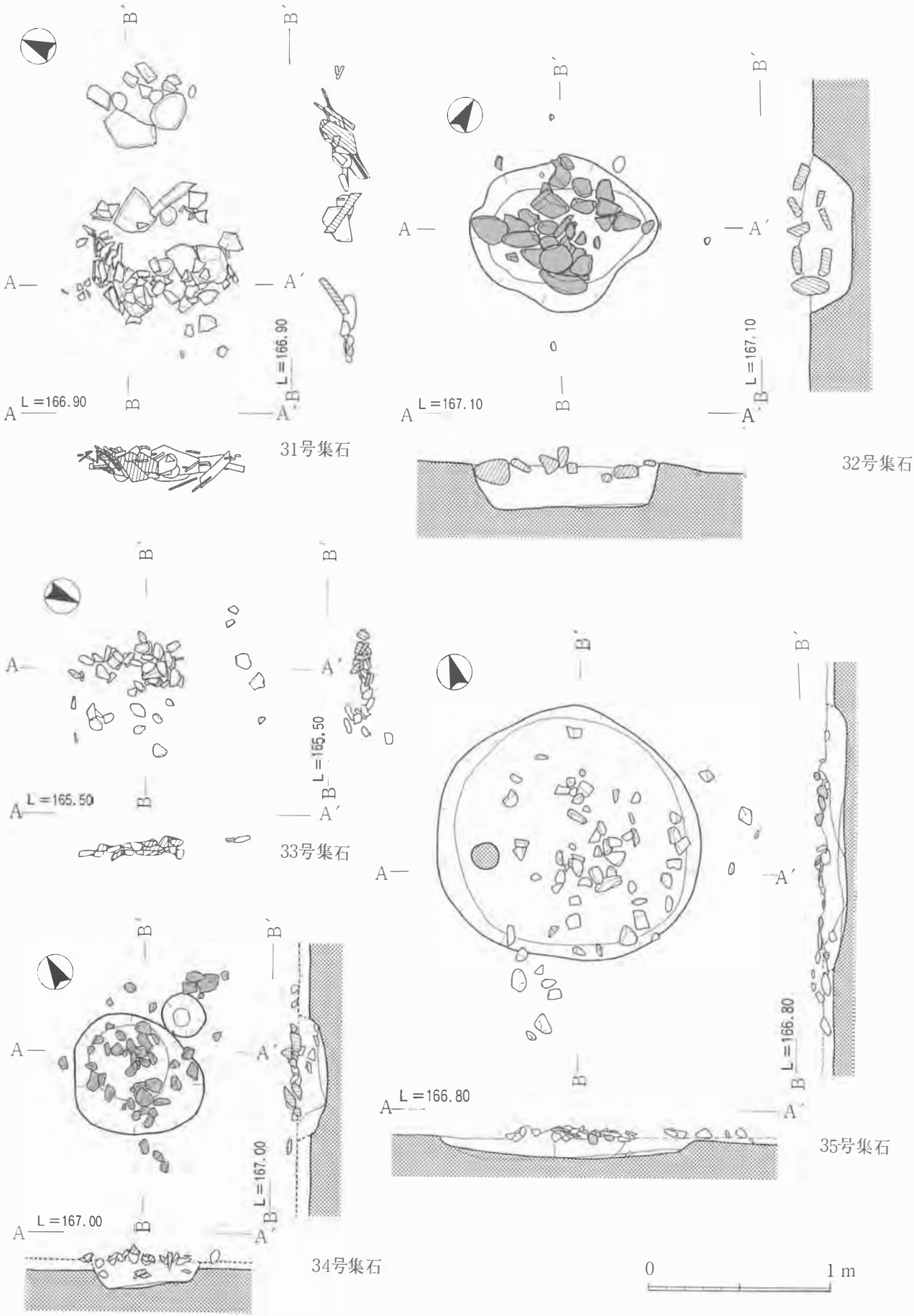
不定形の土坑を持つB類形態で、礫は土坑内に散石し、人頭大1・拳大8・小石41で構成されている。土坑の掘り込みは南側に傾斜し、埋土には微量のカーボンを含んでいる。第7類貝殻文1個体、第8類山形文1点が散石間で出土している。

51号集石　（第25図）

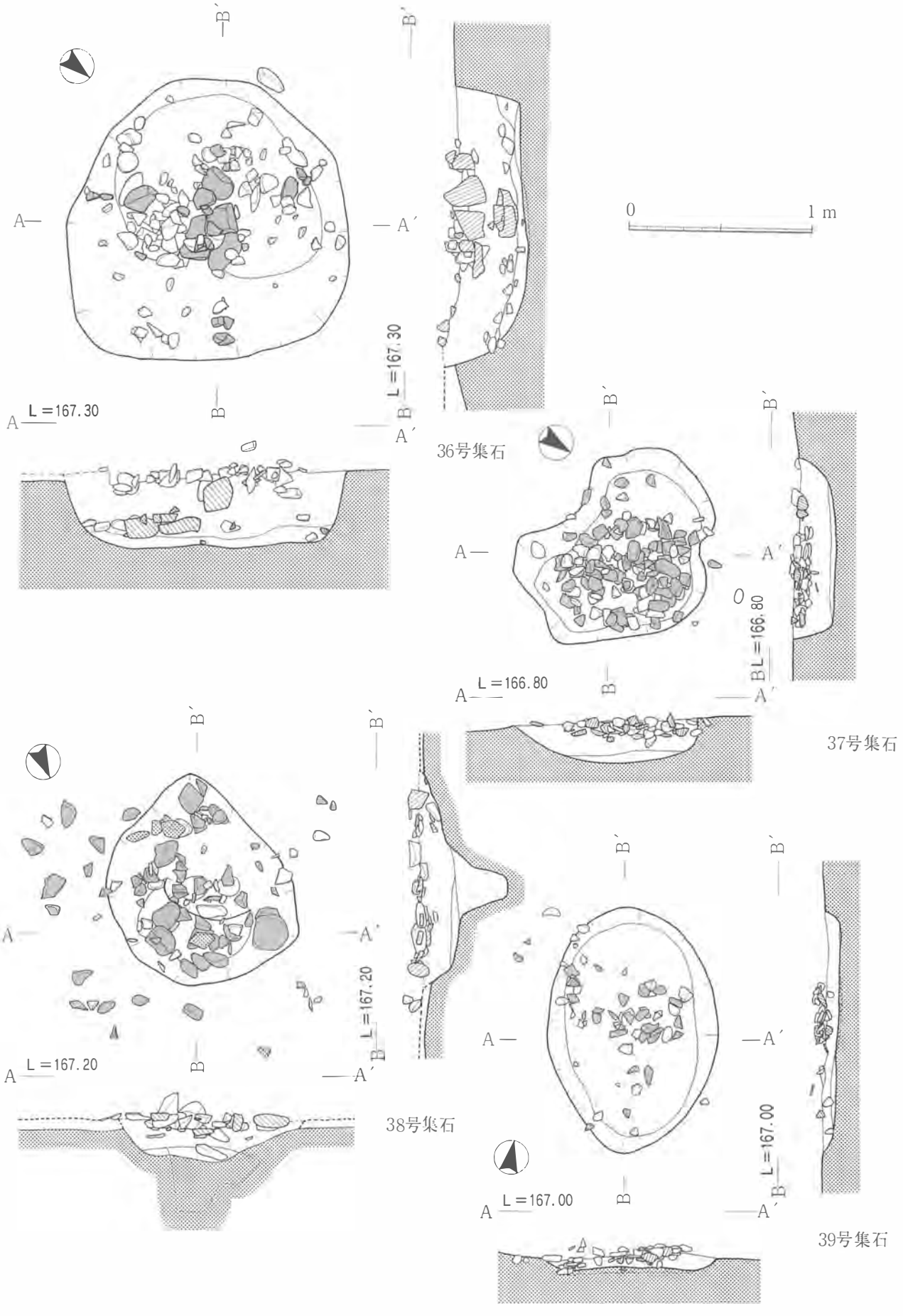
円形の土坑を持つE類形態で西側に撹乱を受けている。礫は人頭大11・拳大2・小石23で構成され、土坑内で0.7m×0.6mの範囲にブロックが見られ、北東方面に散石している。第3類山形文11点・第8類山形文1点と沈線1点が掘り込み集石間より出土している。

52号集石　（第25図）

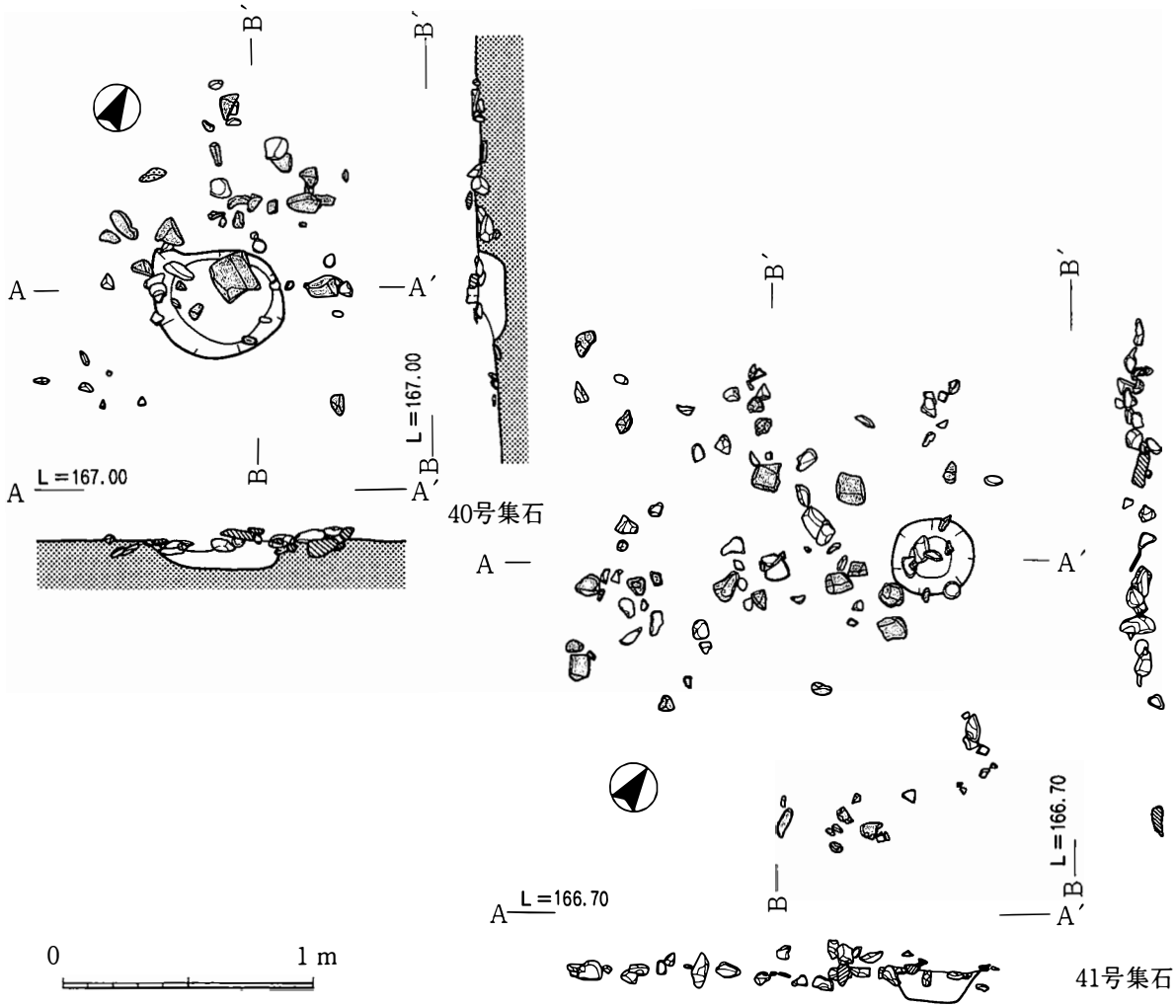
楕円形の土坑をもつB－1類形態で南側を後世のピットで切られているが、礫は土坑内に0.7m×0.7m

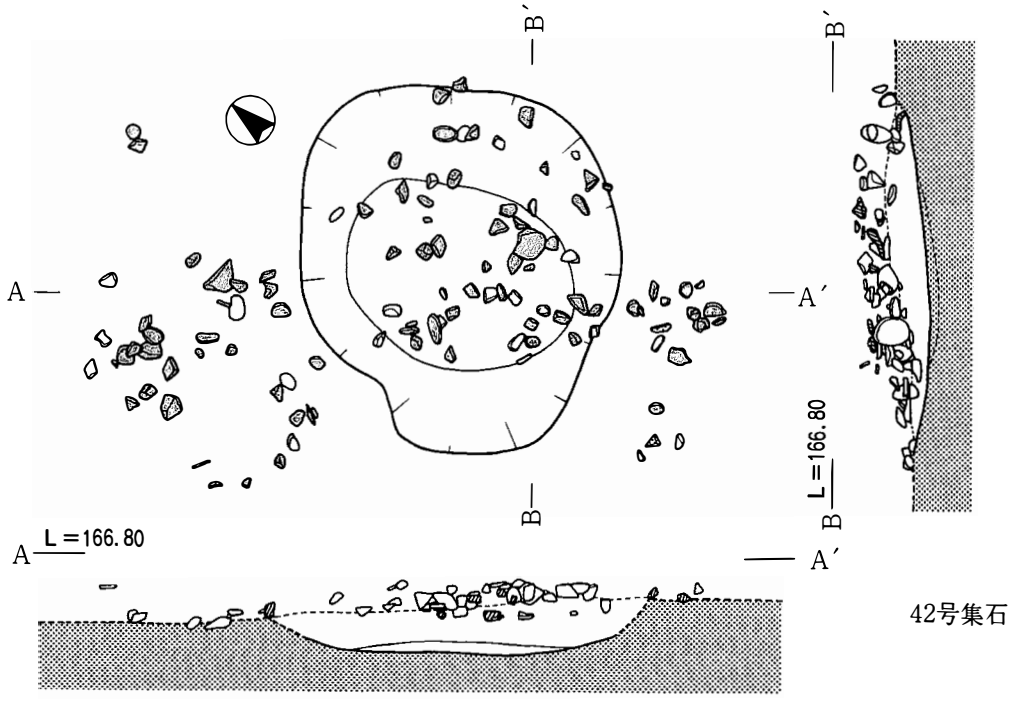


第19図　31・32・33・34・35号集石実測図



第20図　36・37・38・39号集石実測図

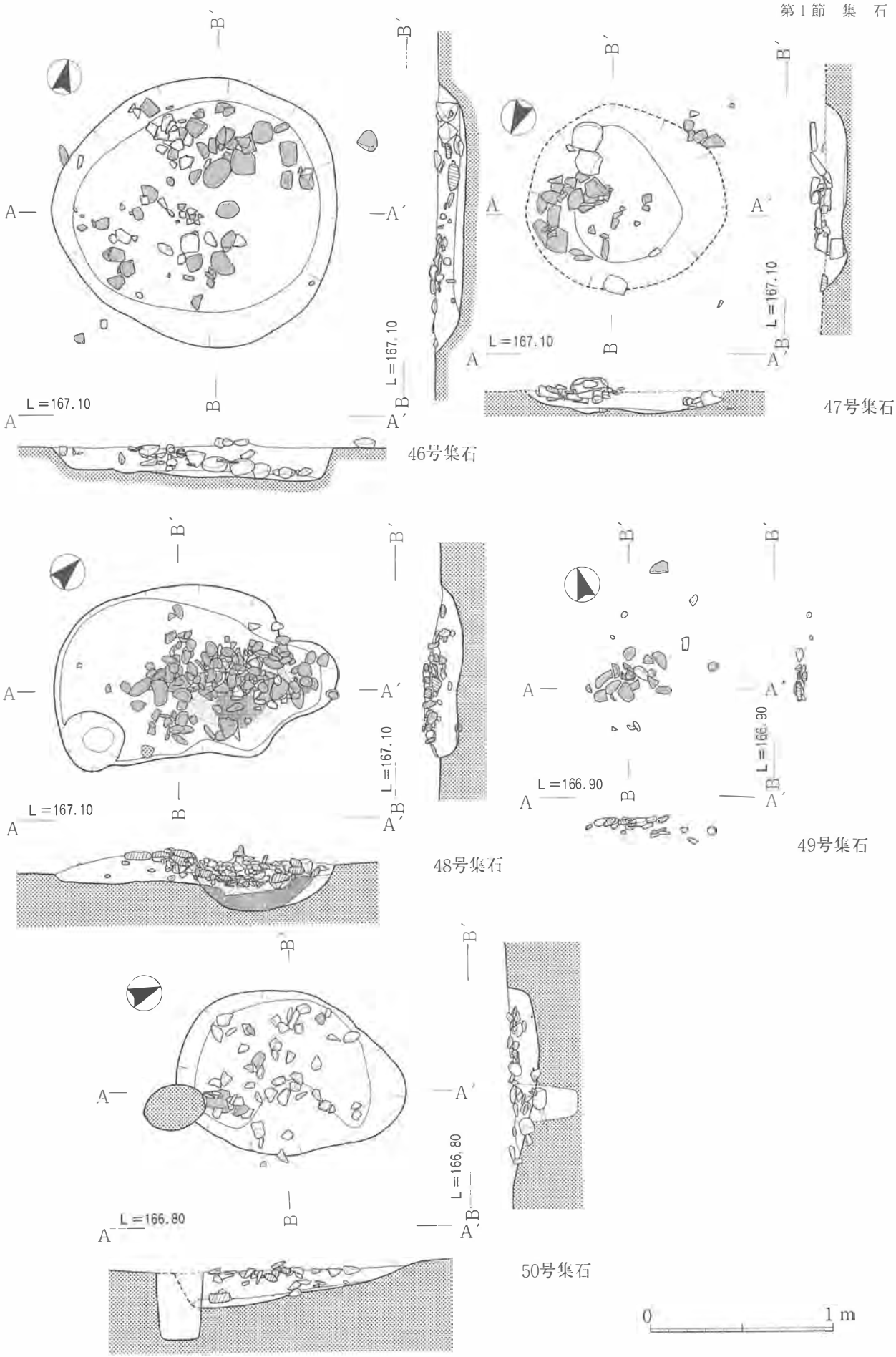




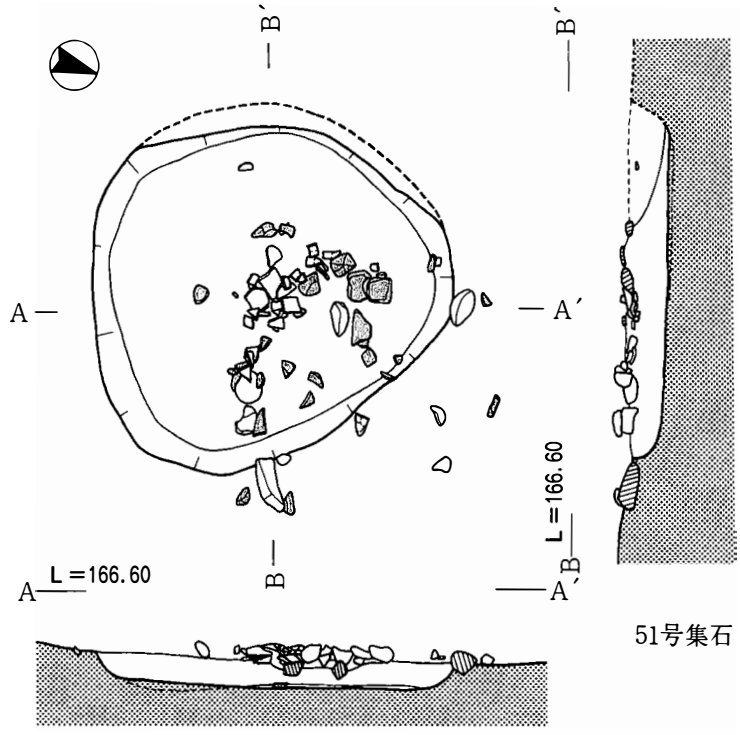
第21図　40・41・42号集石実測図

第22図　43号集石実測図

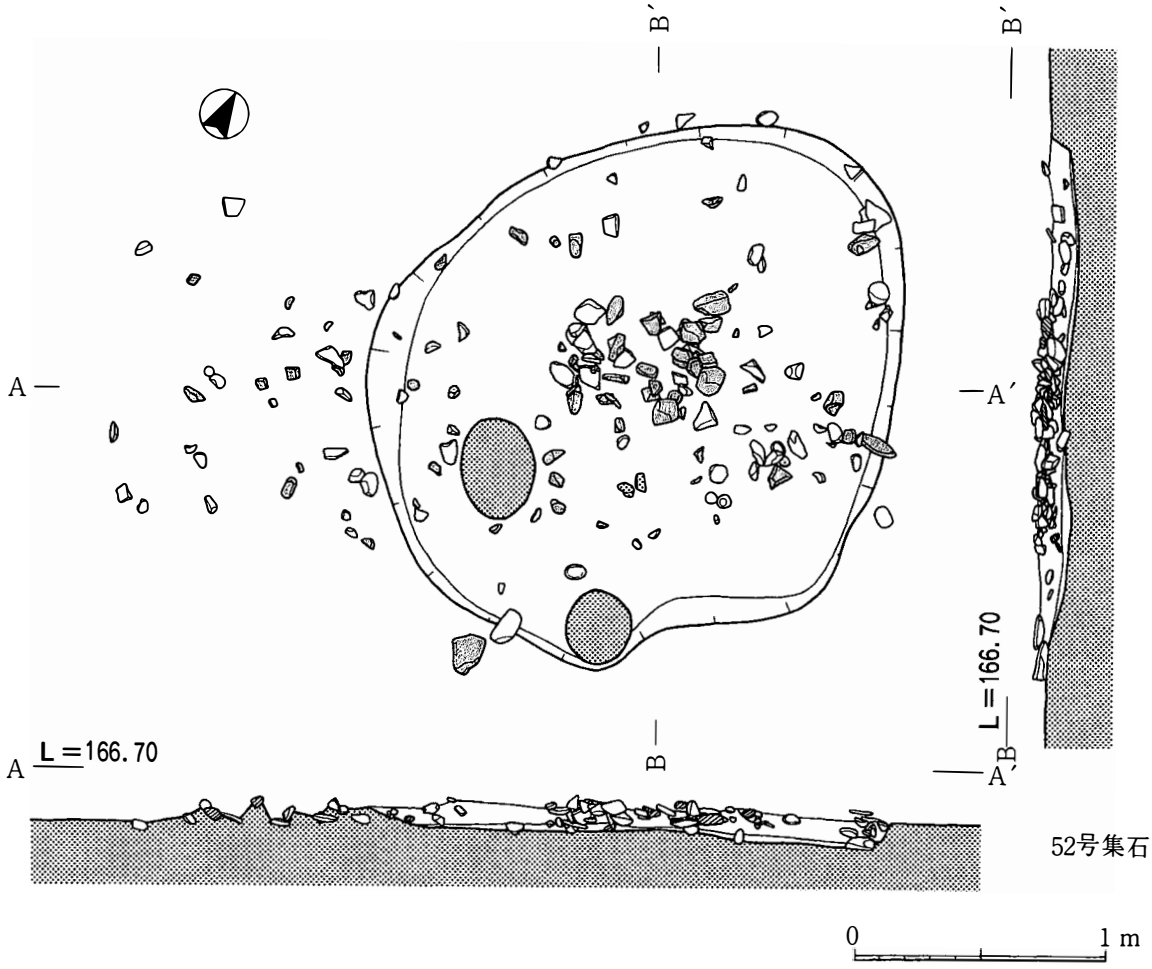
第23図　44・45号集石実測図



第24図　46・47・48・49・50号集石実測図

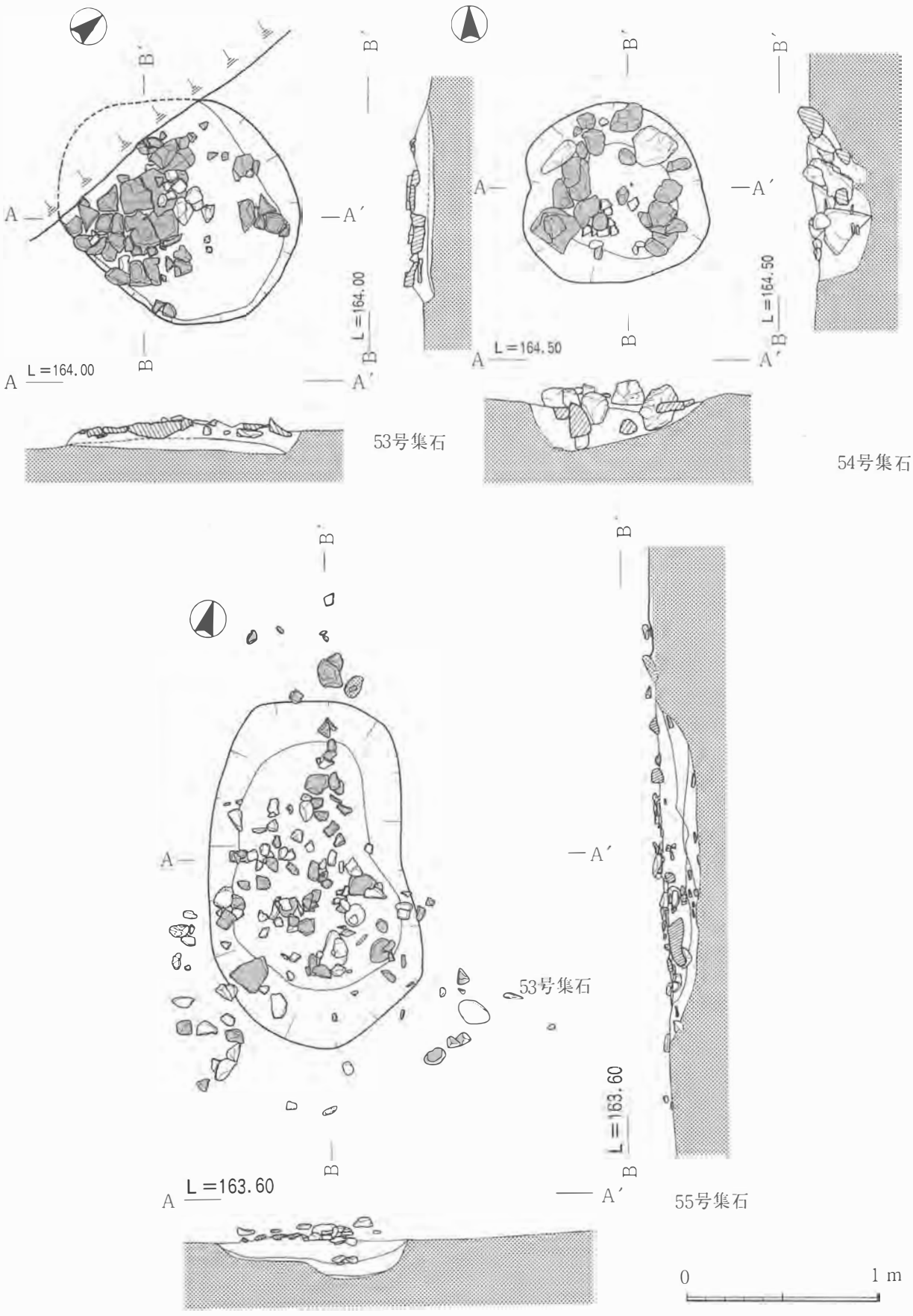


51号集石

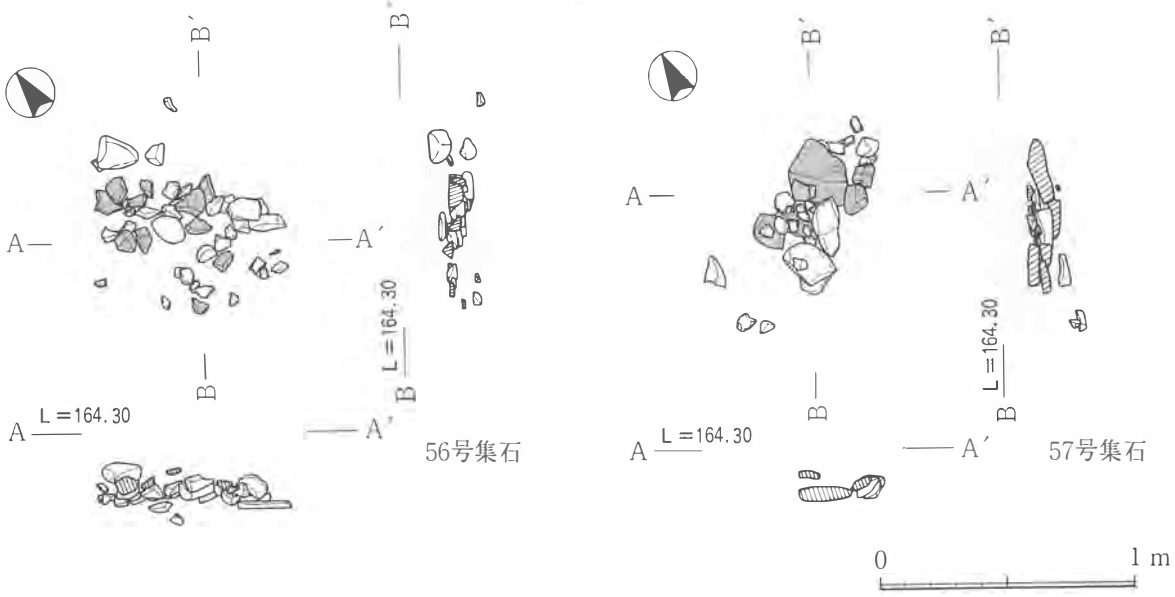


52号集石

第25図　51・52号集石実測図



第26図　53・54・55号集石実測図



第27図　56・57号集石実測図

の範囲のブロックを中心として散石し、土坑外では南西方向に散石が見られる。礫は人頭大27・拳大37・小石55で構成されている。第３類山形文１点、第７類貝殻文系 377と石鏃 18が掘り込み端部より出土している。集石間に摺石・叩石の第２類 234出土。

53号集石　（第26図）

遺構西側を後世の遺構で切られているが楕円形の土坑を持つＥ類形態である。礫は土坑内での集石であるが中央に平胆な大型底石を配置し、周囲に拳大の石が散石している状態であった。礫は人頭大16・拳大16・小石23で構成されている。

54号集石　（第26図）

円形の土坑を持つＡ類形態で礫は中央に空間を持ち花弁状に配置されている。礫は人頭大11・拳大９・小石14で構成され他の遺構に比べ人頭大の比率が高い。第３類山形文３点・撚糸文２点・菱型文１点・縄文１点、同心楕円文１点が中央の空間より出土している。

55号集石　（第26図）

土坑埋土は２層に分層でき、底部に若干の礫が見られるがＢ類形態に区分した。礫は人頭大16・拳大16・小石23で構成され、明確な礫ブロックは見られず南北軸に散石している。掘り込み直上から第３類山形文・ミミズばれ文と沈線文が出土している。

56号集石　（第27図）

Ｃ類形態で0.7m×0.4mの範囲にブロックがあり、周りには散石が見られ、礫は人頭大３・拳大２・小石40で構成されている。沈線文が１点、散石間に出土している。

57号集石　（第27図）

56号集石に隣接しているＣ類形態で大型の底石上に小石が集石している状態である。礫は人頭大５・拳大４・小石18で構成された小規模な集石である。

58号集石　（第28図）

楕円形の土坑上に礫ブロックが見られ東方向に散石しているＥ類形態で、礫構成は拳大６・小石60で構成されている。1.3m×0.7mの範囲に集石している。土坑上面で第３類格子文が１点出土している。掘り込みを持ち、その法量は0.7m×0.5m×0.2mである。

59号集石　（第28図）

遺構北側に撹乱を受けているが、楕円形の土坑を持つＥ類形態で、ほぼ土坑内に礫は集中し、礫構成は人頭大３・拳大24・小石70で構成されている。

60号集石　（第28図）

小ピットを持つ鉤状の不定形掘り込みに礫が集石している。礫のレベルは底部から上面までに位置しているが上面での密集が高くＥ類形態とした。礫は土坑の形状に沿うように鉤状に集中し西側に僅かに散石が見られ、礫構成は人頭大７・拳大15・小石34で構成されている。

61号集石　（第28図）

東側を攪乱により削平されているが楕円形の土坑を持つＢ類形態で0.5m×0.4mにＵ字状の集石があり、周囲に散石が見られるが礫は土坑内に集石している。礫構成は人頭大１・拳大４・小石49で構成されている。火受石の比率は２％と低い。

62号集石　（第28図）

円形の土坑を持つＢ類形態で礫は0.4m×0.3mの範囲に集石している。構成は人頭大２・拳大４・小石11で小規模であり礫は火受石が存在しなかった。

63号集石　（第28図）

楕円形の土坑を持つＥ類形態で土坑内に集石し散石は見られず、0.7m×0.5mの範囲に集石している。上層を掘りすぎたので本来の法量は広がるのであるが検出状況では0.9m×0.7m×0.1mである。集石として厚みがあり0.2mを測る。人頭大４・拳大30・小石74で構成される。

64号集石　（第29図）

不定形の土坑を持つＥ類形態で0.3m×0.4mに礫ブロックが見られ、東・北方向に散石が見られる。構成は拳大３・小石48である。

65号集石　（第29図）

円形の土坑を持つＢ類形態であるが明確な礫ブロックを持たず土坑中心から北東方向に散石している。構成は人頭大２・拳大４・小石27で小規模な集石である。

66号集石　（第29図）

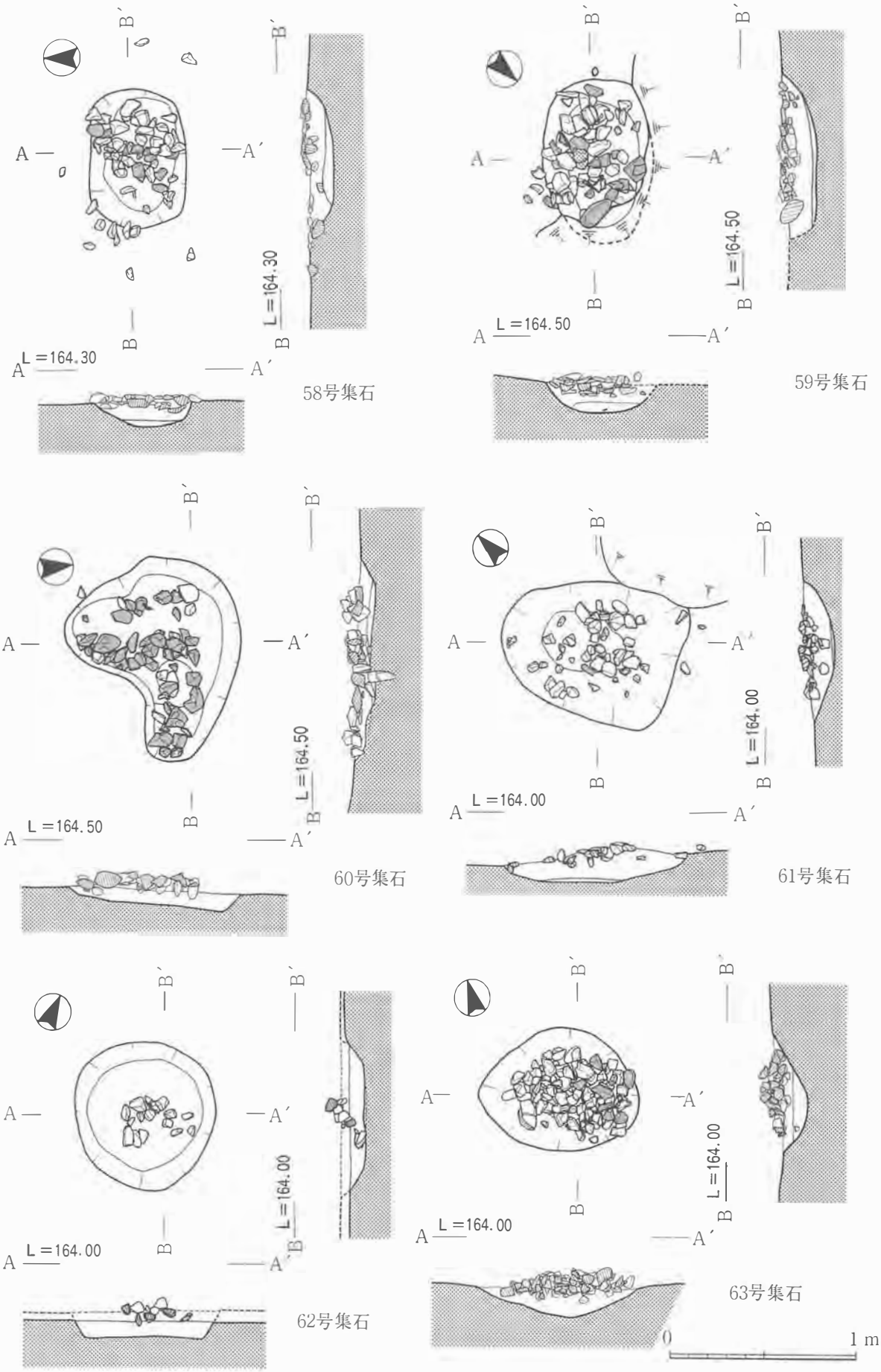
円形の土坑を持つＢ－１類形態で0.7m×0.6mの範囲に集石しているがピット状の遺構で破壊されている。土坑法量は1.0m×0.9m×0.1mであるが堀りすぎているため本来まだ広がるのであろう。構成は人頭大１・拳大22・小石23である。

67号集石　（第29図）

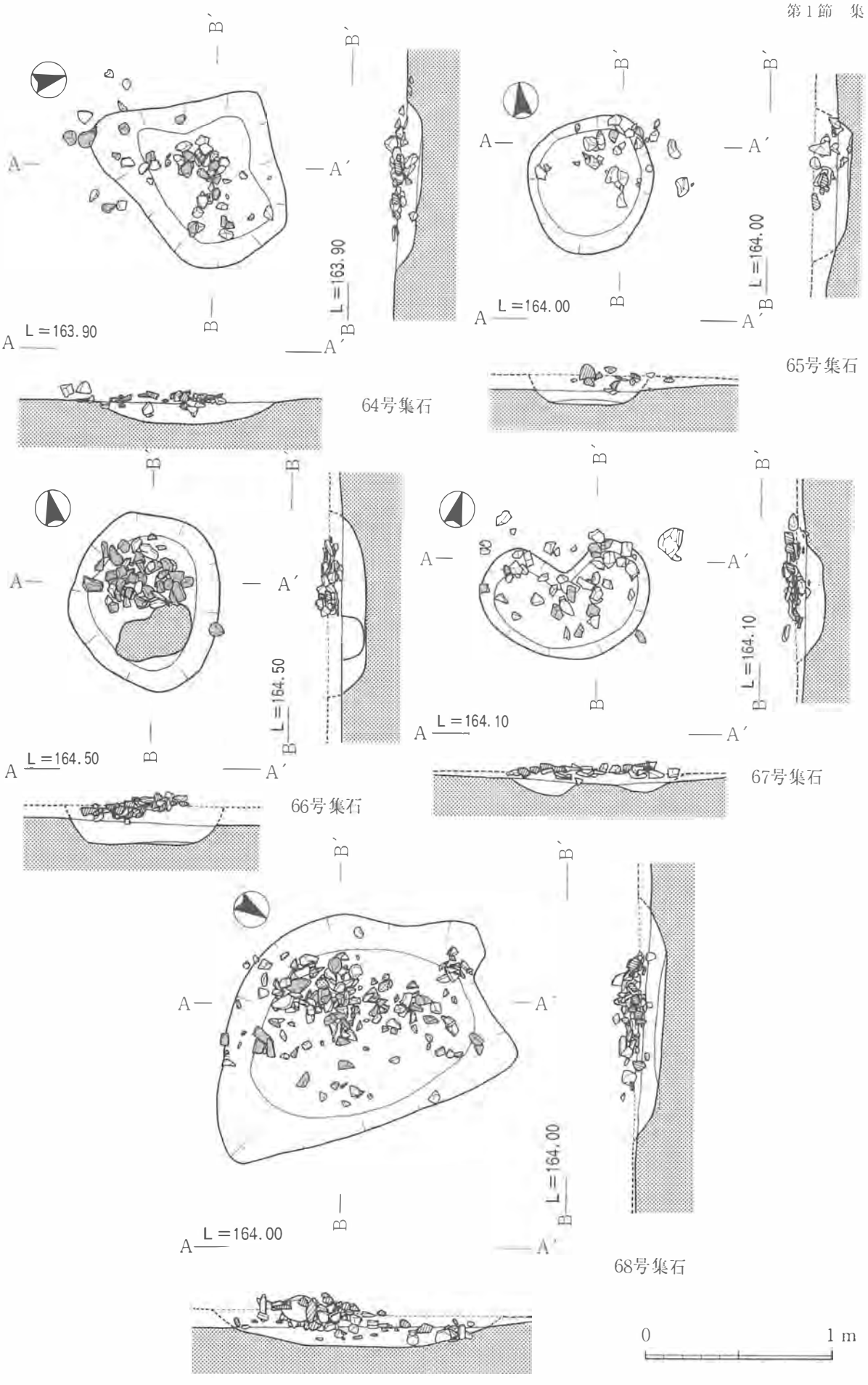
不定形の土坑を持つＥ類形態で明確なブロックを持たず、土坑外に散石も見られる。上層を掘りすぎているがその検出法量は、0.9m×0.6×0.1mである。構成は人頭大９・拳大16・小石30である。土器が５点出土しているが風化が激しく第３類刺突文がわずかに確認できるのみであった。

68号集石　（第29図）

不定形の土坑を持つＢ類形態で0.5m×0.6mの範囲で礫ブロックが見られ、ほぼ土坑内に散石している。上層を掘りすぎているがその検出法量は1.7m×1.2m×0.1mで、構成は人頭大１・拳大９・小石156である。土器が３点、下面レベルより出土しているが風化が激しく第３類ミミズばれ文がわずかに確認できるのみであった。



第28図　58・59・60・61・62・63号集石実測図



第29図　64・65・66・67・68号集石実測図

第3表　集石一覧表

挿図番号	集石番号	形態	規模(m)(長軸・短軸)	礫の総数	火受率	掘り込みの有無	掘り込み規模(m)(長軸・短軸・深さ)	出土石器類	出土早期土器類
7	1	C	1.3×1.0	56	22%				3
	2	D	0.8×0.7	54	29%				
8	3	C	3.9×2.8	149	40%			チャート破片3点	3・沈
9	4	D	1.2×0.9	50	44%			石皿破片，摺石叩石	3
	5	C	1.7×1.3	69	54%				3
	6	C	2.4×1.6	91	79%				3
	7	A	1.7×1.1	58	16%	有	0.7×0.6×0.1	石匙	
10	8	A	2.2×1.8	129	43%	有	0.9×0.6×0.2		3
	9	A	1.1×0.8	60	43%	有	0.7×0.7×0.1		3
	10	A	0.9×0.8	70	34%	有	0.7×0.7×0.1		3
11	11	D	1.7×1.7	121	41%				3
	12	A	1.2×0.8	41	54%	有	0.7×0.6×0.2		
	13	E	1.4×1.2	95	36%	有	1.2×0.9×0.1		3
12	14	E	0.8×0.7	75	100%	有	1.0×0.8×0.3		
	15	D	1.6×1.4	222	86%			石匙	3・沈
	16	B	1.2×0.8	74	100%	有			
	17	A	0.6×0.4	8	56%	有	0.8×0.7×0.1		
	18	D	2.9×2.5	252	83%				3・4・7・沈
13	19	E	2.3×1.6	167	87%	有	1.9×1.4×0.2		3・7・沈
	20	D	3.5×2.3	535	93%			摺石叩石	3・5・7・沈
14	21	D	2.2×1.5	73	70%				3・7
	22	D	2.5×1.3	100	100%				3・9・沈
	23	D	1.8×1.1	309	84%				
15	24	D	2.6×2.4	309	95%	有	0.4×0.2×0.2	石匙	3・7・8・沈
	25	B−1	1.2×1.5	73	97%	有	1.7×0.8×0.2		3
16	26	D	3.5×3.2	244	86%				3・6・7
	27	D	1.7×1.6	89	86%				7
17	28	D	3.1×2.1	225	84%				3・7・9
	29	C	2.1×2.0	119	100%				3・7
18	30	B−1	2.3×2.0	191	92%	有	1.3×0.9×0.2	摺石叩石	3・7
19	31	C	1.6×1.0	112	−				
	32	A	1.0×1.0	33	94%	有	1.1×0.8×0.2		
	33	D	1.0×0.7	49	−				2・3
	34	E	1.2×0.9	53	100%	有	0.7×0.7×0.2		
	35	E	1.4×1.7	51	不明	有	1.5×1.4×0.1		3・7・沈
20	36	A	1.6×1.6	131	31%	有	1.7×1.6×0.4		1・3・7・8
	37	E	1.0×1.1	120	65%	有	1.2×0.8×0.2		
	38	E	1.5×1.8	43	75%	有	1.1×1.0×0.2		7
	39	B	1.3×1.0	61	57%	有	1.4×0.9×0.2		3・7
21	40	E	1.3×1.3	44	56%	有	0.4×0.5×0.1		3
	41	D	2.6×1.8	83	34%	有	0.3×0.3×0.2		2・3・7
	42	E	2.6×2.1	106	75%	有	1.4×1.3×0.2		3・沈
22	43	D	4.3×2.0	570	86%				2・3・沈
23	44	B−1	1.8×1.3	140	74%	有	1.3×1.0×0.2		3・9
	45	B−1	3.7×2.2	149	92%	有	1.4×1.6×0.1		3・7
24	46	C	1.9×1.3	34	85%	有	1.6×1.5×0.2		3・沈
	47	B	1.0×0.9	41	86%	有	1.1×1.0×0.2		
	48	B	1.2×0.8	192	78%	有	1.6×0.9×0.3		
	49	D	0.7×0.9	20	88%				
	50	B	0.9×0.9	50	15%	有	1.3×0.9×0.2		7・8
25	51	E	1.7×1.4	36	69%	有	1.5×1.4×0.2		3・8・沈
	52	B−1	3.2×2.2	119	42%	有	2.0×2.2×0.1	石錐，摺石叩石	2・3・7
26	53	E	1.1×1.1	55	73%	有	1.3×1.2×0.2		
	54	A	0.8×0.8	34	75%	有	1.0×1.0×0.3		3
	55	B	2.8×1.9	55	41%	有	1.8×1.1×0.2		3・沈
27	56	C	0.8×0.9	45	24%				沈
	57	C	0.9×0.4	27	18%				
28	58	E	1.3×0.7	66	16%	有	0.7×0.5×0.2		3
	59	E	0.8×0.7	97	28%	有	0.9×0.5×0.2		
	60	E	0.9×0.7	56	74%	有	1.0×0.9×0.1		
	61	B	1.0×0.8	54	2%	有	1.0×0.8×0.1		
	62	B	0.4×0.3	17	−	有	0.8×0.7×0.1		
	63	E	0.7×0.5	108	13%	有	0.9×0.7×0.1		
29	64	E	1.2×0.7	51	37%	有	1.2×1.0×0.1		
	65	B	0.8×0.6	33	6%	有	0.8×0.7×0.1		
	66	B−1	0.7×0.6	46	65%	有	1.0×0.9×0.1		
	67	E	1.1×0.7	55	20%	有	0.9×0.6×0.1		3
	68	B	1.5×1.0	166	26%	有	1.7×1.2×0.1		3

第２節　土　坑　（第31図～47図）

１号土坑　（第31図）

2.5m×1.5m×0.3m の楕円状を呈し、破砕した砂岩と火受凝灰岩が出土している。床面北西に焼土、壁面に火を受けた痕跡が部分的に認められることから火気使用の遺構である可能性が高く、燃焼土坑と仮称しておく。この燃焼土坑は本遺跡において数基検出されている。

２号土坑　（第31図）

1.3m×1.0m×0.1m の不定形を呈し破砕された砂岩が出土しているが、礫は肉眼観察では火を受けた感がなく、土坑としては浅いため上部が削平されている可能性がある。遺物は、黒曜石片１点、土器片３点が出土している。３点はそれぞれ１類楕円文・３類山形文・縄文でいずれも細片である。

３号土坑　（第31図）

1.8m×0.8m（残存部分）×0.3m の不定形を呈している。東側は調査区外であるため遺構全体の規模は不明であるが、床面に焼土、また埋土には灰土が混在していることから燃焼土坑であろう。ほぼ床面から第３類山形文を口縁部内面と外器面に施文された、屈曲（１）型 **1**、他に３類菱形文が１点・山形文の破片が５点と口縁部片１点が出土し、先の１固体である可能性も高い。

４号土坑　（第32図）

2.6m×1.9m×0.2m の不定形を呈し、遺物は下層から第２類楕円文、第３類山形文・変形撚糸文・縄文、他に沈線文が出土している。４層掘り下げ時に検出されたので本来の遺構はまだ広がる可能性もある。床面に第３類変形撚糸文が出土している。焼土面は見られないが火受凝灰岩が出土している。

５号土坑　（第33図）

1.7m×0.9m×0.3m の楕円形を呈し、南西・北東側を後世の遺構で破壊されている。遺物は土器155点出土している。第３類山形文・縄文・撚糸文と沈線文が確認でき、他は風化が激しく類別は困難であった。器全体の約1/8程を占める程度のものが３個体分 **2・3・4** が出土している。**2** は強い屈曲を持つ第３類（２）型であるが風化が激しく文様の判別ができない。**3** は第３類　縄文の（１）型で第３類分類（表４参）ではＧ－１－（１）で口縁部から経部まで施文が観察され下位は風化のためか無文である。**4** は胴部から底部にかけての資料でこれも文様の観察ができない。**3** と **4** は胎土が酷似しているため同一個体か。他に第４類小型土器の山形施文の口縁部が１点出土している。形状が判別できる以外はほとんど細片である。第７類土器片が２点、土師器片も出土しているが上層での流れ込みと思われる。遺構床面に焼土面が認められる燃焼土坑である。下層面から第３類土器が礫、磨石とともに出土しており、これらが遺構廃棄時とすればその時の様相を留めていると思われる。最も残りのよい土器 **2** の表面は風化していることから二次焼成を受けた可能性が高く、また一緒に出土している凝灰岩も火を受けていることから火気を使用した遺構である。

６号土坑　（第34図）

1.3m×1.28m×0.2m の円形を呈し、遺物は、山形文の土器片２点が出土しているが、細片であることから、流れ込みの可能性がある。

７号土坑　（第34図）

1.8m×1.3m×0.3m の不定形を呈し、遺物は土器21点が出土。内訳は、第３類山形文９点・菱形文１点 **136**・縄文２点・撚糸文２点・撚糸文地文に山形文を主文にしたもの１点、沈線文１点、無文の口縁分１点、底部１点、不明３点である。山形文は、同一個体ではなく第３類（１）型とされるもの１点を含む。他の文様のものも、第３類の範疇と考えることができるが、無文の土器片のみが異質である。土器片ほとんどが、①層下面から②層上面からの出土である。石鏃１点 **10**が出土。破砕砂岩・凝灰岩は火を受けたものが目立つが焼土や焼けた床面などは確認できない。

８号土坑　（第35図）

1.0m×0.8m×0.1m の不定形を呈し、遺物は16点が出土している。内訳は第２類楕円文１点、第３類山形文８点のうち４点は同一個体、不明４点であるが遺物は流れ込みの可能性がある。

９号土坑　（第35図）

1.4m×1.0m×0.1m の楕円形を呈し、出土遺物の土器片の内訳は、第１類条痕文１点、第３類山形

文５点・撚糸文３点・縄文13点、沈線文３点、不明４点である。山形文は２個体、縄文は13点のうち６点は同一個体で、他はそれぞれ別個体であるが床直上から縄文が出土している。また第９類円盤状土製品 557の出土がある。

10号土坑　（第35図）

1.6m×1.2m×0.3mの不定形を呈し、遺物は土器片19点が出土している。内訳は、第２類楕円文１点、第３類山形文12点・撚糸文１点・沈線文１点、底部１点、不明２点である。礫に混在した出土状態で個体としては捉えられず、流れ込みの可能性が高い。やや小規模の土坑ではあるが礫は多いが構成石が火受石ではない。

11号土坑　（第36図）

1.0m×0.8m×0.1mの楕円形を呈し出土遺物は第３類撚糸文土器細片１点が出土している。細片であるため流れ込みの可能性が高い。火焼石がある程度まとまって出土している。遺構床面には焼けた形跡が確認されていないため、集石に用いる礫を一時的に保管した礫溜めのような機能とも考えられる。

12号土坑　（第36図）

0.9m×0.7m×0.1mの楕円形を呈し、遺物出土は第３類山形文の細片が３点出土している。削平がはげしく火受石が１点出土している。

13号土坑　（第36図）

1.5m×1.2m×0.1mの楕円形を呈し、出土遺物はなく火受石が２点出土している。

14号土坑　（第36図）

1.7m×1.0m×0.1mの楕円形を呈し、遺物は第７類土器の撚糸文系が１点出土しているが出土状況は不明。火受石がある程度まとまって出土しているが遺構床面などに火を受けた形跡がないことから、11号土坑と同質のものか。

15号土坑　（第36図）

2.2m×1.4m×0.1mの不定形を呈し、遺物は第３類土器が４点出土している。

16号土坑　（第37図）

1.1m×0.8m×0.2mの不定形を呈し、出土遺物は12点で、第３類山形文が６点・撚糸文が２点（接合）、他は不明である。火受石が土坑の周辺に多数出土している。土器は土坑内を中心に出土し火受石は周辺にある状況から、集石の可能性も否定できない。

17号土坑　（第37図）

1.2m×1.2m×0.1mの円形を呈し、出土遺物はなく火成石が散在していた。

18号土坑　（第37図）

2.2m×1.4m×0.4mの不定形を呈し、遺物は第３類山形文の破片が多数出土し、３個体分ほどのまとまりで、屈曲（１）（２）型がそれぞれ確認できる。他に山形文底部 316・縄文２点・撚糸１点が出土した。第１類土器の細片が１点出土しているが上層での出土で流れ込みと考えられる。遺構床面に焼土の広がりが確認されており、土坑内には火受石も多く検出されているがややレベル差があるようである。焼土上に土器が集中していることから燃焼土坑の可能性がある。

19号土坑　（第37図）

1.1m（残存部分）×1.0m×0.3mの楕円形を呈し、遺物は第３類山形文７点・菱形文２点が出土している。遺構南側を後世の遺構により破壊されているため推定ラインを提示した。土坑北側床面に燃焼面が認められ、またこの燃焼面に径30㎝の大石が配置されたように検出された。

20号土坑　（第38図）

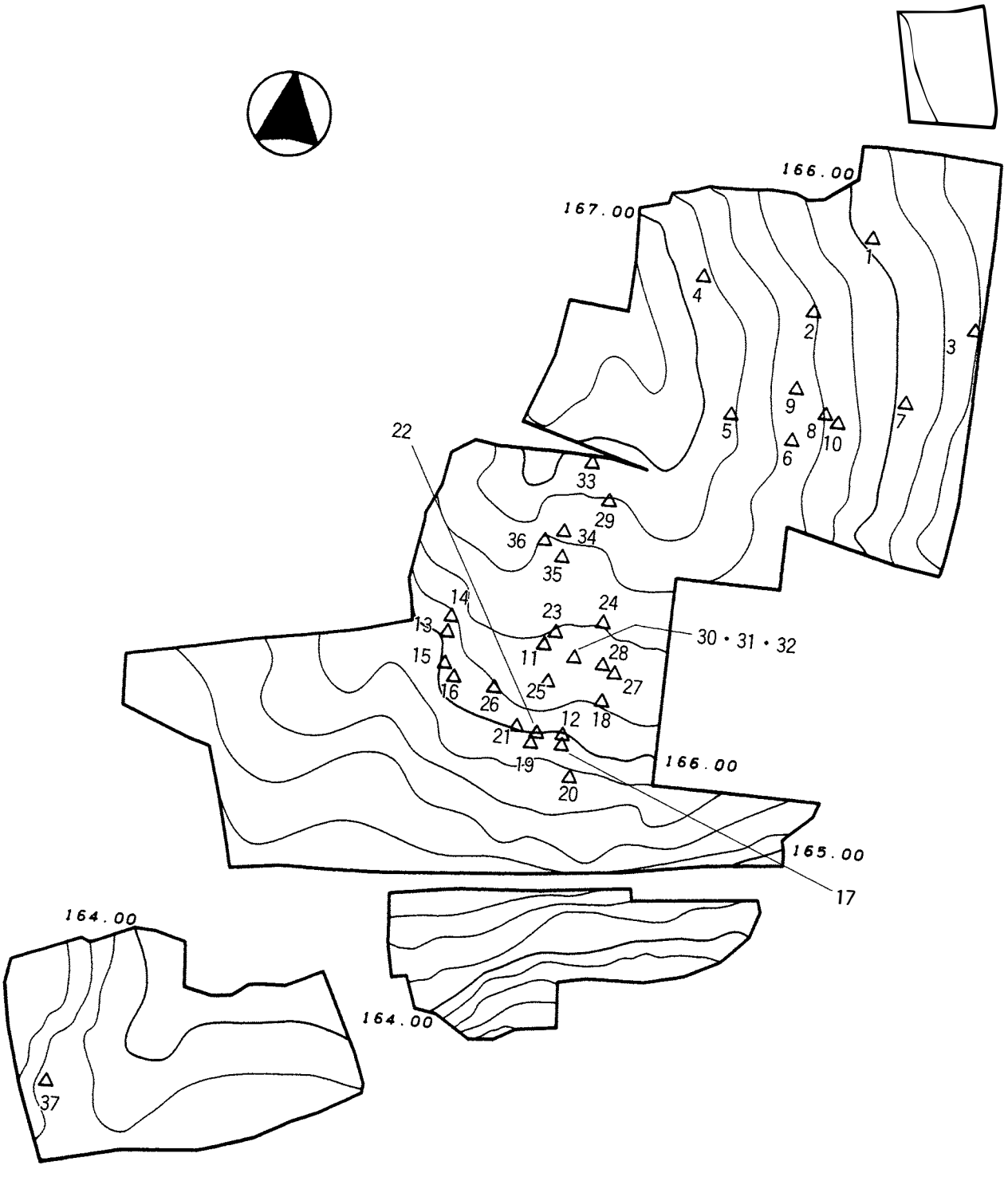
1.6m×1.3m×0.4mの楕円形を呈し、出土遺物は８点でその内訳は、第３類土器山形文１点・撚糸文４点・縄文１点、突帯刻みのある土器１点で、撚糸はタイプ（１）型であるが上層から中層にかけての出土であるため流れ込みの可能性が高い。また火受石の出土も認められる。

21号土坑　（第38図）

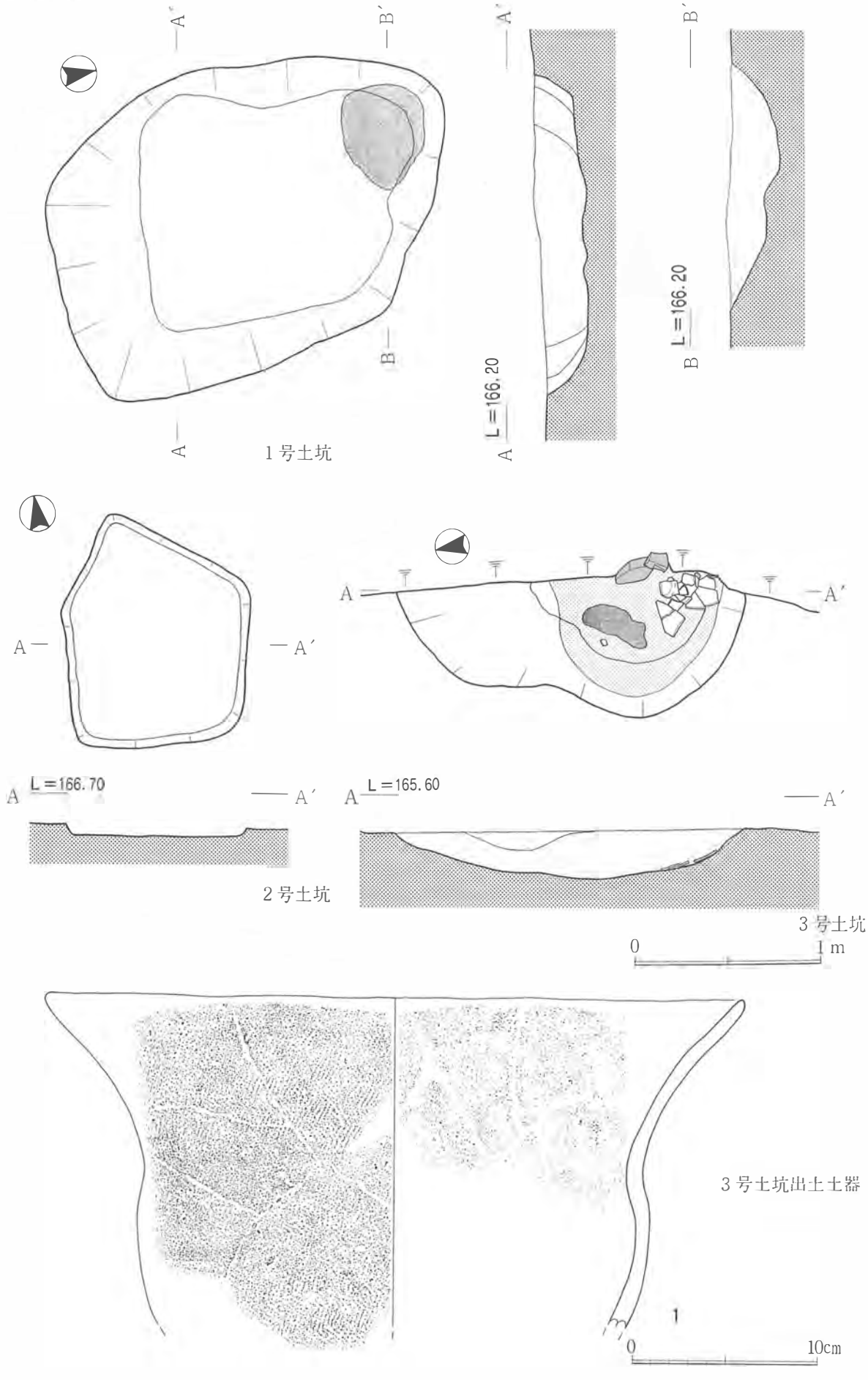
2.5m×2.2m×0.2mの円形を呈し、出土遺物は第３類山形文20点・撚糸文１点である。山形文は１個体にまとまらず別個体の小片である。火受石が11点、散在しているが、遺構床面などには火使用の痕跡は確認されていない。床直上から第３類山形文が出土している。

22号土坑　（第39図）

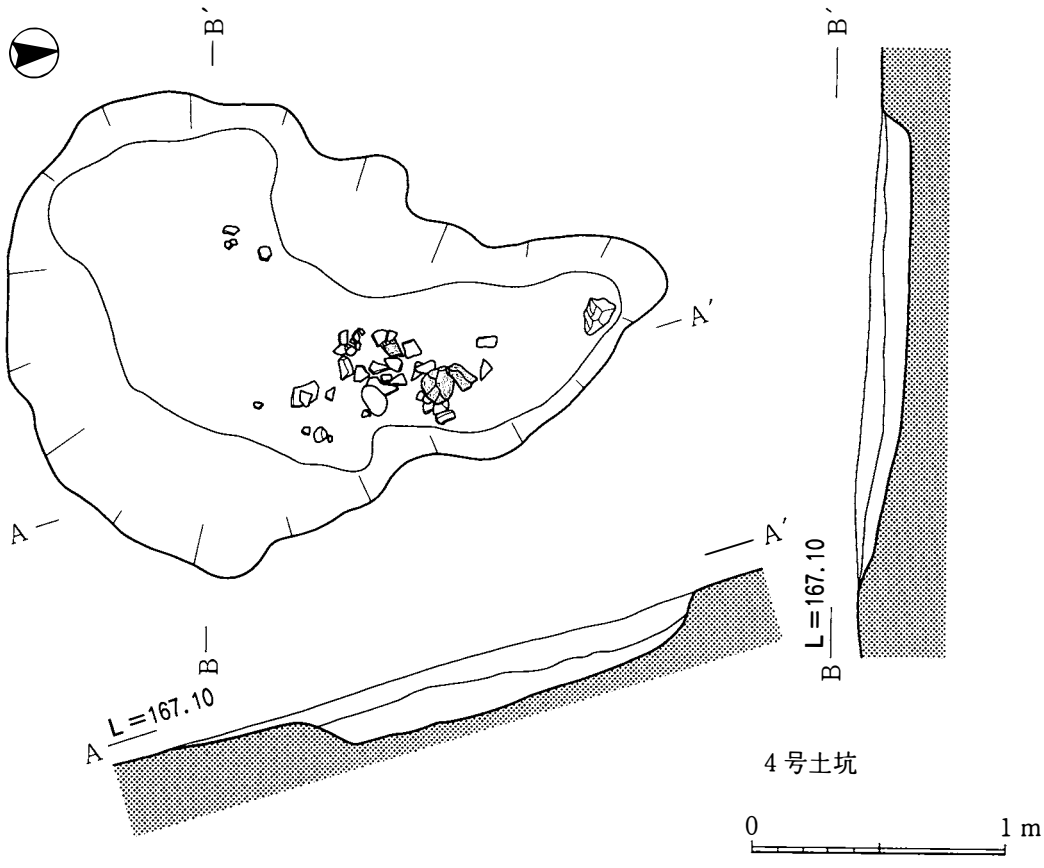
1.9m×1.3m×0.2mの不定形を呈し、遺物は第３類山形文（１）型、１個体分出土している 5。



第30図　土坑遺構配置図



第31図　1・2・3号土坑実測図・3号土坑出土土器



第32図　4号土坑実測図

その他第3類山形文・撚糸文、沈線文などの細片が出土している。石鏃が1点 **123**が出土してる。石鏃はほぼ床直から出土で、この遺構に伴うものと考えられる。火受石も6点ほど出土しているが、床面には火を使用した形跡は確認されていない。

23号土坑　（第40図）

2.2m×1.2m×0.1m の楕円形を呈し、出土遺物は第3類山形文23点・撚糸文1点、第4類山形文が1点、不明1点。いずれも小片である。遺構北側に焼土面が確認され、遺物・火受石はともに散在し、10㎝程の礫が焼土面直上に在る。

24号土坑　（第40図）

1.9m×0.8m×0.2m の楕円形を呈し、出土遺物は第3類山形文13点・撚糸1点・菱形文1点が出土している。石鏃1点出土 **121**。カーボンを含む埋土で、火受石の出土が認められる。

25号土坑　（第40図）

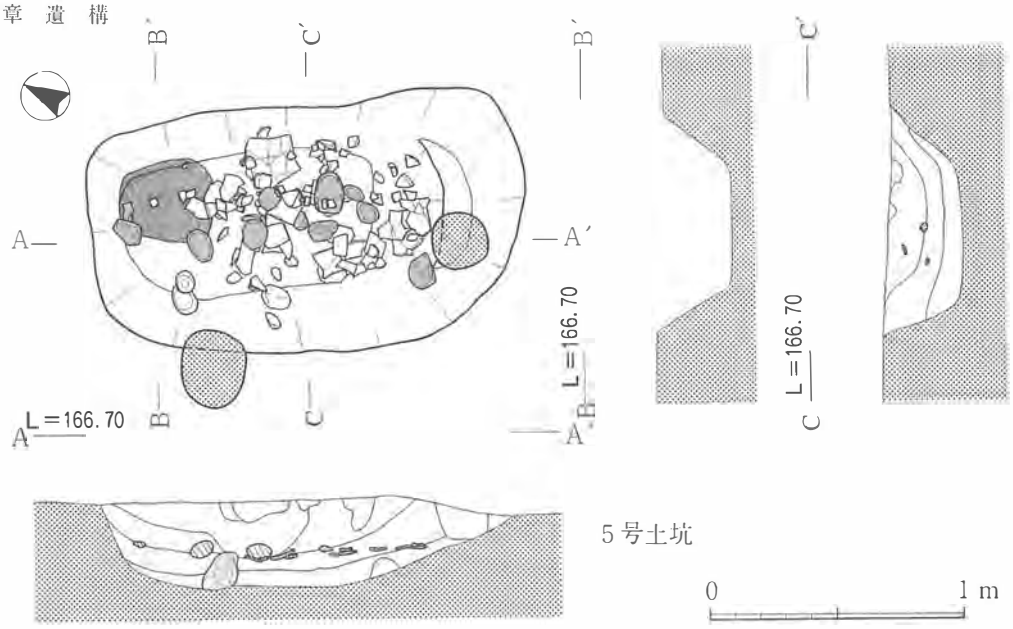
1.5m×1.2m×0.4m の不定形を呈し、出土遺物は第3類山形文が7点、撚糸文2点・縄文1点、第4類山形文4点。カーボンを含む埋土であり、土坑内部にある石はすべて火受石だが、床面等には火を受けた形跡は確認されていない。石鏃 **54**出土。

26号土坑　（第41図）

2.1m×1.3m×0.2m の不定形を呈し、遺物出土は第3類山形文が11点・縄文2点、不明1点である。いずれも細片で別個体である。火受石が多く出土したが床面などに火を受けた痕跡は確認されないが12号集石と近接していることから、集石に付随する石溜めのような遺構か。

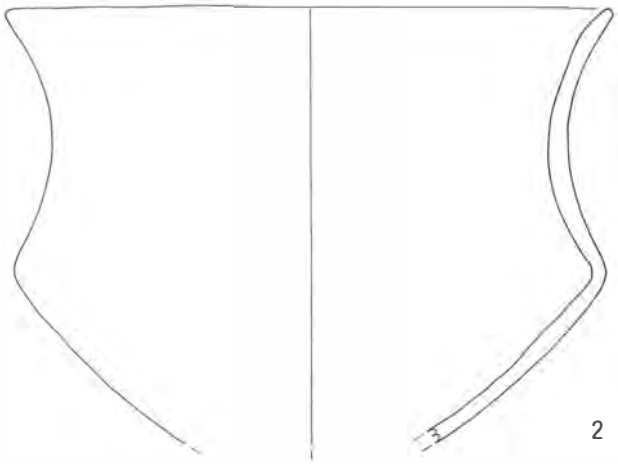
27号土坑　（第42図）

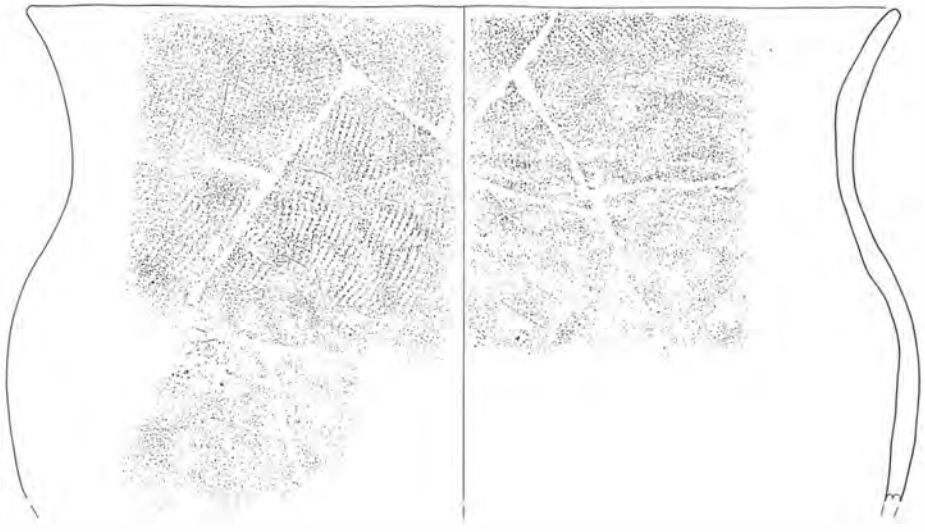
2.1m×1.5m×0.3m の不定形を呈し、出土遺物は第3類土器片が多数出土した。山形文・沈線文・縄文・突帯・それに伴う刺突文などで、**6**は第8類壷型の撚糸文で經部～口縁部資料で、**7**・**8**は同一個体であろうと思われる。**9**・**10**は山形施文で壷型になると思われ、これも同一個体か。**11**は底部資料でナデ調整が施されているため施文の確認ができないがわずかに山形状にも見える。**12**は胴部最大經に



5号土坑

0　1 m

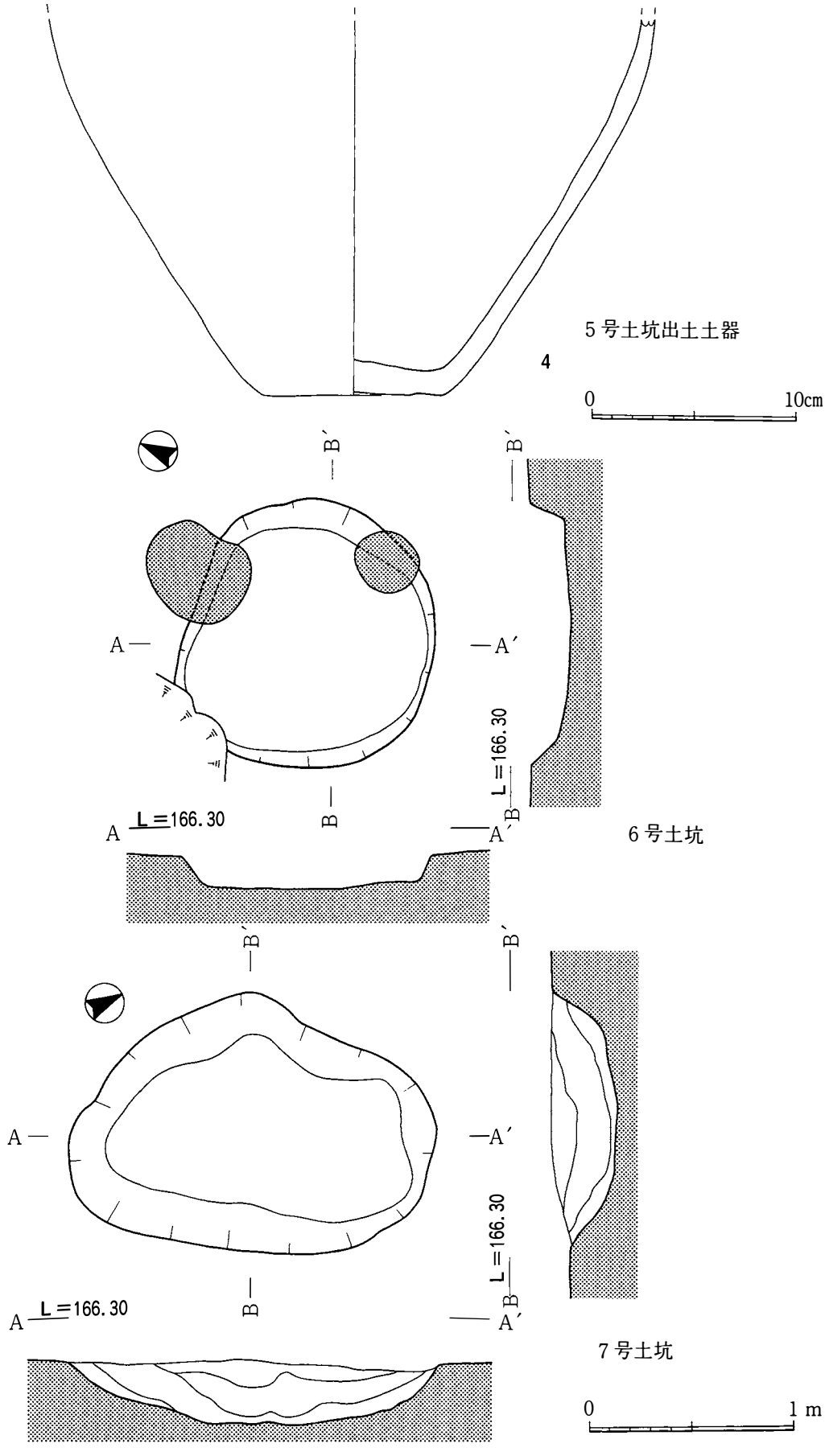




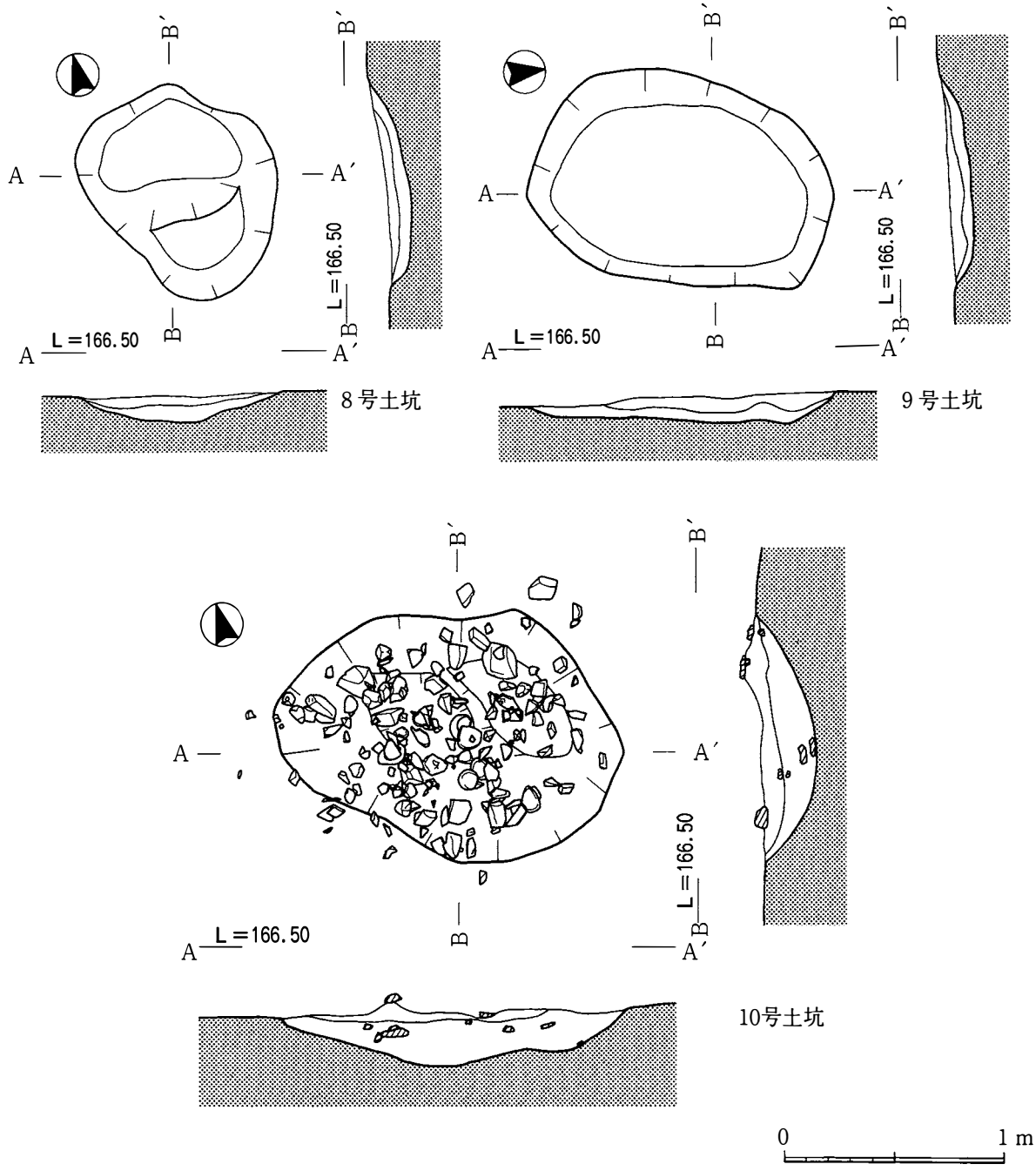
5号土坑出土土器

0　10cm

第33図　5号土坑実測図・5号土坑出土土器



第34図　5号土坑出土土器・6・7号土坑実測図



第35図　8・9・10号土坑実測図

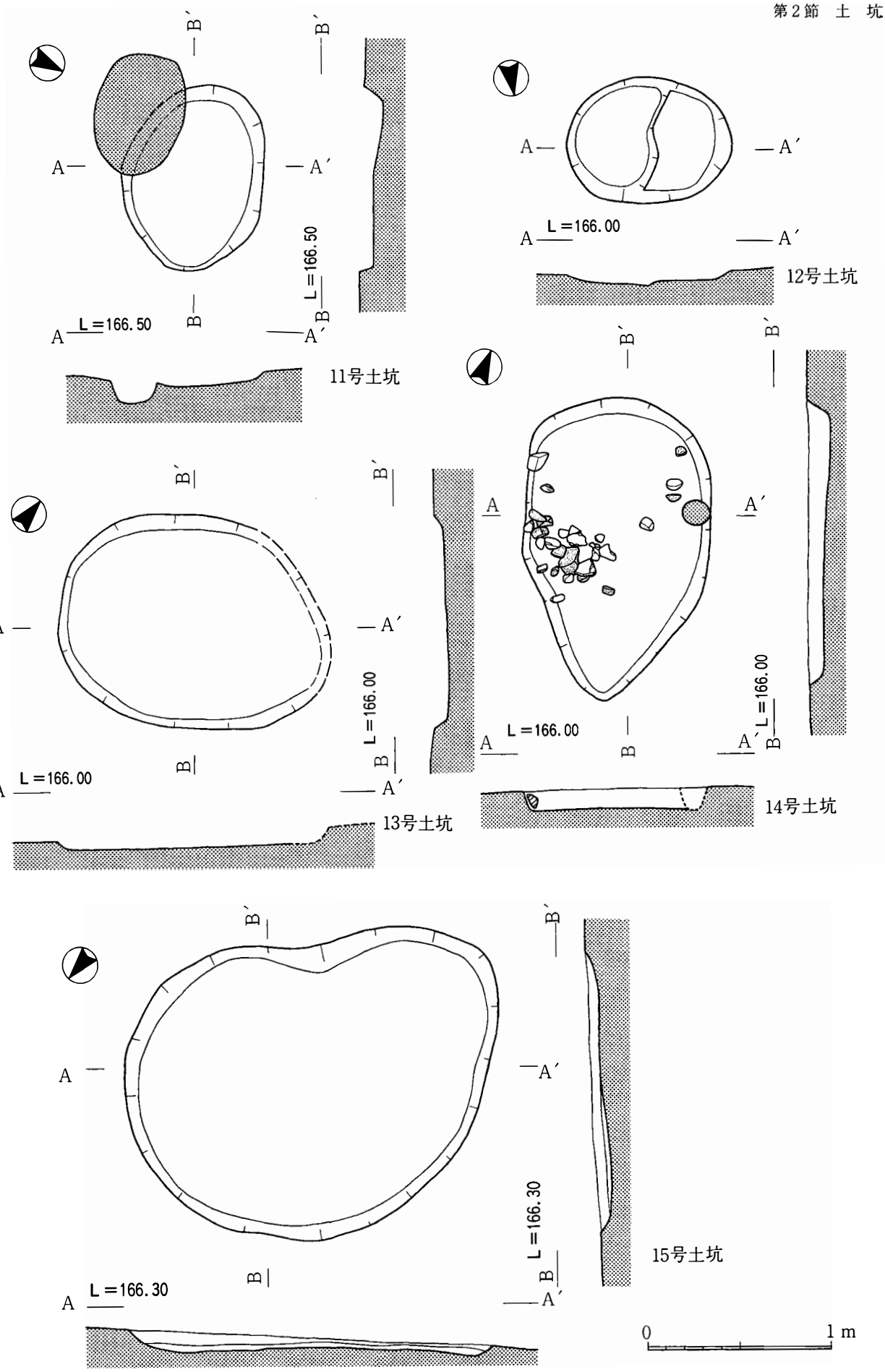
突帯刻みを施し、この突帯上位に沈線・下位に撚糸文を施文している第3類の分類では2－K－（1）型である。他の土器片はほとんど互いに別個体である。土器 **12**が出土した部分の床面に、火を受けた痕跡が確認されている。純粋に遺構に伴うのは土器 **12**で他の遺物は遺構廃棄後にゴミ捨て場として使用したとも考えられることから、遺構利用から廃棄までは短期間であるか。石鏃 **103**出土。

28号土坑　（第43図）

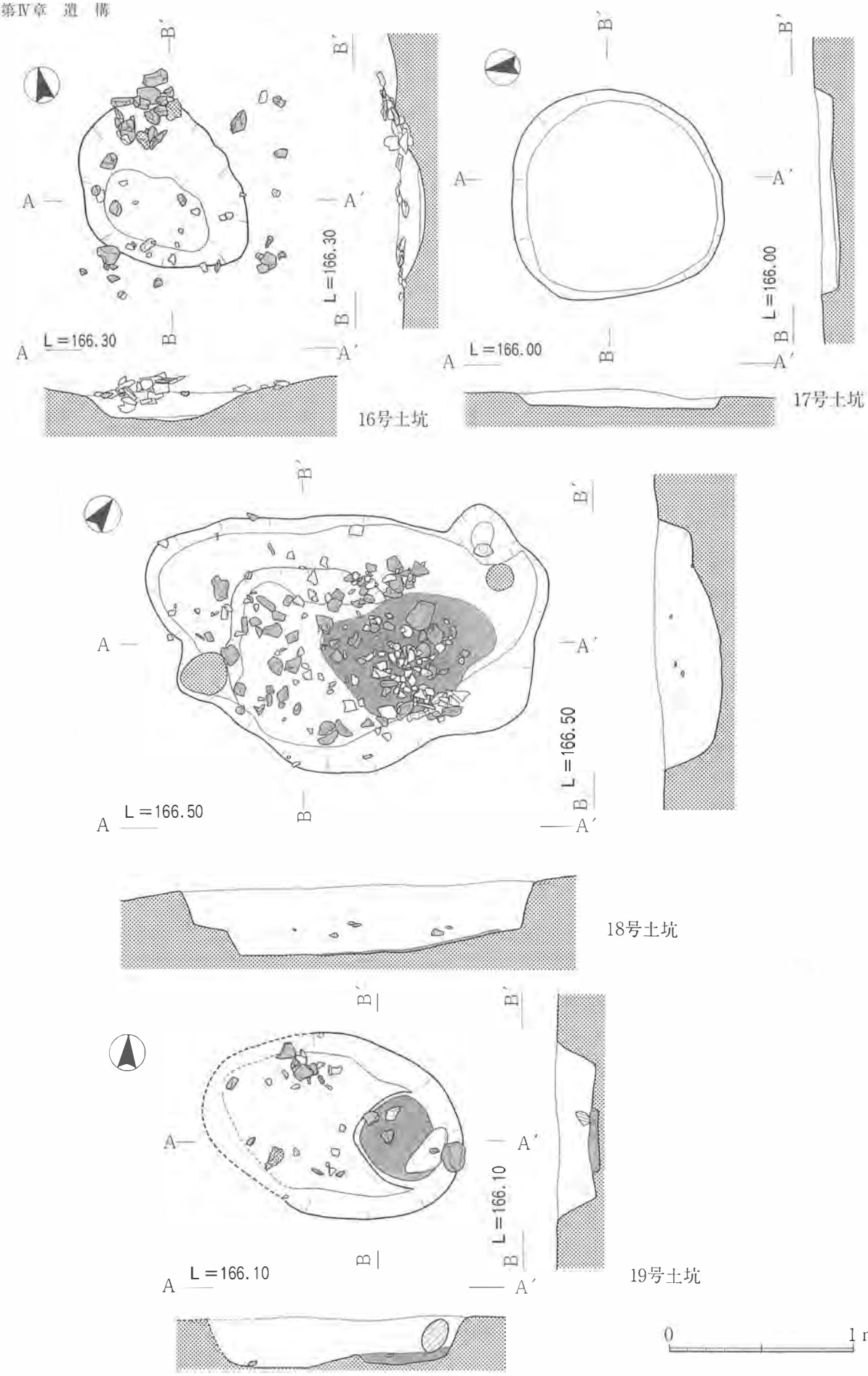
1.5m（残存部分）×1.0m×0.3m の不定形を呈し、出土遺物は第1類条痕文、第2類楕円文、第3類は山形文が主体である。**13**は第8類壷形土器の口縁部で、**14**は上位に沈線下位に山形文が施されていることから **13・14・15**は同一個体であろう。

29号土坑　（第44図）

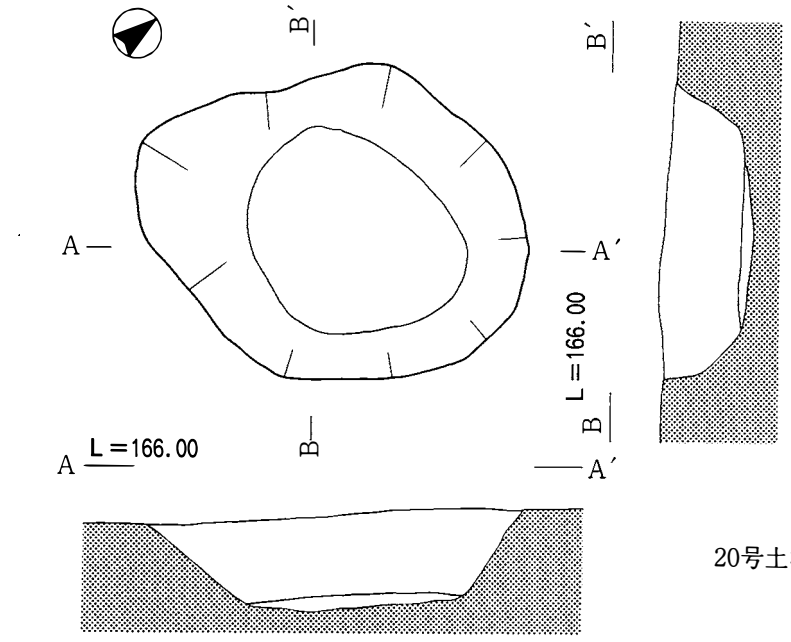
2.4m×1.3m×0.1m の不定形を呈し、出土遺物は、壷形土器1個体分、土器細片1点（文様不明）



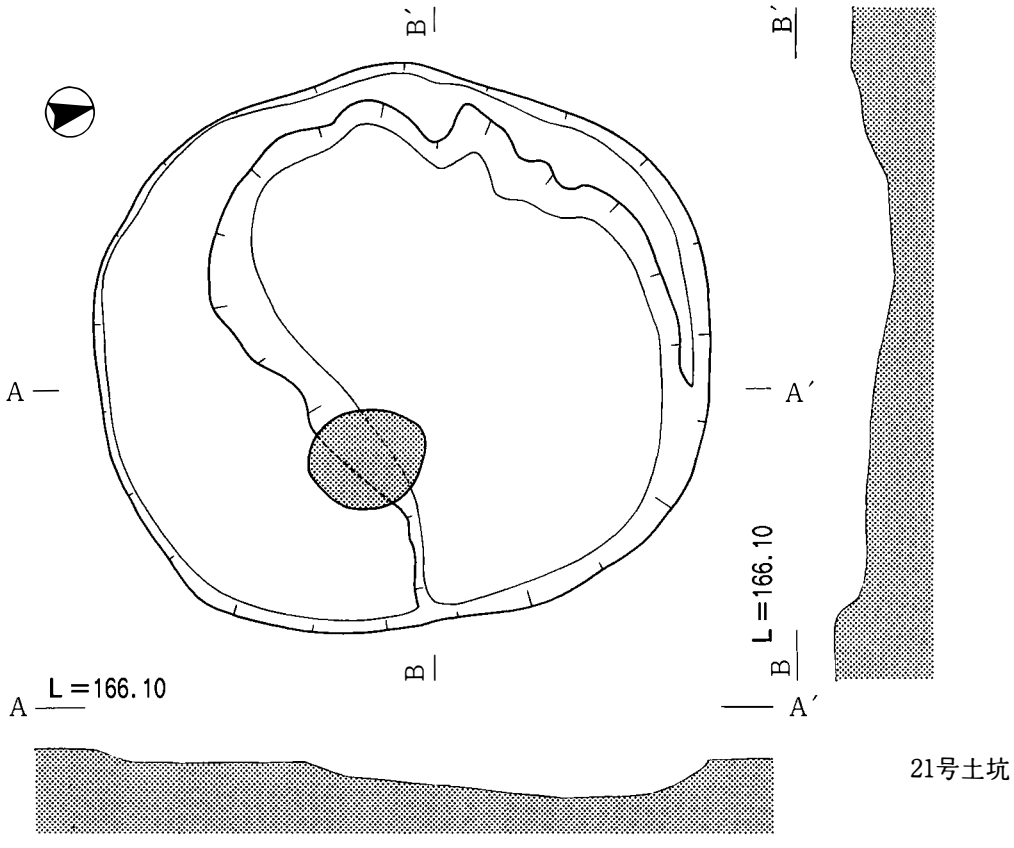
第36図　11・12・13・14・15号土坑実測図



第37図　16・17・18・19号土坑実測図



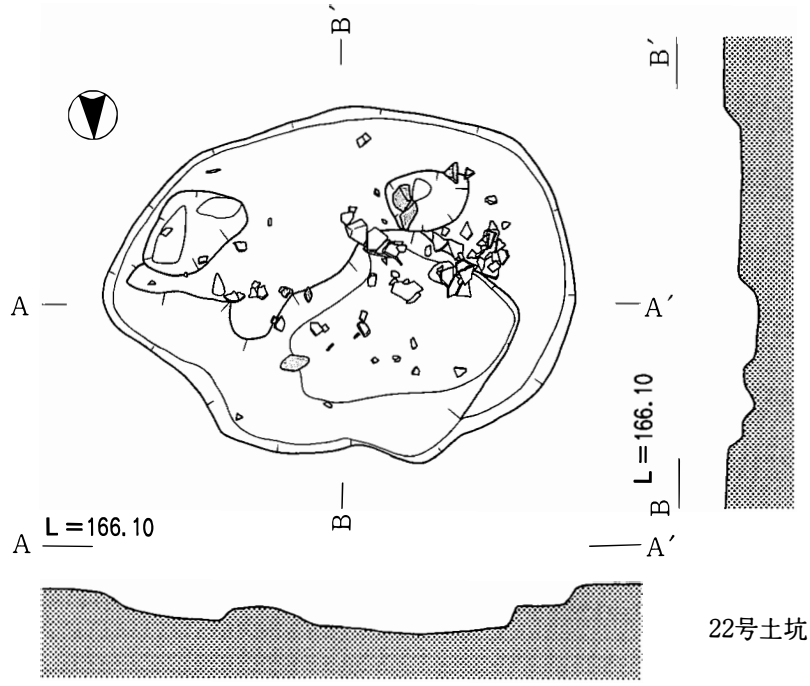
20号土坑



21号土坑

0　1 m

第38図　20・21号土坑実測図



22号土坑

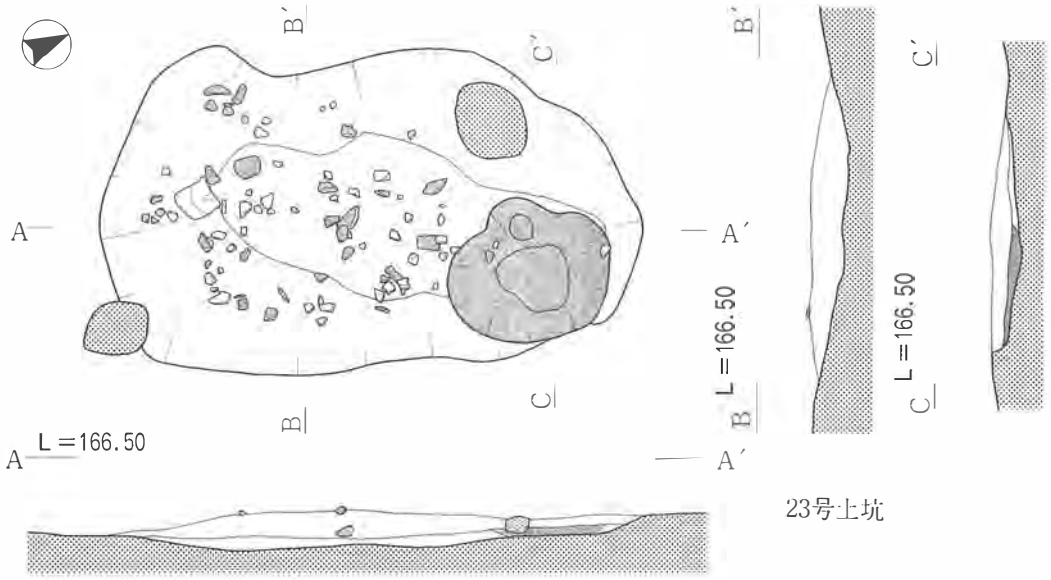
0　1 m

22号土坑出土土器

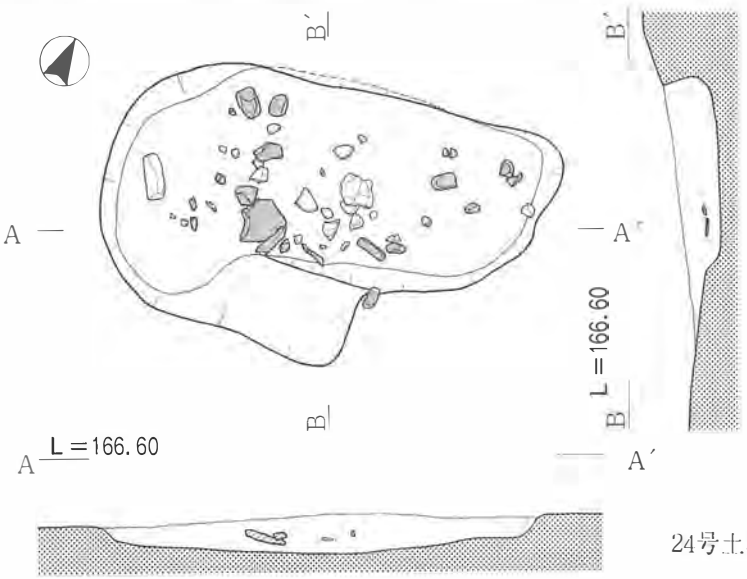
5

0　10cm

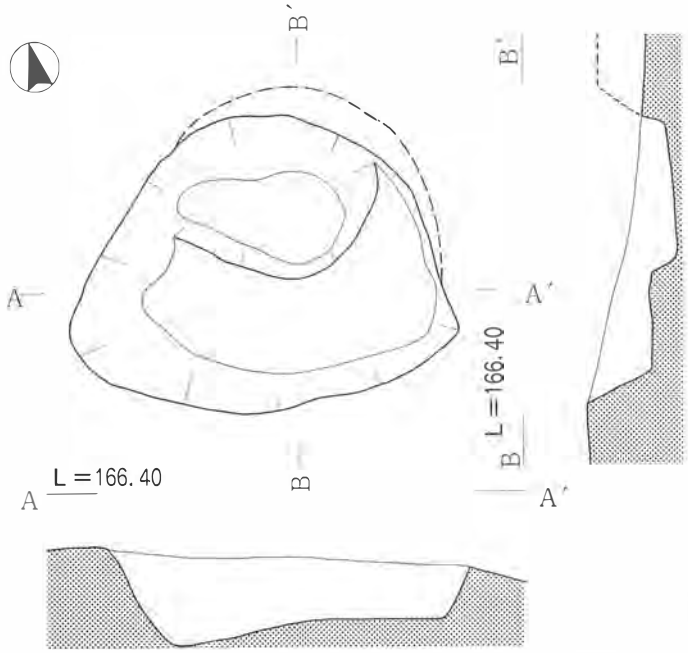
第39図　22号土坑実測図・22号土坑出土土器



23号土坑



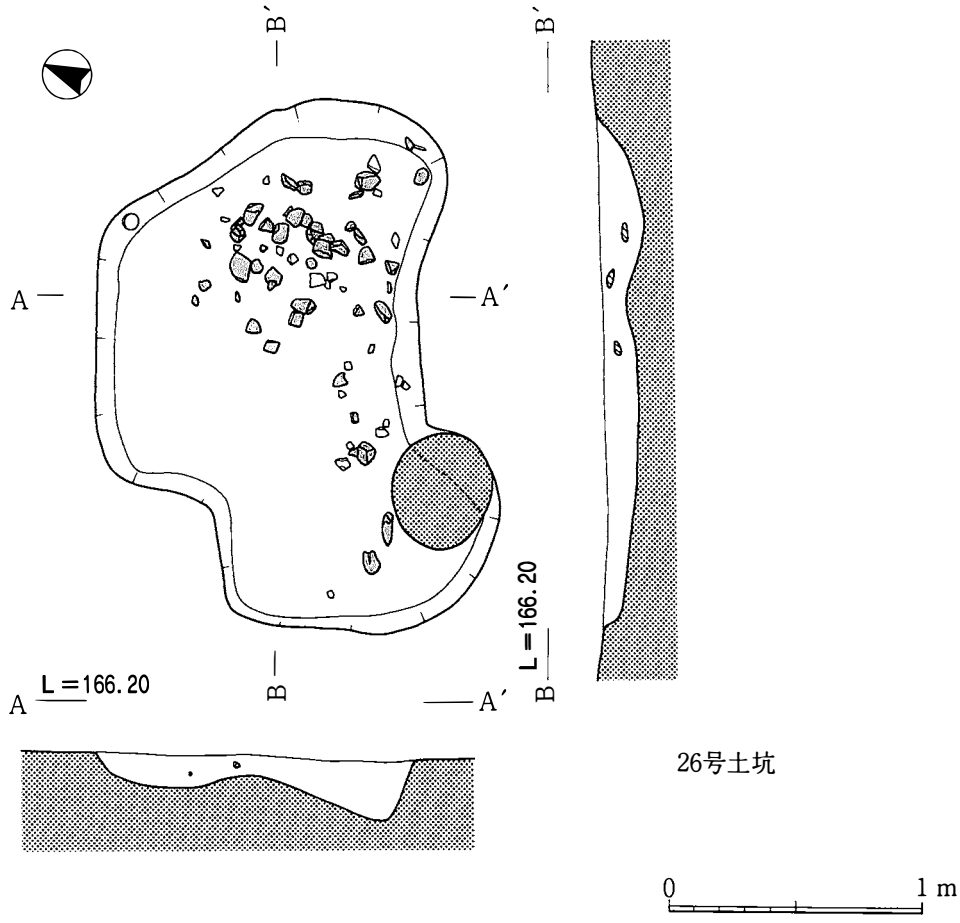
24号土坑



25号土坑

0　1 m

第40図　23・24・25号土坑実測図



第41図　26号土坑実測図

出土。壷形土器 **16**は、全体的な形が復元できる良好な資料である。胴部下方がわずかに張り出し、そこから上方の口縁端部にかけて徐々に内傾し、よって明瞭な頸部は認められない。底部は上げ底を呈する。全体的に均一の厚みのある器壁で薄手である。外器面には口縁部と頸部付近に３列、３～５条を一組とする沈線文を横方向にめぐらせ、中央の一組には弧状の文様を、下部の一組には斜位に横切る沈線文を施文している。内器面には、口縁部ちかくには丁寧なナデ、胴部あたりには粗い横方向のナデ調整を施している。外器面にも文様を施文する前に丁寧なナデ調整を行い、文様施文後、一部に赤彩色が認められる。出土状況は折り重なるような出土状況で遺構床面より３㎝ほど浮いてはいるが、ほぼ完形で出土しているため遺構に伴い埋納されたものか。

30号土坑　（第45図）

1.0m×0.8m×0.2m の不定形を呈し、出土遺物は、間伸びした第３類山形文１点と撚糸文１点。また火受石が４点出土。31号土坑・32号土坑と切り合い関係にありもっとも新しい。

31号土坑　（第45図）

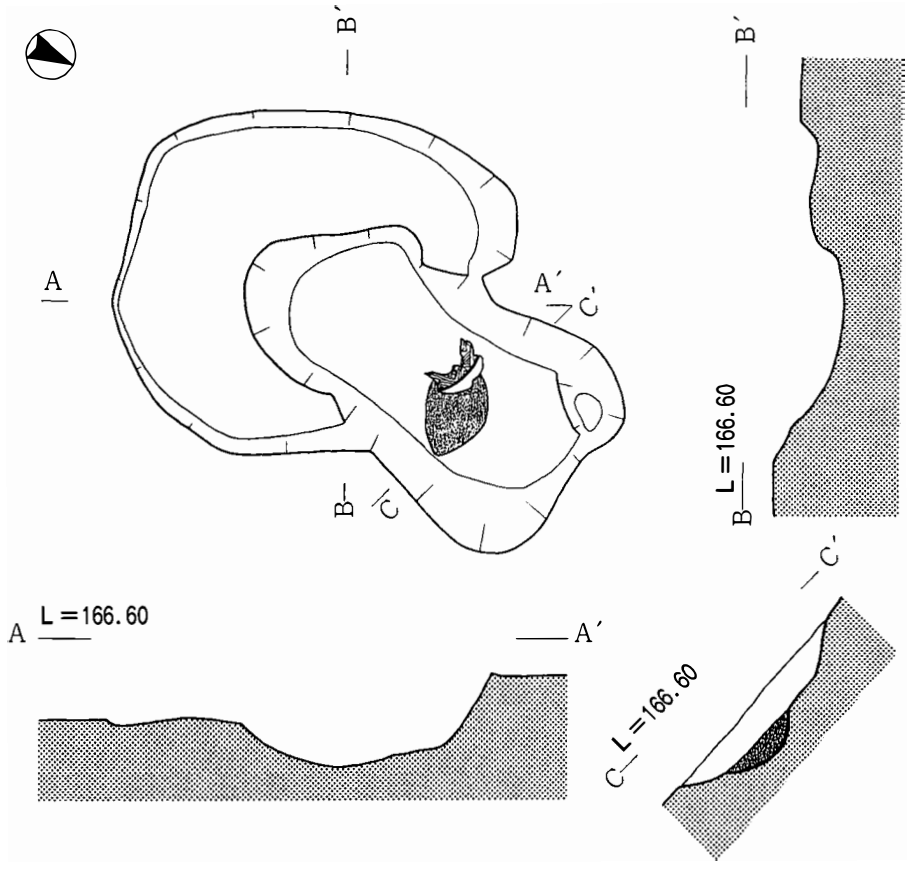
1.3m×0.7m×0.1m の楕円形を呈し、遺物は火受石が２点出土している。30号土坑・32号土坑と切り合い関係にある。当遺構は30号土坑に南側を切られ、32号土坑の東側を切っている。

32号土坑　（第45図）

1.1m（残存部分）×1.3m×0.1m で出土遺物は第３類縄文２点・撚糸文１点である。30号土坑・31号土坑に東側を切られており、これらの土坑の中ではもっとも古い。

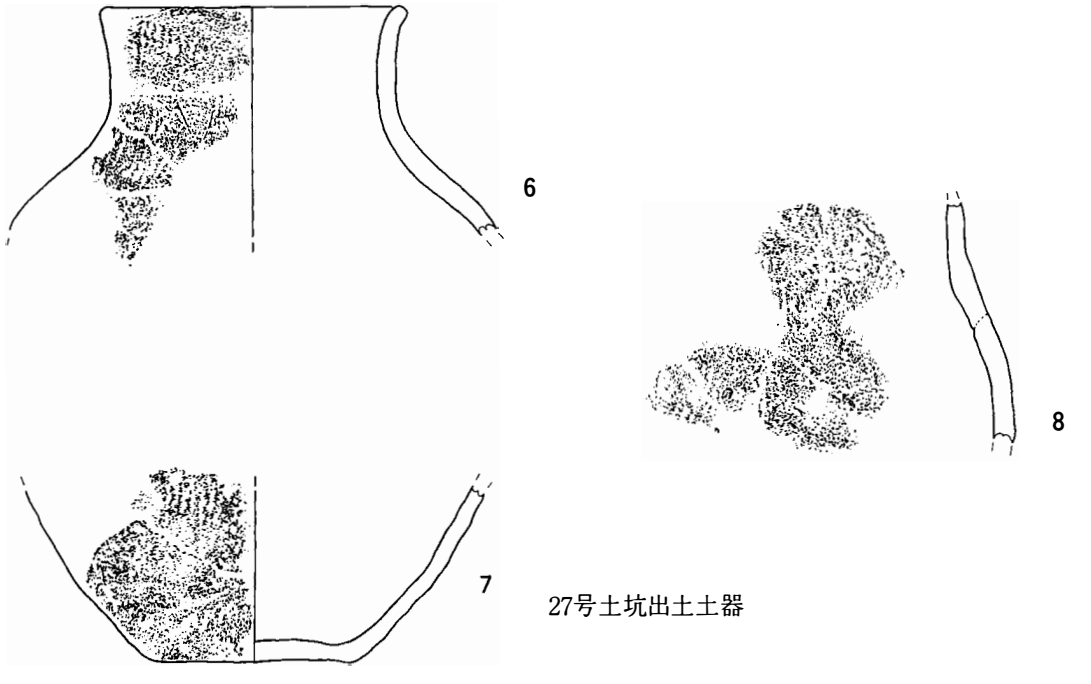
33号土坑　（第45図）

1.5m×1.3m×0.5m の楕円形を呈し、出土遺物は第３類山形文７点・撚糸５点・縄文１点と沈線文２点、不明９点出土している。土器片は上層からのみ出土し中層に礫が西側から流れ込むようにしているが火受石ではない。



27号土坑

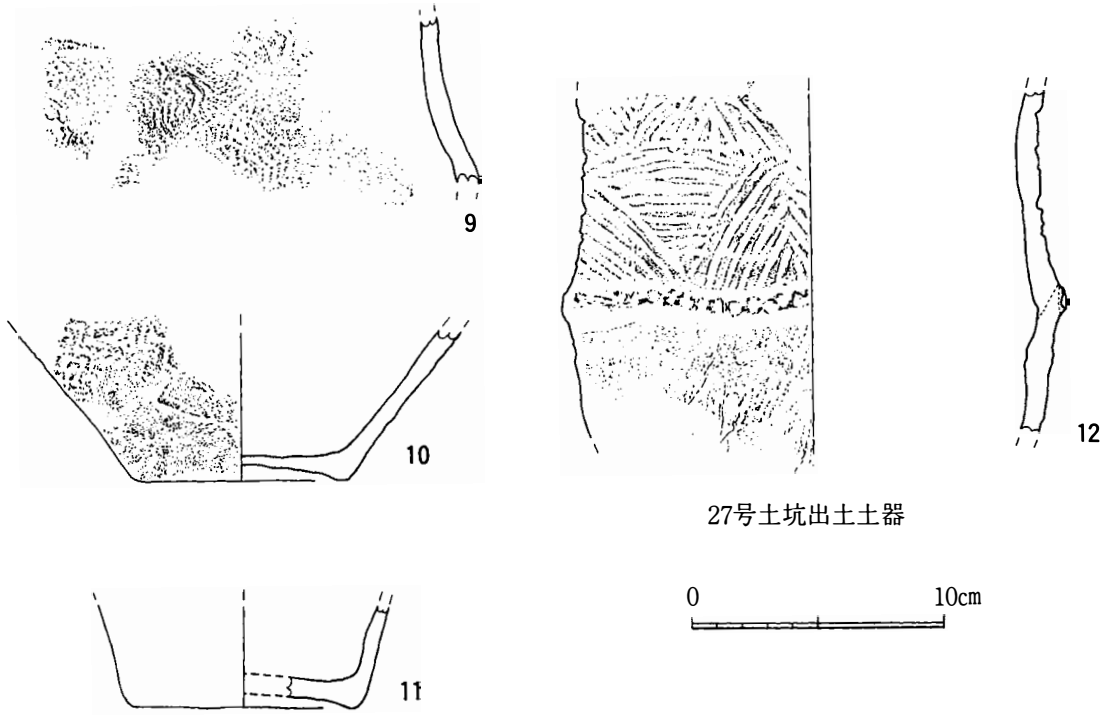
0　1 m

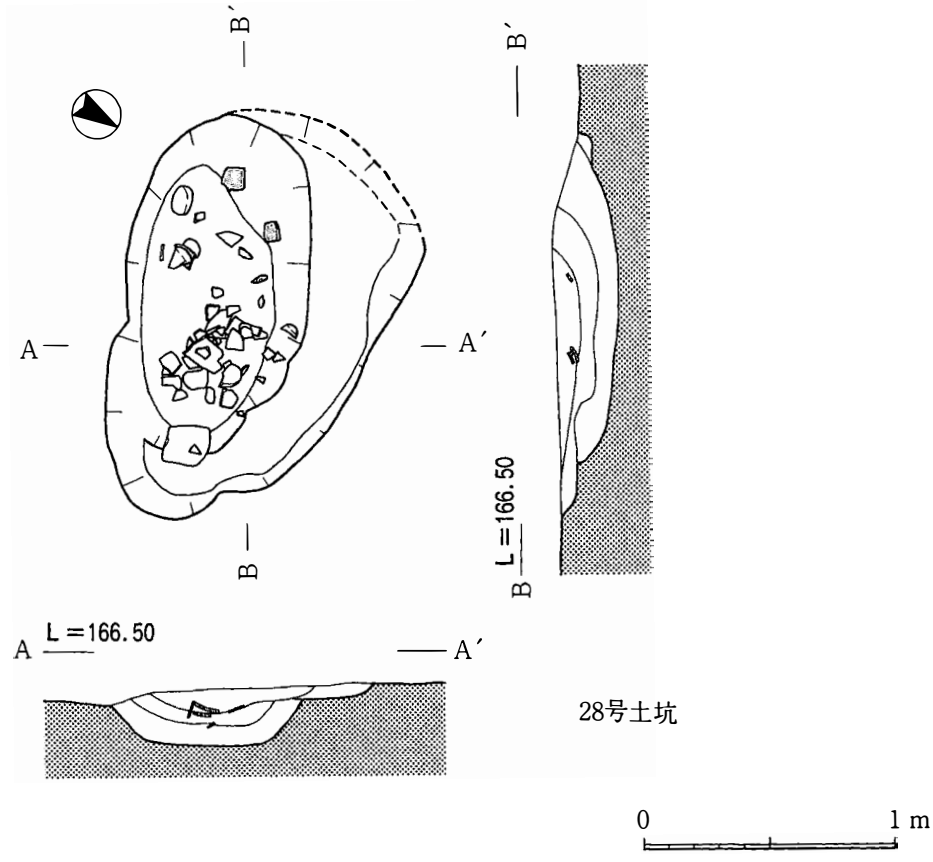


27号土坑出土土器

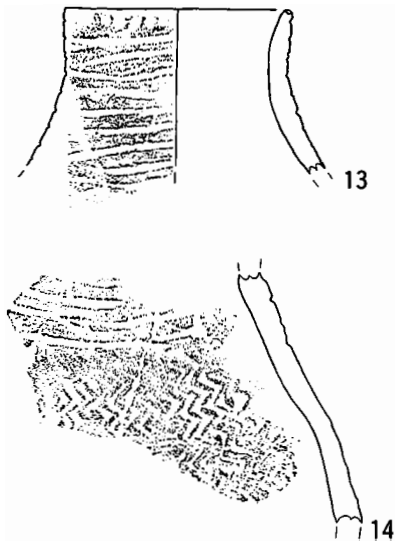
0　10cm

第42図　27号土坑実測図・27号土坑出土土器

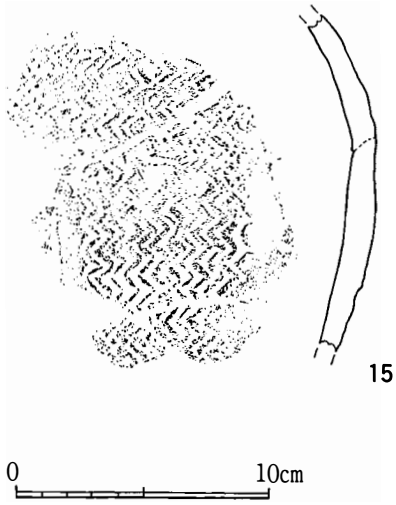


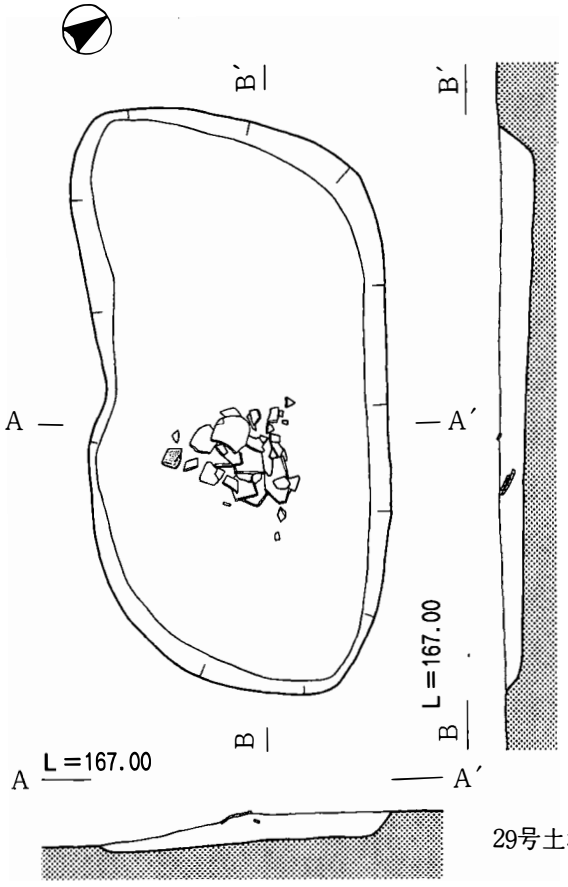


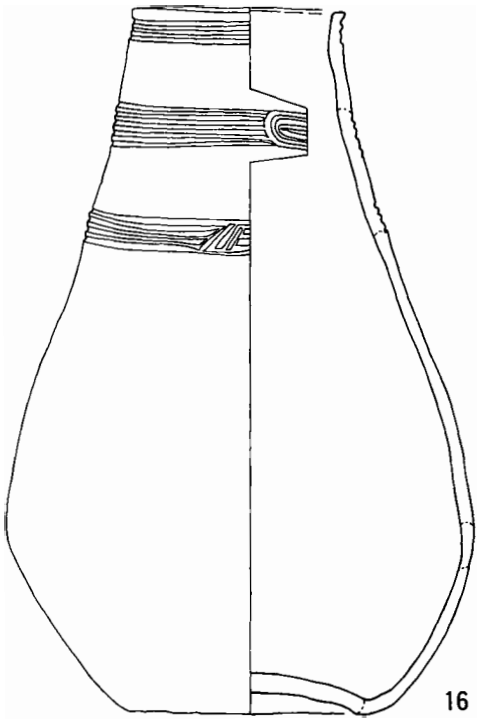
第43図　27号土坑出土土器・28号土坑実測図



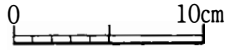
28号土坑出土土器



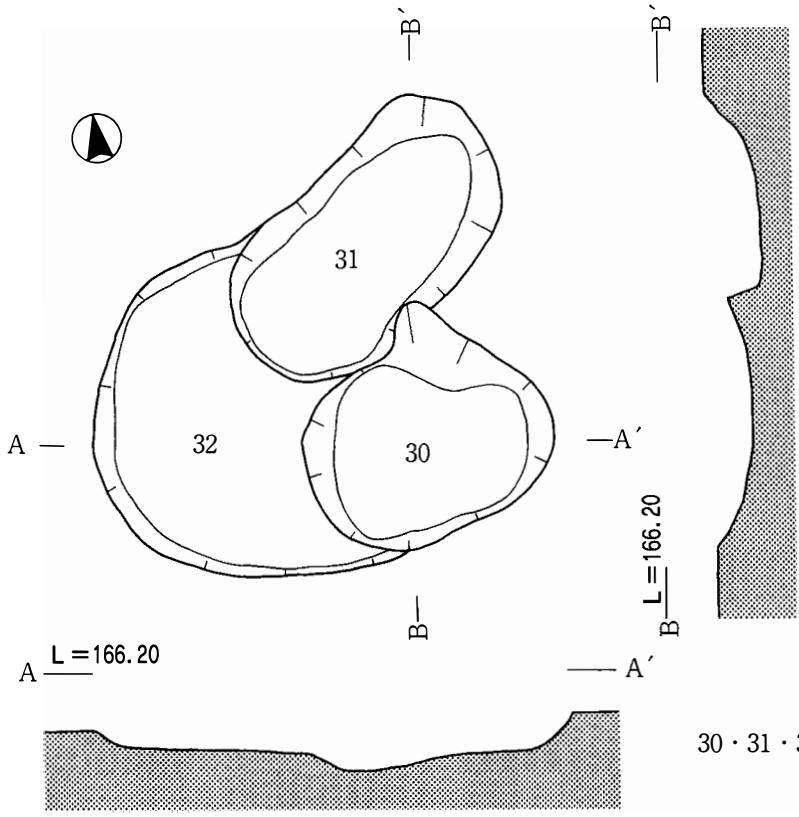




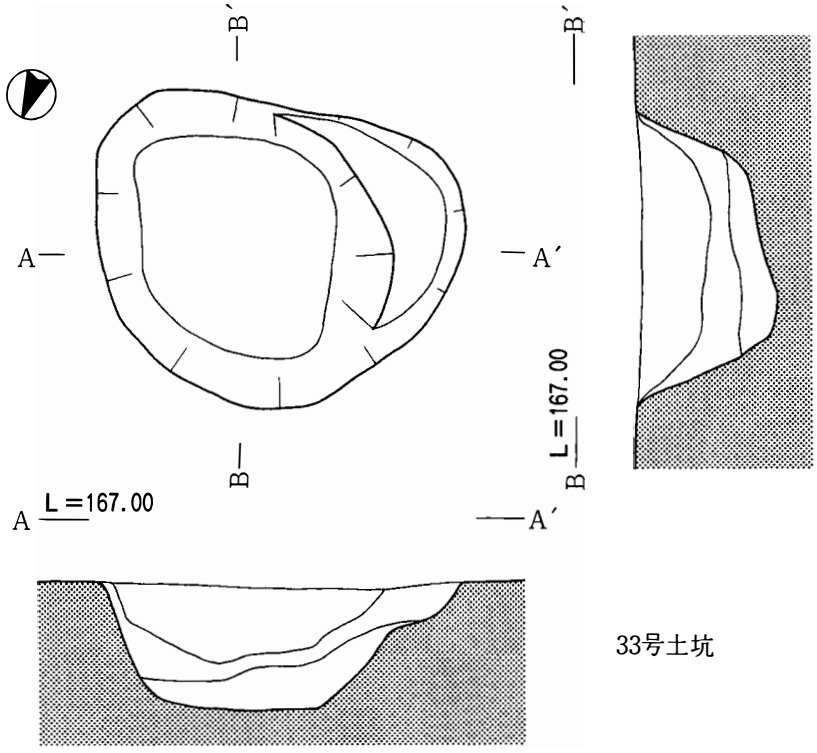
29号土坑出土土器



第44図　28号土坑出土土器・29号土坑実測図・29号土坑出土土器



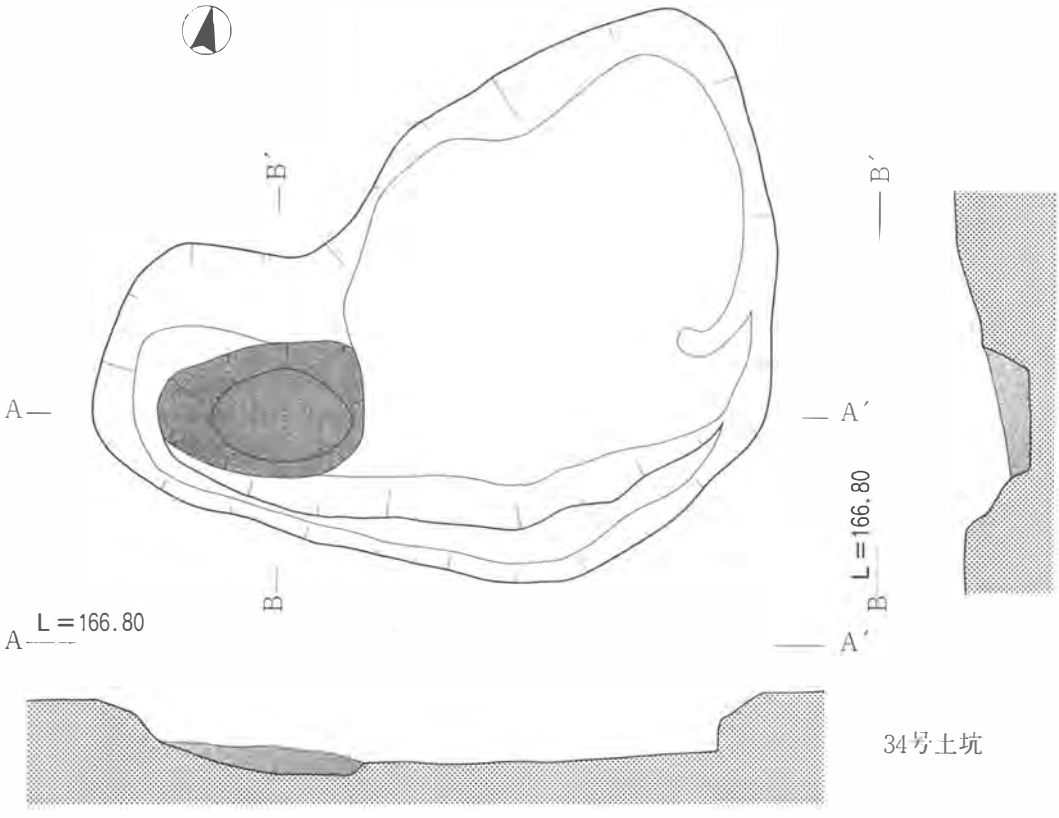
30・31・32号土坑



33号土坑

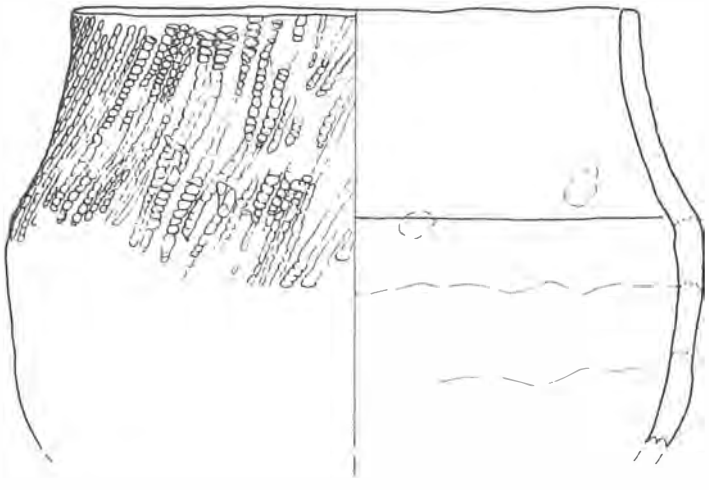
0　1 m

第45図　30・31・32・33号土坑実測図



34号土坑

0　1 m

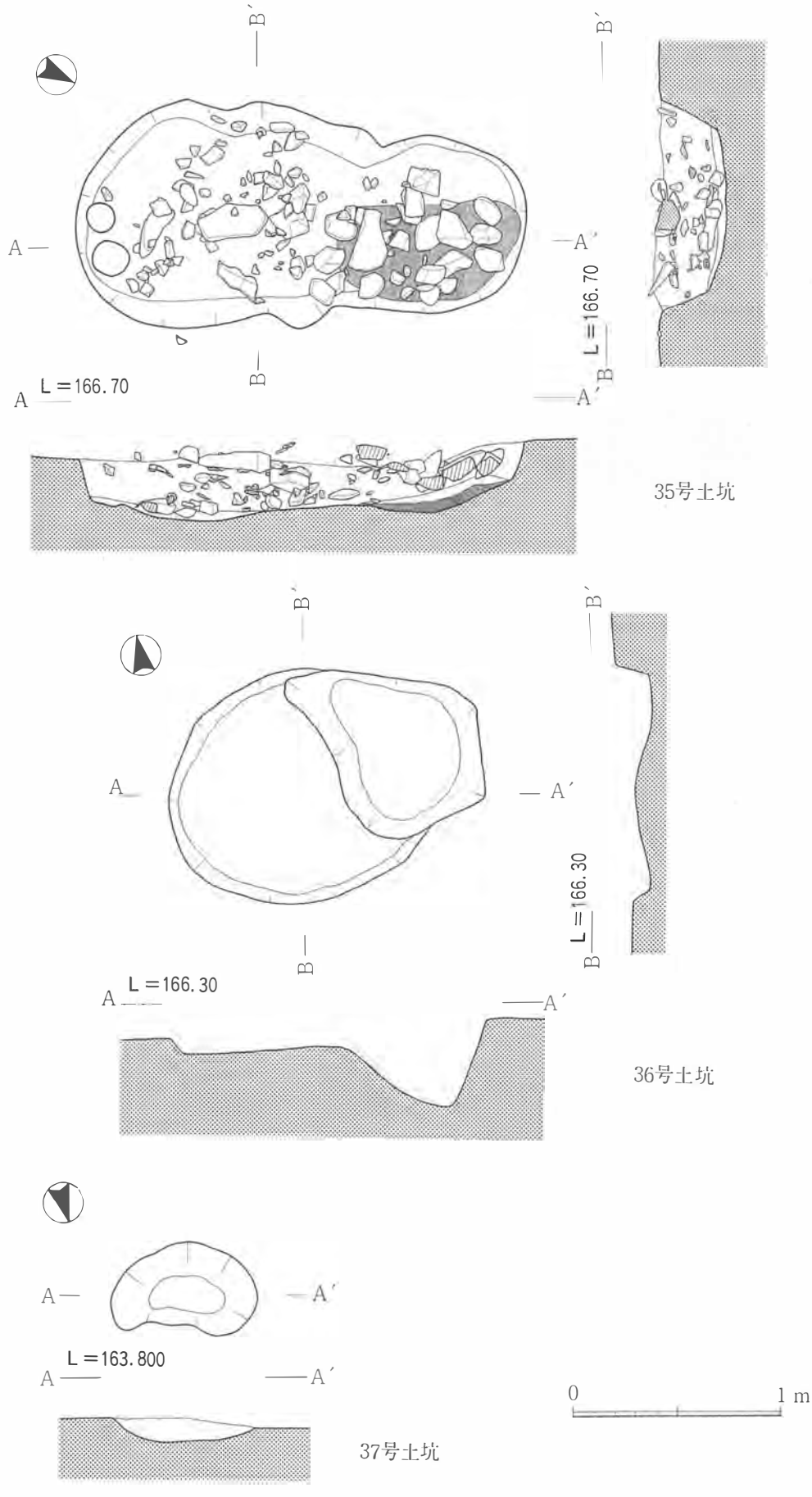


17

34号土坑出土土器

0　5 cm

第46図　34号土坑実測図・34号土坑出土土器



第47図　35・36・37号土坑実測図

34号土坑　（第46図）

2.8m×2.3m×0.3m の不定形を呈し、出土遺物は經部に縄文を施文した壷型土器系 **17**が１個体、第３類格子文２個体分・山形文・縄文・山形文地文に沈線文を主文（第３類２－A)とした等の細片が多数、第４類撚糸文 **325**など出土しているが、調査終了前日に検出されたため出土状況不明である。西側に焼土面が確認されていることから、これまでみられた燃焼土坑の可能性もある。

35号土坑　（第47図）

2.1m×1.1m×0.3m の不定形を呈し、出土土器は第３類山形文２個体分・楕円文・菱形文。北側床面に焼土が確認され、直上から第３類菱形が出土している。北側に焼土面があり燃焼土坑の可能性もある。

36号土坑　（第47図）

1.5m×1.1m×0.4m の楕円形を呈し、遺構東側に逆三角錐状の掘り込みがある。出土遺物は、第３類山形文が14点内１個体・（１）型が１点・撚糸文３点・菱形１点、櫛状施文６点・ミミズばれ文３点・山形地文＋沈線１点、山形地文＋ミミズばれ１点・沈線地文＋沈線２点、突帯に山形施文２点土器、以上は第３類土器で、他に第７類の１類３点、第８類山形文＋沈線文が出土した。

37号土坑　（第47図）

0.7m×0.4m×0.1m の不定形を呈し、出土遺物は第７類土器の口縁部 **369**が出土。別個体の第７類土器片も数点出土している。出土状況は床面直上ではないが土器溜め性格を持つものか。第７類土器が土坑に伴って出土する例は、当遺跡においてこの１例のみである。

第Ⅴ章　遺　物(土器)

第１節　縄　文　時　代　早　期

第２節　縄文時代前期～後・晩期

第Ⅴ章　遺　物(土器)

第１節　縄文時代早期

第１節は基本土層第４層での出土土器である。一部に層位の乱れもあり３層出土も見られるが、層位と形式から縄文早期土器に比定され10類に分類を試みた。

第１類土器　（第48図～49図　18～54）

器形は円筒形を呈し、外器面の口縁部付近に貝殻による条痕文を施文した土器である。器壁は厚く、口唇部を平坦に作り出す傾向にあり、口唇部から内器面にかけてナデ調整、外器面に条痕文を施す。口縁部形態から直口・やや外反気味・外反に大別でき、その口唇部には若干の差異がある。以下、個別に説明を加えていく。

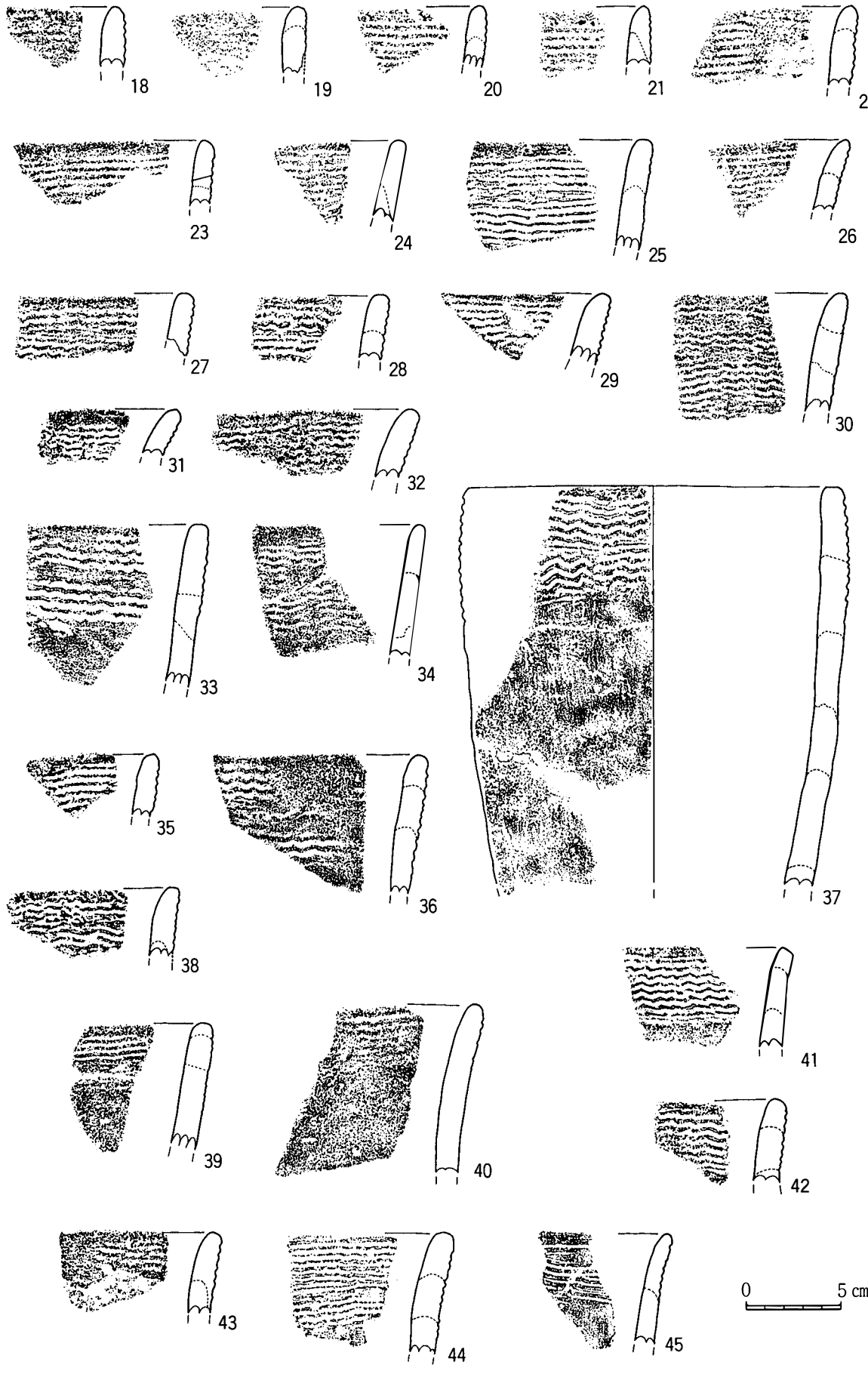
18・19・20・21・22・23・24・25・27・28・33・34・35・36・37・38・39・54は直口の口縁部を持つ資料である。**37**は底部を欠くが円筒形という器形の特徴を見ることができる。口縁部がわずかに内湾しており、口唇部は平坦に作り出している。内器面はナデ調整、口唇部は特に丁寧なナデ調整を施している。外器面は口縁部に貝殻による条痕文を施文し、胴部には丁寧なナデ調整を施している。貝殻による条痕文は小刻みに波状を意識して施文しているようである。**18・19**は内外器面とも劣化が進んでいるため条痕が明確にできないが、**20・21・22**は直線状の条痕を持つ。**23**は内外ともに劣化が進んでおり、二次焼成を受けた可能性を想定できる。また円形の補修孔が一カ所認められ、外器面側から内器面へ向かって穿孔している。**24・35**は丸みを帯びた口唇部、**25・27**は口唇部を平坦に作りだし、**33**も平坦な口唇部であるが器壁が肉厚で、口縁部には貝殻による波状を呈した条痕文を施文している。**34**は口唇部が丸みを帯び、ナデ調整を施し口唇部は特に丁寧である。**38**は口唇部を平坦に作りだし、口外器面には、貝殻による条痕文を波状に施文している。**39**は丸みのある口唇部で４条の条痕でその条数が最も少ない。**54**は口唇部は平坦に作りだし、円形の補修孔が口縁部に１カ所認めることができ、外器面から内器面に向かって穿孔している。補修孔の外器面から見て右端は、内外器面ともに摩耗しており使用していたことが伺える。

26・29・30・31・32・40・41・42・43・44・45・46・47・48・49はやや外反気味の口縁部を持つ。**26**は口縁部がやや外反し、口唇部が先細る器形である。**29**は口唇部から内器面にかけて非常に丁寧なナデ調整を施し、口唇部は滑らかで、丸みを帯びている。外器面には、貝殻による波状の条痕文を施文している。この波状の条痕は **30・31・32・41・42・48・49**にも見られる。**31**は口唇部が尖り気味である。**32**は等間隔の条痕が観察されるが内外器面ともに劣化がすすみ、二次焼成を受けた可能性が高く **44**も同質である。**40・45**は口唇部は丸みを帯び、**41・43・47**は丁寧に平坦部を作り出している。**42**は口唇部から内器面にかけて丁寧な横方向のナデ調整を施し、口唇部は丸みを帯びる。**46**はこの種の土器の中では器厚が薄く、器形は口縁部がやや外反している。口唇部は平坦に作りだし、内器面にかけてナデ調整を施している。**48**は外器面には口縁部に沿って貝殻による条痕文を施文しているが、下部もまたナデ調整を施している。**49**は口唇部が先細り、狭い平坦部を形成している。

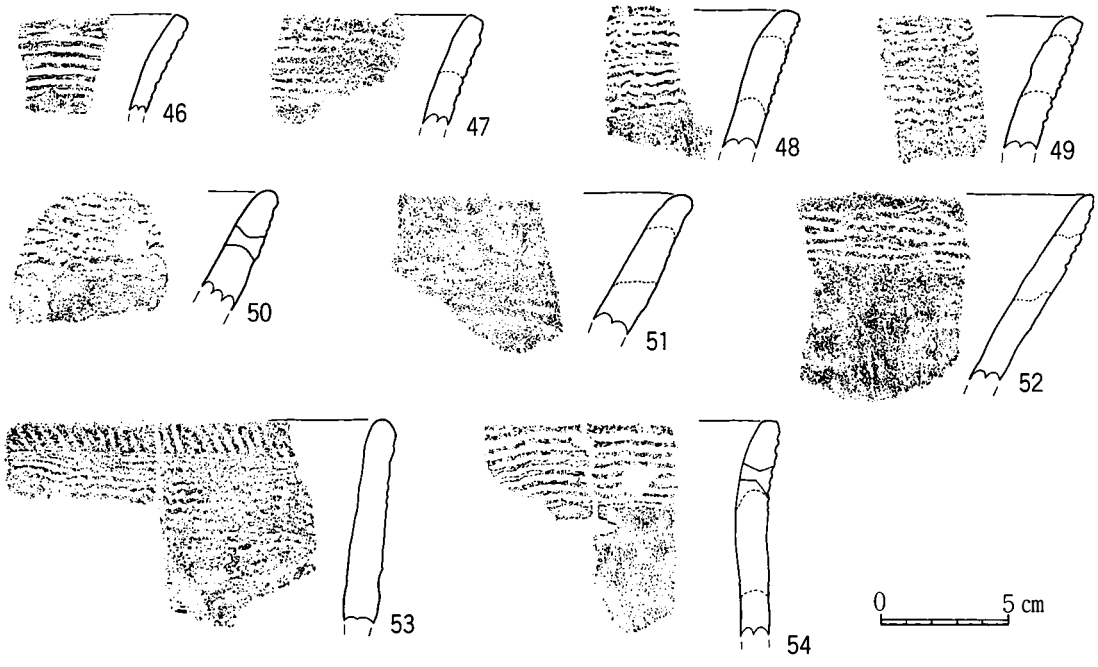
50・51・52は口縁部が外傾する器形である。**50**は口唇部は丸みを帯び、外器面には横方向に貝殻による条痕文を波状に施文し、補修孔が１カ所認められ、内外器面両方から穿孔している。**51**は外器面が一部剥落し、内器面もナデ調整を施してあるが全体的に摩滅している。外器面には条痕文がわずかに確認できる。**52**は口唇部が先細り、外器面には口縁部に沿って条痕文を施文している。

53は直口気味の口縁部であるが、２方向からの施文形態が見られる。外器面の口唇部近くには、貝殻による条痕文をやや傾いた縦方向に施文し、その下部には横方向に同様の条痕文を波状に施文している。

第１類の分布は遺跡中央から北東に密集が見られる。



第48図　第１類土器実測図（１）



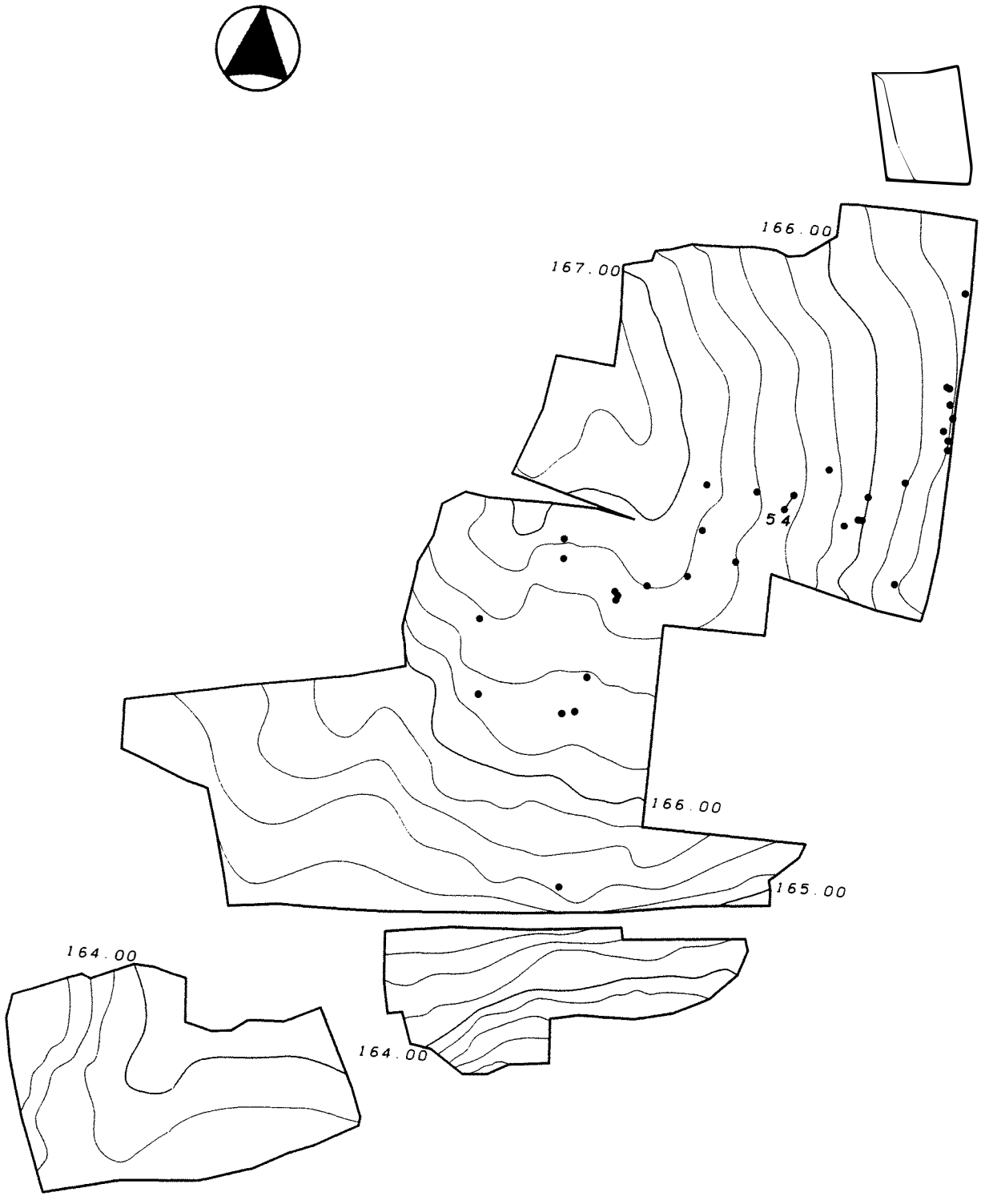
第49図　第１類土器実測図（２）

第２類土器　（第51図～52図　55～81）

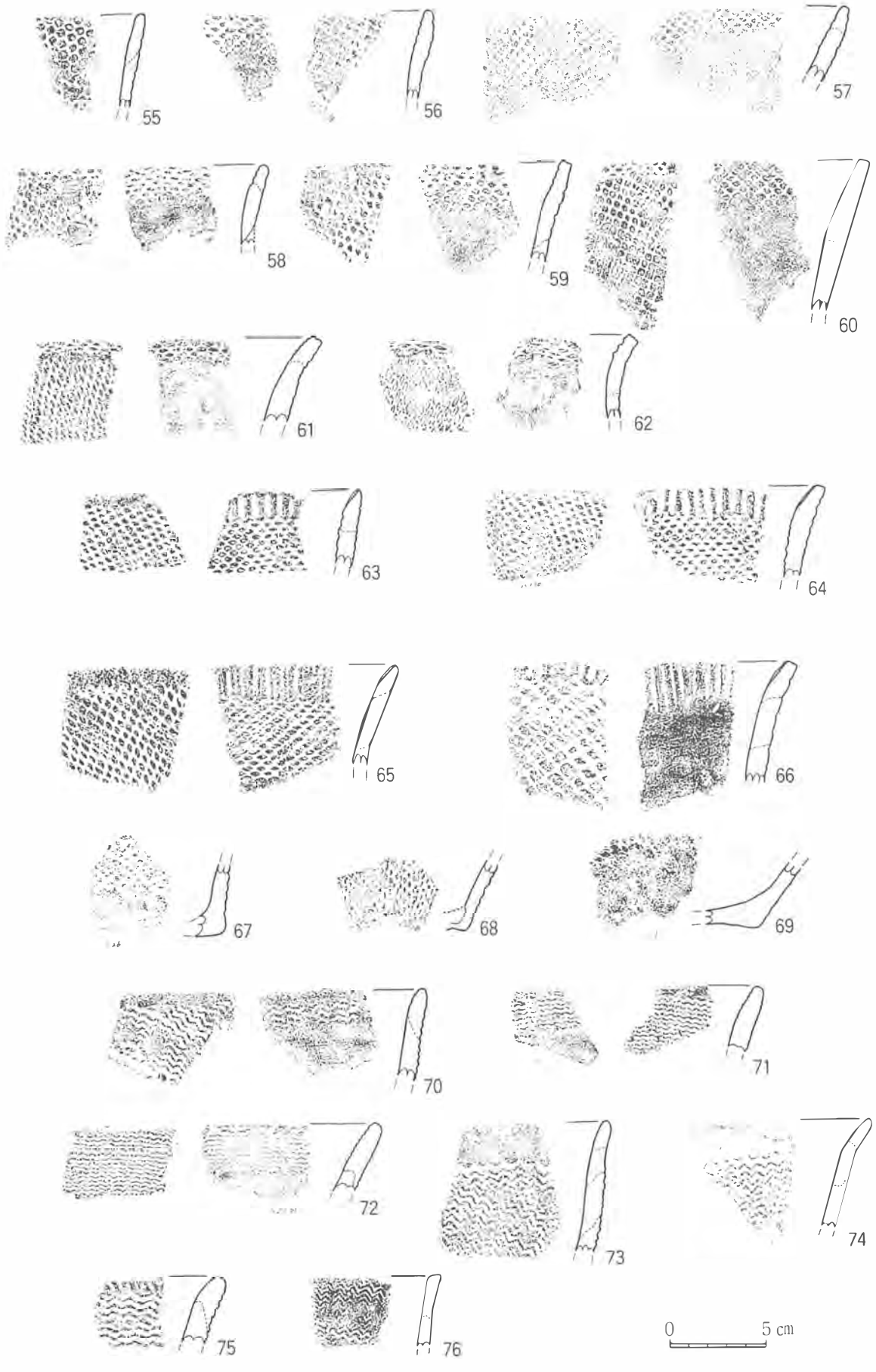
第２類は完形資料には恵まれなかったが、楕円文と山形文の押型文施文土器で口縁部は直口または外反する。底部の様相から胴部はやや膨らむ傾向と円筒状を呈するものが想定される。底部は平底の傾向がある。まず楕円文を施文した土器について説明を加えていく。

施文は外器面・内器面・口唇部に施文され、外器面は縦位・内器面は横位・口唇部は横位の傾向がある。**55**は口縁部が直線的で口唇部は平坦に、外器面には６㎜程度の楕円文を縦位に施文。**56・57・58・59・60・61・62**は内器面にも施文、**58・60・61・62**は口唇部にも施文されている。口縁部は外反するが**56**の口縁部はやや内湾する器形である。楕円施文原体に差異があり、径７～４㎜の範囲内である。内器面に原体条痕を持つ資料として **63・64・65・66**を提示した。外器面縦位・内器面横位の施文であるが内器面の口唇部近くに原体条痕を施す。楕円文に条痕文が重なる面が存在することから楕円施文後原体条痕を施す製作過程であり、条痕施文部は断面では直線状となる。楕円文径は７～６㎜でやや大型である。**67・68・69**は楕円文底部資料でともに平底を呈している。**67**底部から器壁はほぼ垂直に、**68・69**は緩やかに立ち上がることから、２形式の胴部の可能性が想定される。

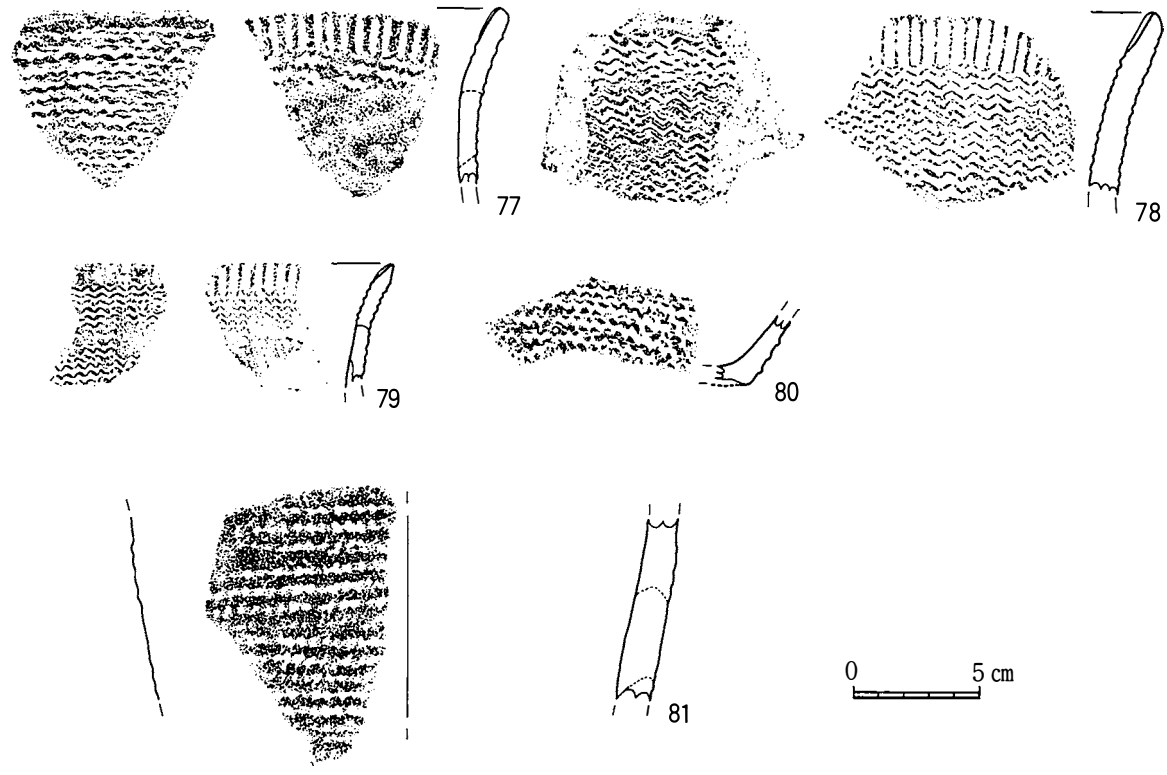
山形文の **70・71・72・73・74・75・76**は外器面・内器面に施文されている資料である。彫刻原体の差異は楕円文と同様であるが、この山形文は彫刻原体で第３類Ａ山形文に一部類似する。**71・72**はピッチ幅が大きく、従って「山」の高さが低いため一見、条痕文の波状と見間違う。**76**も同様である。外器面の施文は縦位傾向であるが **70・73**は斜行であろう。**73・74**は外器面の口唇部近くと、内器面にかけては、横方向のナデ調整を施し、外器面のそれ以外の部分には山形文を横位に施文し、**74**は口縁部が緩やかに外傾し、その端部においてやや強く外反する器形である。外器面口唇部近くは横方向のナデ調整を施し、それ以外には横位に山形文を施文している。**73**にも同様の傾向が見られる。**76**は外器面の口唇部にのみ原体条痕を施文し、その下部から横位に山形文を施文している。**77・78・79**は内器面に原体条痕を施文している。施文順序は、まず山形文を横位に施文し



第50図　第1類土器分布図



第51図　第2類土器実測図（1）



第52図　第２類土器実測図（２）

た後、原体条痕の施文で、楕円文資料の原体条痕と同様である。**80**は、平底を呈する底部資料で、底面を円盤状につくり、それに粘土を積み上げて壁面を形成している。外器面には山形文を横位に施文している。

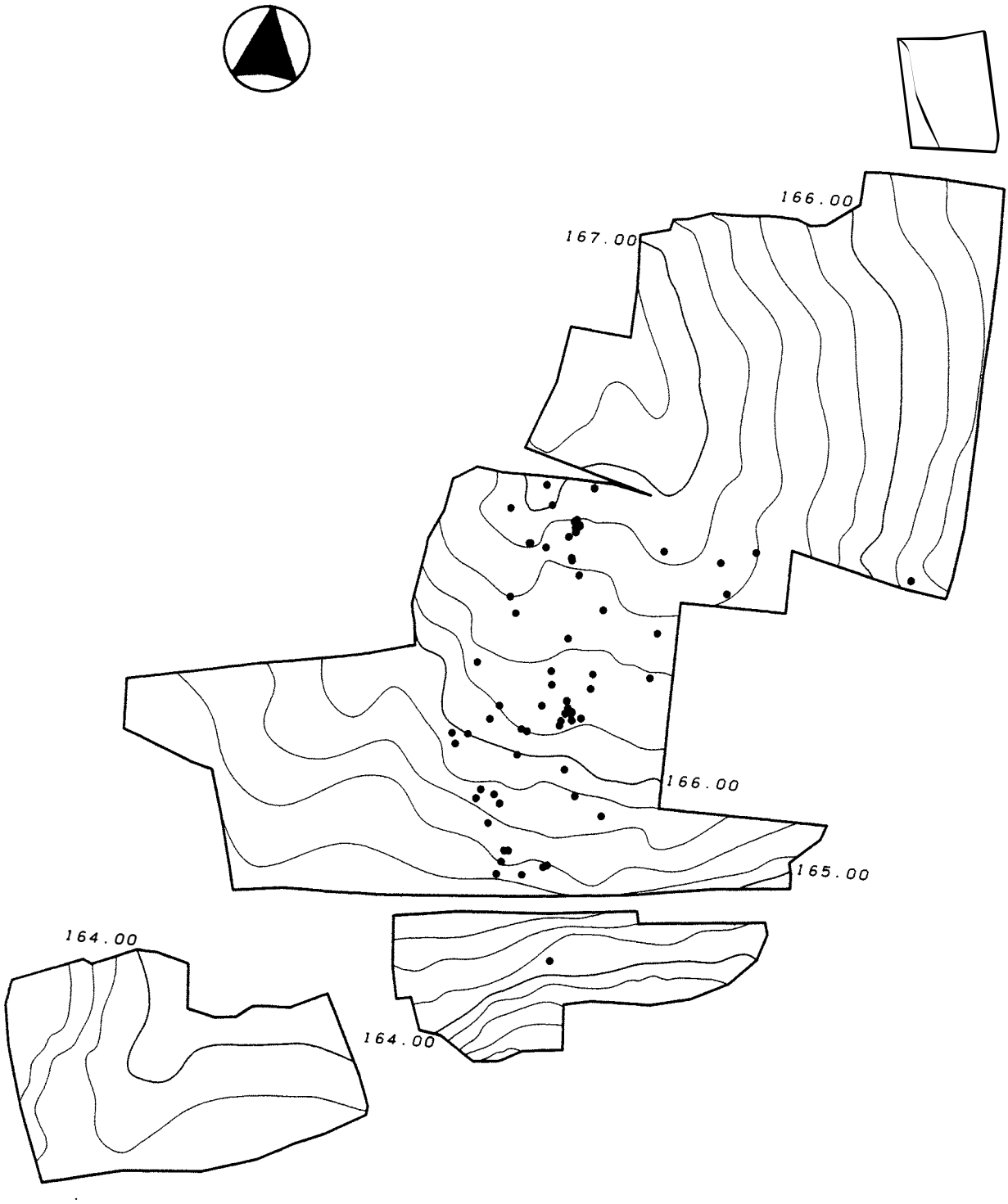
これまで第２類では楕円文と山形文であったが、同じく円筒形土器の中で１点だけ縄文が確認されたので、ここに仮設しておく。**81**は、胴部の資料で器壁は厚みがあり、円筒形を呈している。外器面には、縄文を横方向に施文し、内器面はナデ調整を施している。

楕円は遺跡中央からやや南側に、山形の分布は明確ではないが中央部と北東部に分布が見られる。

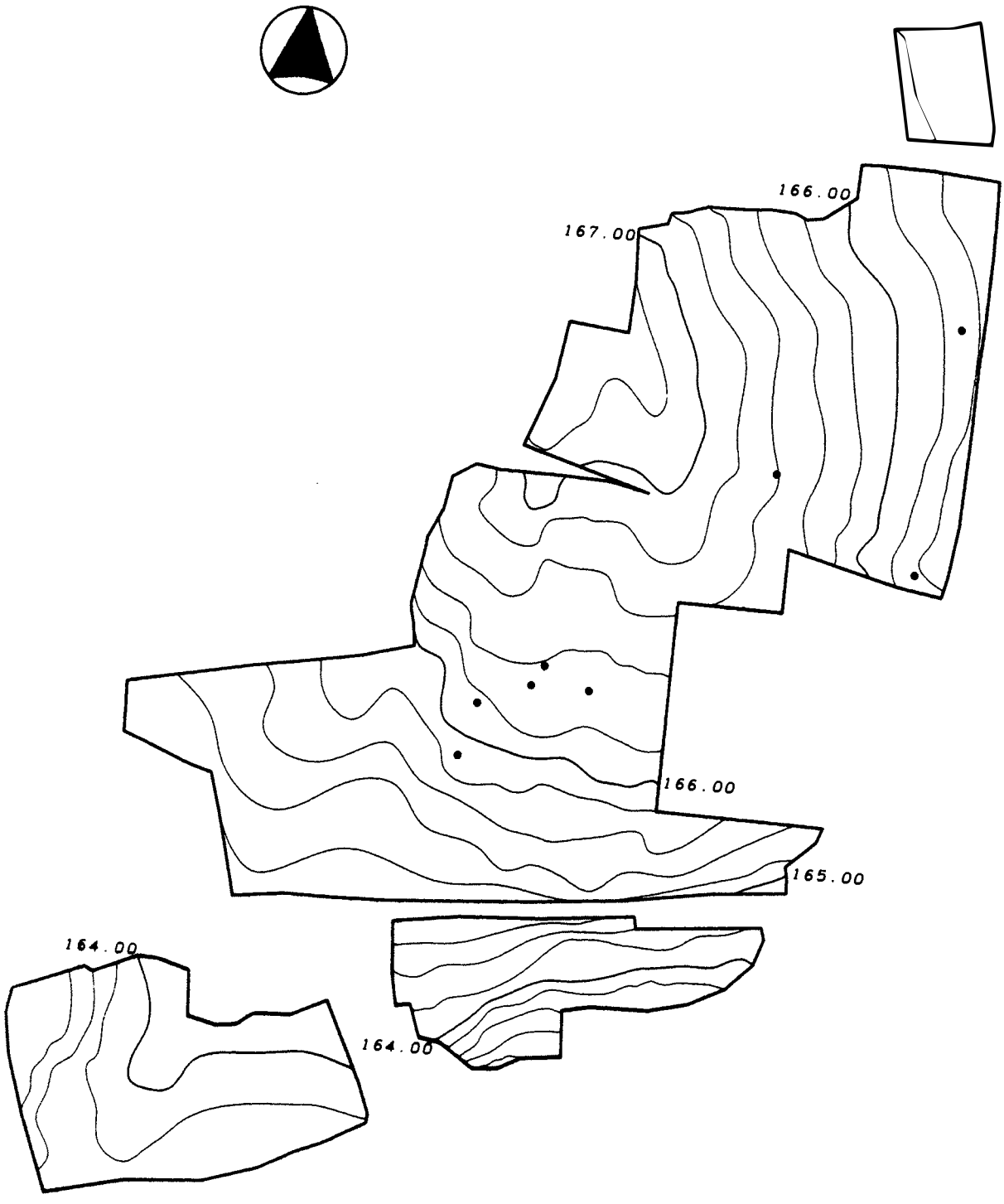
第３類土器　（第55図～68図　**82～319**）

第３類土器は本遺跡中、最も多量に出土し、その数 9,457点であった。弓状または直状に外反する口縁部を持ち、この口縁に対して張り出しタイプ（１）型（３号土坑出土**1**・22号土坑出土**5**）と、強い屈曲タイプ（２）型（５号土坑出土**2**・２－Ｊ類の**223**）をそれぞれの素形とした二形式の胴部が存在する土器類である。また第３類は文様体施文に差異があり、手向山土器編年模式図（横手　1998）を参考とし、第３類は以下のような分類を試みた。

1　押型文施文
2　押型文＋押型文以外の施文
3　押型文以外の施文



第53図　第2類土器分布図（楕円）



第54図　第２類土器分布図（山形）

第４表　第３類土器分類表

1	2	3
A　山形文	**2－A**	
1－A－（1）	2－A－（1）	
1－A－（2）	2－A－（2）	
B　撚糸文	**2－B**	
1－B－（1）	2－B－（1）	
1－B－（2）	2－B－（2）	
C　菱形文		
1－C－（1）		
1－C－（2）	2－C－（2）	
D　同心円文		
1－D－（1）		
1－D－（2）		
E　同心楕円文		
1－E－（1）		
F　雷文	**2－F**	
	2－F－（1）	
1－F－（2）		
G　縄文	**2－G**	
1－G－（1）	2－G－（1）	
1－G－（2）		
H　格子文		
1－H－（1）		
	I　ミミズばれ文	**3－I**
	2－I－（1）	3－I－（1）
	2－I－（2）	3－I－（2）
	J　櫛状施文	**3－J**
	2－J－（1）	3－J－（1）
		3－J－（2）
	K　沈線文	**3－K**
	2－K－（1）	3－K－（1）
	2－K－（2）	3－K－（2）
	L　沈線文＋地文	**3－L**
	2－L－（2）	3－L－（2）
		M　刺突文

この分類に各文様体は次のように提示した。

A　山形文　　B　撚糸文
C　菱文　　D　同心円文
E　同心楕円　　F　雷文
G　縄文　　H　格子
I　ミミズばれ文　　J　櫛状施文
K　沈線文　　L　沈線文＋地文
M　刺突文

これらの組み合わせを第３類土器分類表（第４表）で提示した。第３類土器の紹介にあたり、まず文様体の基本形態の提示として口縁部を最初に表記し、次に胴部張り出し附近より文様体の変化が見られることから同一施文で構成される場合と、異なる文様体の組み合せがあるため、完形資料に恵まれず断片資料であるが胴部形式（１）⇨（２）の順で提示した。以下この分類に沿い説明を加えたい。

１　押型文施文

１は押型文の施文グループでA 山形文～H 格子文まで８種の文様体が認められる。

A　山形文　（第55図　**82～91**）

三角状の山形を呈したグループで第３類中、最も多量に出土した。その文様体には山形のピッチ幅・高さなど様々なパターンが存在する。口縁部の外反状態は弓状であるが、直線状に外反（**83・87・89**）するタイプもある。山形文として包括したがその彫刻原体に差異があり、ピッチ幅を例にとると **83**は振幅が最も大きく2.9㎝を測り、反対に **87**は1.1㎝である。稜は明瞭であるが **86**のように間伸びした山形文も観察される。口縁部内器面に施文が見られ、外器面は縦方向に内器面は横方向・口唇部は横位施文傾向があり、これらは同一施文具を使用しているものと思われる。**90**の外器面は口唇部から口縁部にかけて縦位⇨横位⇨縦位と施文方向が異なるが同一施文具を使用している。また **85**はサンドイッチ状に２種の異なる施文具使用が認められる。**91**は口唇部に山形文が押捺され半円の窪みを呈していることから、使用された施文具が棒状の可能性を示唆する資料である。

１－A－（１）　（第56図　**92～101**）

１－A－（１）は山形の（１）型で外反する口縁になだらかな胴部を持ち、施文は **92**で斜行が見られるが縦位施文が主である。また胴部張り出し部を境に上位と下位で施文形態に差異が生じる傾向も見られる。**99**は上位に縦位・下位に斜行、**101・100**は上位に施文が見られるが下位はナデ調整で無文と呼ぶべきであろうか。また内器面でこの位置に粘土継ぎ目及び調整痕 **96・97**が見られることからも胴部最大径を意識した製作及び施文形態である。**94**の口

縁は内傾の可能性もあり、それによると壷タイプか。

１－Ａ－（２）　（第56図　**102～107**）

１－Ａ－（２）は山形施文胴部において強い屈曲を持つタイプで明瞭な屈曲を持つ **106**は稜線調整が施され、**104**は **106**ほどの屈曲を持たず（１）型との中間型との感も受けるが、ここでは（２）型として提示した。施文は縦位施文 **102・103**と下位ナデ調整の **104・105**に大別される。**107**は文様施文後、ナデ調整を行っているため文様が明瞭でないが縦位の山形文が施されている。**102**はピッチ幅が狭く・高低差があまり見られず第２類の山形文に酷似している。**105**は山形文としてピッチ幅が広く間伸びした押型であるが山形文として包括した。施文状態に共通することは縦位及び斜行の施文であり、屈曲部の頂点にも施文が見られる傾向がある。

Ｂ　撚糸文　（第57図　**108～125**）

撚糸施文のグループで、その施文形態は多種にわたり、多重・網目・格子などの変型撚糸もこの類に包括した。

口縁部で外器面のみ施文 **108・109・115・118・119・123**と内器面までの施文 **110・111・112・113・114・116・117・120・121・122・124・125**、外器面は縦位・内器面は横位施文を基本してある。口唇部にも施文の **120・121・122**があり **122**は口唇部に平坦部を作り出し横位施文が行われている。**120・121・123**は多重撚糸文、**124**は多重撚糸の変形型である。網目撚糸としては **115・118・119**でこの網目の二重型が **114**、網目基調に多重撚糸文のある **125**などのパターンがある。**114**と**117**、**118**と**119**は接合はできなかったが同一個体と思われる。

１－Ｂ－（１）　（第57図　**126～130**）

127は多重網目の様相を呈し、中間型の屈曲を持つが（１）型とした。**128**は**125**と文様が類似しているが別個体である。**130**は縦位撚糸が胴部上位と下位に施文され胴部最大径はナデ調整が施されている。**129**は変形多重撚糸であるが壷胴部の可能性も考えられる。

１－Ｂ－（２）　（第58図　**131～134**）

縦位の撚糸の施文でこれらも強い屈曲部を作り出している。**134**は施文方向が上位と下位で異なる施文形態。**133**は屈曲下位はナデ調整が施されている。**131・132**も下位はナデ調整と思われるが風化が激しく判断ができない。

Ｃ　菱形文　（第58図　**135～145**）

菱形文の施文はＡ山形文に酷似したもので、この施文にも彫刻原体に差異がある。外器面は縦位施文・内器面は横位施文の傾向があり、**138・143**は口唇部は横位施文であるが、施文される口唇部の面積が狭少なために端部が施文され、一見、山形文として見える。ここで注目したいのは縦位施文の **142**と斜行施文の **138**のそれぞれの外器面で施文帯に間隔があり、**142**は施文具の押形が確認される。**138**はインターバルから施文具の単位（2.2㎝）が想定される資料である。

１－Ｃ－（１）　（第59図　**146～151**）

146・150は下位をナデ調整が施され、他は下位まで施文が確認される。縦位施文であるが **149**は規格化された菱形文ではなく右端に中心部を持つ文様でこれも菱形文とし包括した。

１－Ｃ－（２）　（第59図　**152～155**）

153・154は下位をナデ調整が施されている。**154**では屈曲部の外器面では明確な稜線は見られないが、内器面では屈曲部にあたる稜線が見られることから、整形段階で屈曲を意識した製作である。

Ｄ　同心円文　（第59図　**156～158**）

波紋のような同心円状の形態で、山形文・菱形文のように彫刻原体にさほど差異が認められず、３～４重の均一した形状であるが、**157**のように同心円に流水状施文も見られる。文様体は **158**のように隅丸も認められるが同心円文として包括した。出土点数も少量であり、一時的な流行の施文であるか。

１－Ｄ－（１）　（第59図　**159**）

１－Ｄ－（１）は１点だけが図化可能であった。**159**の下部は施文後ナデ調整が施される三重の施文であり、やや横長の同心円状である。

Ⅰ－Ｄ－（２）　（第59図　**160～161**）

161は隅丸円文が下部まで施文されているが、**160**

の下部はナデ調整が施され、上部は均一の見事な同心円文で構成されている。

Ｅ　同心楕円文　（第59図　162）

同心円を横長表現したもので、同心円と形状が類似しているため同心円の範疇として捉えるべきでもあろうが整理上区分した。図化は１点である。162は口唇部が欠損しているが口縁部資料である。内器面にも僅かであるが施文が観察される。

１－Ｅ－（１）　（第59図　163～164）

163はゆるやかな胴部をもつ（１）型で下部はナデ調整であることから施文は上位に施されている。文様体は横長隅丸形とこの半載形との２種類が観察され、これらを区画するかのように棒状施文が存在する。この同心楕円には（２）型が確認できなかった。

Ｆ　雷文　（第59図　165～166）

長方形をベースにし、隅が直角に表現されている文様体を雷文として包括した。Ｅ 同心円楕円と施文形状が酷似しており、そのベースが長方形であるか隅丸楕円であるかの違いでもあろう。従って、同心円・同心楕円・雷文と整理上区画した。またＥ同心楕円に見られた文様体を区画するかのような棒状施文が雷文では明確に観察される。165は内器面・口唇部にも施文が見られるが外器面は長方形文であるがやや乱れている。166は長方形をベースにした鉤状の組み合わせの施文形態で、一見ラーメン丼によく見る施文でもある。

１－Ｆ－（１）・（２）　（第59図　167～168）

167はゆるやかな胴部を持つ（１）型で張り出しから下位はナデ調整であり、施文は大形で2.1㎝×1.2㎝を測り、逆「コ」の施文。168は（２）型で鉤状施文と長方形施文の組み合わせで、166の文様形状と類似している。また､内器面には１－Ｃ－（２）154のと同じく明瞭な稜線が見られる。

Ｇ　縄文　（第60図　169～175）

縦位の施文で口縁部ではＬＲが主で内器面 172・173・174は横位施文である。169は外反が強く小型土器の部類か。172・173・174は口唇部にも施文され、171は口唇部に沿い外器面・内器面に両方向からの施文が行われている。施文具原体には差異があり、171が最大で５㎜幅が確認される。

Ｉ－Ｇ－（１）　（第60図　176～180）

176は縦位ＲＬで接合資料である。直線にして約18mの距離があった。178は斜行施文が見られるが他は縦位のＲＬ施文であるが、180は縦位無節Ｒｌである。179の下部はナデ調整である。

１－Ｇ－（２）　（第60図　181～183）

縦位施文ＲＬが行われているが、181・183の下部はナデ調整で、183は屈曲部に明瞭な稜線を持つ。

Ｈ　格子文　（第60図　184）

格子状の押型施文を持つグループで出土点数は小数である。184は口縁部資料で、方形と長方形の組み合わせであるが、これを格子文と表現した。

１－Ｈ－（１）　（第60図　185～187）

（１）型だけが確認された。（１）型屈曲の 186と（１）型と（２）との中間型の持つ 185がある。185は屈曲頂部にナデ調整が施され、これにより上部施文が消されている。187はナデ調整が屈曲頂部を中心に施され、上部に僅かながら格子文が認められる。

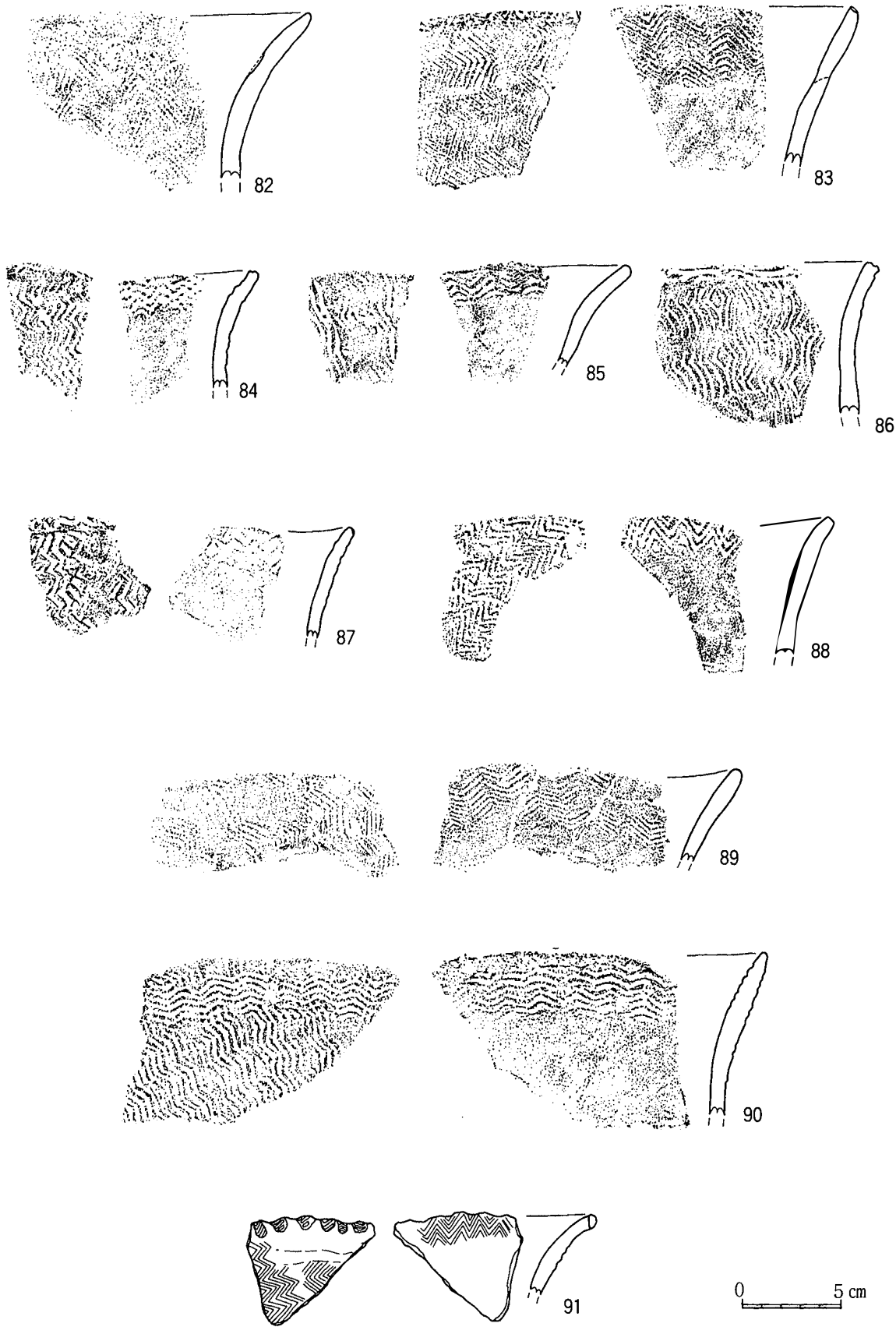
２　押型文＋その他

２は押型文＋その他の施文形態を持つグループで、主文を山形文等の押型とするため、その主文での分類とし「屈曲上部」(口縁上端～胴部最大径及び屈曲頂部）と「屈曲下部」(胴部最大径及び屈曲頂部～底部接地面）で施文が変化するため、「屈曲上部」を主文施文とした。また外器面と内器面が異なる施文は外器面を主文とした。

２－Ａ　山形文　（第61図　188～191）

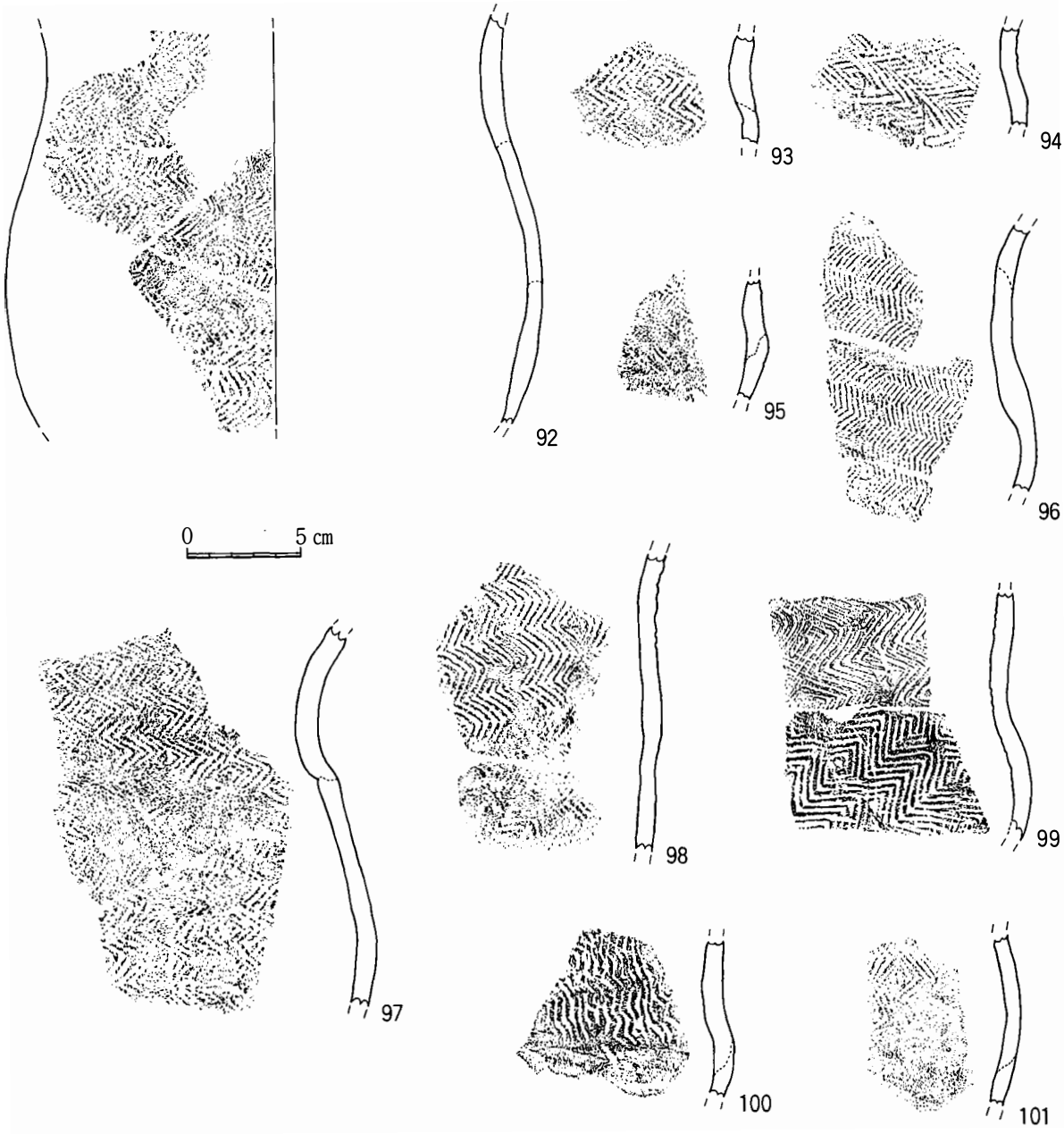
２－Ａ類は山形文を主文しとたグループで、ミミズばれ文・無文・刻み・凸帯刻み・連点文・細沈線などの押型文以外の組み合わせである。188は口縁部外器面にピッチのやや狭い山形縦位と下位にミミズばれ文が見え、内器面口唇部からミミズばれ文が

1－A

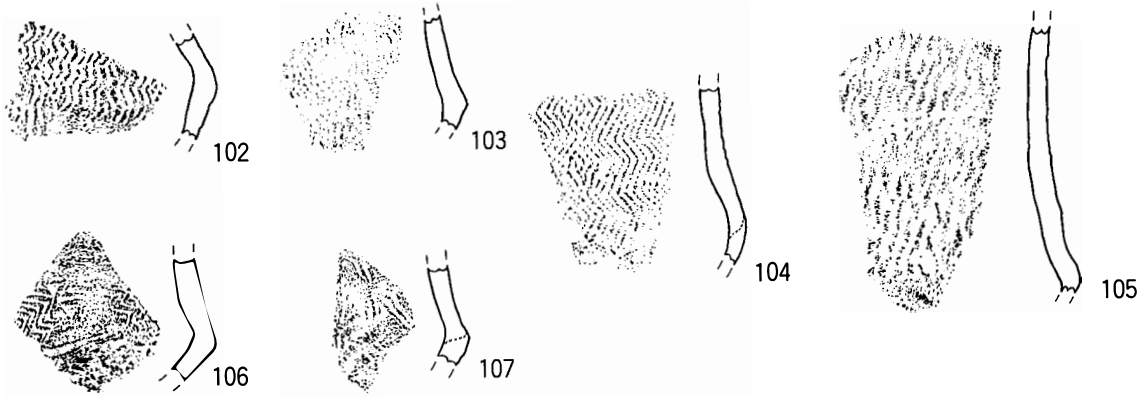


第55図　第３類土器実測図（１）

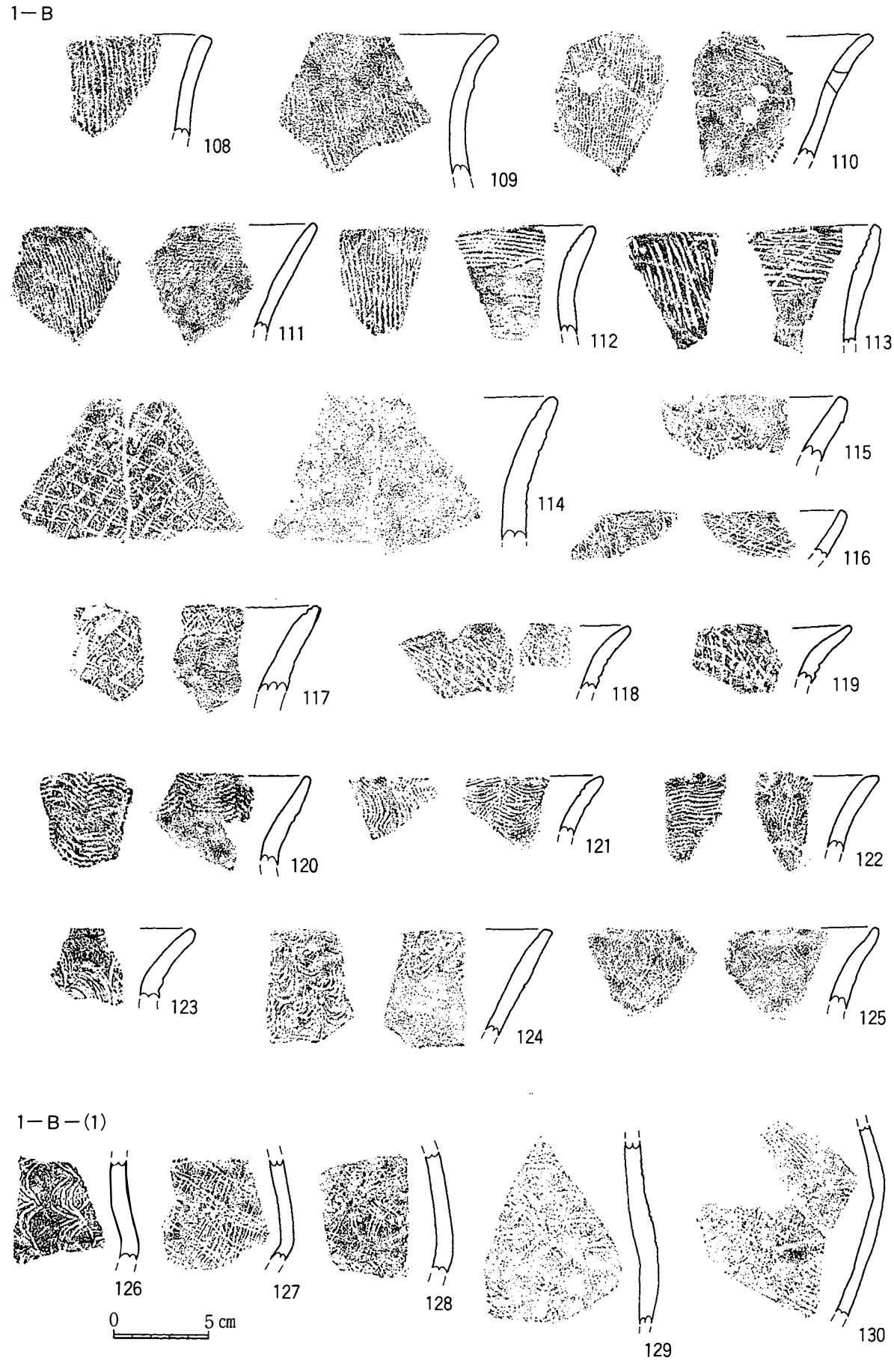
1－A－(1)



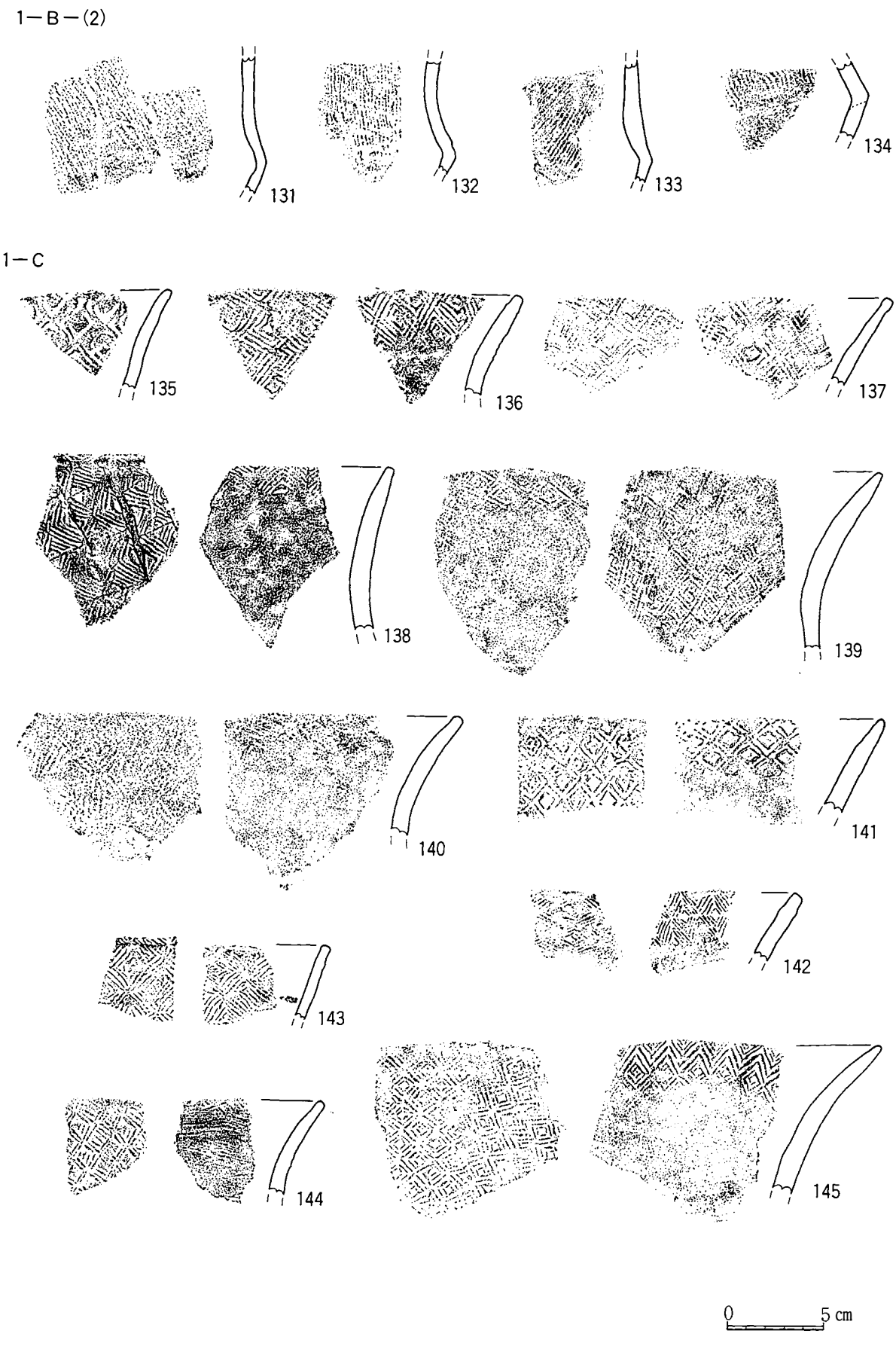
1－A－(2)



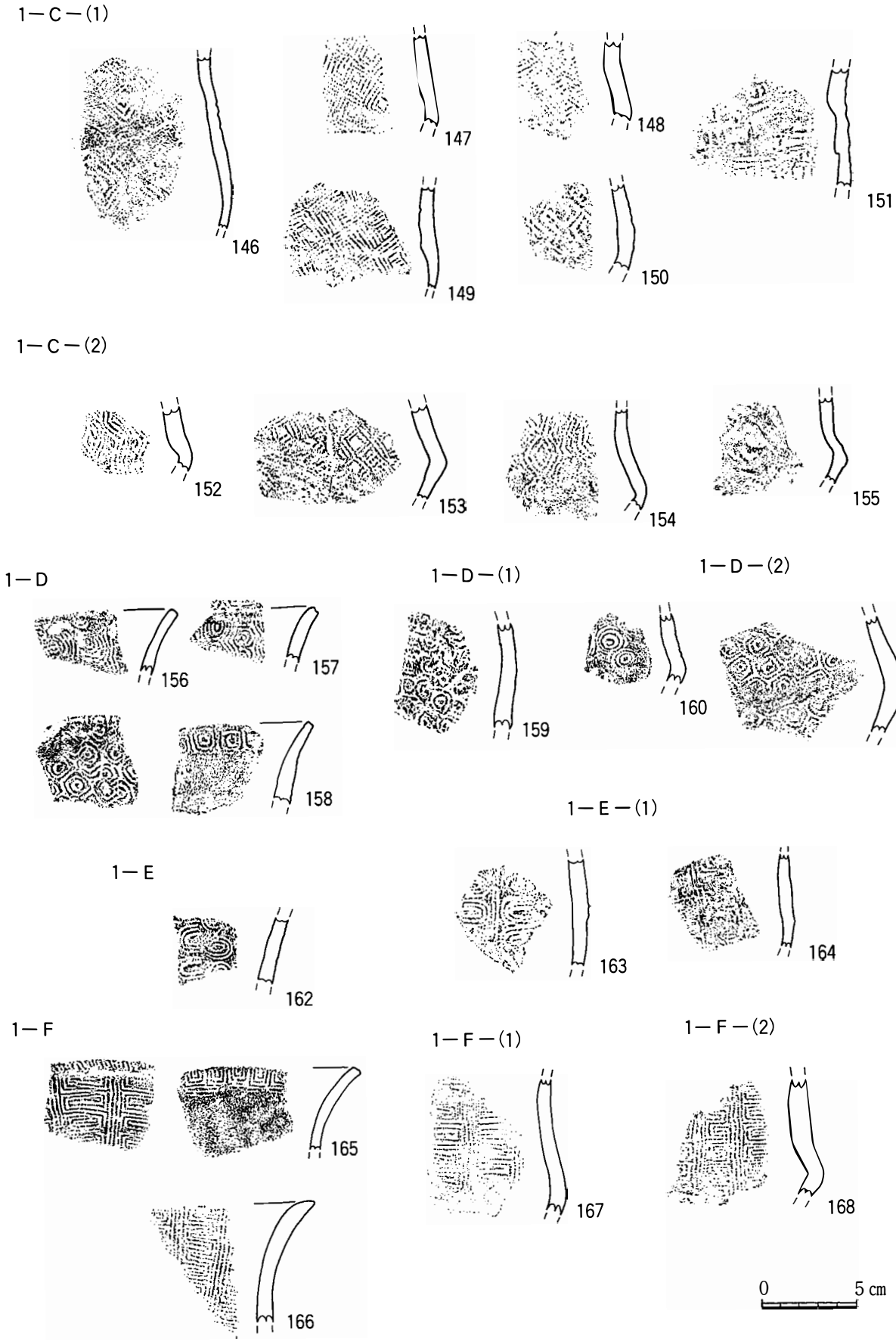
第56図　第３類土器実測図（２）



第57図　第３類土器実測図（３）

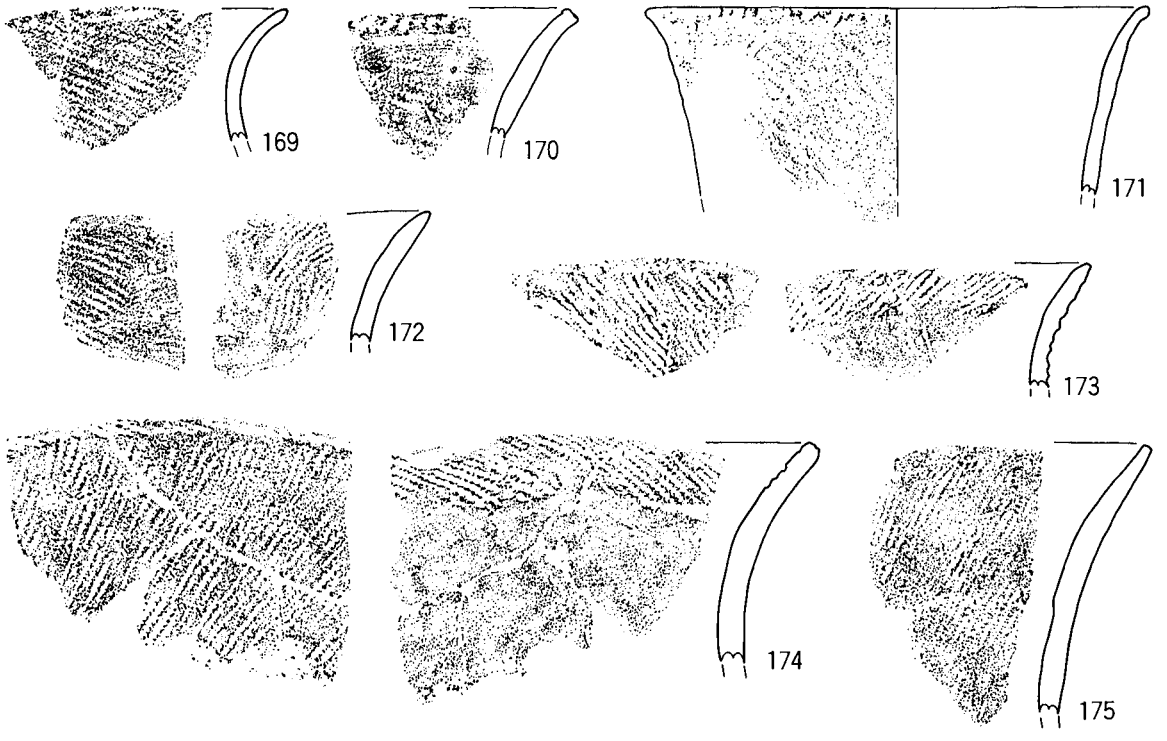


第58図　第３類土器実測図（４）

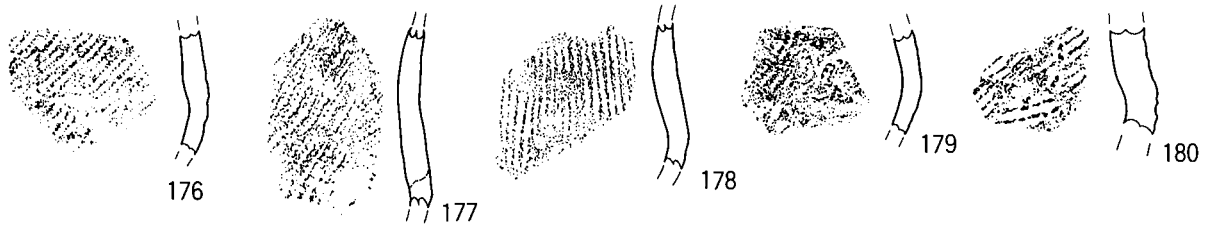


第59図　第３類土器実測図（５）

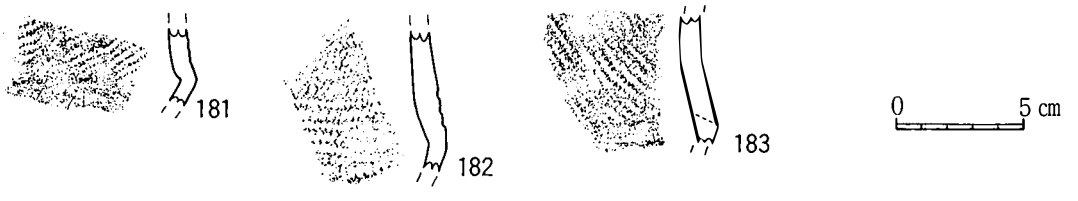
1－G



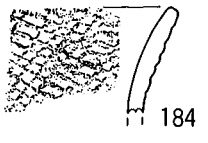
1－G－(1)



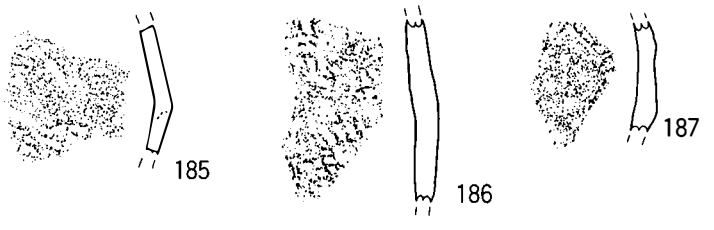
1－G－(2)



1－H



1－H－(1)



第60図　第３類土器実測図（６）

５条確認され、下位に山形横位施文がある。189は外器面・内器面に丁寧なナデ調整がされ、本来は無文の範疇であるが口唇部に山形横位が施されているため２－Ａ類に区画した。強いて分類するならば山形＋無文となろうか。190は山形を主文に口唇部に刻み、外器面口唇部附近に凸帯刻み、また外器面に沿い連点文が施されている。191は外器面に山形斜行、内器面に細沈線というの組み合わせである。

２－Ａ－（１）　（第61図　192～194）

192は山形縦位の後、沈線が横位に施されている。また胴部最大径の位置に突帯が張り巡らされ、ここにも山形横位施文が行われている。従って 192は山形＋沈線＋凸帯となろうか。193は胴部最大径の位置に凸帯。194は連点文が横位に認められる。

２－Ａ－（２）　（第61図　195～197）

195は外器面は細沈線で構成され、屈曲部に突帯が施され、ここに山形文が認められる。山形＋突帯のタイプで､外器面が沈線であるため２－Ｋ－（２）に区分されるのであろうが、ここに仮設した。196は山形縦位に施文後上位屈曲頂部までミミズばれ文が縦位に施文されている。山形地文＋ミミズばれ文。197は屈曲部上部に連点文が施されている。上部は風化が激しいが山形文施文が認められ 194と同類文である。

２－Ｂ　撚糸文　（第61図　198～200）

198・199は口縁部資料で撚糸が斜位に施され、口唇部に刻みがあるため撚糸＋刻みである。200は魚類の背鰭状に延びると推定される凸帯が張り巡らせ、この凸帯にも撚糸文が施されている。これまでにない凸帯である。

２－Ｂ－（１）　（第61図　201～202）

201は上位に変型撚糸が施文され、胴部最大径附近に横位ミミズばれが５条確認される。撚糸文＋ミミズばれ文。

２－Ｂ－（２）　（第61図　203）

203は、屈曲頂部に押圧による撚糸押型が施される珍しいタイプである。91に見られた連続刻みと同質の施文形態である。

２－Ｃ－（２）　菱形文　（第62図　204）

菱形は（２）型のみ確認された。204は菱形施文後、２条の横位とその間に波状のミミズばれ文が施されている。ミミズばれ施文間はナデ調整が施され、これにより菱形文が一部、山形文にも見える。菱形文＋ミミズばれ文。

２－Ｆ－（１）　雷文　（第62図　205）

205は雷文の（１）型で上部を雷文、下位は縦位ミミズばれ文が施される。雷文＋ミミズばれ文。

２－Ｇ　縄文　（第62図　206～207）

206は縦位ＲＬ施文で口唇部に刺突。縄文＋刺突文。207も縦位ＲＬ施文に３条の隆帯、隆帯上にも縄文施文がされている。縄文＋隆帯施文。

２－Ｇ－（１）　（第62図　208～210）

208は縦位ＲＬ施文に屈曲頂部と上位にＵ字状隆帯を巡らし、これに連続刺突が施されている。縄文＋隆帯。209も縦位ＲＬ施文に屈曲頂部に隆帯。縄文＋隆帯。210は屈曲頂部に凸帯刻み下位に縦位施文。縄文＋凸帯。

２－Ｉ　ミミズばれ文　（第62図　211～215）

隆起突帯微文を主文としているが、ここではミミズばれ文という名称で統一したい。このミミズばれ文のバリエーションは３－Ｉで提示する。

外器面にミミズばれ施文が行われ、内器面に山形211、縄文 212、同心円文 214。213は口唇部に１－Ａ91に見られた山形文押捺。215は外器面・内器面にミミズばれ文が施文され、これも口唇部に直線状の押型が見られる。

２－Ｉ－（２）　（第62図　216～222・第63図　223）

（１）類は確認できず（２）類だけである。胴部上位の頂部までをミミズばれ文、屈曲下部から押型施文の類として 223は口縁部から胴部までの良好な資料でミミズばれ文＋山形文。他に山形文との組み合わせとして 218・219があり 218の下部山形施文は横位である。221・222は撚糸、216は縄文。220は屈曲凸帯に山型施文。217は２－Ｂ－（２）203に見られた棒状施文具による押型文で直線状の痕跡が観

察される。

２－Ｊ　櫛状施文　（第63図　224）

Ｊ類は櫛状の施文具による施文でＫ類沈線文と同質であるが整理上区分した。この櫛状施文のバリエーションは３－Ｊで提示する。１点のみの資料で224は外器面に横位施文、内器面と口唇部に山形文施文。櫛状施文＋山形文。

２－Ｊ－（１）　（第63図　225）

２－Ｊ類は（２）類の確認ができず（１）類１点のみである。225は櫛状施文が上位に斜行、胴部に凸帯が張り巡らせ、２－Ｂ－（２）撚糸 203・２－Ｉミミズばれ 217に見られたような押型の形態である。押型文は直線状の施文である。櫛状施文＋押型文。

２－Ｋ　沈線文＋押型文　（第63図　226～235）

２－Ｋ類は沈線と押型の組み合わせのグループで、沈線のバリエーションはＩ類ミミズばれ文・Ｊ類櫛状施文同様、３の押型文以外の施文の項で述べたい。沈線は直線状が主であるが、235は外器面に左渦巻き状を呈し同心円文様を意識したものか。沈線文の中でも異質である。沈線を外器面に施し、押型である山形文が内器面・口縁部・口唇部に施文されている。内器面ではミミズばれ施文の 234以外は横位山形文施文である。口唇部では 226・227・228・233・234・235に横位山形文施文、229・230・231は刻みが施されている。227・228・231は沈線地文に沈線施文の外器面を持ち３－Ｌの類であるが、押型を併用しているためこの類に区分した。

２－Ｋ－（１）　（第64図　236～239）

236・237・239はそれぞれは上位沈線で下位山形の施文で 236・237は突帯を持ち、237の突帯は連続刺突が施される。238は上位に沈線横位、凸帯に２－Ｂ－（２）撚糸 203に見られた山形文が押捺されている。

２－Ｋ－（２）　（第64図　240）

240は鋭利な施文具により横沈線を施した後、半竹状の施文具により縦位沈線を施す。地文は細沈線である。胴部凸帯に山形文施文。

２－Ｌ　沈線文＋地文（押型）　（第64図　241～247）

外器面に押型の地文施文後、沈線施文を主とするグループである主文＋地文という観点では２－Ｋ沈線＋押型の 227・228・231と同質であるが押型地文であるため、ここに整理上区分した。撚糸地文の245以外は山型文が地文である。内器面に押型を施文された 241・243があり、これらは外器面と同一施文具によるものであろう。口唇部では 241に山形施文、242・243・244・245・246に刻みが施される。247は口唇部を欠いている口縁資料であるが山形地文に上位ミミズばれ文、下位に沈線文を施した組み合わせである。

２－Ｌ－（２）　（第64図　248～252）

頂部より上位は押型地文に沈線主文であるが、下位は押型のみの施文である。248・251は施文形態が胴部屈曲まで理解でき、資料として良好で、248は山形文をベースに菱形文施文。251はピッチ幅の広い山形文を地文とし同心円状の沈線である。249は山型、250・252は撚糸地文である。またこの類は突帯を持つタイプ 248・249・250・251がある。

３　その他（押型文以外）の施文

３のその他の施文は押型文を使用しない施文形態で、ミミズばれ・櫛状施文・沈線を主とする。

３－Ｉ　ミミズばれ文　（第65図　253～262）

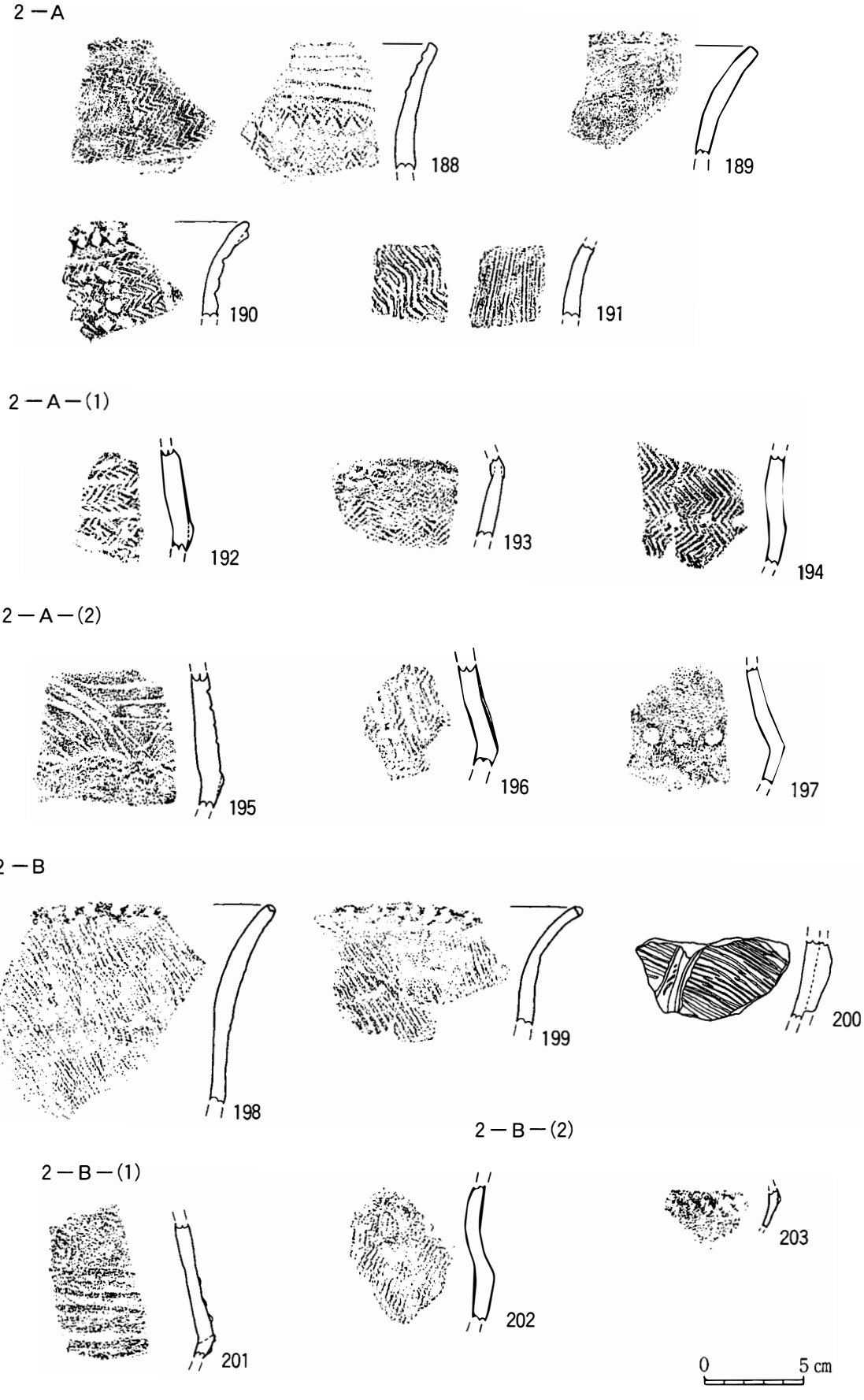
ミミズばれ文は２－Ｉで触れたように微隆起文である。口縁部の外器面の文様形態は横位 253・254、縦位・斜行 256・260・261・262、旭日旗状の 259等をベースにし、またこれらの組み合わせタイプ257が見られる。内器面施文は外器面と同一施文の形状を持つ傾向が見られるが、259は横位、261は横位・斜行と異なる形態も存在する。

３－Ｉ－（１）　（第65図　263～264）

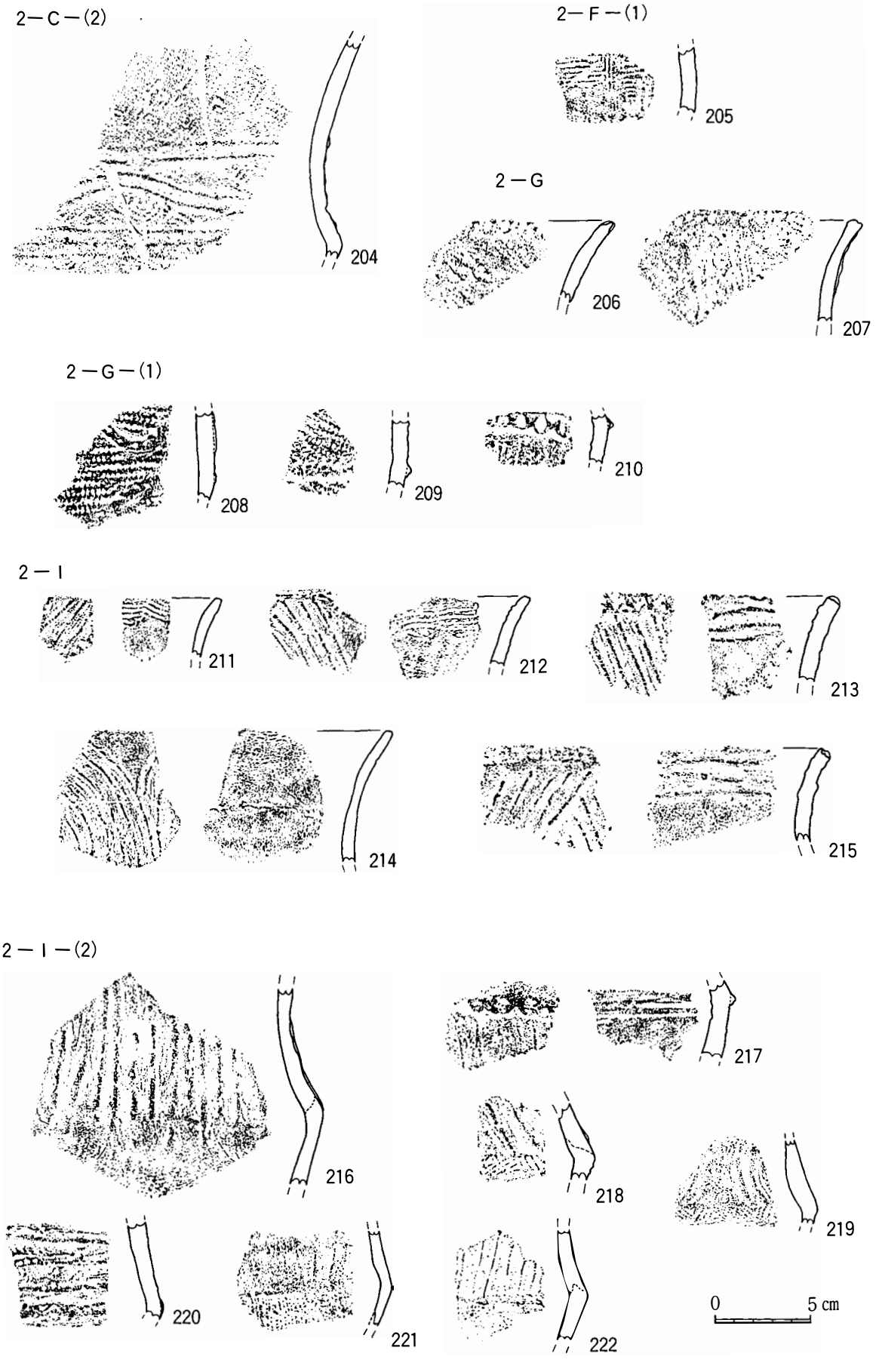
263は縦位、264は山形状施文で共に胴部張り出し下位まで施文は連続する。

３－Ｉ－（２）　（第65図　265～272）

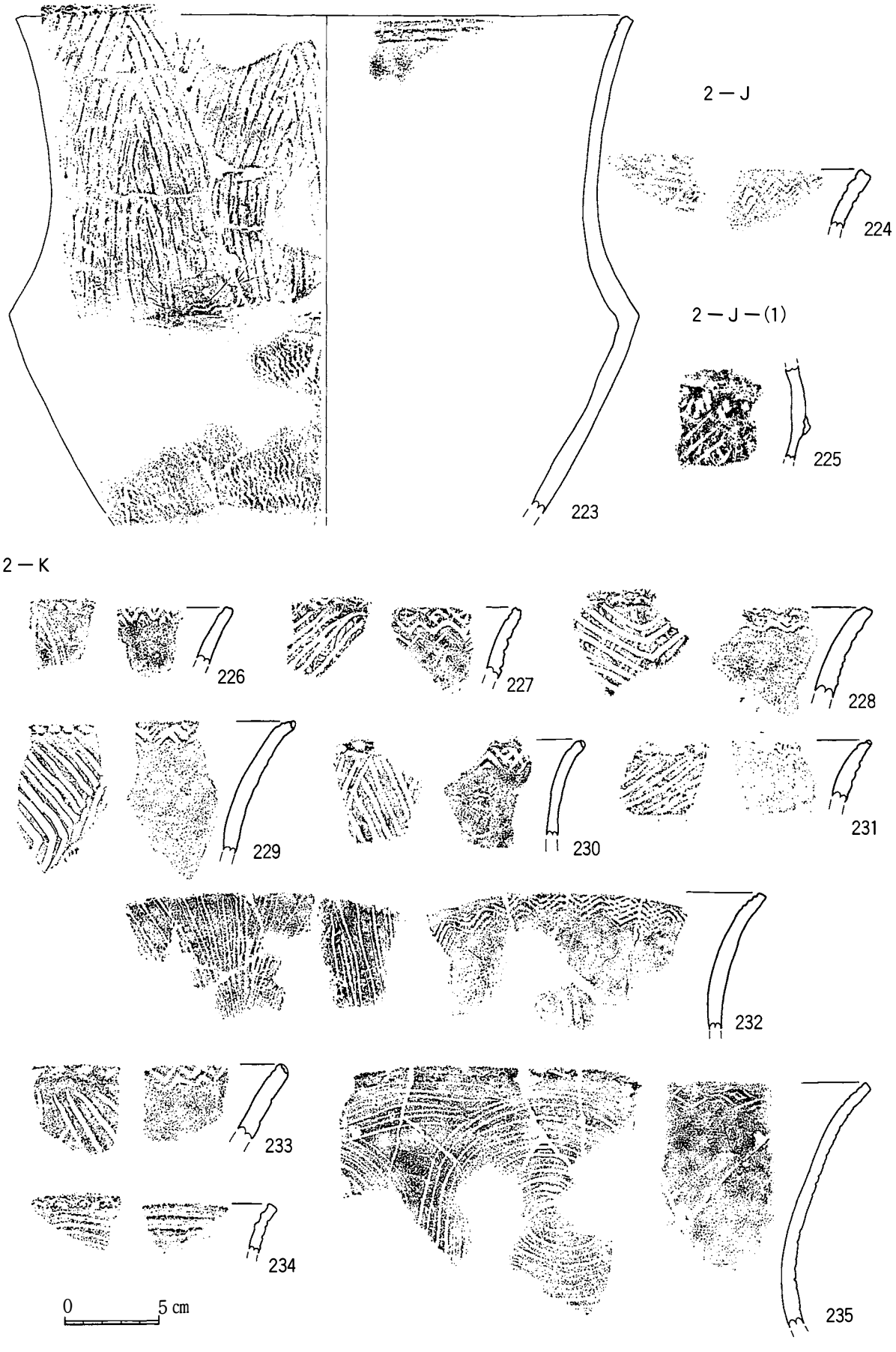
265・266・267縦 位、268・269横 位、270・271斜行、272は波状⇨斜行の施文である。ミミズばれ屈曲の場合、その施文形態として 267は縦位施文で下部はナデ調整であるが、縦位または斜位の場合、施



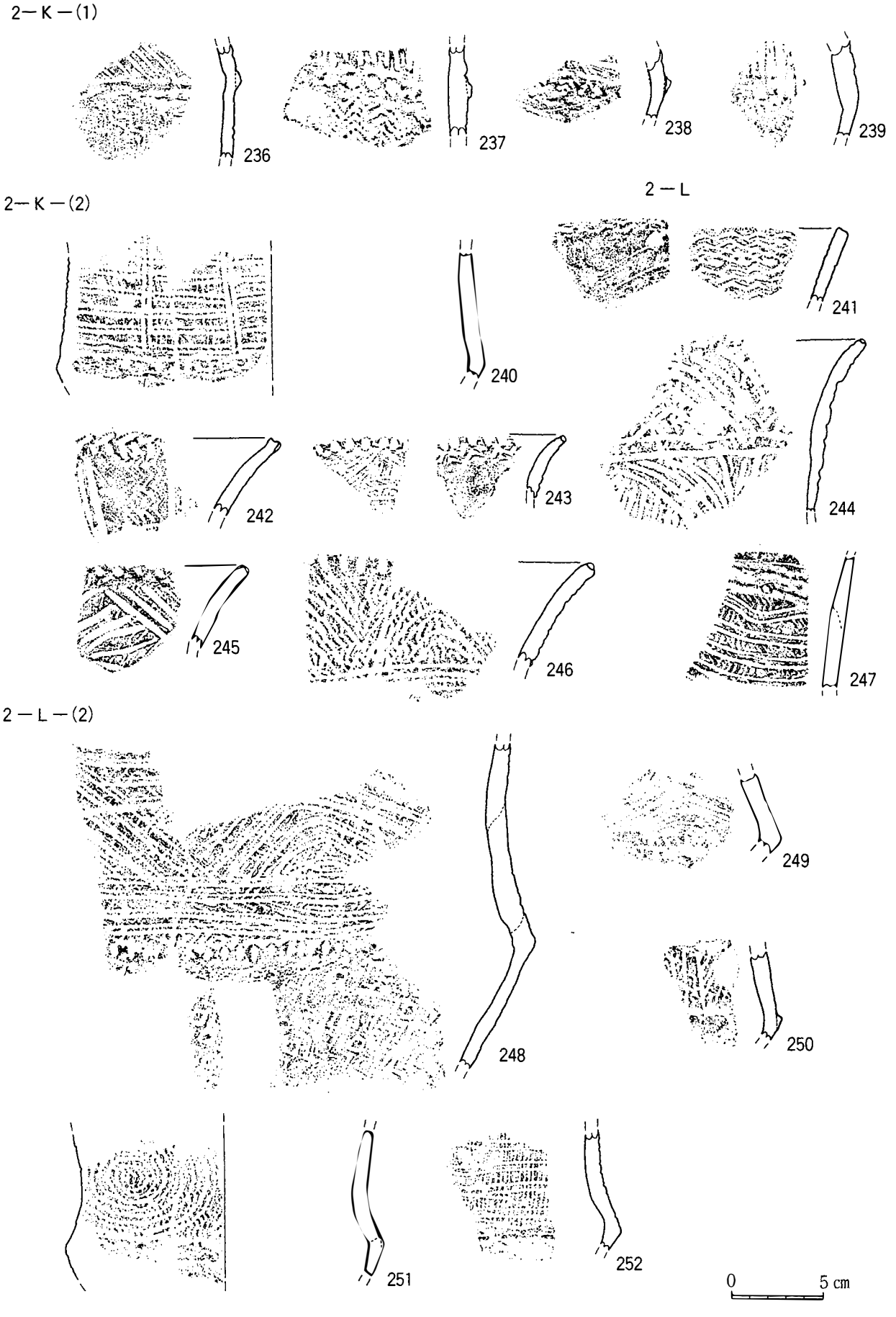
第61図　第３類土器実測図（７）



第62図　第３類土器実測図（８）



第63図　第３類土器実測図（９）



第64図　第３類土器実測図（10）

文は下部まで連続し、横位は屈強頂部より下位はナデ調整による無文という傾向が見られる。

３－Ｊ　櫛状施文　（第66図　273～279）

櫛状施文は本来は沈線の範疇であるが施文具という観点からここに区分した。縦位・斜行を基調とするが 278のように横位波状、275の交互斜行のような施文も存在し、内器面は条痕で外器面とは明らかに異なる施文具使用も観察される。276は風化が激しく外器面と内器面との同一施文具使用の判定は困難であるが施文形態は波状よりも山形を意識した感があり、273の外器面も同様である。279は口唇部を欠く資料であるが、同心楕円文を相互に描く。

３－Ｊ－（１）（第66図　280～281）

280は上位・下位を縦位の施文でその後、凸帯を貼付け連続刺突を施す。281は斜行施文で波状を呈し、これにより菱形状の空間を作り出している。280・281、それぞれは下位まで連続施文である。

３－Ｊ－（２）（第66図　282～285）

これも縦位を基調とするが 285波状、283は縦位ではあるが不定型山形を描いているように見える。前述の 276・273のように山形を意識したものか。屈曲下部までの沈線は施されない。

３－Ｋ　沈線文　（第66図　286～291）

３－Ｋは太めの沈線を施す類でもある。施文具先端の丸い棒状工具で山形状 289・290、波状と平行直線の組み合わせ 287・288など様々なパターンがある。口唇部には連続刺突が見られ、290の口唇部は押引状である。287は先割れか二又状施文具で口唇部の外器・内器面の両面に連続刺突が見られる。

３－Ｋ－（１）　（第67図　292～293）

293は浅い沈線を斜行に下位まで施され、292は屈曲頂部上位に連続沈線が斜行施文に、下位はナデ調整、張り出し部に凸帯刻み。

３－Ｋ－（２）　（第67図　294～308）

沈線施文であるが屈曲頂部より下位に無文は 294・298・302・301で、303は屈曲頂部下位はナデ調整。299は菱形状に沈線を施した後、３条と屈曲頂部の上位に１条の横位の平行沈線を施している。297・298は沈線施文後屈曲頂部上位に連点文。301・302は貝殻背面による条痕で整理上、沈線として区分した。304・305・306・307は鋭利な施文具による沈線で細沈線と呼ばれるものである。307は屈曲上位と下位の施文具が異なり、上位は山形状で細沈線、下位はやや太めの網目状を呈する。306は波状に沈線が深く刻まれている。

３－Ｌ　沈線文＋地文　（第67図　309）

２－Ｌ類は地文に押型を施文するが、３－Ｌ類は地文に沈線を使用していることで区画した。309は沈線を縦位・横位に不規則に施し後、斜行沈線を施す。口唇部と地文に山形押型の施文形態のような施文が見られるが沈線として捉えた。

３－Ｌ－（２）（第67図　310～311）

（１）型が確認できず（２）型だけであるが、310は地文沈線を斜行に規則的に施し、鋭利な施文具で深い沈線が横位に行われている。311は斜行の浅い沈線地文を基調として施文し、横位・斜行と施文されている。屈曲部には凸帯を巡らし押し引きが施されている。

３－Ｍ　刺突文　（第67図　312）

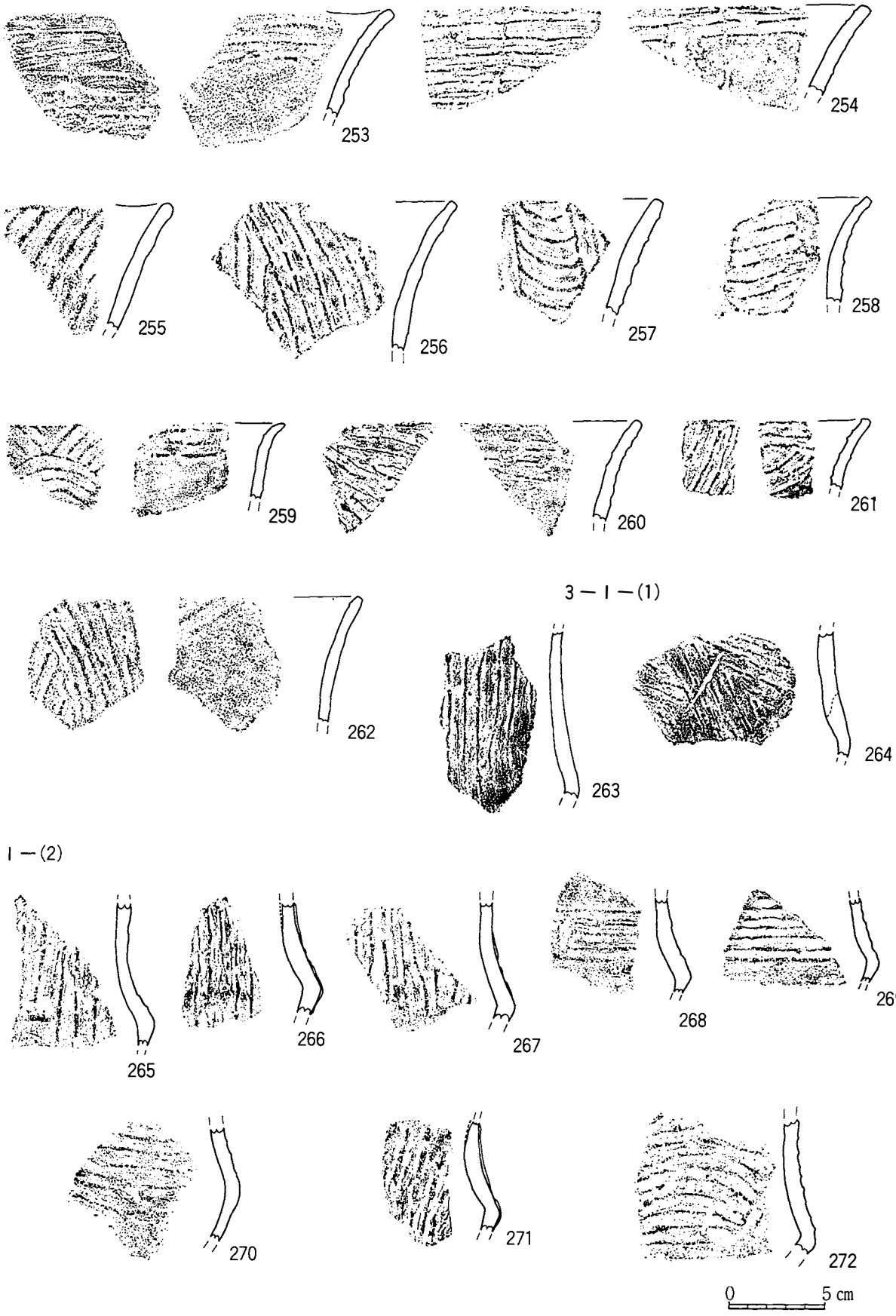
312は外反する口縁部で胴部資料が確認きなかったが、口縁部の持つ特徴から第３類に属する可能性が高く、ここにＭ 刺突文として提示した。口縁部資料で直線状に外反する。外器面に先端が細い施文具で連続刺突を施す。刺突痕から右⇨左に作業を行い。内器面は上⇨下となる。口唇部にも若干に刺突痕が確認される。

第３類底部　（第68図　313～319）

313～319は第３類底部資料である。底部の出土例は多くを占めたが、第３類底部としての認識として胴部施文の属性により判別をした。

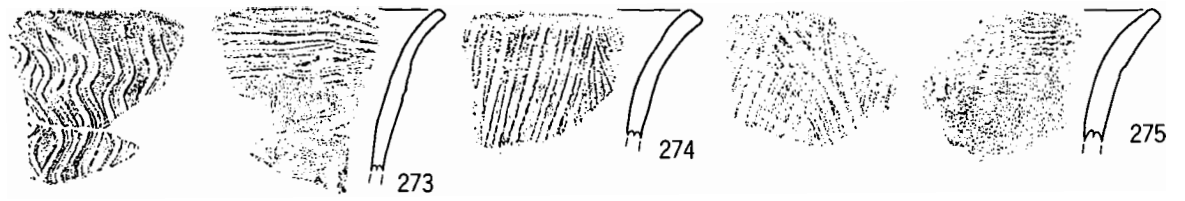
底部形態は平底・上げ底・逆Ｕ字形底と大別できる。315・318・319は平底資料で 315は山形斜行、318は間延びしているが山形文の範疇として捉えた押型文で１－Ａの 85に類似する。319は風化が激しいが僅かに撚糸が観察される。313・314・317は上

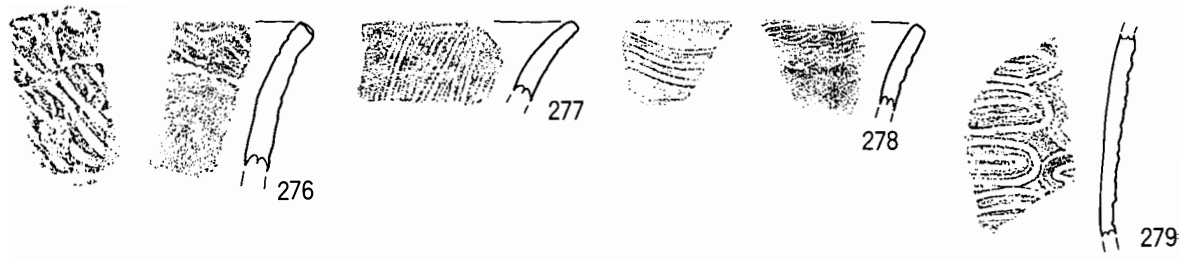
3－1



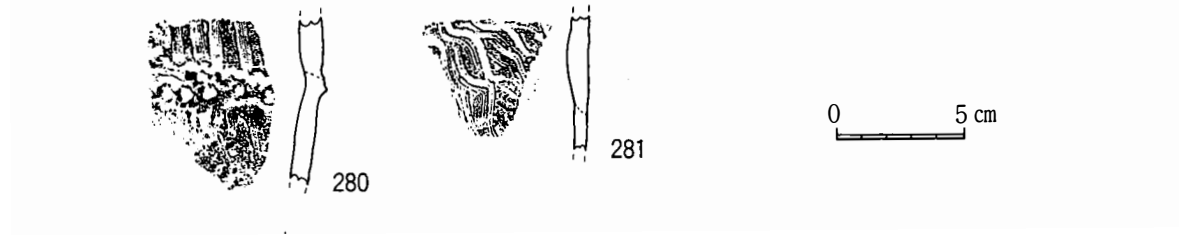
第65図　第3類土器実測図（11）

3－J

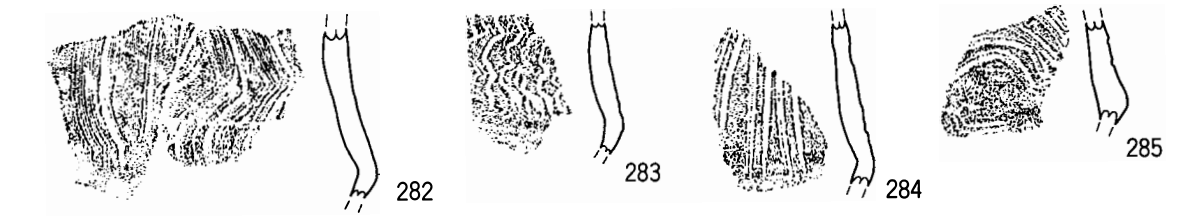




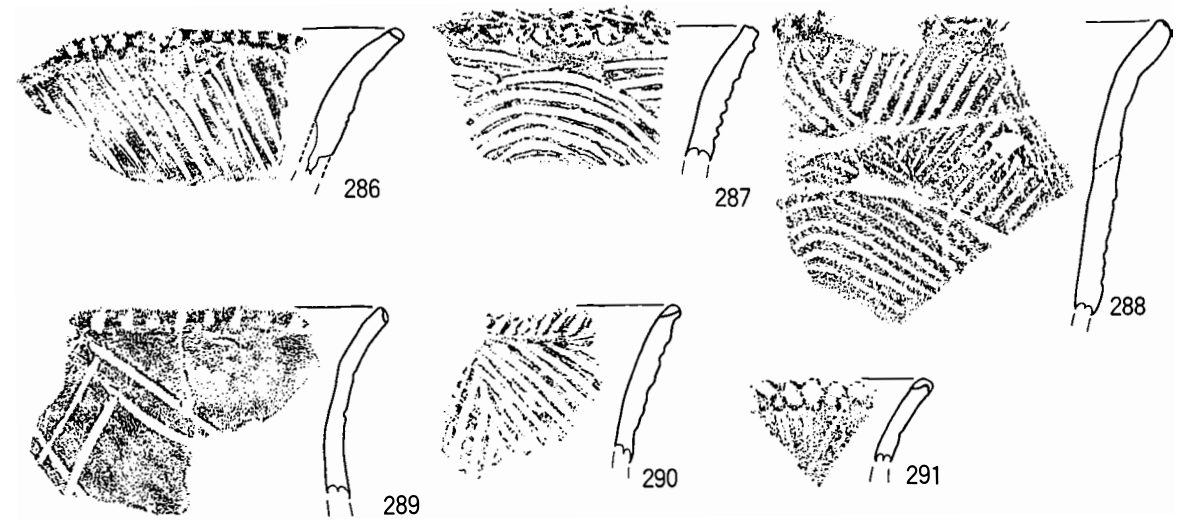
3－J－(1)



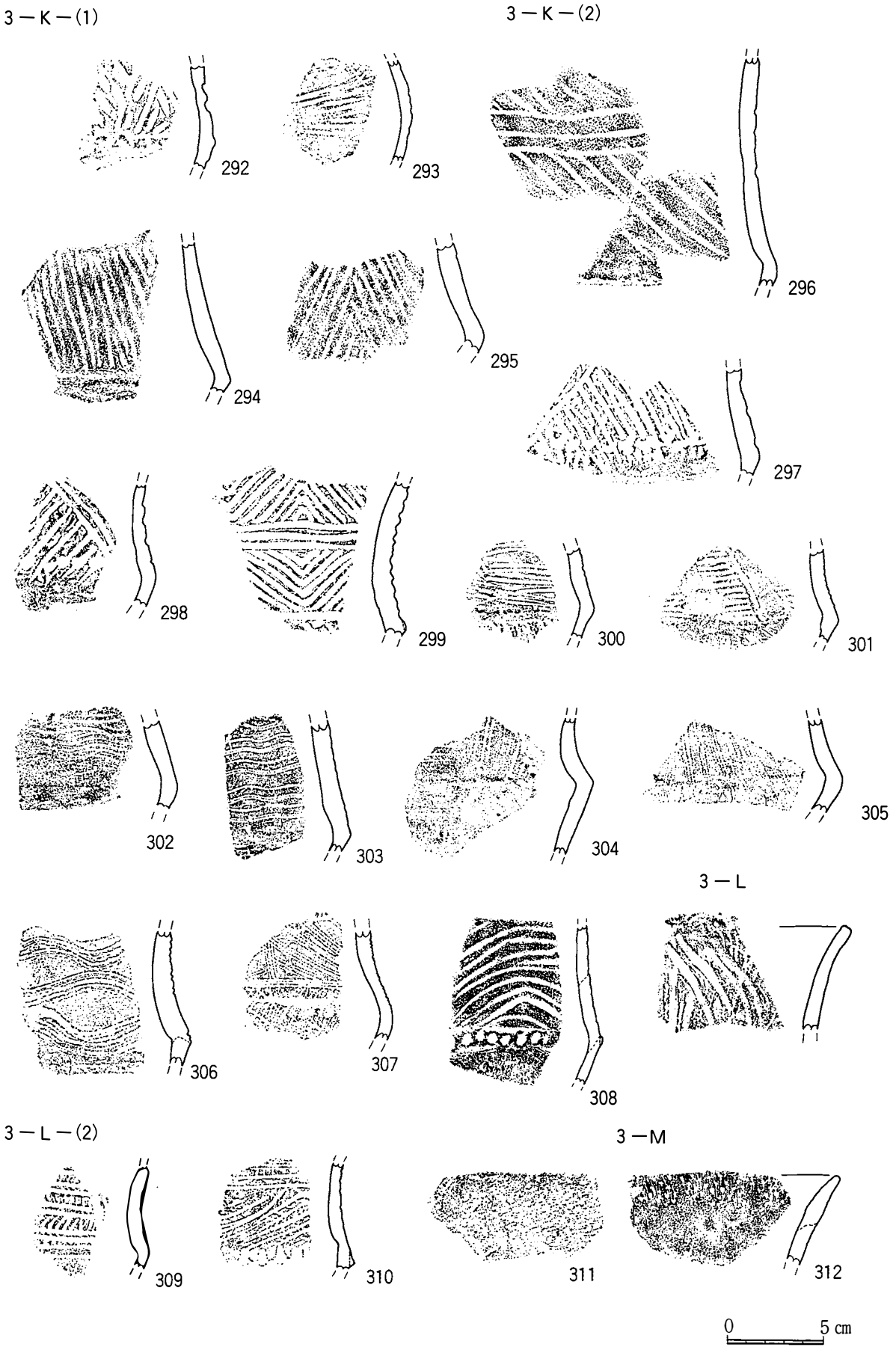
3－J－(2)



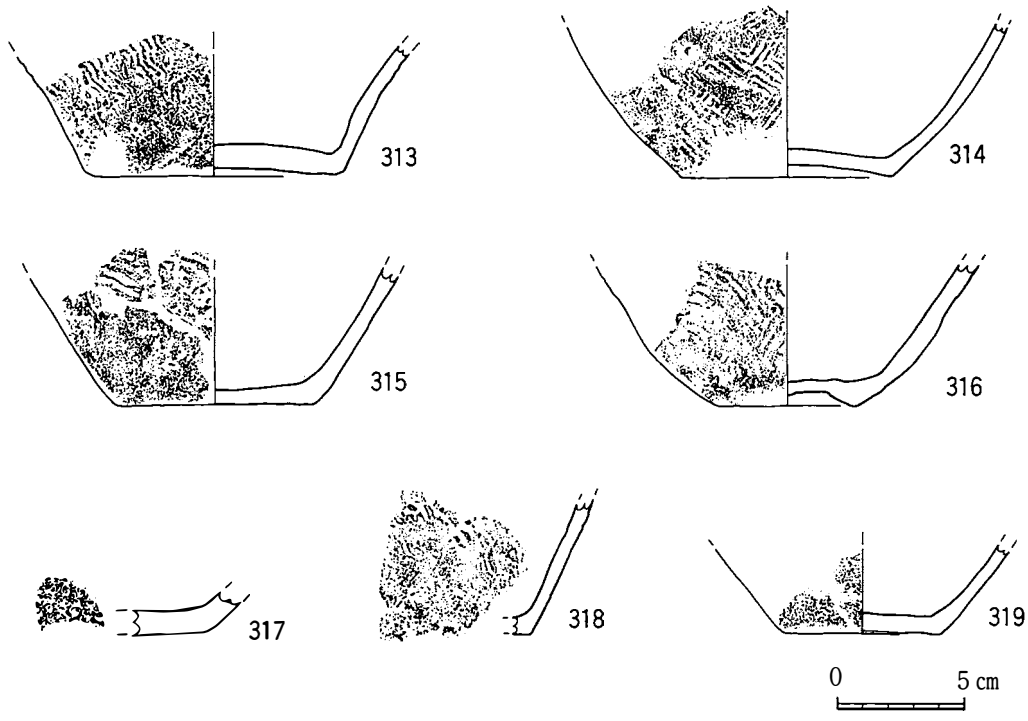
3－K



第66図　第３類土器実測図（12）



第67図　第３類土器実測図（13）



第68図　第３類土器実測図（14）

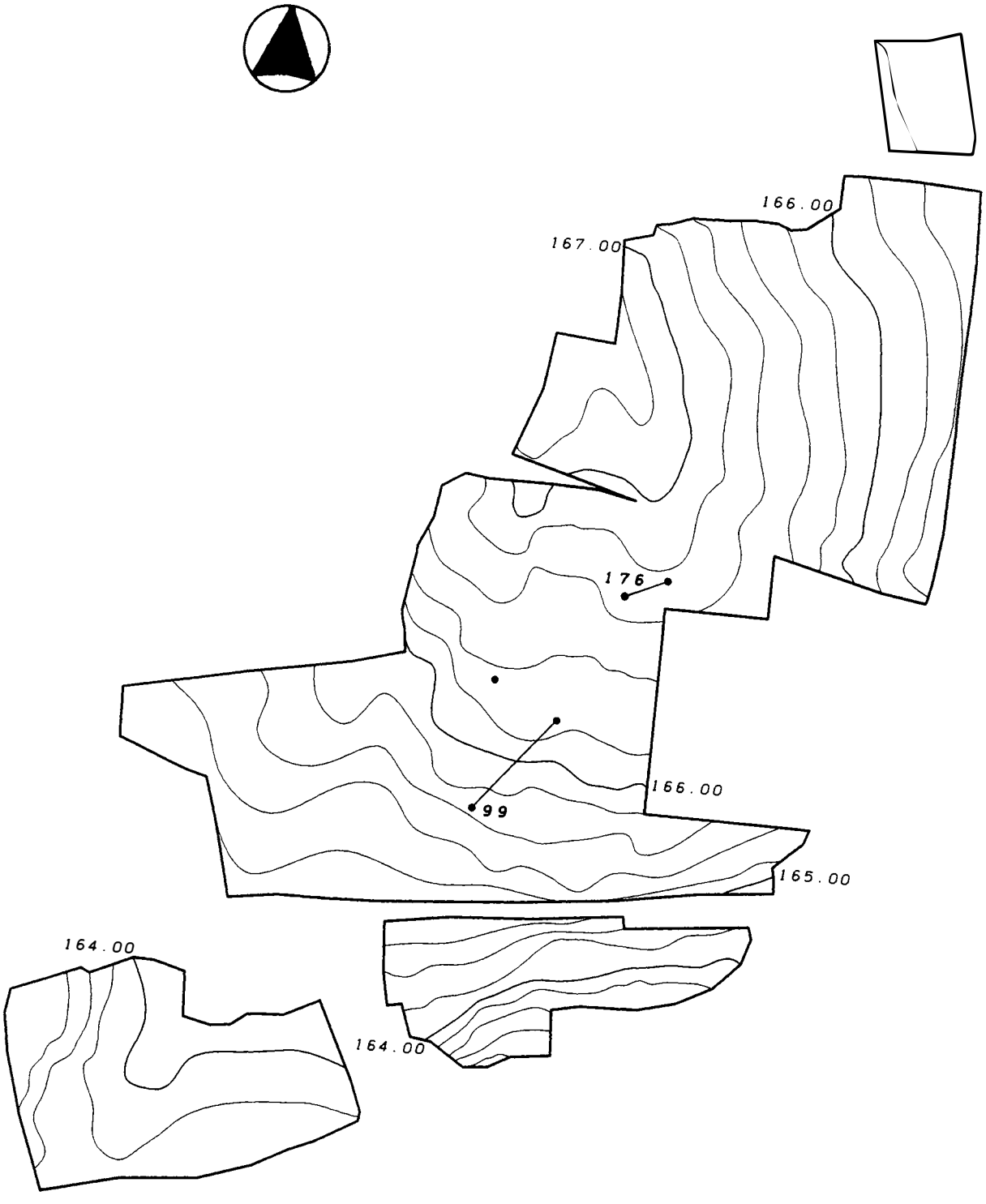
げ底資料。**313**は底部円盤状で上げ底を形成するが、**316**は底部観察から底部基礎となる円盤に粘土帯を貼付け高台状に成し、上げ底を形成する工程を経る。従って底部は逆Ｕ字形を呈する。山形文の同類。**314**は **313**より上げ底状を形成した菱形文である。**316**は山形斜行、**317**は格子状が確認される。

第３類土器分布については文様体の状態から１（押型文）・２（押型文＋押型文以外の施文）・３（押型文以外の施文）に大別したことから、これらの特長を持つ各胴部の（１）・（２）を分布図として提示した。第69図は１（押型文）の分布状況であるが、資料に恵まれず、明確な傾向が出にくいが遺跡中央に分布が見られる。第70図は２（押型文＋押型文以外の施文）で中央部にやや密集傾向と北東側に分布が見られる。第71図においては３（押型文以外の施文）の分布状態で、北東側の分布がやや密集になっている。

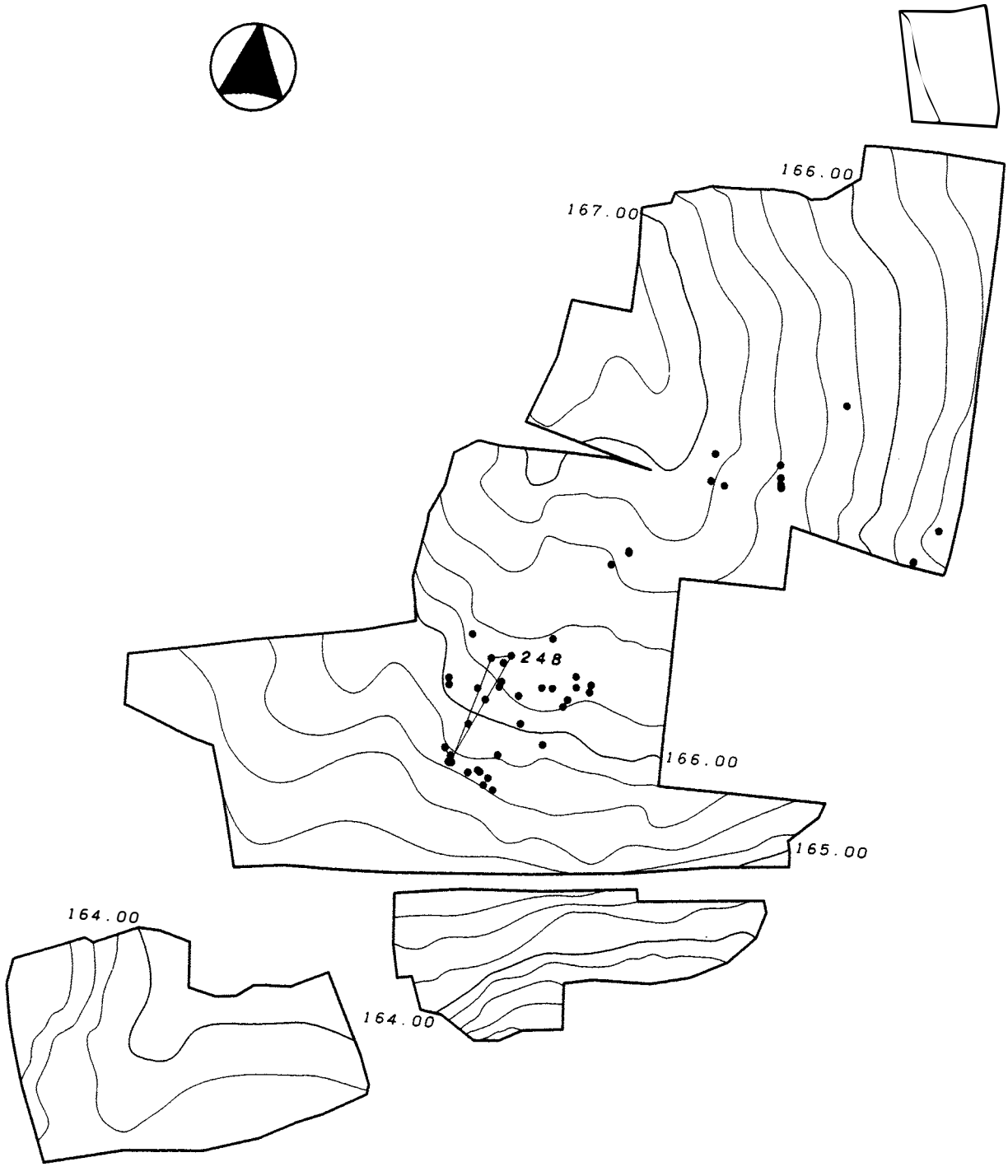
第４類土器　（第72図～73図　**320～331**）

第４類は口径・高さ15cm程の土器群でその様相は第３類土器の性格を帯びることから第３類の中で包括するものでもあるが、あえてここに一形式として設定した。またこれより小型の存在が確認されているが、これらはミニチュアとして第10類で紹介する。第３類で見られた胴部屈曲、（１）・（２）型が第４類にも存在した。

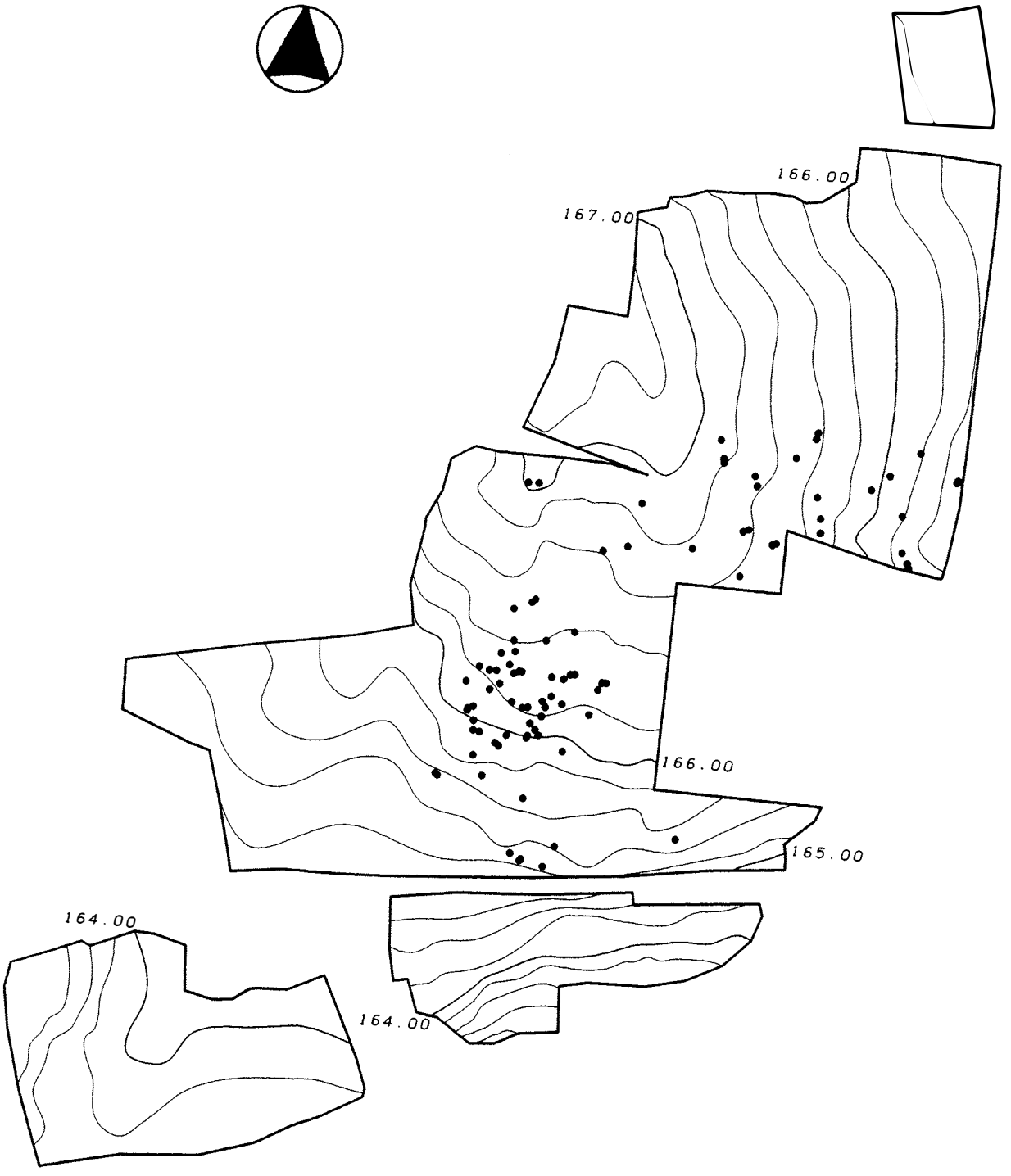
320・321は口縁部から胴部の資料で山形縦位、胴部はゆるやかな（１）型である。**322・323・324**は経部から胴部資料の山形文であるが **324**は斜行施文で



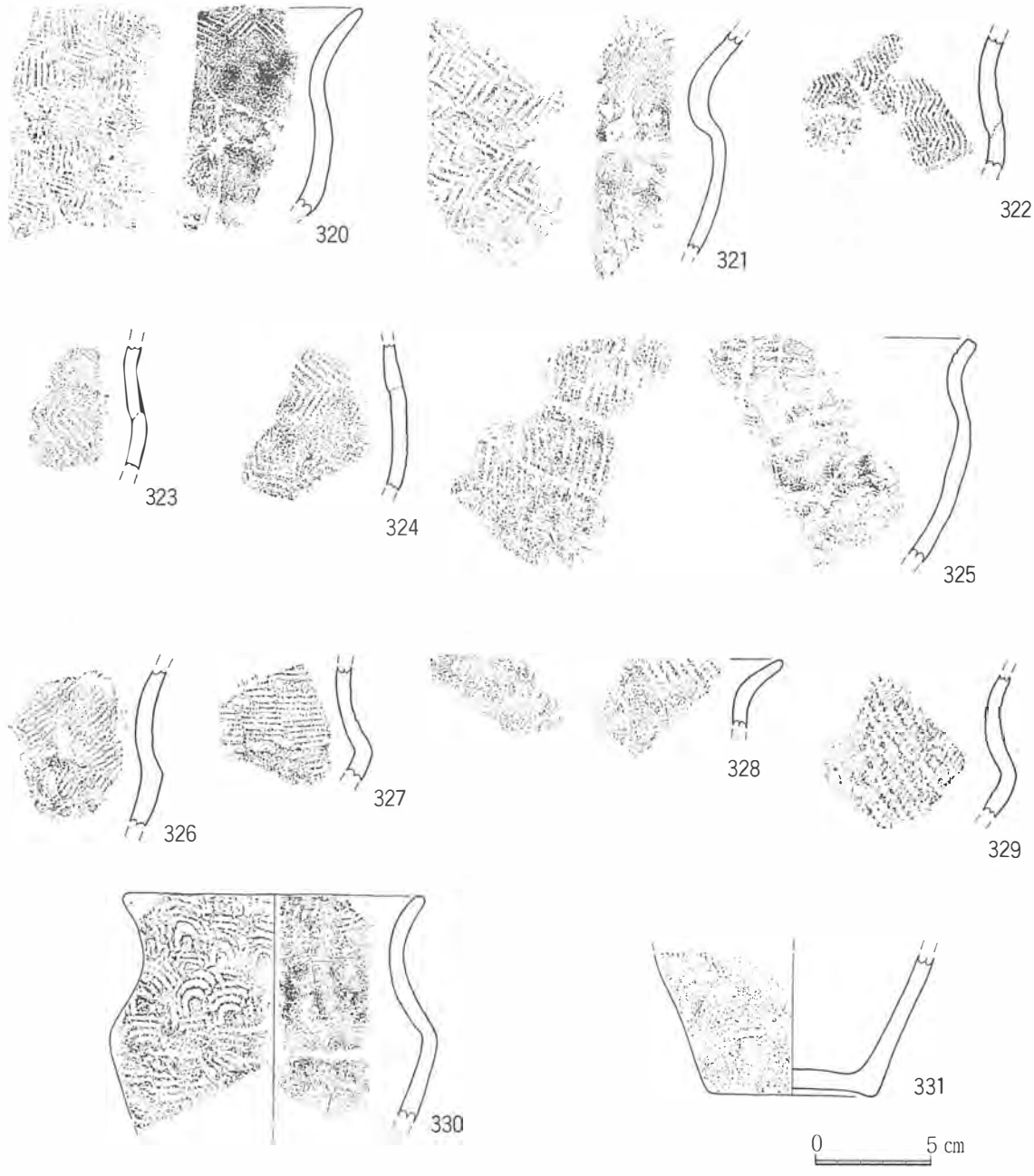
第69図　第3類土器分布図（1）



第70図　第３類土器分布図（２）



第71図　第3類土器分布図（3）



第72図　第４類土器実測図

ある。325・326は撚糸縦位施文でそれぞれ（１）型である。325は口唇部を平坦に作り出している口縁部から胴部資料であるが、胴部に対し經部の割合が極端に小さい。328・329は縄文縦位施文である。329は強い屈曲の（２）型である。330は（２）型の胴部を持ち、口縁部から屈曲部までの上位は第３類にもなかった半円状の押型文で、下位は上位の施文が流れたような押型文を施す。327は条痕文横位で（２）型胴部資料で、この資料以外は押型文である。331は底部資料で上げ底を呈する山形施文である。

第５類土器　（第74図　332～353）

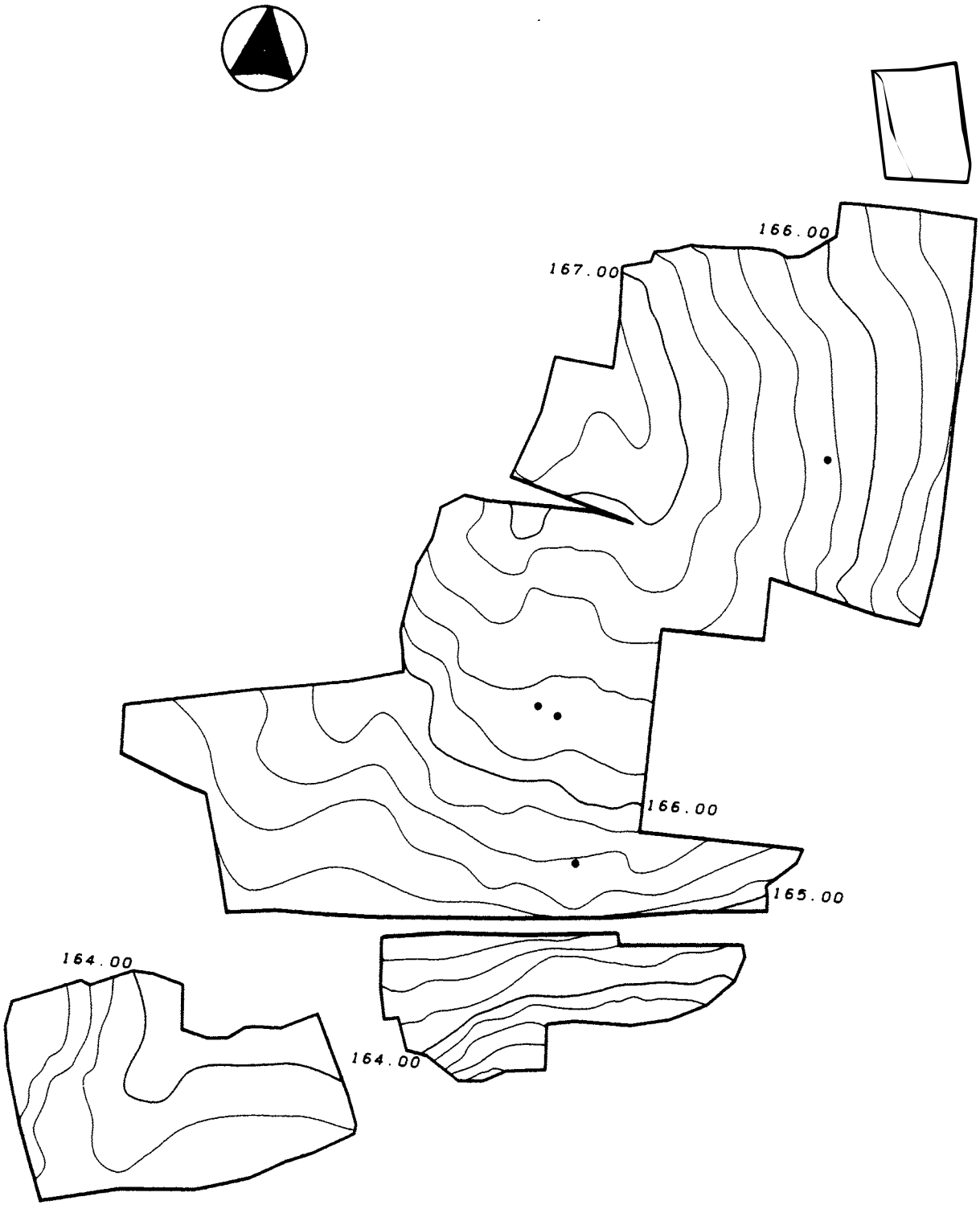
第５類土器は完形資料に恵まれなかったが、口縁部はラッパ状に外反し、やや膨らむ胴部を持つ。第３類土器（１）型に器形が酷似しているが、口縁部に突帯を持ち、沈線を主体とした文様体であるため５類土器とし区画した。その文様から

Ａ類　　押型を共伴

Ｂ類　　沈線主体の土器群で、さらに

Ｂ－１類　突帯に連続刻み

Ｂ－２類　突帯に棒状施文具による連続文



第73図　第4類土器分布図

と大別した。

A類　(332～336)

332・333・334・335・336は口縁部に突帯が貼り巡らされているが、押型文を共伴するグループで、**332・333**は3条の突帯に棒状施文具による連続に施文、胴部には撚糸を地文とし沈線が斜行に施されている。胎土・施文形態が酷似しているため同一個体と思われる。**336**は口唇部と口縁部の1条の突帯に連続刻みが施されているが胴部には山形文が縦位に施文。**334**は内器面に突帯を貼り巡らし山形文横位。**335**は口唇部に山形文横位がそれぞれ施文されている。

B－1類　(337～347)

突帯に連続刻みを施す **337・338**は3条の突帯に刻みと胴部に沈線、口唇部に刻みが施されている。また **338**の胴部には縦位の突帯が見られる。この2点は同一個体とも考えられが口縁部の開きが若干異なるため別個体として提示した。**341**は同じく3条の突帯に刻みと胴部に沈線、口唇部に刻みを持つが、胴部上面には沈線により区画された線に連続沈線を施している。**340**は残存度からでは3条の突帯に刻みと口唇部に刻みが確認され、これまでにはない精製で薄手のものである。**347**は2条の突帯に刻みと内器面にも突帯刻みが観察される。口唇部から2条目の突帯より半円条に突帯が確認される。**338**と同様に胴部に突帯を貼り巡らす類である。風化が激しく胴部にわずかではあるが沈線が観察される。

B－2類　(348～353)

B－1類が突帯に刻み系の施文を施すのに対しB－2類は突帯に棒状施文具による押捺の連続文を施す。

348は残存18cm程でこれにより胴部形態を知ることができる資料である。5条の突帯を張り巡らし胴部に斜行・横位沈線を施す。突帯には二又の施文具による連続刺突が施されている。**351**は **348・349**と同様、二又施文具による施文であるが **348・349**のスタンプ径が9㎜に対し7㎜程であり同一種施文具ではあるが小型の施文を施す。**344・352・353**は棒状施文具が連続施文され、そのスタンプは円形及び楕円形を呈する。**353**には補修孔が見られる。**342・343**は斜方行からの施文形態でこれにより **342・343**は径6㎜の施文具を使用している。**345**はやや粗雑な形成の3条の突帯が残存、口唇部から1・2条は刻み、3条目は斜行の押捺施文でありB－1類の併用でもあるが整理上ここに分類した。同一施文具を使用し、施文形態に変化を加える類例である。

第75図の分布図からでは遺跡中央部と北東側に若干の分布を中心とした分布が見られる。

第76図　第3・5類土器変遷概念図について

第3・5類土器にはいくつかの類似点が見られ、それらを図化したのが第76図で、第3・5類土器の変遷について試みた概念図である。表記にあたっては卵型楕円は第3類、レンズ状楕円は第5類を、センターラインは（1）・（2）型の形式分別と共に時間軸を表した。

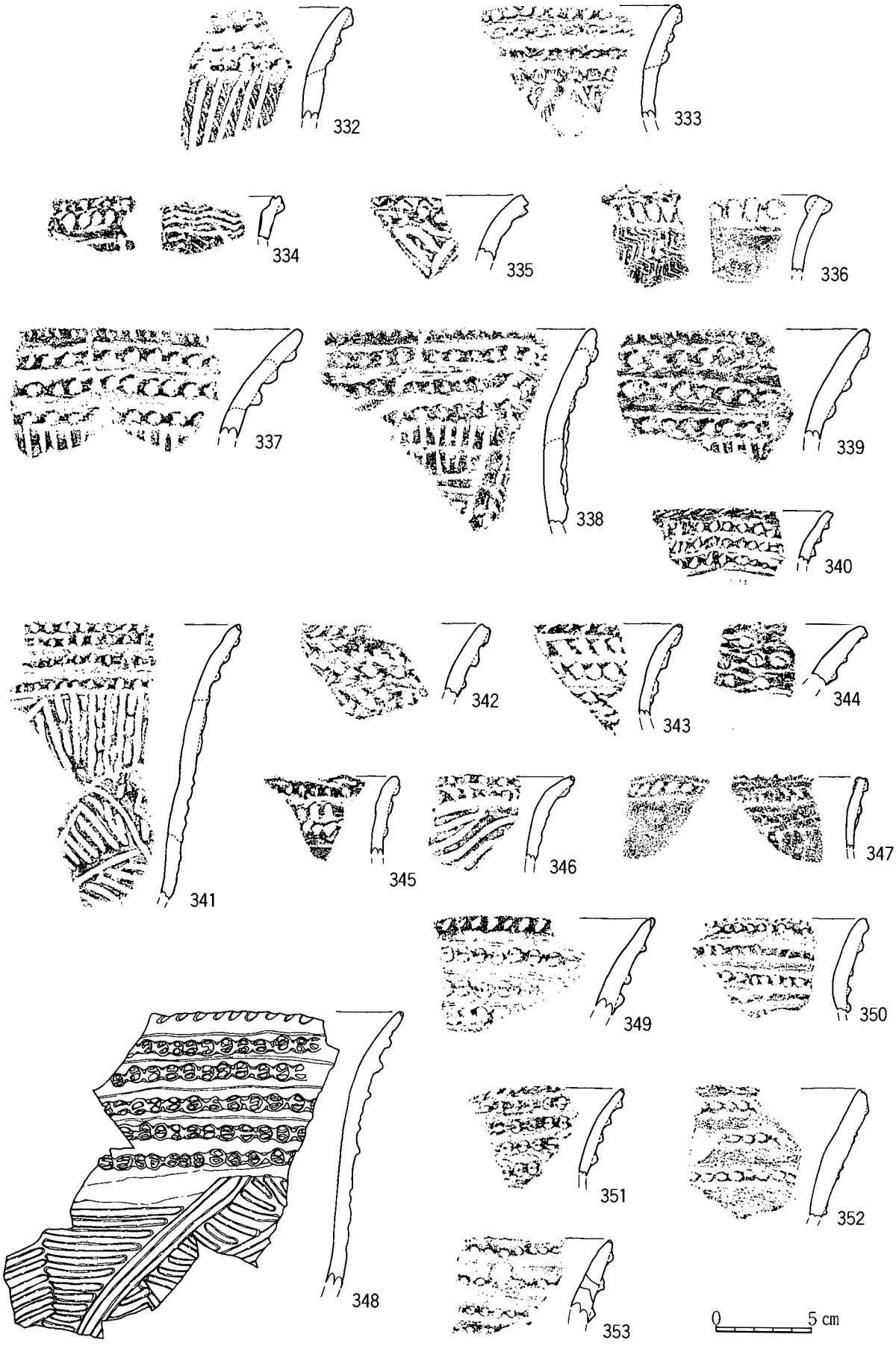
まず第3類の施文形態が1（押型文）・2（押型文＋押型文以外）・3（押型文以外）に分類できるが、2（押型文＋押型文以外）は1（押型文）と3（押型文以外）の双方の性格を持つため、1（押型文）と3（押型文以外）の中間に位置する。

第5類のA類では押型文を共伴するがB類では沈線文を主体とする。これは第3類土器施文形態と類似し、A類は2（押型文＋押型文以外）・B類は3（押型文以外）への対応が想定されることと、やや膨らむ胴部を持つため（1）型に仮設し、3類・5類の関係をも図化した。

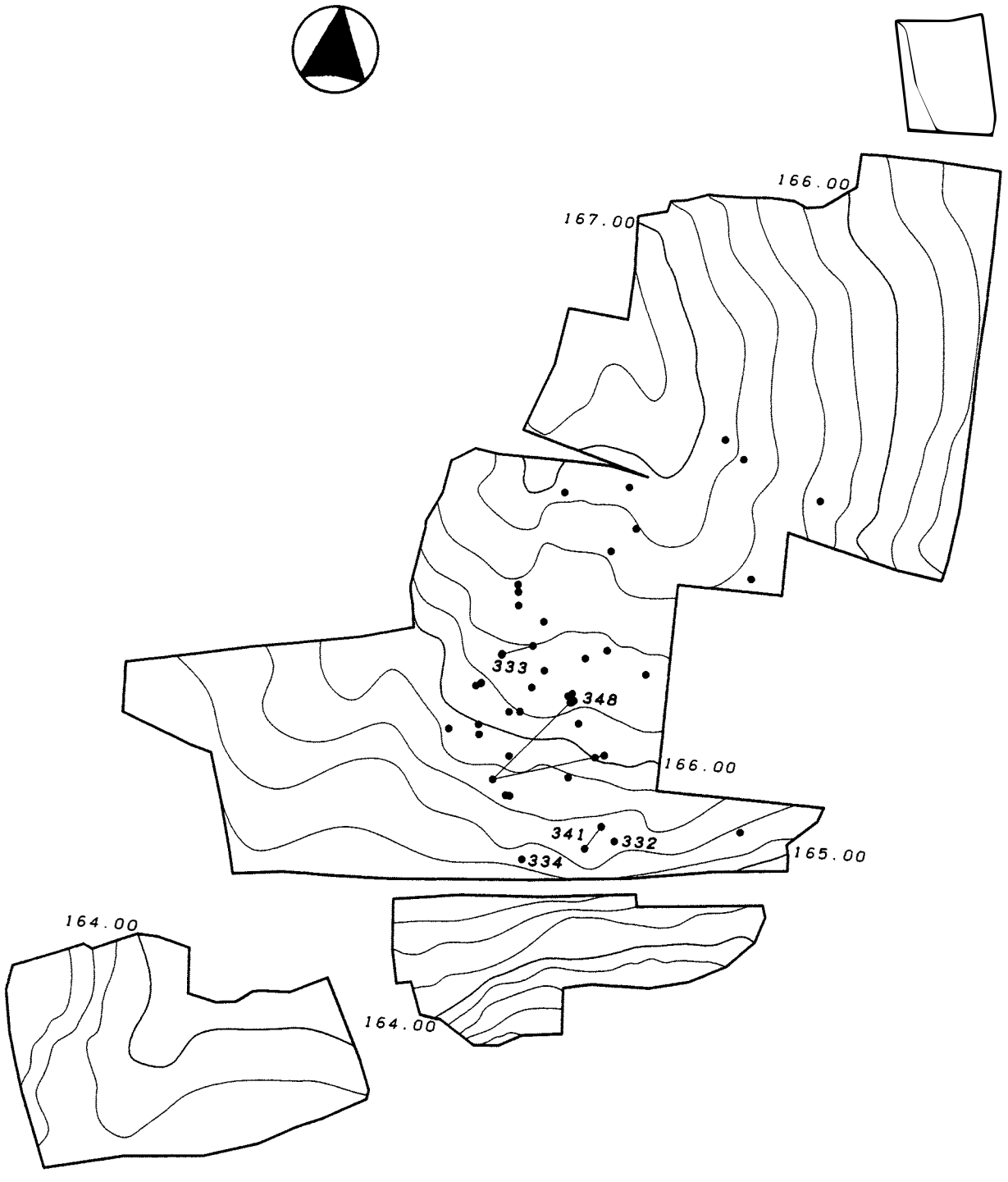
（押型文）のみ施文から始まる第3類は、第2期である（押型文＋押型文以外）に第5類のA類が発生する。次に第3類は（押型文以外）施文で最終期であるが、第5類のB類がこの時期に該当しながら、継続していくと思われ、従って第3類土器のみならず第3・5類土器に併用関係が生じる。第3類(1)・(2)型の平行関係については不明であるが、飽くまで概念図として本遺跡出土土器から想定した。

第6類土器　(第77図　**354～367**)

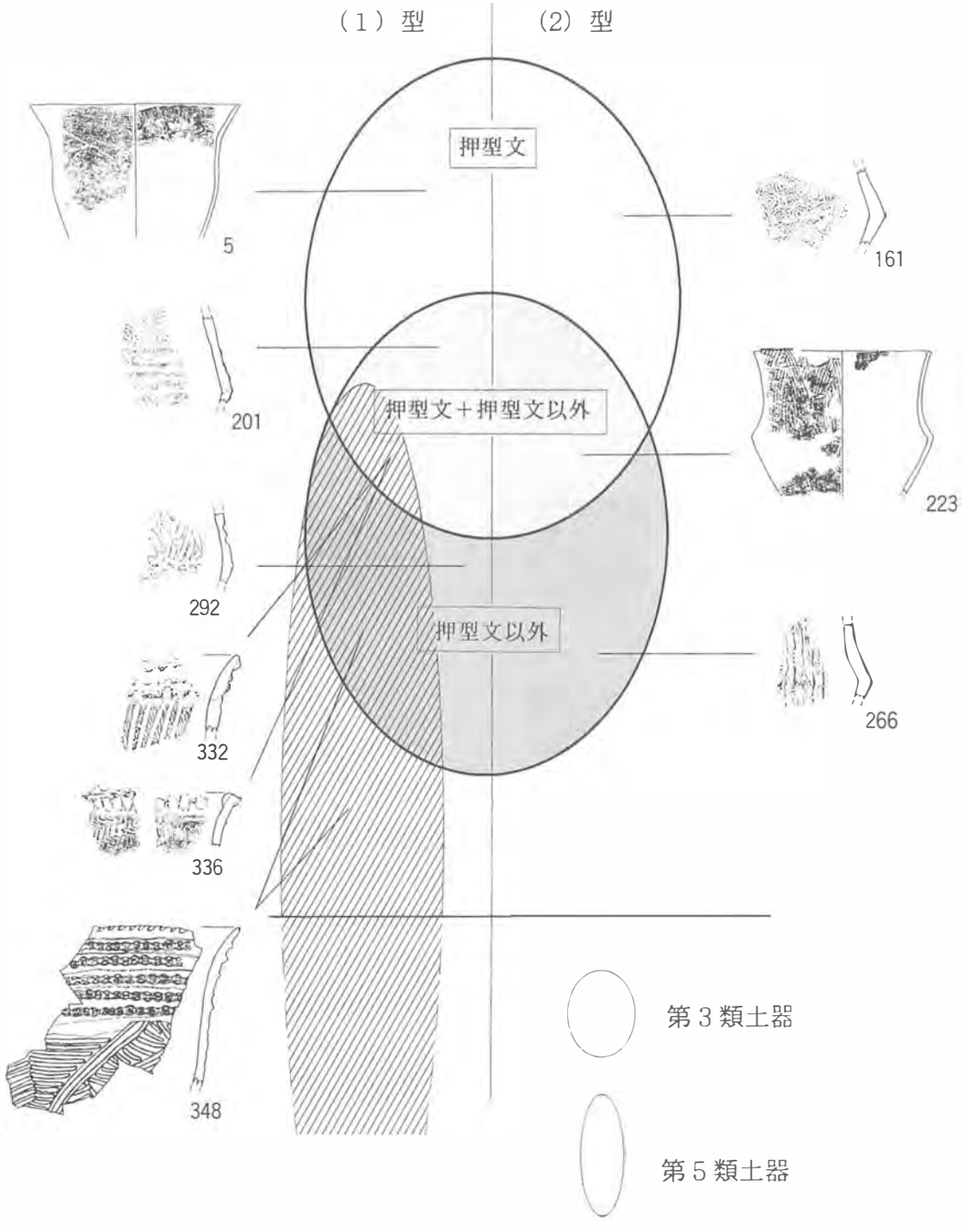
この第6類は口縁部がキャリパー状の開く二重口縁を持つ土器群である。これも完形資料に恵まれなかったので胴部及び底部形態は不明である。以下説明を加える。



第74図　第5類土器実測図

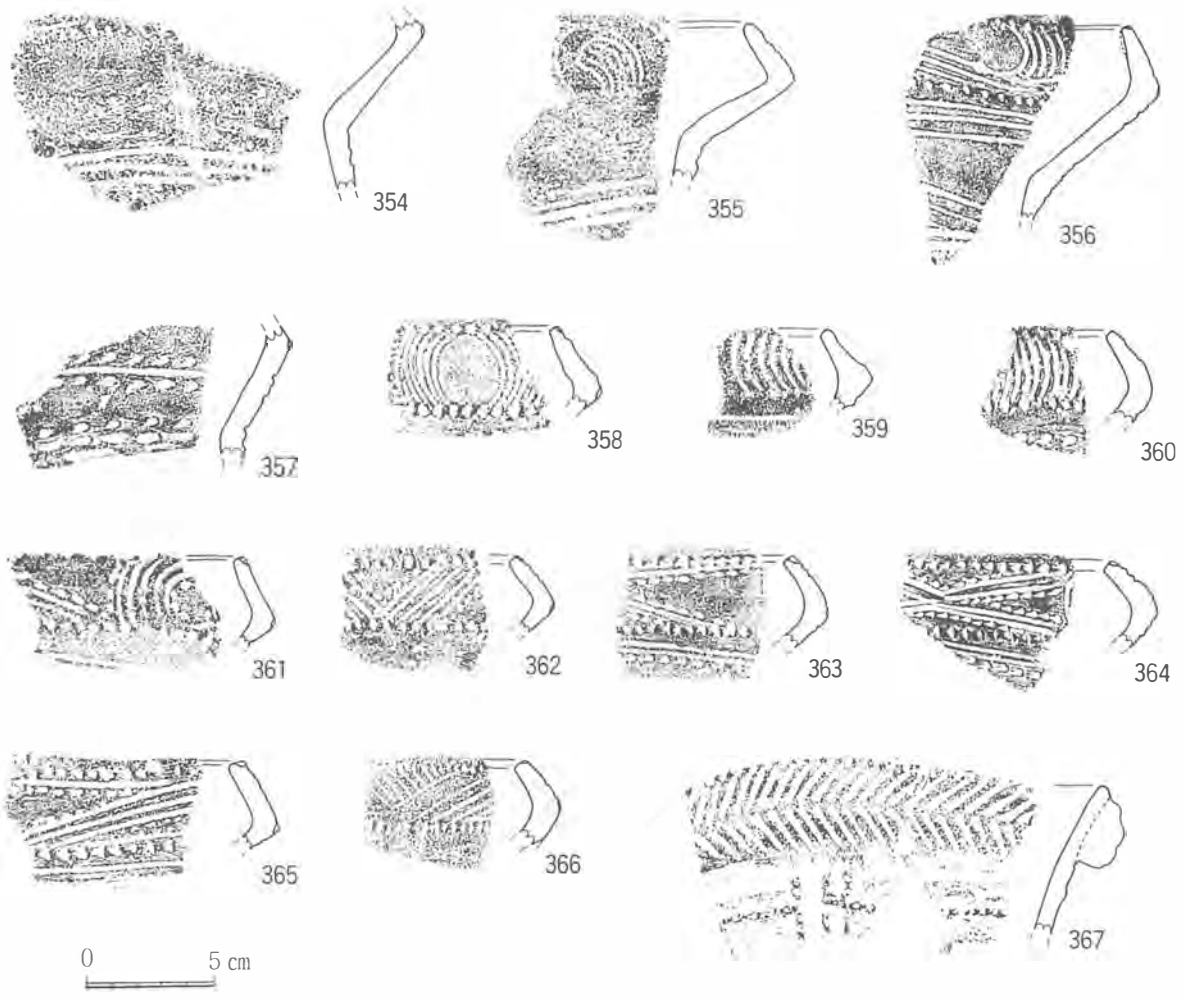


第75図　第５類土器分布図



第76図　第3・5類土器変遷概念図

354は主に口縁部屈曲部下胴部にかけての資料で屈曲頂点に連続刻み、口縁部と胴部の屈曲下に縦位の沈線地文に横位の2本の沈線が施されている。355と356には口唇部直下から屈曲部にかけて曲線文が見られ、残存度の高い356には屈曲下に横位と斜位の細沈線がある。357は口縁部屈曲下から胴部にかけての資料で横位沈線の上下に棒状施文具による連続刺突文が施される。359・360・361は口唇部直下から屈曲部にかけての資料で曲線沈線が見られ、この曲線は358に左右対象が確認されることから359・360も同様の沈線が施されている可能性もある。口縁部屈曲部下には359に沈線横位、360に連続刺突が見られる。362・363・364・365も口縁部屈曲部下の資料で横位・斜位沈線に沿い棒状施文具による



第77図　第６類土器実測図

連続刺突、屈曲部には刻みが見られる。屈曲部下には横位沈線 365、横位沈線と二股の施文具による連続刺突 363・364が確認される。361は同心円状沈線と刺突文の組み合わせで 362・363・364・365では361に見られる文様体の可能性を示唆する。366は口唇部直下部に沈線のみ施文でこれまでに見られない直線の沈線のみのＶ字及び斜位沈線の施文である。口縁部の文様体からでは

Ａ類　　曲線・同心円系　355・356・358・359・360

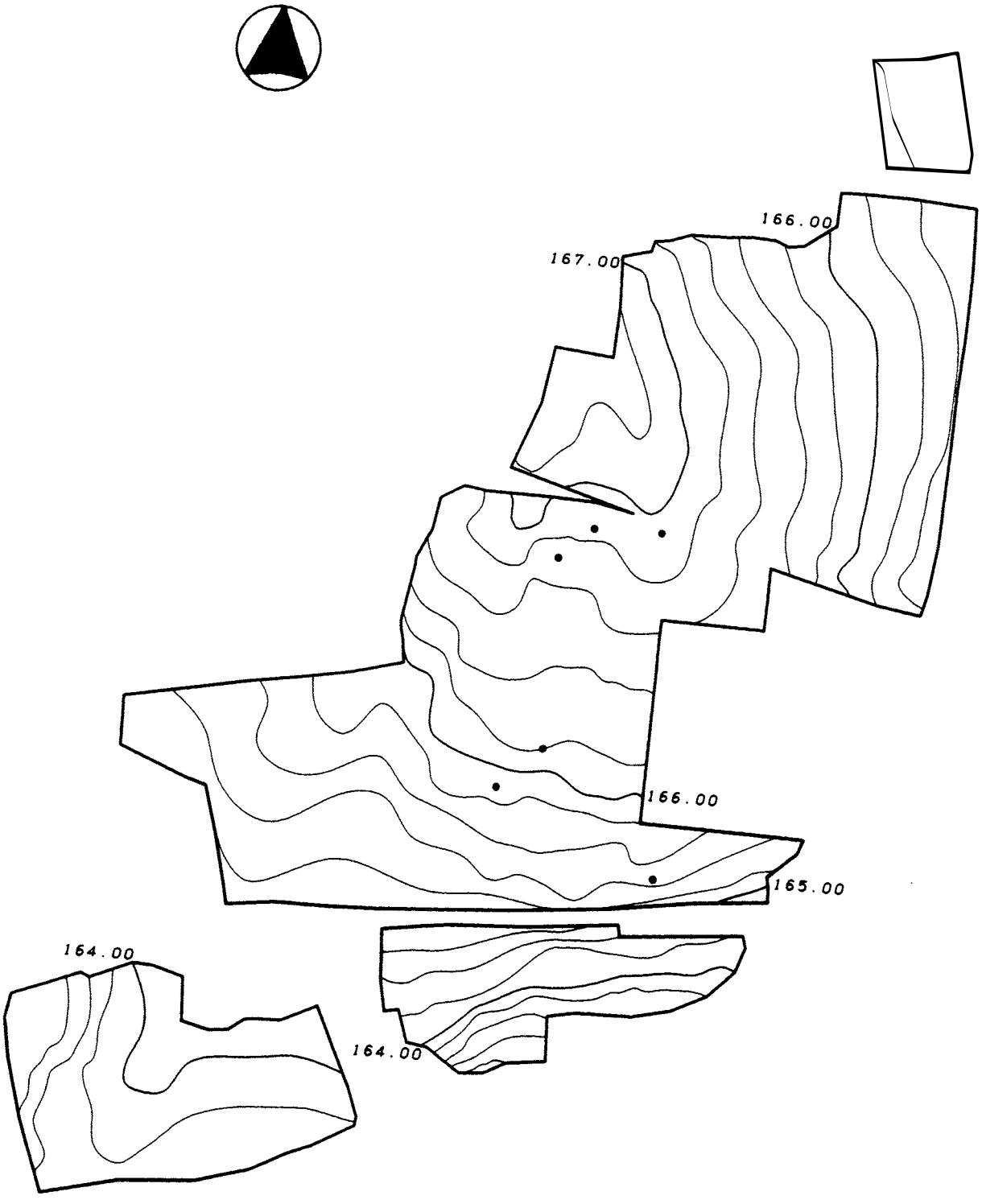
Ｂ類　　沈線＋連続刺突系　362・363・364・365・366

に大別でき、Ｂ類には波状口縁の傾向が見られる。Ａ類とＢ類の両要素を持つものとして 358・361があることから前述したように相対関係も考えられるが断片資料であるため詳しくは不明である。

367は口縁部から胴部にかけての資料で、貼付け凸帯を持つものであるが整理上ここに仮設しておく。口縁部は波状口縁を呈し、口縁部が肥厚し綾杉状の沈線を施す。胴部には縦・横位の粘土帯が見られる。

第７類土器　（第79図～88図　368～496）

第７類土器は　円筒形の胴部に漏斗状に開く口縁部を有する深鉢である。本遺跡からは2,921点出土した。文様構成により１類（貝殻文系）・２類（撚糸文系）に大別できる。それぞれの類別において、



第78図　第6類土器分布図

説明を加えていく。

1類（貝殻文系）　（第79図～85図　**368～432**）

器形は基本的に円筒状の胴部に漏斗状の口縁部を有する深鉢であるが、胴部上方がやや張り出すものや、頸部の屈曲が弱く、口縁部がわずかに外傾するだけのものもあり、器形に多少のバリエーションを認めることができる。また波状口縁を呈するものもわずかながら存在する。全体的な傾向として大型で器壁が厚く、粗雑な作りのものが多い。口縁部の文様は口唇部には貝殻による刻みを施すものが多く、口縁部には貝殻文を数条にわたり施文し胴部の文様は以下の2種に細別できる。

A 胴部に貝殻条痕文・凹線文による幾何学的文様、口縁部には貝殻条痕文・凹線文を施文する場合がある。

B 胴部に撚糸文・縄文などを凹線文間に充填した文様帯を、幾何学的に施文するもの。

1－A類　（第79図～82図　**368～398**）

368・369は、口縁部～胴部にかけての資料である。いずれも胴部上方が張り出した器形である。**368**は口縁が大きく外傾し胴部が張り出すため、頸部が極端に締まってみえる器形である。口唇部は平坦に作りだし、貝殻による刻み目を施している。口縁部から頸部にかけては貝殻による連続刺突文を横位に4条施文している。胴部は凹線で区画した貝殻条痕文を幾何学的に施文している。**369**は頸部はやや締まり気味で胴部が張り出すが、頸部には明瞭な屈曲は見られず、なめらかな曲線を描く器形である。口唇部は平坦に作りだし、貝殻による刻み目を施している。口縁部から頸部にかけては、貝殻による押し引き文を主に横位施文され、口縁部中程ほどの5条は波状を呈している。胴部は凹線で区画した貝殻条痕文を幾何学的に施文し、内器面は口縁部から頸部の屈曲部にかけては横方向のナデ調整であるが、屈曲部から胴部は貝殻の腹縁による横方向のナデ調整を施している。

370～378は、口縁部から頸部にかけての資料である。**370**は口縁部が4つの頂部を有する波状口縁を呈し、おそらく胴部が張り出ない円筒形の胴部を有する器形と推測できる。この類にしては器壁が薄く、かなり器面が劣化しており2次焼成を受けた可能性が高い。口唇部と頸部に貝殻による刻み目を施し、外器面と頸部には口唇部に沿って貝殻による連続刺突文を1条施文している。これら2条の貝殻刺突文間には、凹線文を2条1組で格子状の文様に施文している。この凹線は貝殻条痕の可能性が高いが、器面の風化が激しくその判断は困難である。**371**の外器面は口唇部近くに貝殻条痕文を斜位に施文し、それと交差するように下から上に向かって凹線文を2条一組で施しており、格子状の文様を形成している。その下部には横位に貝殻による連続刺突文と凹線文を交互に施文している。この貝殻刺突文と格子状凹線の組合せは **374・377**にも見られ、**372・373・376**では同じく貝殻刺突文と凹線の組み合わせで**373・376**は「く」字凹線である。口縁部が大きく開き、胴部はおそらく円筒形を呈する器形である。口唇部は平坦に作り貝殻による刻み目を施している。外器面は口縁部から頸部にかけて横位に貝殻による連続刺突文を **372**は7条、同じように **375**は5条巡らせている。**378**は口唇部には貝殻による刻み目を施し、口縁部に1条、頸部に1条、横位にめぐる貝殻による連続刺突文を施文している。胴部には貝殻条痕文を施文。

379～387は胴部の資料である。**380・383・385**はやや胴張り気味の器形である。頸部付近には横位にめぐる貝殻による連続刺突文を施文し、その下部は2～4条を一組とした凹線文を幾何学的に施文している。**379・381**は、頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外方にわずかに傾く程度と推測でき、頸部近くに横方向の貝殻による刺突文を巡らせ、胴部には貝殻条痕文を凹線文で区画した文様を施文している。**382**も頸部の屈曲は弱く口縁部の開きは緩やかである。**384**は貝殻条痕文を横位・斜位に幾何学的に施文し、**386**はやや張り出し気味の胴部であり、中央に3条の連続刺突文があり上部・下部に貝殻条痕文を施文し､下部の条痕文は斜行の網目状である。**386**と **387**と類似し、連続刺突文の下部に貝殻条痕文が横位・斜行に施文している。

388～391・397・398は、胴部から底部にかけての資料である。397・398は上げ底で胴部は底部から外傾しながら立ち上がる器形である。胴部には凹線文を斜位に施文している。397は底部外側にはヘラ状の工具で粗いナデ調整を施し、398の内器面は成形時の指頭圧痕を底部と胴部の接続部に集中して認めることができる。388・389は平底を呈すると思われ、390・391の胴部はほぼ垂直に、388・389は胴部はやや外傾しながら立ち上がる。

392～396は底部の資料で 396は上げ底で他は平底である。394と同様に外器面には凹線文を施文している。395は貝殻条痕文を横方向に施文。392・393は厚みのある平底の底部で、外器面には縦位と横位の凹線文を施文している。

１－Ｂ類　（第83図　399～406）

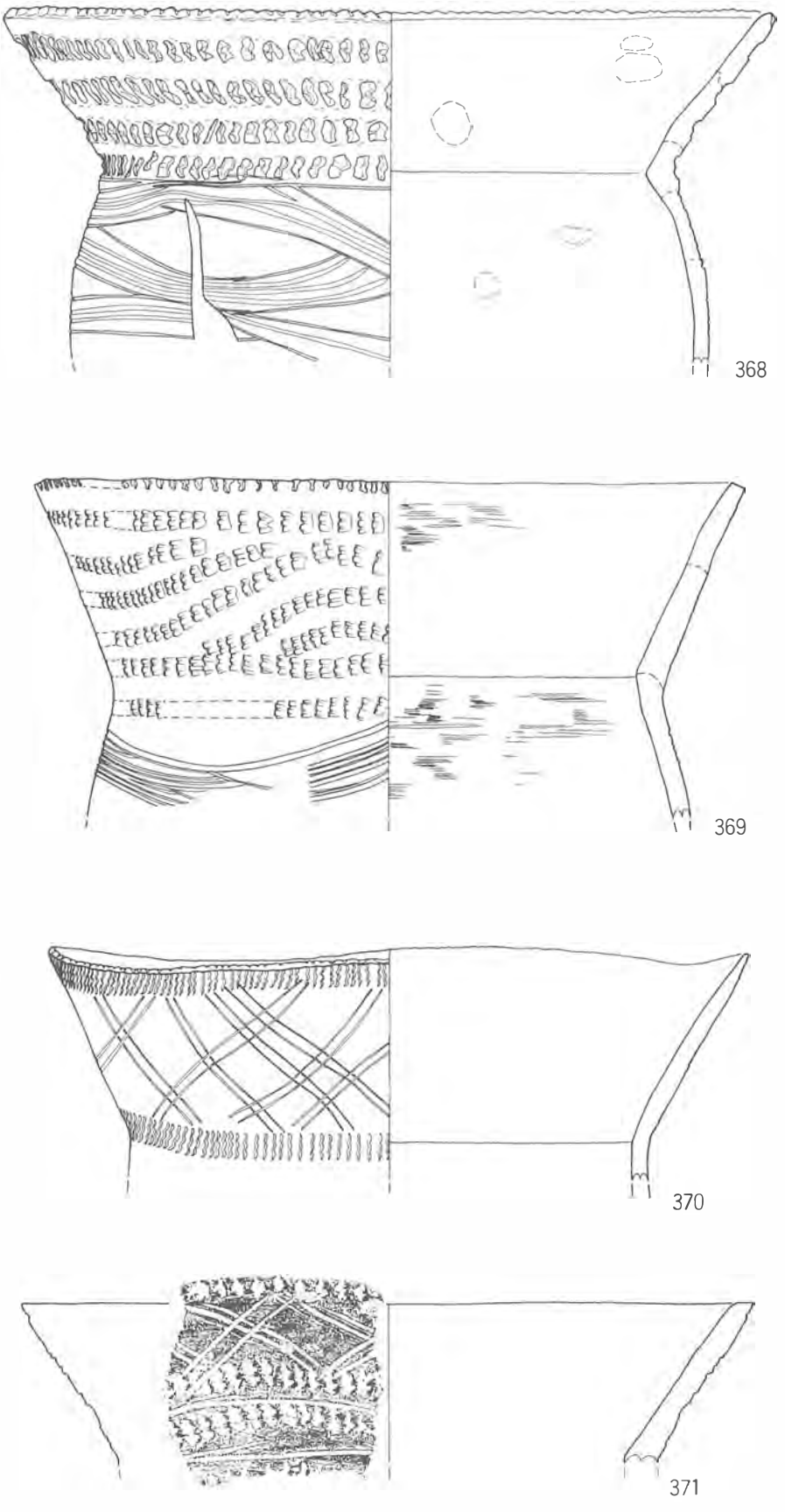
399は頸部から胴部にかけての資料である。胴部は円筒形を呈し頸部の屈曲・口縁部の開きが緩やかな器形である。頸部付近には貝殻による横方向の連続刺突文を施文し、胴部には凹線文で区画した内部を縄文で充填した文様を幾何学的に施文し 406にも同様の施文が見られる。施文順序はまず縄文を幾何学的に施文したあとに凹線文で区画し、最後にはみ出した縄文をナデ消す、という手順であろう。

400～406は、胴部の資料である。401は波状に、402は幾何学的に区画した凹線文間を縄文で、400・403・404は撚糸文で充填した文様を施文している。405は外器面には凹線区画内部を貝殻による刺突文で充填した文様を施文している。貝殻による刺突文を充填したものは珍しく、当遺跡では２点出土している。

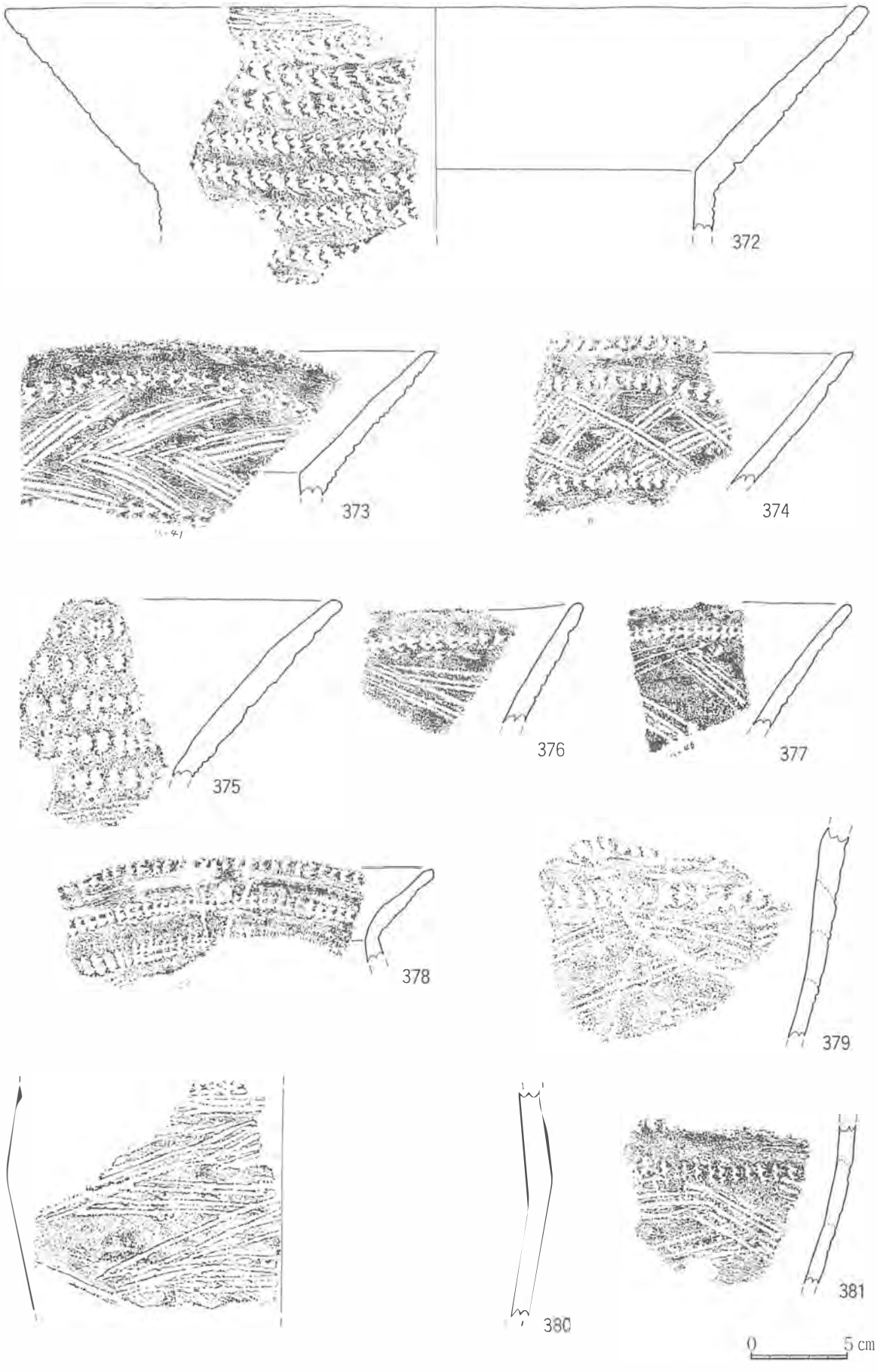
口縁部　（第83図～85図　407～432）

貝殻による文様を施文した口縁部である。１－Ａ類か、１－Ｂ類に属するものと思われるが、胴部の文様が不明であるため、類別が不可能であった。よって二者のどちらかに属するものとして、ここで説明を加えていく。

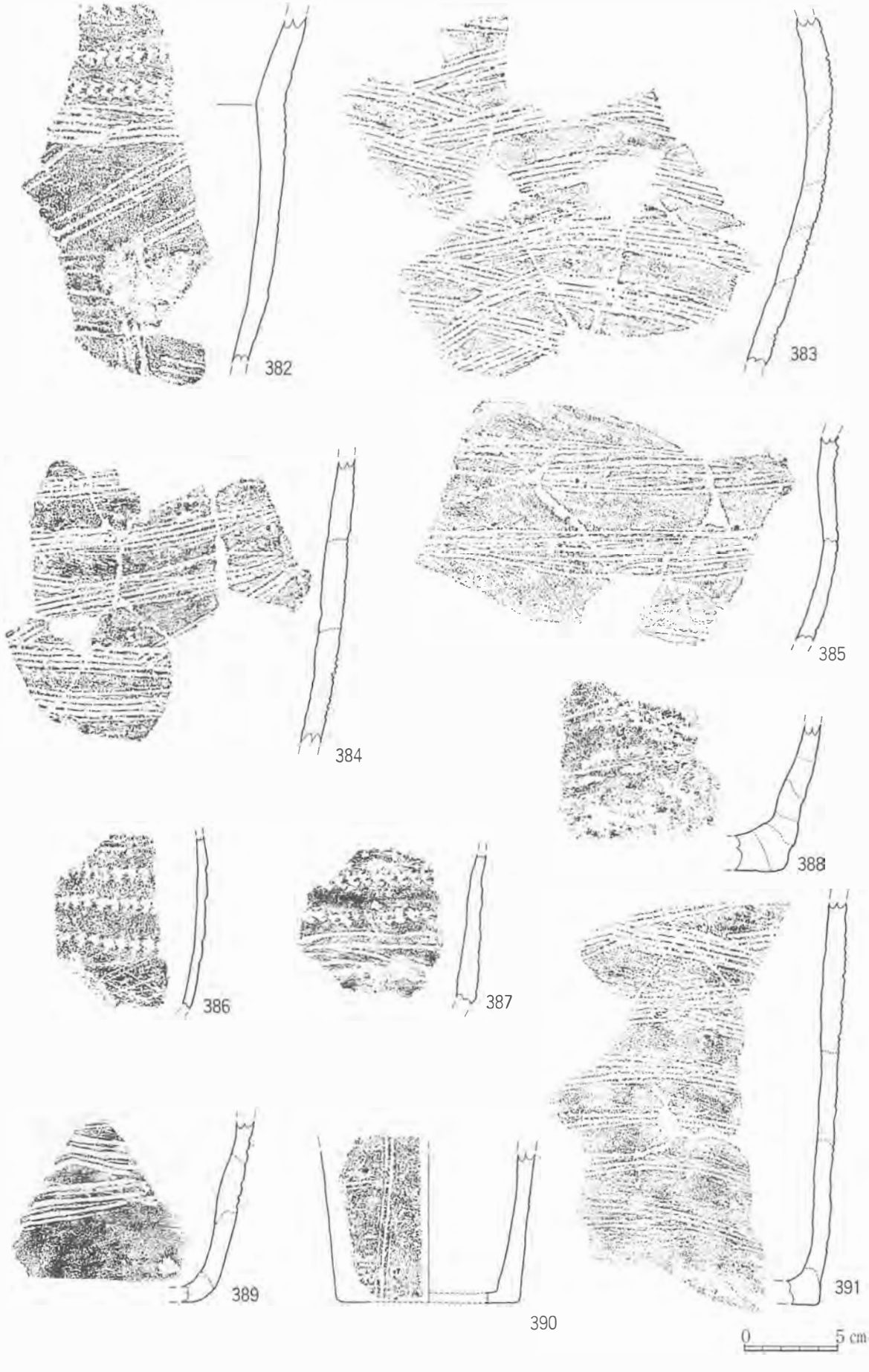
407は外器面の口唇部に沿って、連続刺突文を施文し、408は外器面は口唇部に沿って連続刺突文を１条施文、口縁部には押し引き文を横方向に施文している。409は器壁が薄く劣化が進んでいるが、口唇部には刻み、外器面には斜行の連続刺突文を施文し、410・411・412は外器面に連続刺突文を横方向に施文している。413は頸部の屈曲が強く、口縁部の開きが大きい器形である。口唇部外器面側角に刻みを施している。外器面には連続刺突文を施文。414は口唇部には貝殻による刻みを施し、口縁部には同じく連続刺突文を施文している。連続刺突文は現状で３条認めることができるが、うち上下２条は横方向に、中央の１条は山形状に施文している。415は口唇部を平坦に作り、外器面側の角に刻みを施し、416は頸部が屈曲というより、むしろ外湾した器形を呈す。口唇部は平坦につくり、外器面側の角に刻みを施し 417口縁部から頸部にかけては、連続刺突文を横方向に施文しており口唇部は丁寧である。418・419は押し引き文を施文し、418は口唇部は平坦に作り出し器壁は厚手で、419は頸部からの口縁部の開きが浅い器形である。420は頸部の屈曲が弱く明瞭な稜をなさない器形である。口唇部は先細りで平坦に作り刻みを施している。外器面には横方向の押し引き文を施文する。421は漏斗状の丸みを帯びた口縁部をなし、頸部は明瞭な屈曲部を作り出しており、胴部は張り出す傾向にある。この種の深鉢の中では丁寧な作りをしている。422と同様に外器面には連続刺突文を山形に施文している。423は頸部が屈曲というよりむしろ湾曲し、口縁部が朝顔状に開く器形である。424は波状を呈する口縁部で頸部の屈曲は弱く、425は口唇部には刻みを施し、外器面には横方向の貝殻による連続刺突文を高い密度で施文。426では連続刺突文は口唇部近くでは波状で、頸部近くでは横方向である。427は頸部の屈曲が明瞭で、口縁部は大きく開く器形である。外器面は押し引き文を横方向に施文している。428は頸部が緩やかな屈曲を呈する器形で 429は口唇部に貝殻による刻みを施し、口縁部には貝殻による連続刺突文を斜位に施文している。430の外器面は条痕文を横方向に、内器面は貝殻の腹縁による横方向のナデ調整を施している。431は口唇部を平坦に作りだし、刻みを施している。外器面には連続刺突文を口縁部に沿って施文し、その下部に凹線を同心半円状に描



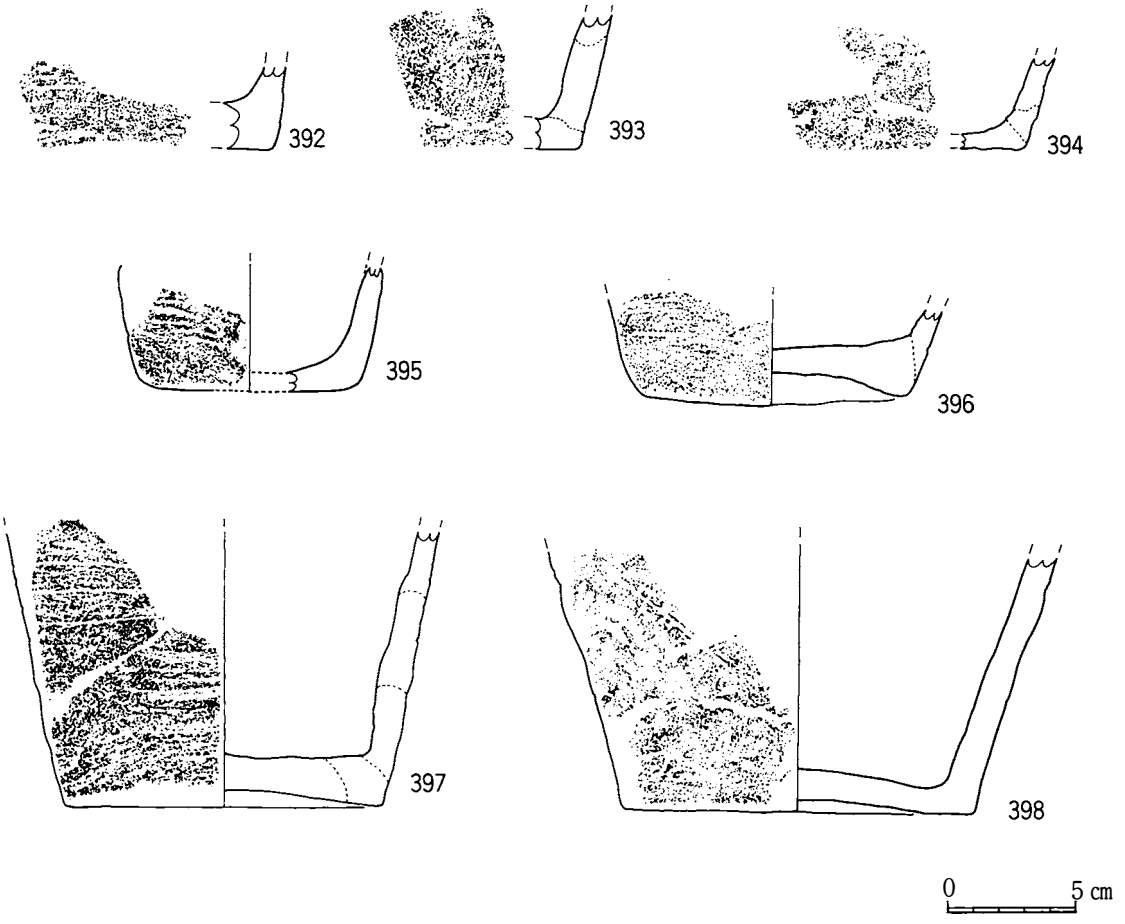
第79図　第７類土器実測図（１）



第80図　第７類土器実測図（２）



第81図　第７類土器実測図（３）



第82図　第７類土器実測図（４）

いた文様を施文している。**432**は頸部の屈曲が明瞭ではなく、なだらかに口縁部が開き、胴部もやや張り出す傾向にある。外器面には連続刺突文を施文している。連続刺突文は頸部では横方向に施文しているが、口縁部では山形に施文している。

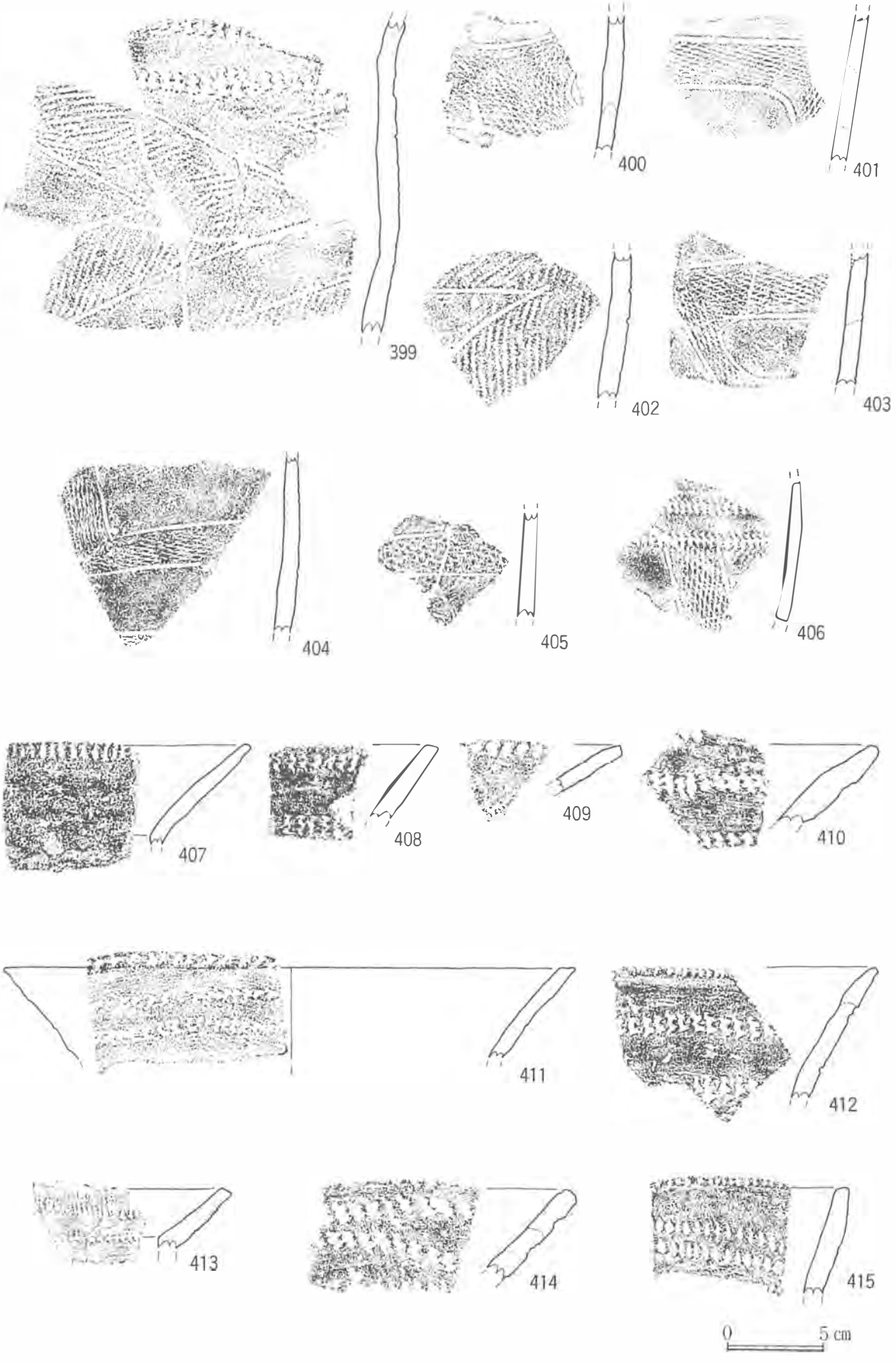
２類（撚糸文系）　（第85図～87図　**433～472**）

器形は、円筒形の胴部に漏斗状に開く口縁部を有し、頸部の屈曲は強く明瞭である。屈曲部から口唇部までは短小で、波状口縁を呈するものも存在する。小型で器壁が薄く、丁寧な作りのものが多い。

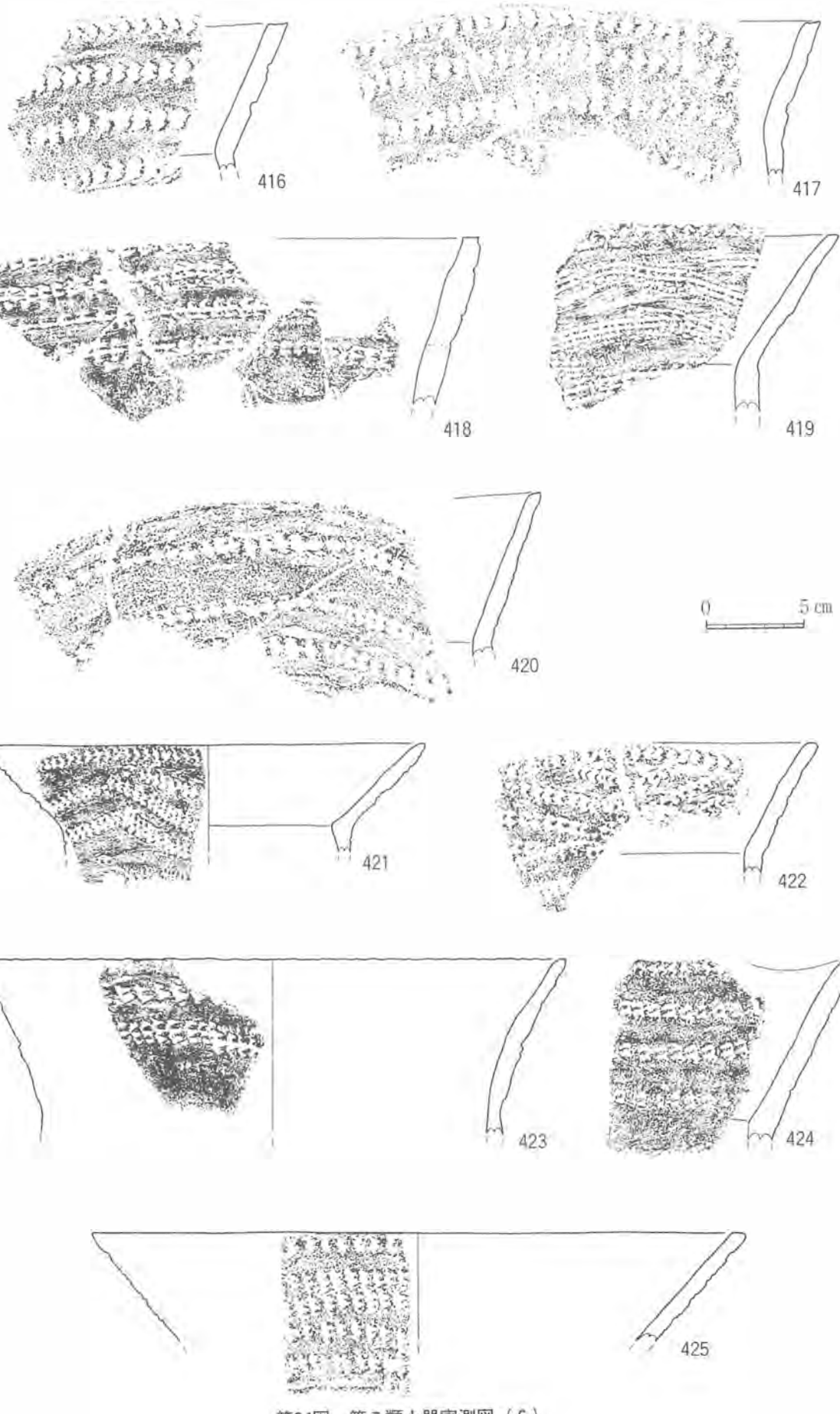
文様は、口唇部に刻みを施すものが多く、口縁部・頸部には主に凹線文を施文している。頸部から（口縁部からのものもわずかに存在する）胴部にかけては、縦位に数条ずつの撚糸文を施文し、それらは近接、または重複している。胴部にも凹線文を横位にめぐらせ、部分的に山形や半円を描いているものが多い。以下、資料の説明を加えていく。

433はほとんど完形に近い資料である。口縁部は短小で、頸部は強く屈曲し、胴部は円筒形を呈する。口唇部には刻みを施し、頸部から縦位に撚糸文を施文後、凹線文を施している。凹線文は頸部には横方向に２条施し、胴部においては２カ所に分かれて施している。胴部上方にあるものは、横方向に３条と、波状を呈する凹線文２条の間に横位の凹線文を施している。胴部下方にあるものは、２・３・３条ずつの横方向の凹線文を施文し、その間に３条の凹線文のまとまりからなる山形文を施文している。内器面は、丁寧なナデ調整を施している。

434～436は、口縁部から胴部にかけての資料で、**435・436**は頸部の屈曲が強く、口縁部が漏斗状に開き、胴部が円筒形を呈する、典型的な器形である。



第83図　第７類土器実測図（５）



第84図　第7類土器実測図（6）

434の頸部の屈曲はやや弱く、口縁部が短小で大きく開かず胴部がやや膨らむ器形で、口縁部は波状を呈し口唇部に刻みを施している。頸部から縦位に撚糸文を施文後、頸部に4条の横位にめぐる凹線文を、胴部中央には斜位に凹線文を施文している。435の口唇部は平坦に作り刻みが認められ、それぞれの外器面には頸部から縦位に撚糸文を施文し、その後頸部と胴部に横方向の凹線文を施文している。内器面は劣化が進んでおり、二次焼成の可能性がある。

438～464は口縁部の資料である。

438・446・453は頸部に横位凹線文を施文し、下部に撚糸文を縦位に施文し、440は頸部から口縁部にかけて大きく花弁状に外傾し、口縁部は波状を呈している。口唇部には刻みを施し、頸部から縦位に撚糸文を施文。439・442は頸部には横方向に凹線文を施文し口唇部には刻みを持ち、442の口縁部は波状を呈し、口唇部の刻みは波状の頂部において口唇部に対し直交して施文しているが、他の部分では斜位に施文している。441は口縁部は波状を呈し、口唇部は平坦面に刻み。443は口唇部に刻みを施し、外器面には凹線文を横方向に施文している。444は口縁端部に向かって先細り、445は口縁端部がやや内湾する器形である。447は口縁部に凹線文を斜位・横位に施文。口縁部が短小で先細りになっており、口唇部には刻みを施している。外器面には頸部から縦位に撚糸文を施文している。448の口縁部外器面は、口唇部近くから縦位に撚糸文を施文後、頸部に横方向の凹線文を施文している。449は口縁部が波状を呈し、450外器面は頸部から縦位に撚糸文を施文し、口縁部には斜位に、頸部には横位に凹線文を施文している。451は口唇部に刻みを施し、口縁部外器面はレンズ状沈線が相互に見られる。452・456・467は波状口縁を施し、口唇部に刻みで頸部には横位に凹線文を施文している。454の口縁部は波状を呈し、口唇部の波状頂部には縄文を口唇部に沿って2条施文し、その他の部分には刻みを施している。455は頸部に横方向の凹線文。459は口縁部・頸部には2条ずつ横方向に凹線を施文している。458・460は頸部から縦位に撚糸文を施文し、その後頸部に横方向の凹線文をめぐらせている。462も丁寧なつくりで口縁部は 461も同様である。463は器壁が薄く口唇部に向かうほどさらに薄くなっている。464は頸部の屈曲が弱く口縁部があまり外傾しない器形である。

465～467は、胴部の資料である。それぞれ縦位に撚糸文を施文後、凹線文を施文している。465は横位に凹線文を4～5条ずつ巡らしている。466は横位、また横位に巡る凹線文の上から、部分的に斜位に凹線文の施文が見られる。467は横位・斜位。468～471は、底部の資料で撚糸縦位である。470は上げ底気味の底部で、他は平底である。外器面には撚糸文を縦位に施文が見られる。472は胴部から底部へ移行する部分は丸みを帯び湾曲している。

その他の口縁部・胴部・底部

ここでは当遺跡から出土している1・2類のどちらに該当するのか、それともどちらに含まれるのか、部分的な破片のみの出土で全体像を把握できなかったが、7類土器の範疇にあるものについて説明を加えていく。

口縁部

文様から、次の5種に分けられる。

1．無文（第88図　473～477）

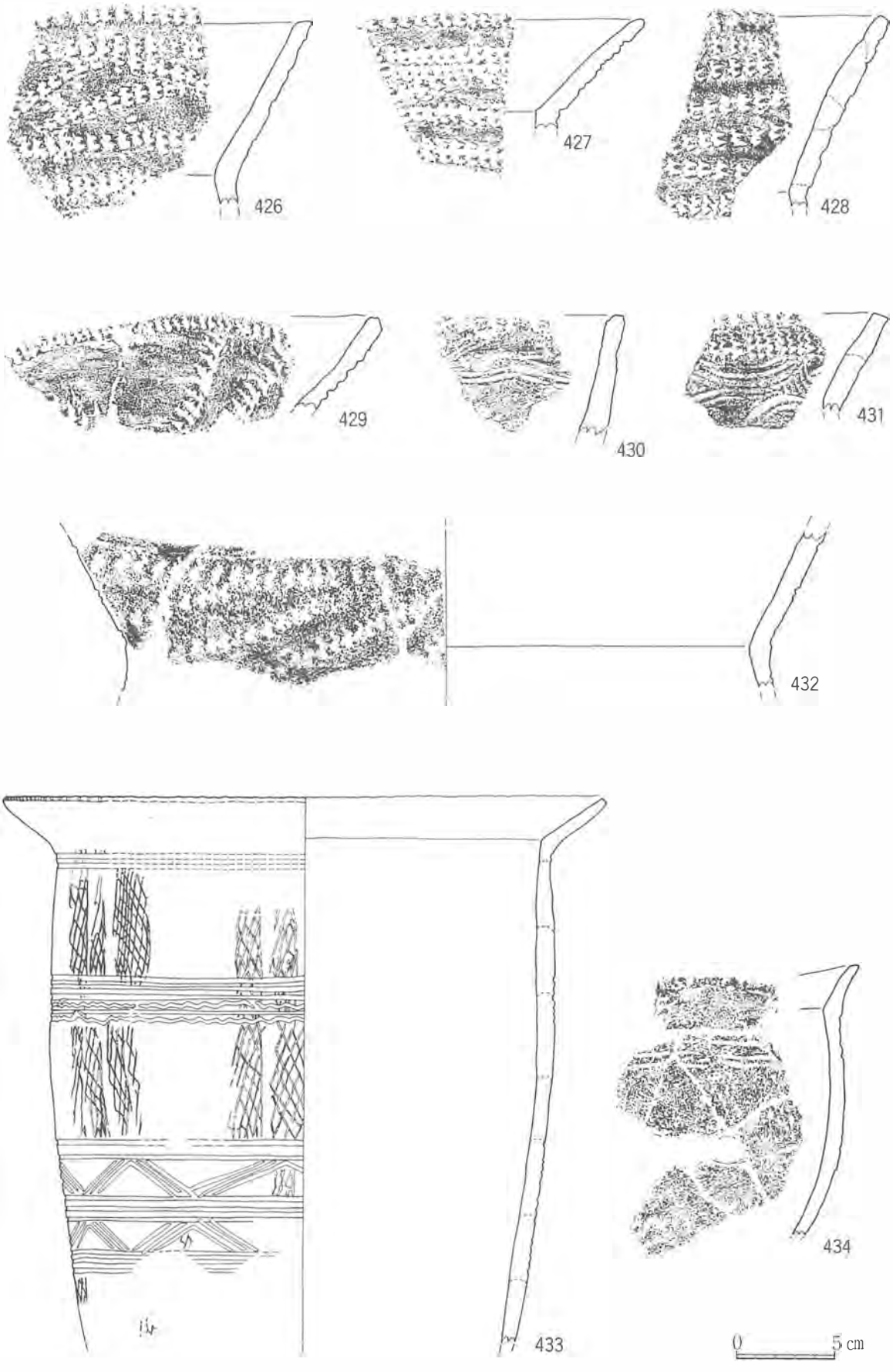
内外器面ともに横方向のナデ調整を施していることが観察される。473は頸部の屈曲が弱く口縁部は大きくは開かず、口唇部は平坦に作っている。474は口縁部が波状を呈し頸部の屈曲が強く、口縁部は花弁状に大きく開く。475も波状口縁である。476・477は内外器面ともにナデ調整を施した無文である。

2．口唇部に刻みのみ（第88図　478～481）

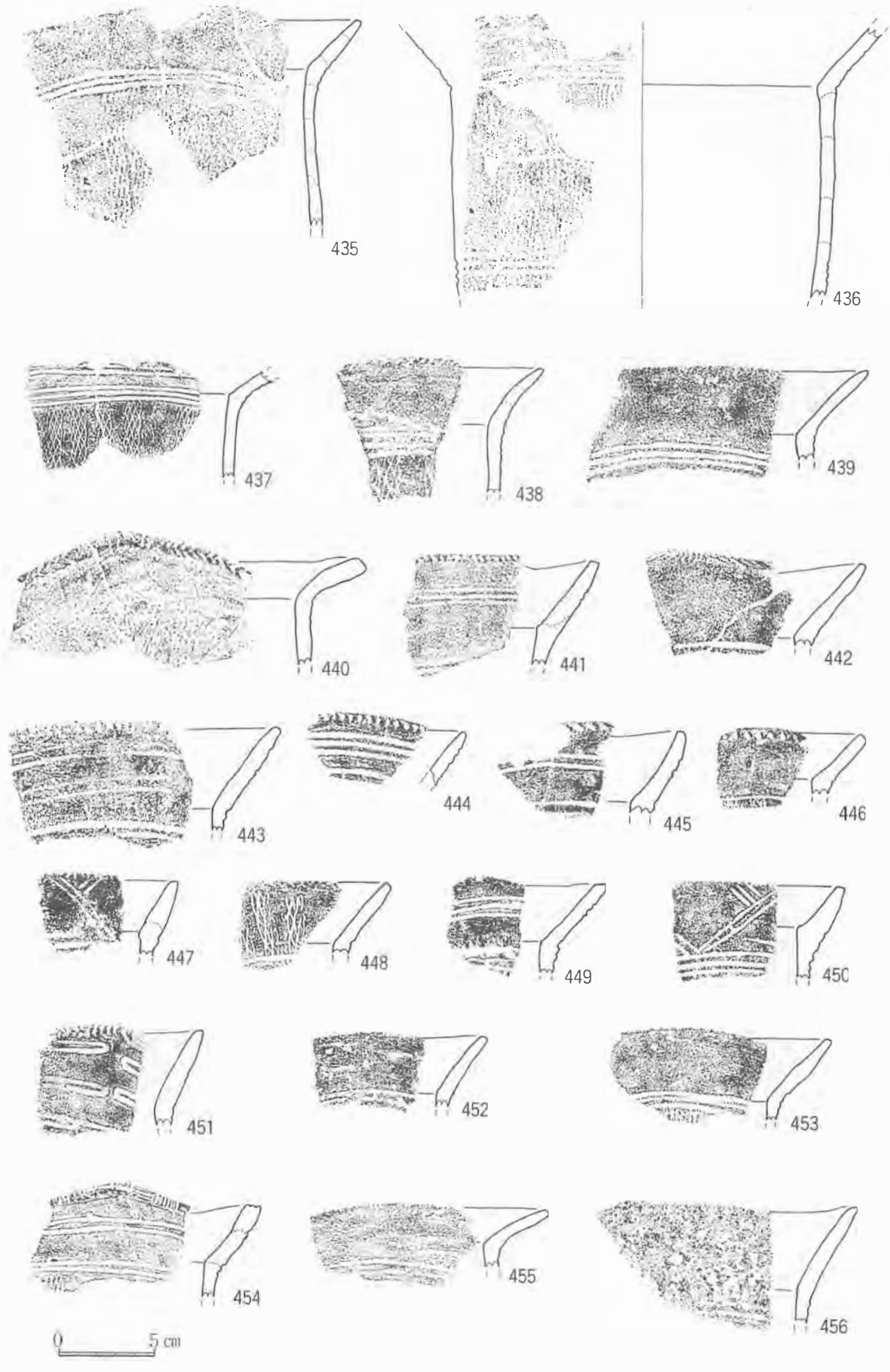
内外器面ともに横方向のナデ調整を施している。478は器壁が薄く口唇部は平坦に作り出し、479は頸部の屈曲が強く、口唇部に刻みを施す。480は口唇部に刻みを施し、内外器面ともに横方向のナデ調整を施し、480・481は波状口縁を有する。

3．口唇部に刻みを有するものもあり、口縁部に連点文を施文しているもの（第88図　482～486）

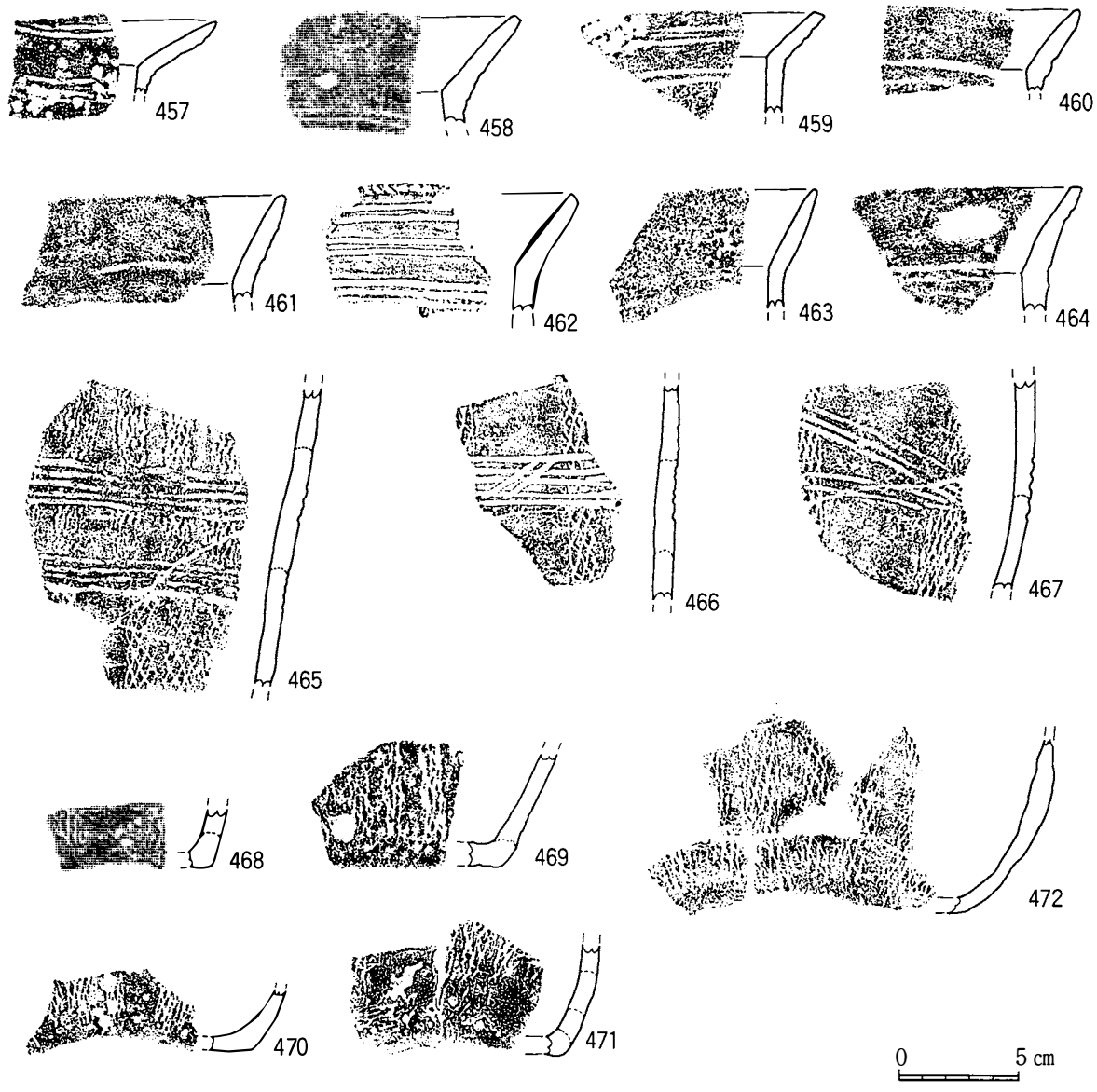
482は口唇部を平坦に作り、外器面には口唇部に沿って連続刺突文を施文している。483は、頸部の



第85図　第７類土器実測図（７）



第86図　第７類土器実測図（８）



第87図　第７類土器実測図（９）

屈曲が強く口縁部は大きく外傾している。口唇部は平坦に作り外器面側の角に刻みを施している。外器面には連続刺突文を横方向に数条にわたり施文している。**484**は粗雑な作りで波状口縁を呈する。口唇部には刻みを施し、口縁部には横位に薄い板状の工具による連続刺突文を施文している。**485**は口縁部が僅かに湾する器形である。口唇部は平坦に作り、頸部には連続刺突文を横方向に施文している。**486**は精緻な作りで頸部の屈曲は強く、口唇部には平坦面を作り出している。外器面には口唇部に沿って連続刺突文を施文し、また口縁部・頸部にも連続刺突文を横方向に施文している。

４．口唇部には刻みを有し、横位にめぐる凹線文を連点文が縁取ったものを施文しているもの（第88図**487～490**）

487は口縁端部がやや内湾した器形である。外器面には口唇部に沿って連続刺突文を施文し、２～３本の凹線文を半裁竹管状の工具による連続刺突文で縁取った文様を横位・斜位に施文している。また、頸部にも横方向に連続刺突文を施している。**488**は外器面には口唇部に沿って連続刺突文を施文し、数条の凹線文を連続刺突文で縁取った文様を横位・斜位に施文している。**489**は口唇部に沿って連続刺突文を施文し、凹線文を連続刺突文で縁取った文様を

横位・斜位に施文している。**490**は、数条の凹線文を連続刺突文で縁取った文様を斜位に施文し、頸部には横方向に連続刺突文を施文している。

５．口唇部近くに連点文を有し、凹線文により区画された内部を撚糸文で充填し、その文様帯を連点文が縁取ったものを施文しているもの。(第88図　**491**　**492**)

491は頸部の屈曲が強く、口縁部は大きく外傾している。口縁部は波状を呈し口唇部は平坦に作り出している。外器面には口唇部に沿って連続刺突文を２条、異なった工具で施し、凹線文内を撚糸文で充填、それを連続刺突文で縁取った文様を横方向に施文している。**492**は口唇部を平坦に作り、それに沿って外器面に連続刺突文を２条施文している。また外器面には、凹線文間を撚糸文で充填し、それを連続刺突文で縁取った文様を斜位に施文している。

胴部　(第88図　**493～494**)

いずれも頸部から胴部にかけての資料である。**493・494**は横位に連続刺突文を施文し、胴部には凹線文間を撚糸文で充填し、それを連続刺突文で縁取った文様を施文している。

底部　(第88図　**495～496**)

文様が確認できず、類別不可能であったものである。**495**は上げ底の底部である。粗雑なつくりで、内器面の底面には成形時の指頭圧痕を、胴部器壁と底部の接続部に認めることができる。**496**は上げ底の底部である。内外器面ともにナデ調整を施し、底面と器壁の接続部には成形時の指頭圧痕を認めることができる。

分布は１類の貝殻文系は遺跡中央部を中心に密集し、２類の撚糸文系は中央部と北東部に分布が見られる。(第89・90図参)

第８類土器　(第91図～92図　**497～541**)

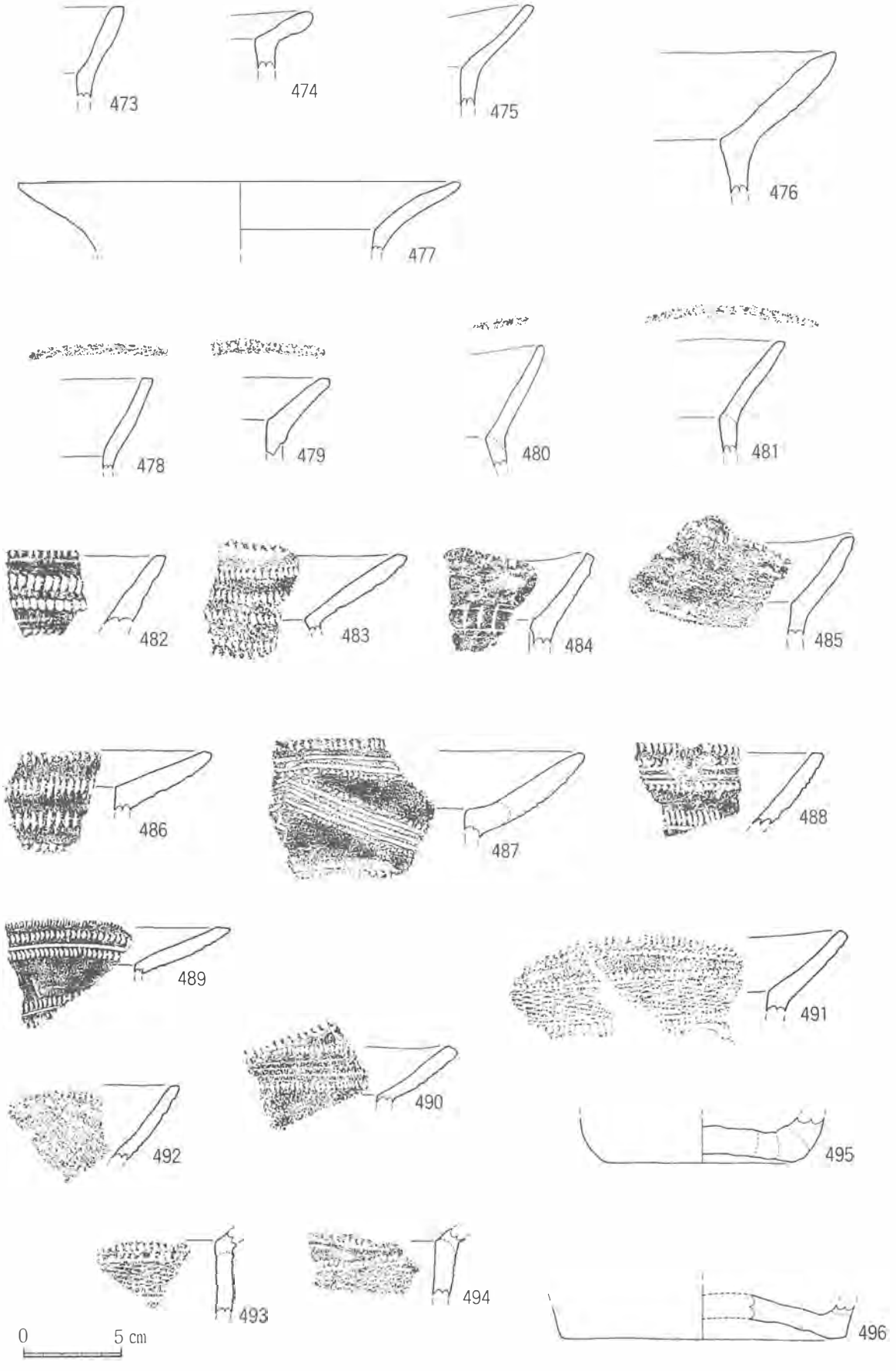
經部が窄まり胴部が丸く膨らむ、いわゆる壷形の土器をここでは一括して取り扱う。当遺跡において284点が壷形土器として確認され、器形・文様ともにバリエーションに富んでいるが、第８類の紹介にあたり以下の３資料をまず提示する。

29号土坑出土 **16**はほぼ完形資料で直口気味の口縁部を持ち、最大径は胴部下位に位置し、ゆるやかに立ち上がる。数値で対比すると口径１に対し、高さ３・胴部最大径２の割合となる。27号土坑出土 **6**は胴部の一部から經部にかけての資料で胴部から經部の立ち上がりが急で、やや外反する口縁部を持つ。全体は胴部の占める割合の高いタイプとなるか。34号土坑出土 **17**は底部資料を欠くが、内湾する口縁部を持ち、肩部に最大径を持つ。形式上甕形の様相を呈し、外反する口縁部の先端の欠損した第３類（１）型に酷似した形態であるが、整理上第８類として仮設した。口径１に対し、胴部最大径はこれよりやや大きく、高さは１ほどであろう。以上の３点を第８類の素形とするが、多くが断片資料のため口縁部を中心の掲載とした。口縁部は外反・直口・内湾の３種が見られるが、第３類土器で試みた文様体を参考とした分類での説明を加える。

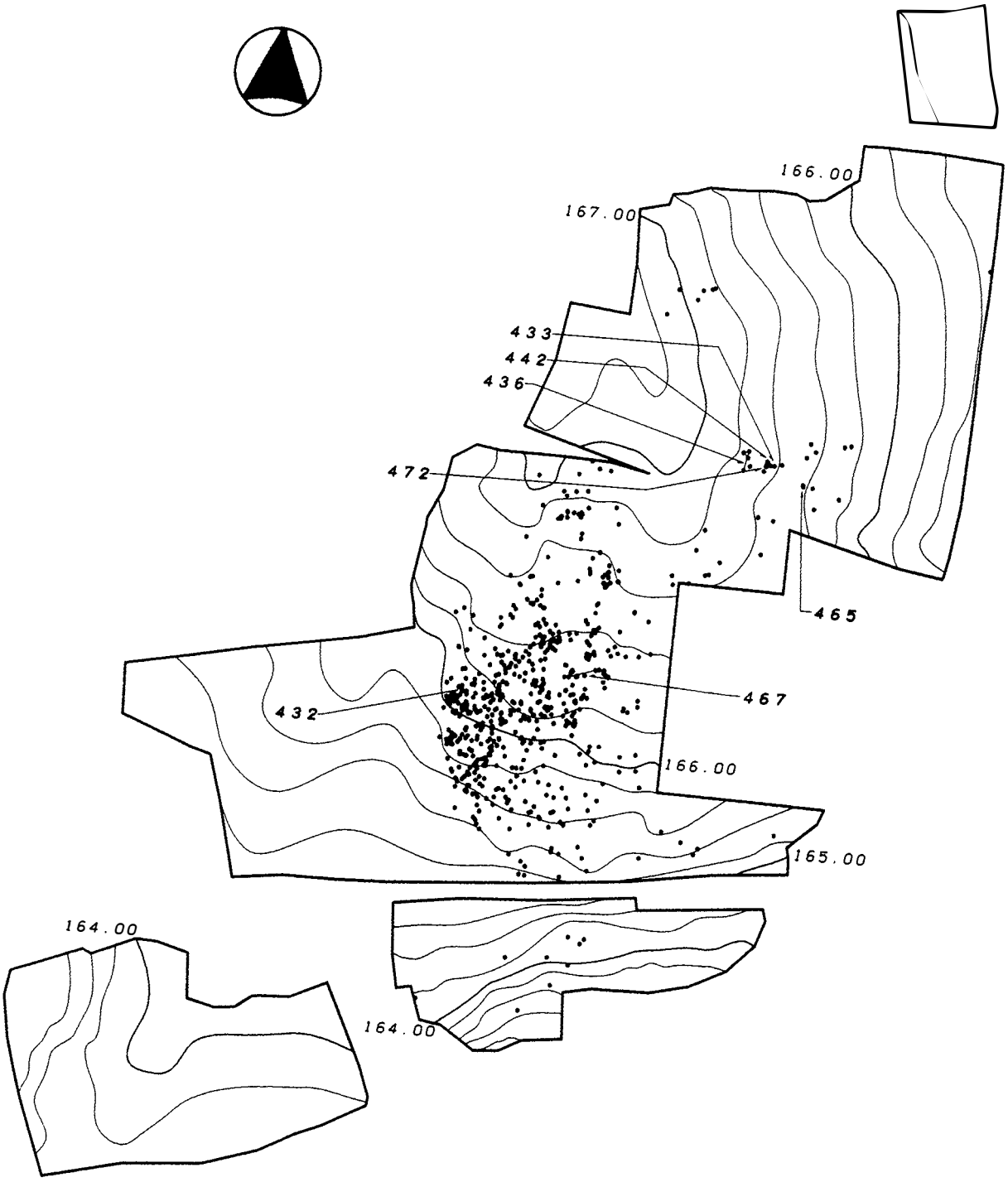
497は胴部から經部にかけての資料で胴部から内傾のまま口縁部を形成する。經部に３条を１単位とした横位沈線を４単位巡らし、胴部には補修孔が見られる。29号土坑出土の土器 **16**と類似するが **497**は口縁部が内湾し窄む。**498～514**は押型文施文である。**498～502**はやや外反する口縁部資料で押型山形文が施文されている。縦位の施文であるが **498**は内器面に横位施文が行われている。**500**の口縁端部は先細り、さらに外反している。**503～507**は經部資料で山形文縦位施文であるが **504**は横位施文であろう。**508～511**は撚糸文施文。**510**は内湾する口縁である。**512～514**は口唇部に近い經部資料で、**512・513**は縄文、**514**は菱形文施文である。

515～521は押型文と他の施文が加わる類である。**515～518**は外器面に山形地文を施した後、沈線施文を加える。**515**は内器面、**517・518**は口唇部にも山形横位が施されている。**519**は縄文施文に２条の突帯刻み、**521**は菱形施文に口唇部刻み、**520**は山形状沈線に口唇部山形押型施文である。

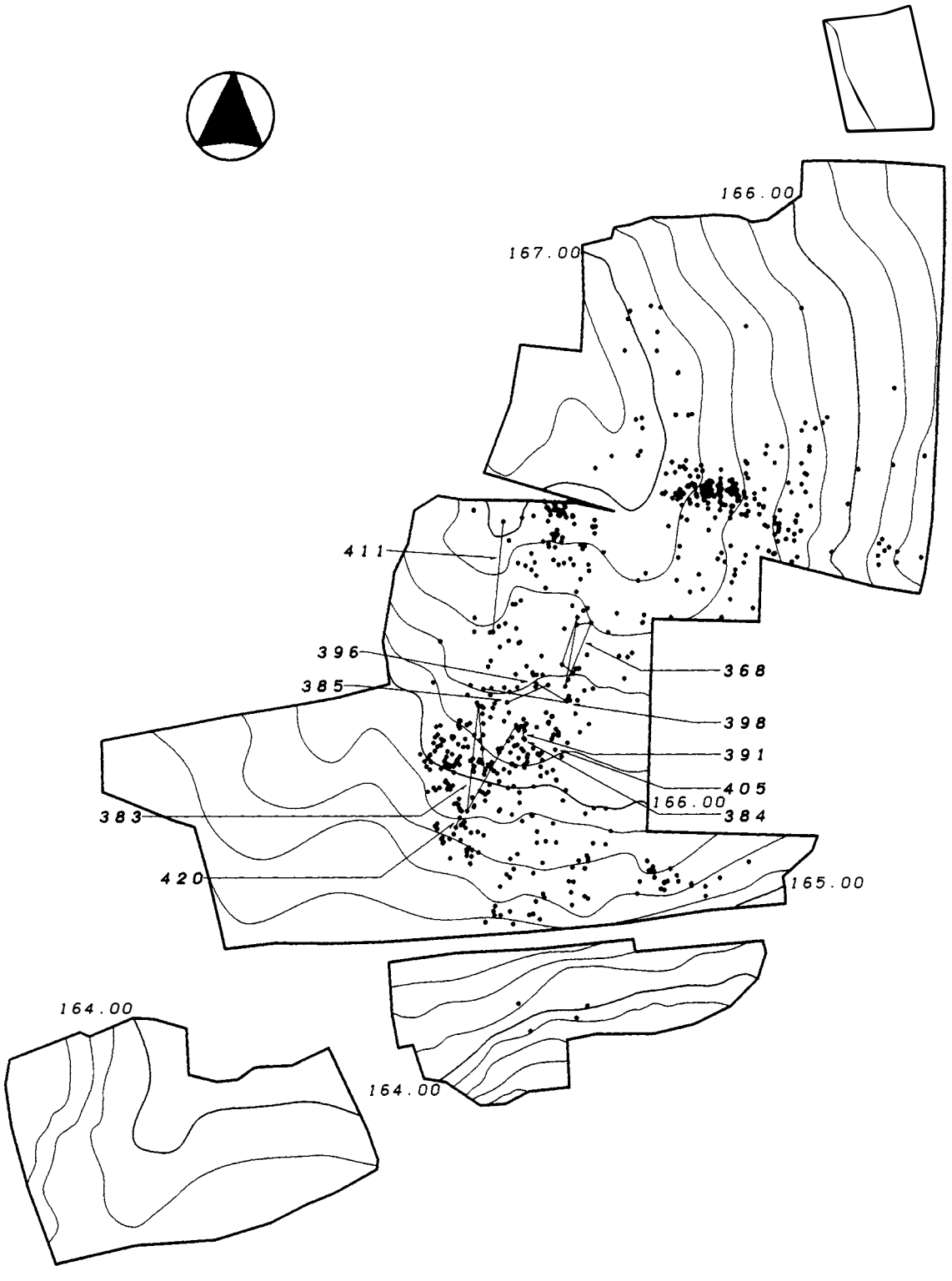
522～541は押型文以外の施文で沈線・突帯を主体とするグループである。**522～531**は沈線施文であるが **522**はミミズばれ文と称する微隆起文で、内湾する口縁である。**523・524・526**は横位沈線、**525**は横位であるが波状を呈し、**527・528**は斜行施文である。



第88図　第7類土器実測図（10）



第89図　第７類土器分布図（貝殻）



第90図　第７類土器分布図（撚糸）

526・527は口唇部に刻みを有し、直口気味に立ち上がる。529・532は櫛状施文具を使用し、529は縦位、532は横位後縦位、533は縦位施文であるがジグザグに施されているため、これにより山形文状を形成している。このタイプは第３類３－Ｊの 273･276･281の内器面に見られた。535～537は經部資料で 534は横位後縦位 535・536は櫛状施文具によるものであるが 535は横位、536は縦位の施文方向である。537は鋭利な施文具を使用し横位・斜行に施文。

538～539は突帯を持つ口縁部である。538・539は摘みあげたような僅かな突帯を口唇部に巡らし、刻みを施す。外器面は沈線を地文とし横位の沈線を施文とする。540は口唇部に刻みを有し、外器面上位は棒状施文具による２条の連続刻みを斜方向から施し、下位は横位沈線施行により形成された凸状に鋭利な施文具により緻密な連続縦位のが観察される。541は丁寧なナデ調整後、２条の凸帯刻みを持つ口縁でやや外反する。

文様体では 498～518・520～522・529・533・536～535は第３類土器、519・538～541は第５類土器の性格と類似し、沈線施文の29号土坑出土 16は、497・524は第７類の凹線系か。

第93図は 498～518・520・521の押型文を伴う土器群の分布で、第94図は第８類全体の分布である。

第９類土器(異形土器)　(第95図～97図　542～557)

この第９類は本来ならば１～８類上にてそれぞれ分類すべきであるが点数としては小数であるため、１形態としてここに提示する。

１　ミニチュア土器　(第95図　542～545)

第４類よりさらに小型をミニチュア土器とした。542は胴部から底部にかけての資料である。円筒形で平底を呈し、胴部には蛇行した細沈線が不定型に施され、残存高5.2㎝を測る。543は算盤玉状の胴部に平底を呈し、復元により最大径７㎝程で外器面・内器面にナデ調整が施されている。544は胴部から底部にかけての資料で外器面に斜行の沈線が確認されるが風化が激しい。平底の底部から外反しながら立ち上がる。残存3.3㎝。545は底部資料で復元径3.8㎝の平底から大きく開きながら立ち上がる。

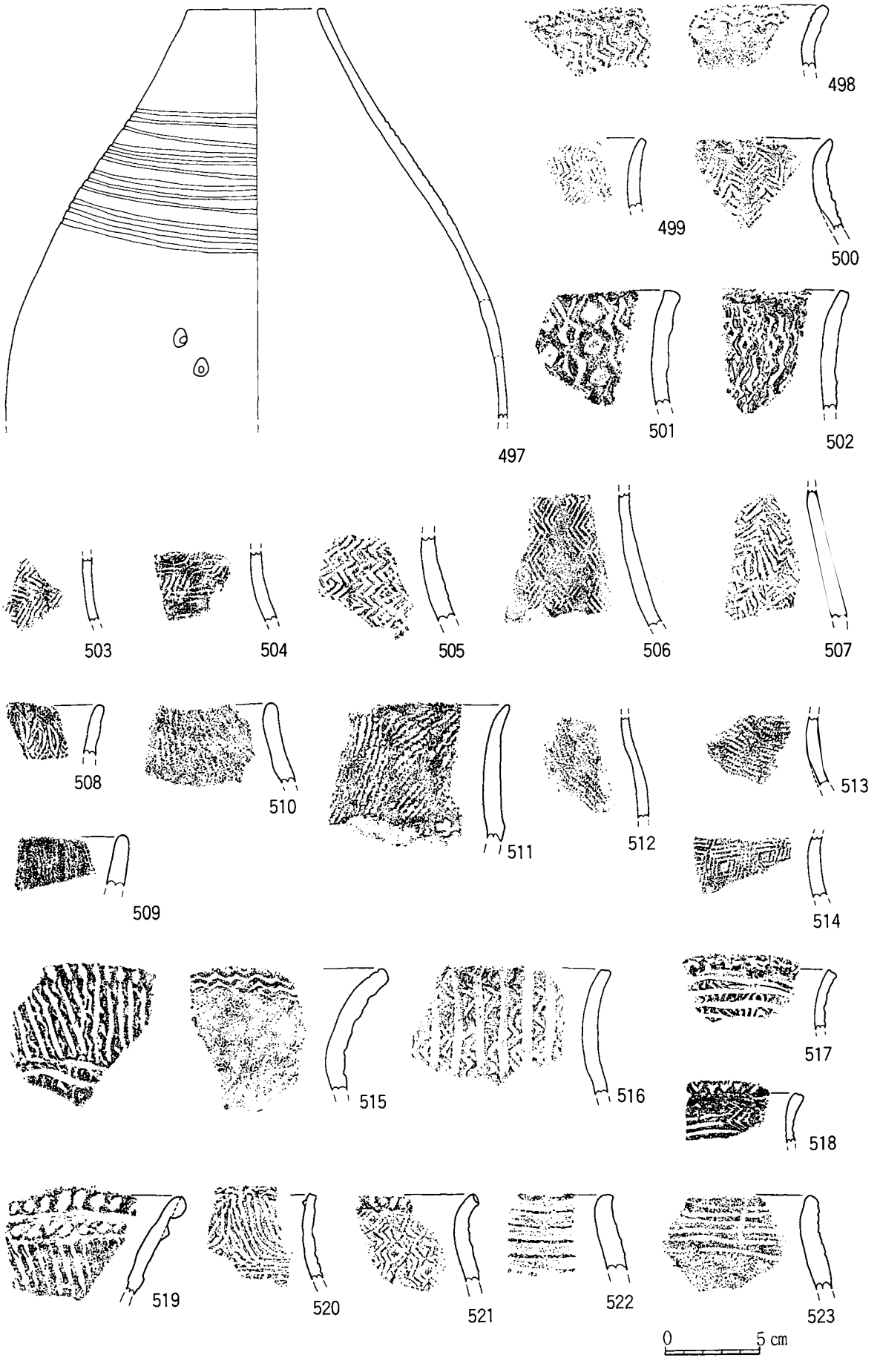
２　突起物付き土器　(第95図　546・547、第96図　548・549)

これまで見られない突起物のある土器群でここにポリープ状突起物土器とここで仮称し掲載する。546は径2.4㎝高0.7㎝程度の円筒形の突起を貼付た後、山形施文を行っているが風化が激しい。547は小型土器で口縁部から胴部に山形施文が縦位に見られる。口縁部と胴部に突起物があり、それぞれの先端は破損しているが、各傾きから把手状に連続する可能性がある。549は外反する口縁部にミミズばれ文横位を巡らした後、横長の突起物を持つ土器で、547の形態と酷似しているが先端部が破損しているため突起状か把手状になるかの判断は困難である。548は２種の異なる施文具による沈線を施され、僅かであるが凸帯が残存する。沈線上に瘤状の突起物が貼付けられて、摘みあげたような感を持つ。549は３類－Ⅰの口縁部、547も３類のミニチュア・546は形状不明であるが押型山形文を持つ。548は沈線＋凸帯で形式は不明であるが第３類－Ｋの範疇として捉えるか。

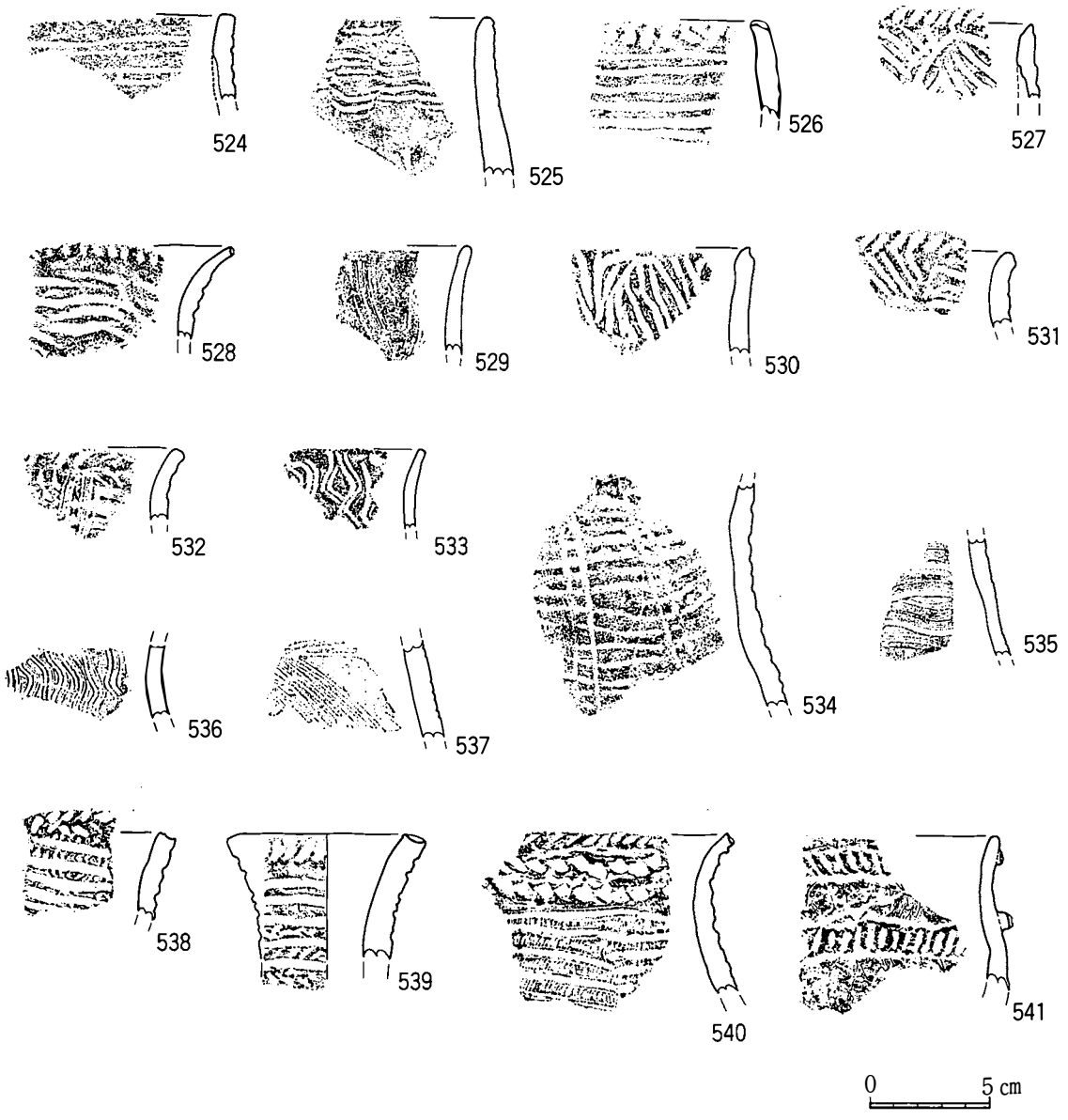
３　円形状土製品　(第96図　550～554、第97図　555～557)

土器片を円形に打ち欠いて成形を行った製品で、その形から円形状土製品と呼ばれるものである。総数８点が出土した。いずれも早期土器に包括されるもので、遺構に伴わずほとんどが包含層によるものである。

ほとんどの製品は打ち欠いだものであるが、550は加工面を打ち欠くいだ後、研磨調整を行ったと思われ、その断面は半円状を呈する。552は口縁部から胴部の資料であるがほとんどの製品は胴部を使用している。いずれも文様体を伴うが 550は無文であるが浅い刺突が観察できる。この円形状土製品について諸問題が生じるが、打ち欠きによる形成という視点からこの製品は当初から意図的に作り出したものでなく、土器製品の二次的利用である可能性が高いが、550は成形段階から意図的に製作された可能性もある。出土点数は僅少で出土地点にも傾向が見られないことから、直接生産に係わる遺物ではなく、遊技等に使用されたものか。



第91図　第8類土器実測図（1）



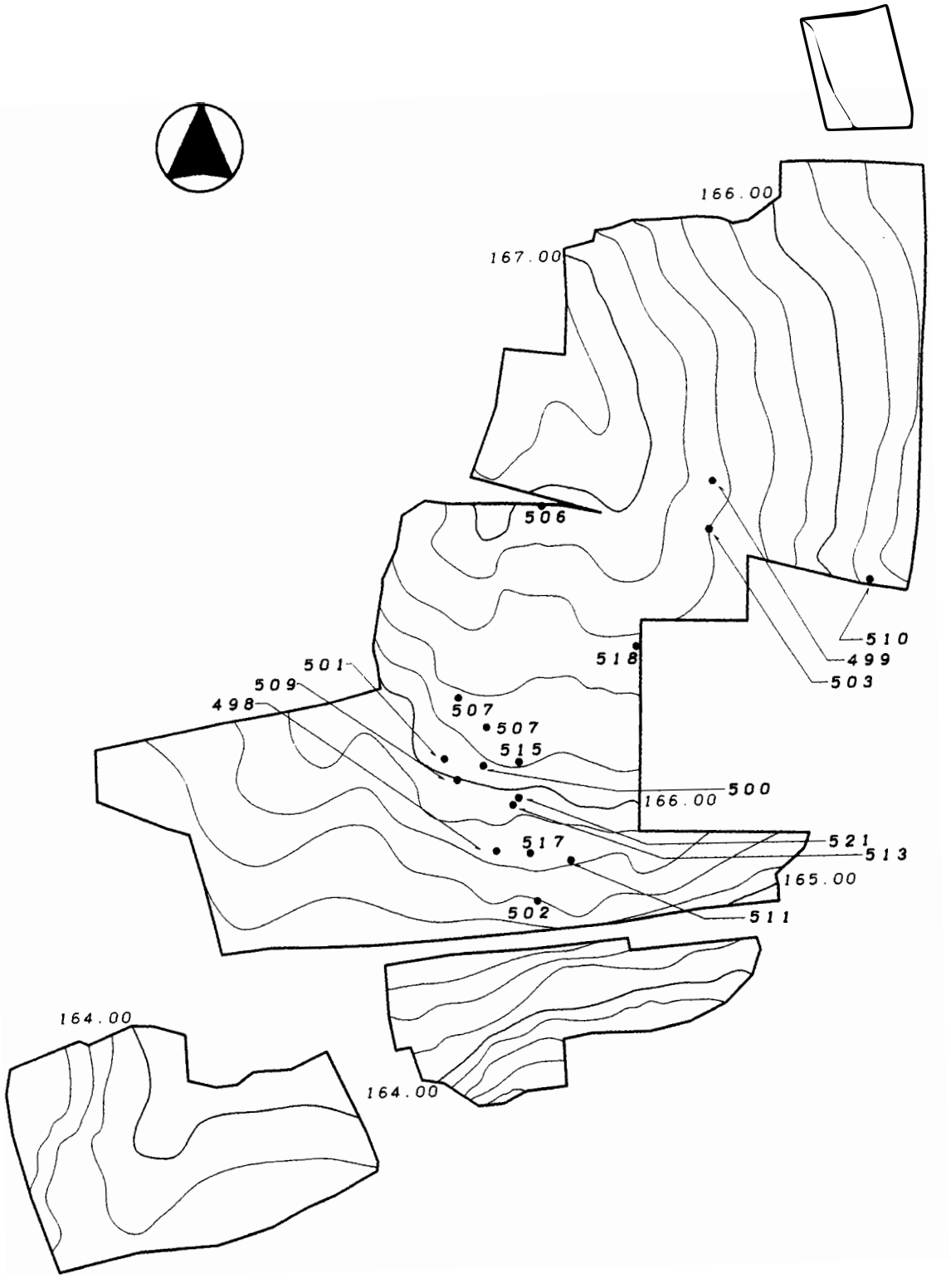
第92図　第８類土器実測図（２）

10類土器　（第98図～99図　**558～561**）

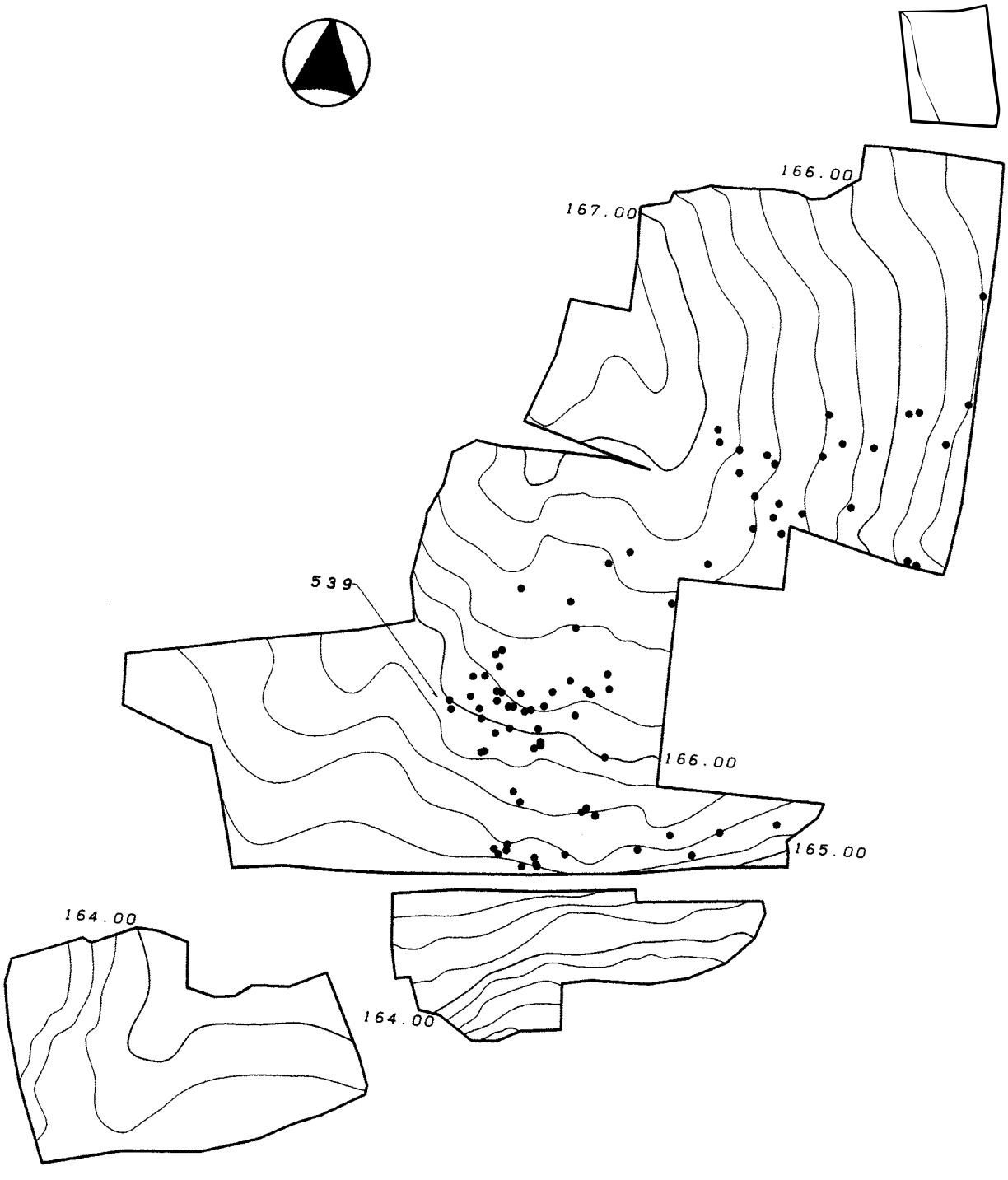
この類は彩色が施されている群で、土器及び土製品に認められる。彩色に関しては鹿児島県埋蔵文化センター大久保浩二 文化財主事に科学分析を依頼した。その内容については第Ⅶ章科学分析を参照されたい。

1　耳栓　（第98図　**558～561**）

本遺跡では破片であるが４個体の耳栓が出土している。いずれも完形資料ではなく反転復元で図化した。輪鼓状形態であるため床に対し水平に仮置きという提示方法で説明を加えたい。形態は幅広く翼状面を上位とした場合、下位は平坦部を形成するに留まるという傾向が見られる。耳栓はいずれも遺構に伴うものではなく、包含層からの出土でその層から早期遺物と思われる。**558**は残存部1/3強ほどで、復元により内径３㎝を測る。上位を欠失しているが内器面から上位にかけて赤色彩が観察される。下位は丸み面である。**559**も残存部1/3強ほどで上位を欠失している。内器面にわずかな赤色彩が観察される。内径は3.5cm程である。下位は床に対し水平な平坦面を作り出している。**560**は上位資料で復元外径を8.1cm・内径3.5cmを測る。上位面に僅かではあるが



第93図　第８類土器分布図（１）

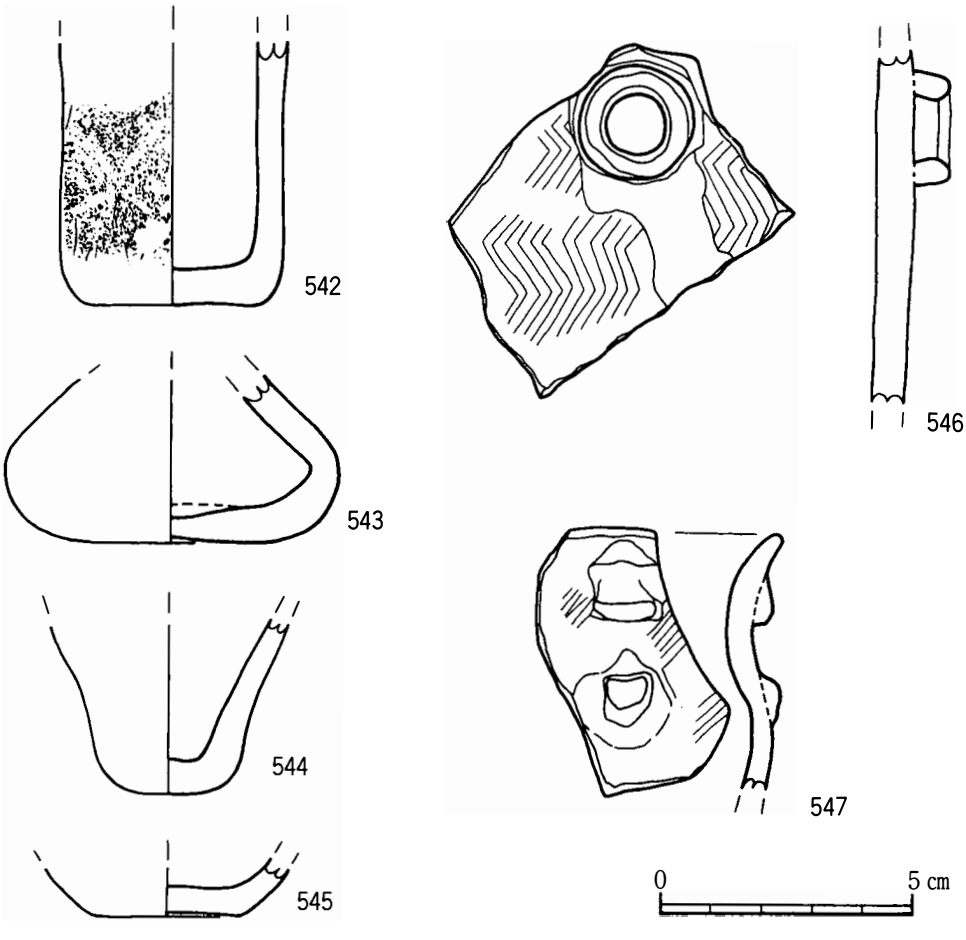


第94図　第８類土器分布図（２）

赤色彩が観察でき、下位は欠失のため形態は不明である。内器面に斜行の沈線が施され、上位は沈線状も見られる風化が激しく明確にできない。**561**も上位資料で復元外径を5.3㎝に測り、他の資料と比較すると小型の耳栓である。彩色は確認でなかったが耳栓という遺物から整理上ここに仮置した。

２　彩色土器　（第98図～99図　**562～564**）

562は第３類土器の口縁部と思われ、間伸びした山形文に沈線を施す。全体に淡くピンク色の彩色である。**563**は条痕が施され第１類土器に該当すると思われ、濃い赤彩色が条痕にある。第Ⅶ章の科学分析で明らかになったが同じ赤彩色でも **562**はＦｅ(酸化第二鉄）を持ついわゆるベンガラ使用で、**563**はＳｉ(ケイ素)とＡｌ(アルミニウム)とFe_2O_3(酸化第二鉄）のピークを持つものであった。視覚的には赤彩色と映るが、その素材に差異が生じる例で、広義の赤彩色として以上の土器片を提示した。**564**は第３類土器縄文施文で、黒彩色が口縁部の外器面から内器面に見られる。断面観察により断面にも黒彩色が見られることから、使用された塗材はタールや漆類ではなく、焼成時の炭素（Ｃ）付着か、素材に炭素が入り込み付着した可能性が考えられるが、黒彩色が意図的に行われたか突発的発生か、土器の残存部からでは判断は困難であるが、参考としてここに提示する。

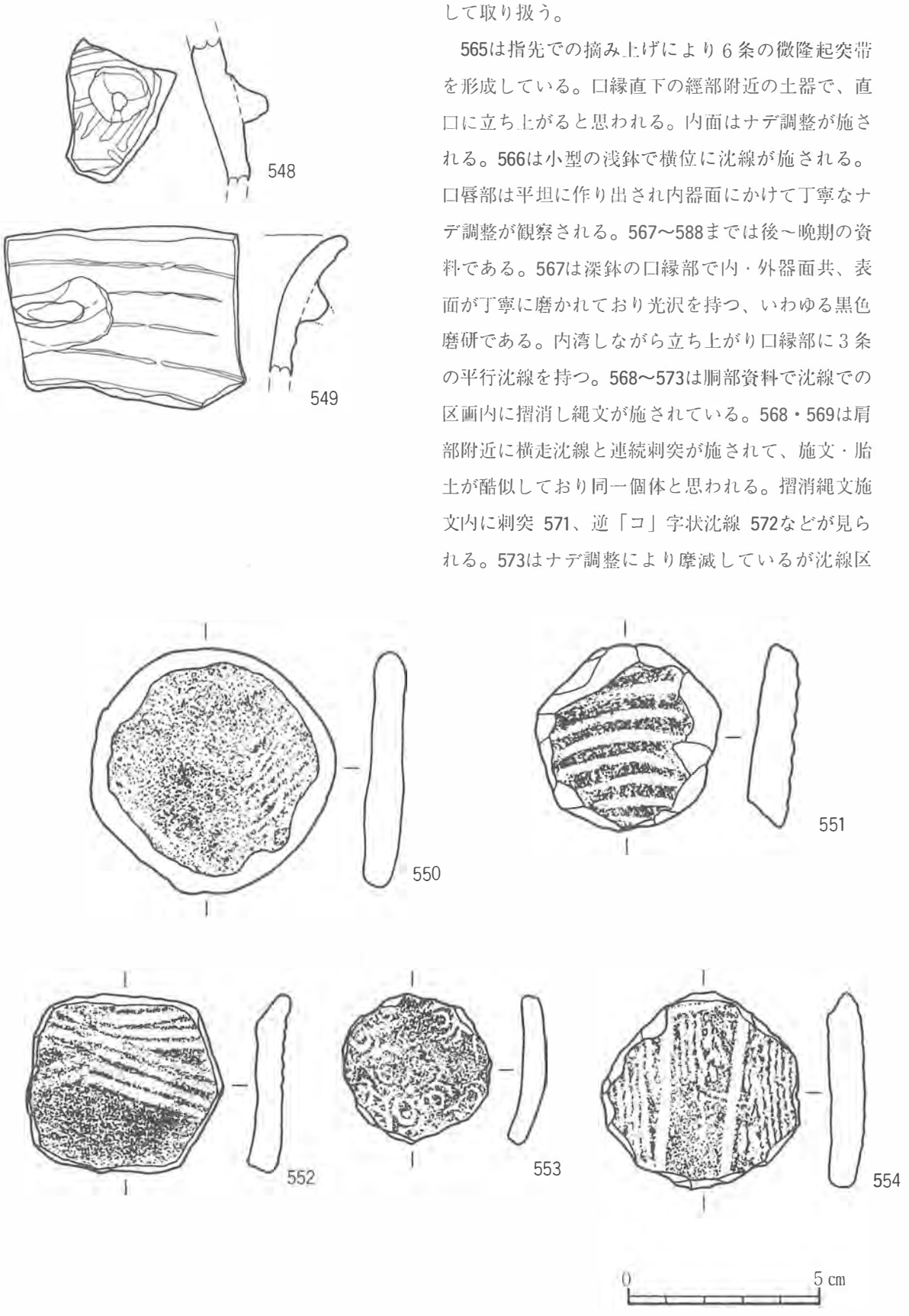


第95図　第９類土器実測図（１）

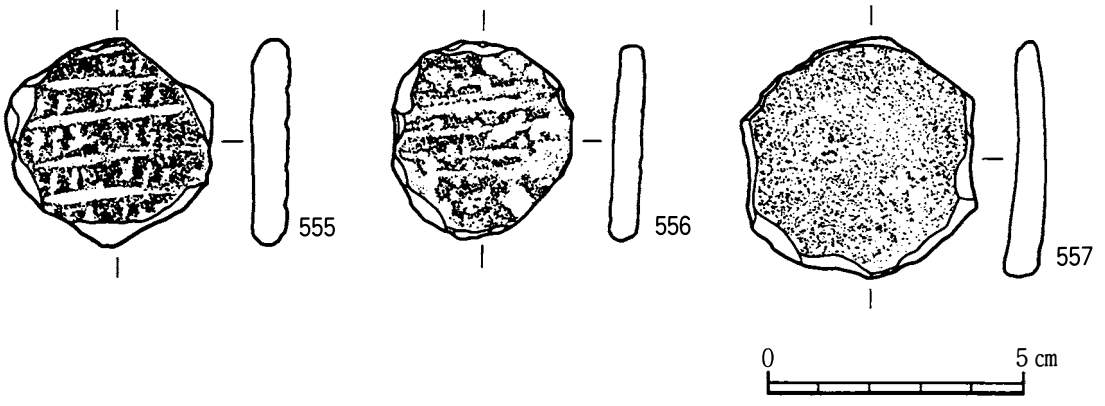
第２節　縄文時代前・中・後～晩期

ここでは縄文時代前・中・後～晩期の土器を一括して取り扱う。

565は指先での摘み上げにより６条の微隆起突帯を形成している。口縁直下の経部附近の土器で、直口に立ち上がると思われる。内面はナデ調整が施される。566は小型の浅鉢で横位に沈線が施される。口唇部は平坦に作り出され内器面にかけて丁寧なナデ調整が観察される。567～588までは後～晩期の資料である。567は深鉢の口縁部で内・外器面共、表面が丁寧に磨かれており光沢を持つ、いわゆる黒色磨研である。内湾しながら立ち上がり口縁部に３条の平行沈線を持つ。568～573は胴部資料で沈線での区画内に摺消し縄文が施されている。568・569は肩部附近に横走沈線と連続刺突が施されて、施文・胎土が酷似しており同一個体と思われる。摺消縄文施文内に刺突 571、逆「コ」字状沈線 572などが見られる。573はナデ調整により摩滅しているが沈線区



第96図　第９類土器実測図（２）

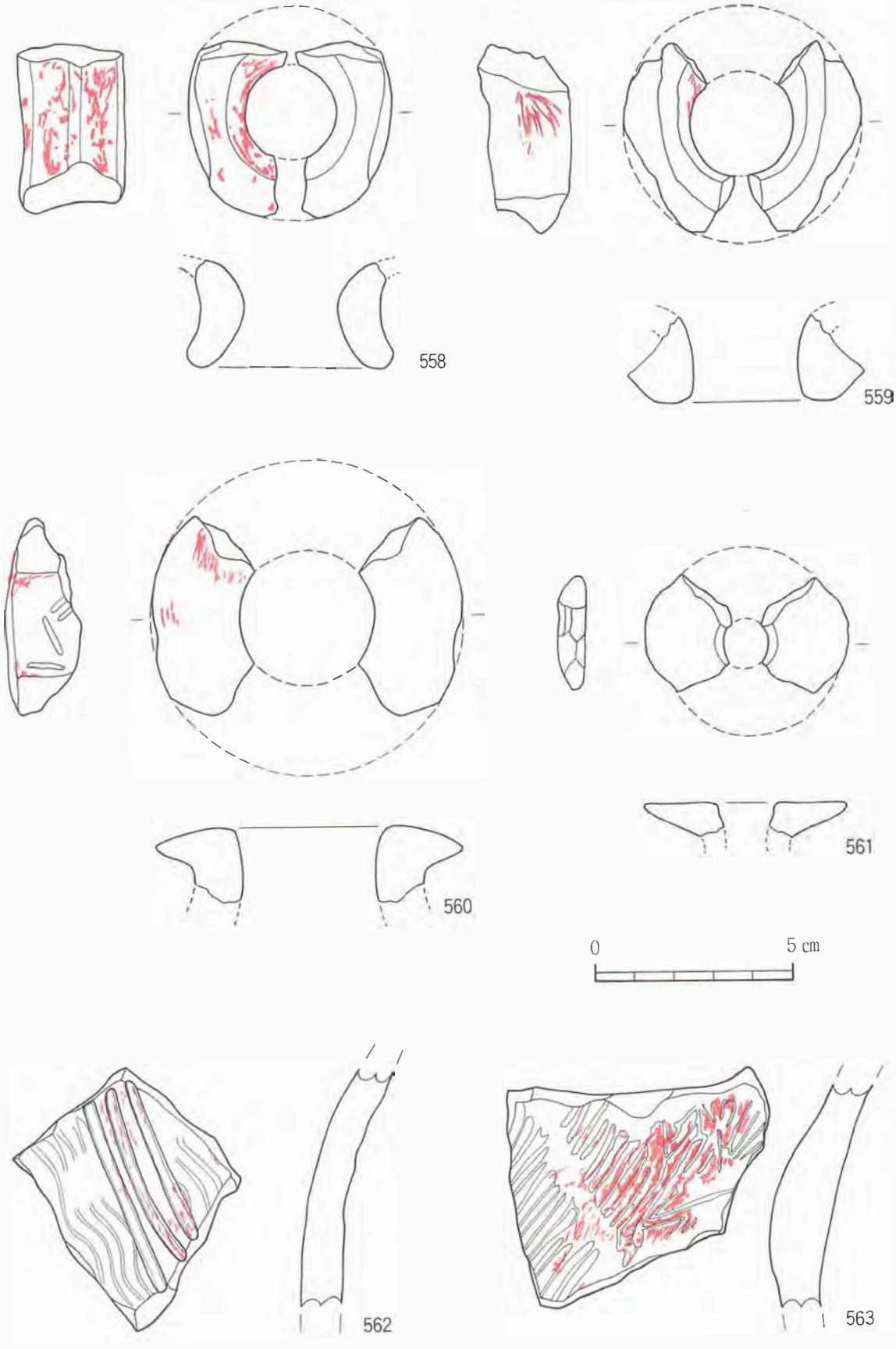


第97図　第９類土器実測図（３）

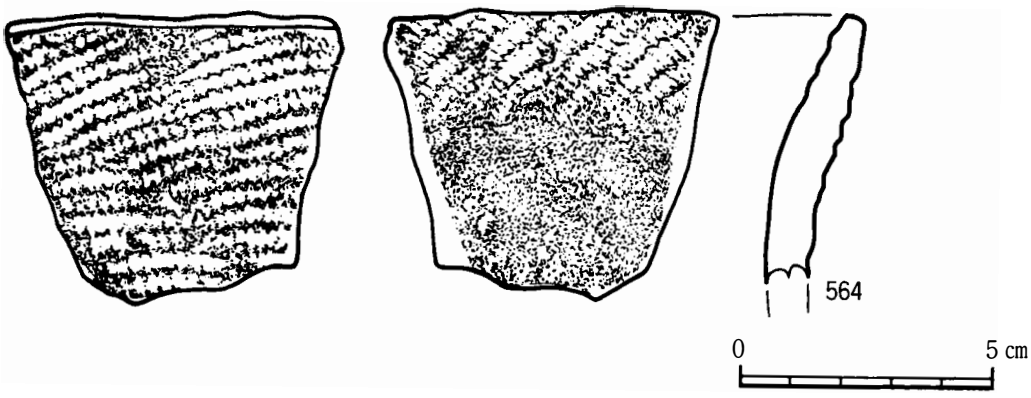
第５表　円盤状土製品観察表　　(単位；cm，g)

挿図番号	No.	縦	横	厚さ	重量	文様体
96	550	6.3	6.4	1.0	54.3	撚糸文
	551	4.8	4.8	1.1	31.5	沈線
	552	4.6	5.1	0.8	28.4	沈線
	553	3.9	4.0	0.6	13.0	同心円文
	554	5.1	5.2	0.9	29.1	撚糸文＋沈線
97	555	4.1	4.1	0.7	14.8	沈線地文＋沈線
	556	3.9	3.5	0.5	10.6	沈線＋刺突
	557	4.7	4.4	0.6	20.9	無文＋刺突

画内に摺消縄文が確認できる。いずれも精製土器である。**574**は口縁部に突帯を貼付け摘み上げを行っている。内外器面とのナデ調製を行うが粗製である。**575～578**は深鉢の口縁部～胴部資料である。**575**は粗製であるが内器面に丁寧なナデ調整で口縁部は波状傾向にある。**577**は口縁部に斜行沈線が施され、内面は丁寧なナデ調整、**578**は内外器面とも丁寧なナデ調整が施される。**579**は腕資料で、平底の底部からゆるやかに立ち上がり、内外器面とも丁寧なナデ調整が施される。**580～587**は浅鉢資料である。**581～585**は口縁部に平行沈線を持ち、**582**は口唇部にリボン状、**583**は帯状の突起を有する。**588**は底部資料で簾状の圧痕が明瞭で、内器面は黒色磨研が施されている。**586・587**は大型の浅鉢で器面はナデ調整であるが、内器面は黒色磨研が施されている。同一個体であろう。**565**は轟Ｂ、**566**は曽畑、**567～573**は三万田系、**577**は市来、**574～576・578～587**まで黒川系か。



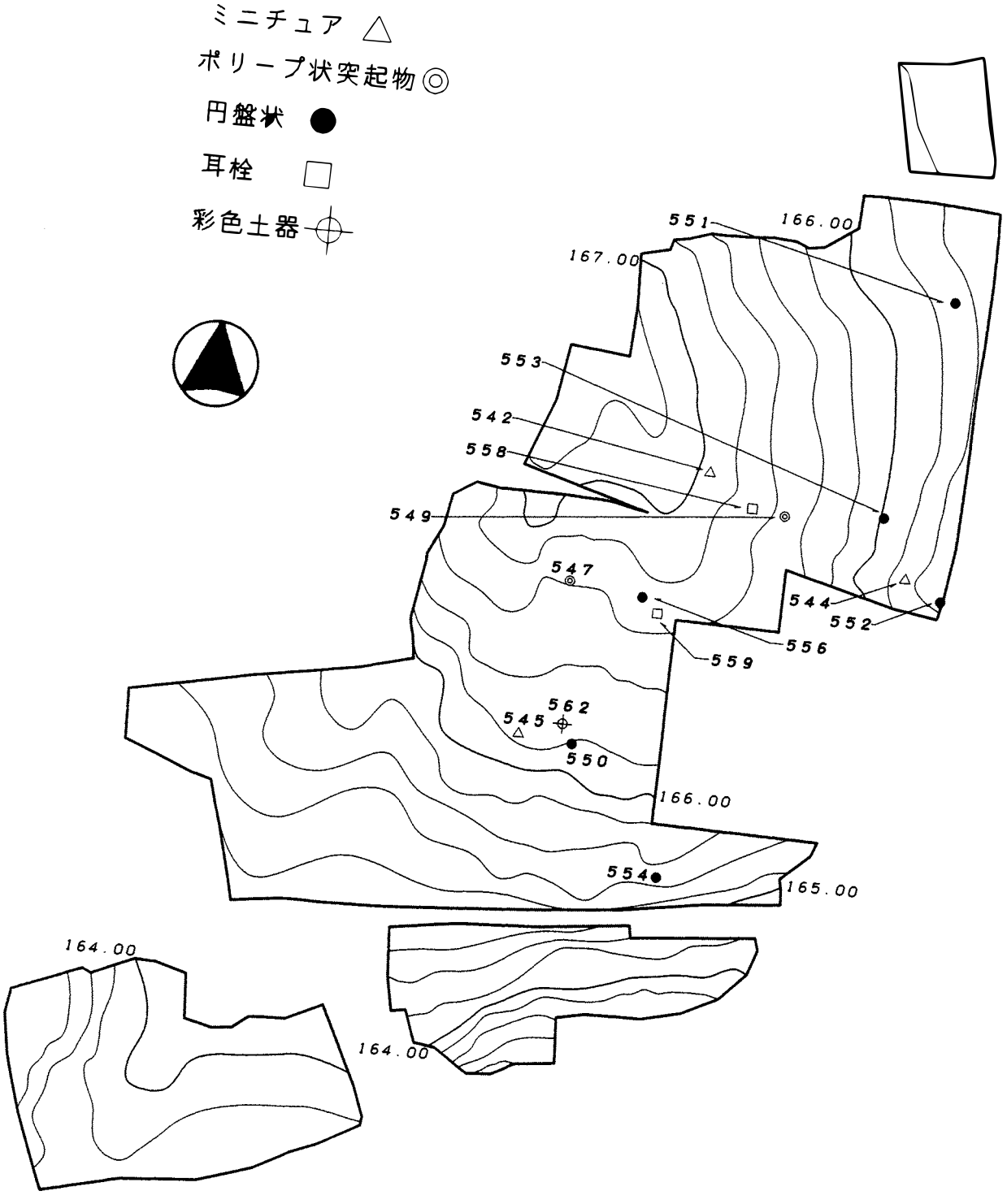
第98図　第10類土器実測図（１）



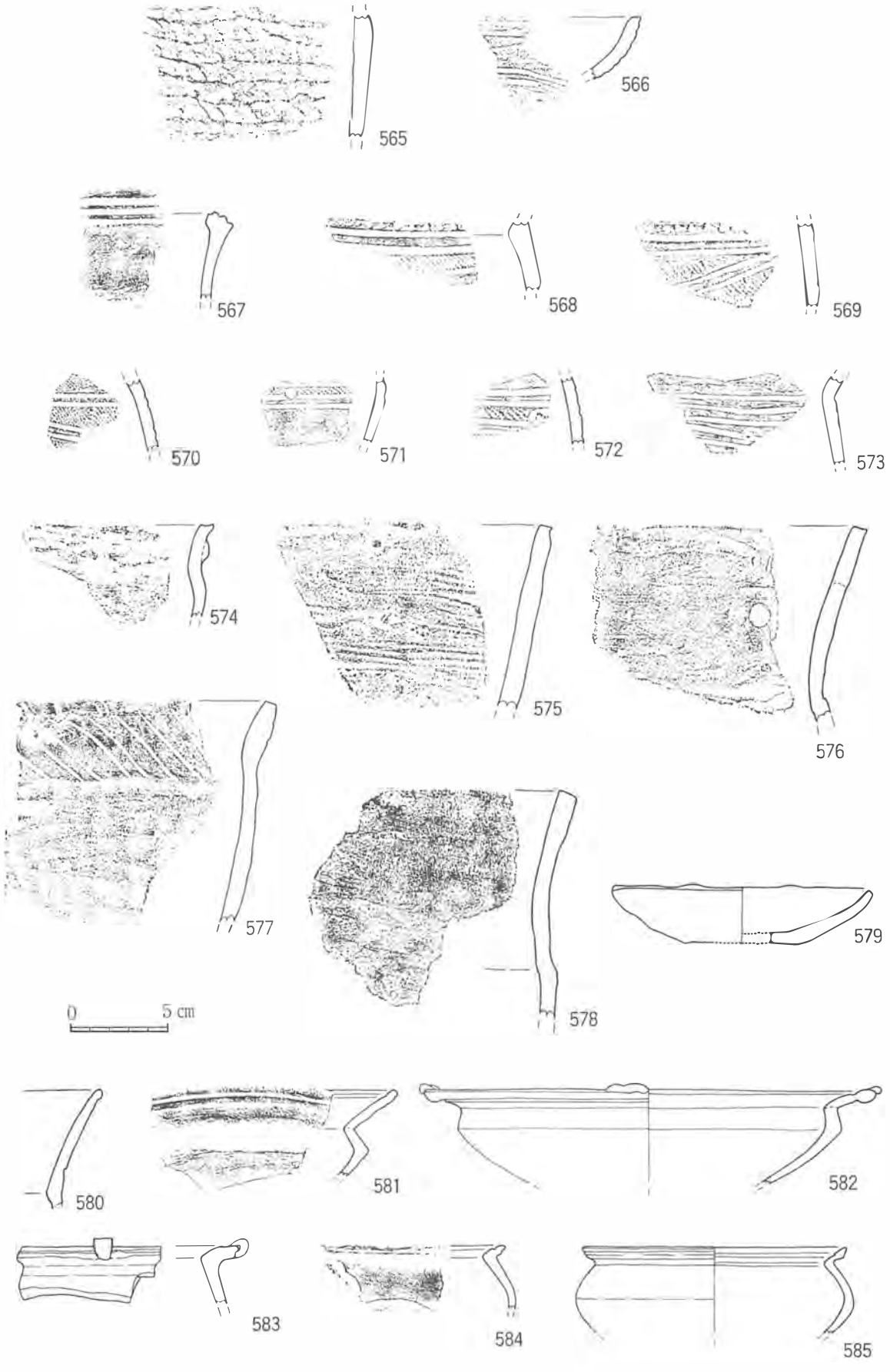
第99図　第10類土器実測図（２）

第６表　第10類土器観察表

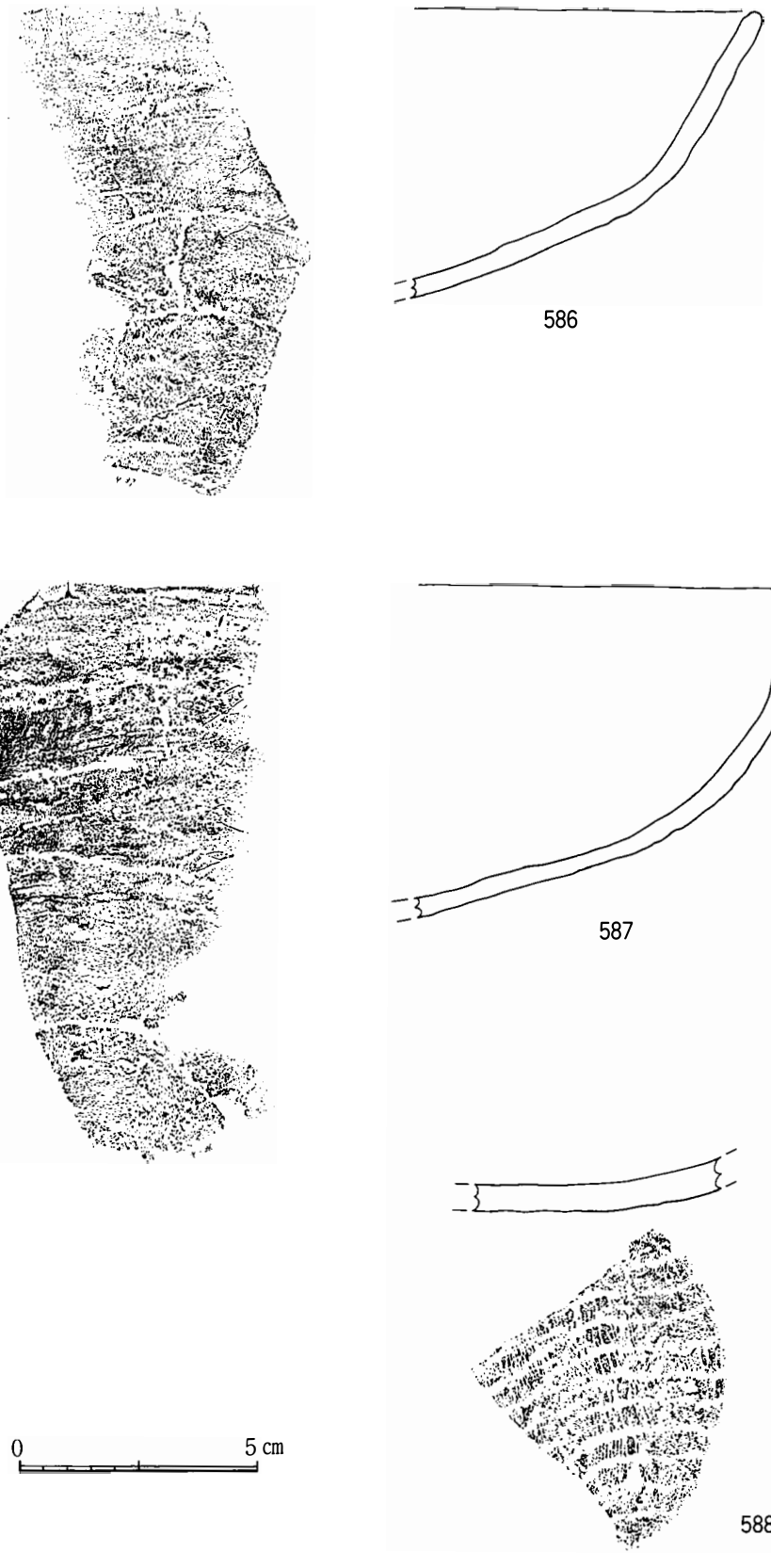
挿図番号	番号	種別	色調	胎土	土色	備考
98	558	耳栓		石英・長石	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	残存1/3強
			彩色		明赤褐 Hue2.5YR5/8	
	559	耳栓		長石	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	残存1/3
			彩色		赤 Hue10R4/8	
	560	耳栓		石英・角閃石	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	残存1/4
			彩色		赤橙 Hue10R6/8	
	561	耳栓		石英	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	残存1/5
	562	土器片		石英・長石	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	第３類　山形＋沈線
			彩色		赤橙 Hue10R6/8	
	563	土器片		石英	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	第１類？　条痕
			彩色		赤 Hue10R4/8	
99	564	土器片		石英	橙 Hue7.5YR6/6	第３類　縄文
			彩色		黒 Hue10Y2/1	



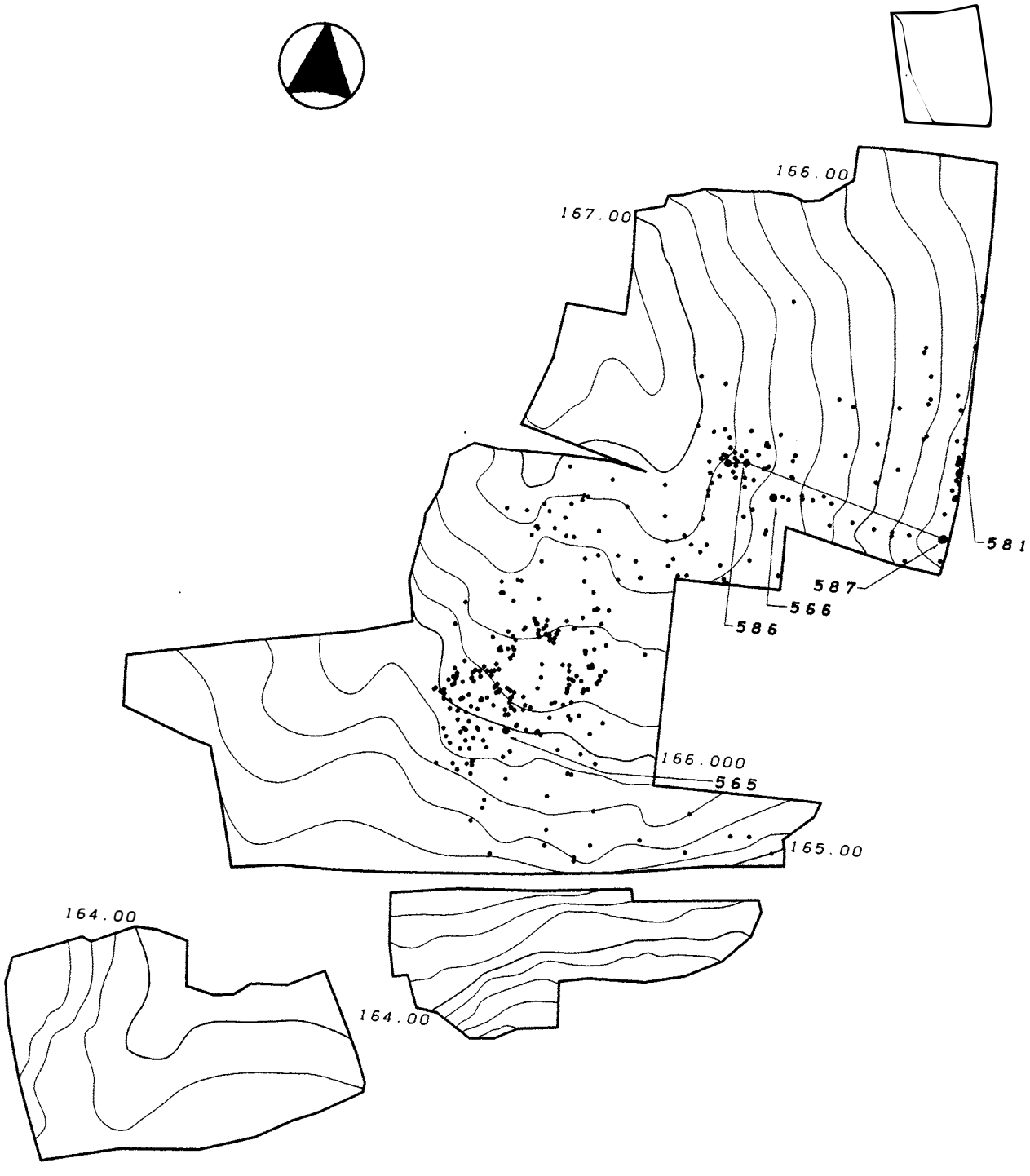
第100図　第9・10類土器分布図



第101図　縄文前中後晩期土器実測図（１）



第102図　縄文前中後晩期土器実測図（２）



第103図　前期～後・晩期土器分布図

第7表　早期土器参考表（1）

挿図番号	遺物番号	類	出土グリット	層	出土地
31	1	3	P−16		3号土坑
33	2	3	J−14		5号土坑
	3	3	J−14		5号土坑
34	4		J−14		5号土坑
39	5	3	D−5		22号土坑
42	6	8	G−9		27号土坑
	7		G−9		27号土坑
	8		G−9		27号土坑
43	9		G−9		27号土坑
	10		G−9		27号土坑
	11		G−9		27号土坑
	12	3	G−9		27号土坑
44	13	8	G−9		28号土坑
	14		G−9		28号土坑
	15		G−9		28号土坑
	16	8	G−12		29号土坑
46	17	8	F−11		34号土坑
48	18	1			註記不明
	19	1	M−13	4	
	20	1			註記不明
	21	1	N−12	4	
	22	1	M−18		撹乱
	23	1			註記不明
	24	1	J−15	4	
	25	1			D区調査区
	26	1	L−12		後世のPit内に混在
	27	1	H−11	4	
	28	1			A区調査区
	29	1	P−15	4	
	30	1	K−13	4	
	31	1	K−13	4	
	32	1	N−17	4	
	33	1	L−13	4	
	34	1	E−10	4	
	35	1	G−15	4	
	36	1	N−14	4	
	37	1	M−13	4	
	38	1	EFG−1		後世の遺構に混在
	39	1			註記不明
	40	1	J−12	3	
	41	1	M−9		後世のPit内に混在
	42	1	H−16	4	
	43	1	M−13	4	
	44	1	M−16	4	撹乱（横転層）
	45	1	E−9	4	
49	46	1	H−11	4	
	47	1	L−14	4	
	48	1	G−9	4	
	49	1	G−9	4	
	50	1	N−14	4	
	51	1	P−15	4	
	52	1	F−12	4	
	53	1	L−14	4	
	54	1	L−13	4	
51	55	2		4	
	56	2			D区
	57	2	K−11	4	
	58	2	K−13	4	
	59	2	K−14	4	
	60	2	F−11	4	
	61	2	N−11	4	
	62	2	M−13		後世の遺構に混在
	63	2	N−16	4	
	64	2	P−15	4	
	65	2	N−18	4	
	66	2	P−16	4	
	67	2	N−16	4	
	68	2	D−5		後世の遺構に混在
	69	2	H−16	4	
	70	2	N−11	4	
	71	2	L−17		撹乱
	72	2	M−18		後世の遺構に混在
	73	2	E−7	4	
	74	2	E−8	3	
	75	2	G−13	4	
	76	2	K−6		後世の遺構に混在
52	77	2	N−12		撹乱（横転層）
	78	2			E区一括
	79	2	M−16		後世の遺構に混在
	80	2			C、D区調査一括
	81	2	N−14	4	
55	82	3	M−13	4	
	83	3	N−12		9号集石
	84	3	D−9	4	
	85	3	L−13		後世のPit内に混在
	86	3	L−7	3	
	87	3	K−14	4	
	88	3	K−13	3	
	89	3	N−16	4	
	90	3	P−13	4	
	91	3	J−13	3	
56	92	3	L−14	4	
	93	3	M12	4	
	94	3	K−11		後世のPit内に混在
	95	3	L−14	3	
	96	3	E−9	4	
	97	3	N−16		後世のPit内に混在
	98	3	L−14	4	
	99	3	E−6	4	
	100	3	F−8	3	

挿図番号	遺物番号	類	出土グリット	層	出土地
56	101	3	P−15	4	
	102	3	E−9	4	
	103	3	H−15	4	
	104	3	G−8	4	
	105	3			A区調査区
	106	3			E区調査区
	107	3	E−8	3	
57	108	3	H−11	4	
	109	3	M−15	4	
	110	3	M−13	4	
	111	3	P−15	4	
	112	3	M−13	4	
	113	3	G−8	4	
	114	3	F−13	4	
	115	3	E−6	4	
	116	3	M−9		後世の遺構に混在
	117	3	D−10	4	
	118	3	F.G−10	4	
	119	3	G−9	4	
	120	3	E−8	4	
	121	3	F−8	3	
	122	3			調査区
	123	3	E−9	4	
	124	3	H−16	4	
	125	3	P−16	4	
	126	3	H−16		後世の遺構に混在
	127	3	G−7	4	
	128	3	G−8	3	
	129	3	H−16	4	
	130	3	B−1		後世のPit内に混在
58	131	3	H−16	4	
	132	3	D−7	4	
	133	3	P−12	4	
	134	3	E−8	3	
	135	3			後世のPit内に混在
	136	3	M−13		7号土坑
	137	3	D−30		後世の遺構に混在
	138	3	M−12	3	
	139	3			撹乱
	140	3	F−7	3	
	141	3	E−9	4	
	142	3	K−10		後世のPit内に混在
	143	3	E−8	4	
	144	3	E−7	4	
	145	3	G−6	4	
59	146	3	M−13		
	147	3	P−13		
	148	3	N−14		後世の遺構に混在
	149	3	F−6	4	
	150	3	K−6	4	
	151	3	L−14		後世のPit内に混在
	152	3	N−14	4	
	153	3	E−9	4	後世のPit内に混在
	154	3	E−6	4	
	155	3	L−7	4	
	156	3	K−13	3	
	157	3	G−8	4	
	158	3			撹乱（横転層）
	159	3	G−6		後世の遺構に混在
	160	3			C区調査区
	161	3	L−13	4	
	162	3	M−8		後世のPit内に混在
	163	3	N−9		後世のPit内に混在
	164	3	G−11	4	
	165	3	E−9		44号集石
	166	3			E区調査区
	167	3	G−7	4	
	168	3	E−9	4	
60	169	3	G−6		後世の遺構に混在
	170	3	E−10	4	
	171	3	L−17		後世の遺構に混在
	172	3	G−6		後世の遺構に混在
	173	3	N−15	4	
	174	3	H・J−11	4	
	175	3	E−10	4	
	176	3	G−6		
	177	3	E−8	4	
	178	3	H−11	4	
	179	3	H−10	4	
	180	3	M−13	4	
	181	3	L−19		後世の遺構に混在
	182	3	N−13		後世の遺構に混在
	183	3	E−7	4	
	184	3	N−14		撹乱（横転層）
	185	3	H−11	4	
	186	3	J−10		後世の遺構に混在
	187	3	L−14	4	
61	188	3	L−13	4	
	189	3	P−15	4	
	190	3	N−11	4	
	191	3	L−9		後世のPit内に混在
	192	3	J−11	4	
	193	3	E−6	3	
	194	3	M−15	4	
	195	3	H−13	4	
	196	3	D−5		後世の遺構に混在
	197	3	N−13		撹乱（横転層）
	198	3	G−6		後世の遺構に混在
	199	3	G−6		後世の遺構に混在
	200	3	L−11		後世のPit内に混在

第８表　早期土器参考表（２）

挿図番号	遺物番号	類	出土グリット	層	出土地
61	201	3	N－12	4	
	202	3	K－３、４		後世の遺構に混在
	203	3	F－７	4	
62	204	3	J－12	4	
	205	3	K－13	3	
	206	3			A区調査区
	207	3	G－11	3	
	208	3	H－12	4	
	209	3			B区調査区
	210	3	H－11	4	
	211	3	N－12	4	
	212	3	G－８	4	
	213	3	K－９		後世のPit内に混在
	214	3	L－９	4	
	215	3	E－７	4	
	216	3	F－８	4	
	217	3	L－14	4	
	218	3	M－13	4	
	219	3	N－12	4	
	220	3	K－11	4	
	221	3	N－11	4	
	222	3	F－６	4	
63	223	3	D－9･E－8･F－8	4	
	224	3	E－10	4	
	225	3	F－８	3	
	226	3	L－13	4	
	227	3	E－９	4	
	228	3	H－８		後世のPit内に混在
	229	3	G－６	4	
	230	3	G－７	4	
	231	3	A－６	4	
	232	3	E－８	4	
	233	3	G－７	3	
	234	3	L－14	4	
	235	3	L･K－12　M－13	3	
64	236	3	M－16		後世の遺構に混在
	237	3	E－９	4	
	238	3	E－６	3	
	239	3	L－12		後世の遺構に混在
	240	3	N－11	4	
	241	3			D区調査区
	242	3	N－13		撹乱（横転焼）
	243	3	L＝14	4	
	244	3	K－13	3	
	245	3	P－19	4	
	246	3	D－５		後世の遺構に混在
	247	3	N－15、16		後世の遺構に混在
	248	3	D－７E－９	4	
	249	3	N－15	4	
	250	3	K－12	4	
	251	3	N－16	4	
	252	3	L－13	4	
65	253	3	N－11	4	
	254	3	F－９	4	
	255	3	H－12		撹乱（横転焼）
	256	3	K－７	4	
	257	3	N－10	4	
	258	3	L－14	4	
	259	3	E－８	4	
	260	3	F－８	4	
	261	3	B－０		後世の遺構に混在
	262	3	N－12	4	
	263	3	E－９	4	
	264	3	F－７	4	
	265	3	E－７	4	
	266	3	N－13		後世の遺構に混在
	267	3	K－８	4	
	268	3	N－14	4	
	269	3	L－９		後世のPit内に混在
	270	3			調査区
	271	3	E－８	4	
	272	3	M－12		撹乱（横転焼）
66	273	3	E－８	4	
	274	3	L－13	4	
	275	3			註記不明
	276	3	G－９	4	
	277	3	F－８	4	
	278	3	F－５	4	
	279	3	H－５	4	
	280	3	G－８	4	
	281	3	M－９		後世のPit内に混在
	282	3	E－９	4	
	283	3	M－13	4	
	284	3	K－18	4	
	285	3	L－18		後世のPit内に混在
	286	3	G－８	4	
	287	3	G－８	4	
	288	3	C－９		後世の遺構に混在
	289	3	P－15		後世のPit内に混在
	290	3			註記不明
	291	3			註記不明
67	292	3	G－６	3	
	293	3	D－７	4	
	294	3	E－10	4	
	295	3	E－８	4	
	296	3	F－９	4	
	297	3	K－13	4	
	298	3	K－13	4	
	299	3	E－１	4	
	300	3	K－13	4	

挿図番号	遺物番号	類	出土グリット	層	出土地
67	301	3	F－11	4	
	302	3	E－８	3	
	303	3	H－６		後世の遺構に混在
	304	3	L－12	4	
	305	3	G－８	4	
	306	3	J－５	4	
	307	3	E－７	4	
	308	3	M－16		撹乱（横転焼）
	309	3	F－８	4	
	310	3	K－６		後世のPit内に混在
	311	3	E－２	4	
	312	3	F－５	4	
68	313	3	F－８	4	
	314	3	F－７		後世の遺構に混在
	315	3	K－12・J－13	3	
	316	3	G－８		18号土坑
	317	3	N－18	3	
	318	3	F－８	4	
	319	3			５号土坑
72	320	4	G－６		後世の遺構に混在
	321	4	N－16		撹乱（横転焼）
	322	4			D区調査区
	323	4	N－16		撹乱（横転焼）
	324	4	N－16	4	
	325	4	F－11		34号土坑
	326	4	F－７		後世のPit内に混在
	327	4	F－９	4	
	328	4	L－14	4	
	329	4	G－９	4	
	330	4	H－10		後世の遺構に混在
	331	4	G－６	4	
74	332	5	H－５	4	
	333	5	F－９	4	
	334	5	F－５	4	
	335	5	E・F－９	4	
	336	5	G－８	4	
	337	5	H－９	4	
	338	5	H－９	4	
	339	5	H－14	4	
	340	5	G－９	4	
	341	5	H－６G－５	4	
	342	5	K－７	4	
	343	5	J－５		後世のPit内に混在
	344	5	C－９		後世のPit内に混在
	345	5	L－12	4	
	346	5	J－10		後世のPit内に混在
	347	5			C、D区調査区
	348	5	G－８	4	
			E－６	3	
			G－７	3	
	349	5	G－９	4	
	350	5	F－５	4	
	351	5	K－11	4	
	352	5	F－６	4	
	353	5	K－10		後世の遺構に混在
77	354	6			註記不明
	355	6	G－12	4	
	356	6	F－12	4	
	357	6			D区調査区
	358	6	K－９		後世のPit内に混在
	359	6	K－７	4	
	360	6	L－７	4	
	361	6	G－12	4	
	362	6	F－８	4	
	363	6	H－12	4	
	364	6	L－10		後世のPit内に混在
	365	6	F－７	4	
	366	6	J－５	4	
	367	6			A区調査区
79	368	7	G－10	4	
	369	7	W－０		37号土坑
	370	7	Z－５	4	
	371	7	F－５	4	
80	372	7			D区調査区
	373	7			C、D区調査区
	374	7	B－８		後世の遺構に混在
	375	7	F－12	4	
	376	7	F－９		D区調査区
	377	7	J－11		52号集石
	378	7	F－９	4	
	379	7	D－７	3	
	380	7	H－10	4	
	381	7	E－７	3	
81	382	7	F－９		後世の遺構に混在
	383	7	E－7.8.9　F－8	3	
				3	
				3	
				3	
	384	7	F－８	3	
	385	7	G－９F－９	4	
	386	7	E－８	4	
	387	7			後世の遺構に混在
	388	7	F－11	-4	
	389	7	K－９		後世のPit内に混在
	390	7	F－12	4	
	391	7	F－８	3	
82	392	7	G－10	4	
	393	7	G－９	4	
	394	7	F－９		41号集石
	395	7	G－５	4	

第9表　早期土器参考表（3）

挿図番号	遺物番号	類	出土グリット	層	出土地
82	396	7	G－9	4	
	397	7	H－9		後世の Pit 内に混在
	398	7	G－9	4	
83	399	7	J－13	3	
	400	7			後世の遺構に混在
	401	7	G－8	4	
	402	7	L－12	4	
	403	7	J－9	4	
	404	7	J－6	4	
	405	7	E－6	3	
	406	7	F－8	3	
	407	7	G－10	4	
	408	7	J－11	4	
	409	7	E－7	4	
	410	7	K－8	4	
	411	7	F－12	4	
	412	7	K－12	4	
	413	7	J－8	4	
	414	7			C 区調査区
	415	7	E－5		後世の遺構に混在
84	416	7	F－7	4	
	417	7	F－6		後世の遺構に混在
	418	7			C 区調査区
	419	7	G－5	4	
	420	7	E－7	4	
			E－6	4	
	421	7	J－8		後世の遺構に混在
	422	7	F－9	4	
			G－9	4	
	423	7	D－6	4	後世の Pit 内に混在
	424	7	E－10	4	
	425	7	F－10	4	
85	426	7	G－8	4	
	427	7	M－10		後世の Pit 内に混在
	428	7	G－9	4	
	429	7	L－13	3	
	430	7			後世の Pit 内に混在
	431	7	Z－6	4	
	432	7	E－8	3	
	433	7	H－5	4	
	434	7	H－13	4	
86	435	7	H－13		撹乱（横転層）
	436	7	F－5	4	
	437	7			後世の遺構に混在
	438	7	K－13	3	
	439	7	K－13	3	
	440	7			B 区調査区
	441	7	J－13	4	
	442	7	K－13	4	
	443	7	J－15		後世の遺構に混在
	444	7	K－9		後世の Pit 内に混在
	445	7			後世の遺構に混在
	446	7	K－7	4	
	447	7	G－11		撹乱（横転層）
	448	7	J－6		後世の遺構に混在
	449	7	E－6	4	
	450	7	K－7		後世の Pit 内に混在
	451	7	L－10	4	
	452	7	G－18	4	
	453	7	J－13	3	
	454	7	K－13		後世の Pit 内に混在
	455	7	H－11	4	
	456	7	K－6	4	
87	457	7	L－13		撹乱（横転層）
	458	7	F－13	4	
	459	7			F 区調査区
	460	7	F－12	4	
	461	7	J－13	3	
	462	7	G－7	4	
	463	7	J－14	4	
	464	7	E－5	4	
	465	7	L－13	4	
	466	7	H－13	4	
	467	7	G－9	4	
	468	7	G－11	4	
	469	7	K－8		後世の遺構に混在
	470	7	K－6		後世の Pit 内に混在
	471	7	L－10	4	
	472	7	K－13	3	
88	473	7	F－9	4	
	474	7	J－9		後世の遺構に混在
	475	7	K－13	4	
	476	7	G－10・12	4	
				4	
	477	7	H－13	4	
	478	7	K－13	3	
	479	7	F－9	4	
	480	7	H－15、14	4	
	481	7	H－15	4	
	482	7	J－10	4	
	483	7	J－8	4	
	484	7	E－6		24号集石
	485	7	E－8	4	
	486	7	J－6	4	
	487	7	H－9		後世の遺構に混在
	488	7	E－8 F－8	4	
	489	7	J－10	4	
	490	7	G－12	4	
	491	7	D－8		29号集石
	492	7	E－7	4	

挿図番号	遺物番号	類	出土グリット	層	出土地
88	493	7			後世の遺構に混在
	494	7	E－8	4	
	495	7	E－8	4	
	496	7	G－9	4	
91	497	8	L－12	4	
	498	8	F－6	4	
	499	8	K－13	3	
	500	8	F－8	4	
	501	8	E－8	4	
	502	8	G－5	4	
	503	8	K－12	4	
	504	8	G－3	4	
	505	8			B 区調査区
	506	8	G－13	4	
	507	8	F－8・E－9	4	
	508	8	H－16	4	
	509	8	E－7	4	
	510	8	N－11	4	
	511	8	G－6	4	
	512	8	M－13	4	
	513	8	F－7	3	
	514	8	L－14		後世の遺構に混在
	515	8	F－8	4	
	516	8	F－10	4	
	517	8	F－6	4	
	518	8	H－10	4	
	519	8			後世の Pit 内に混在
	520	8	P－13	4	
	521	8	F－7	4	
	522	8	J－13	4	
	523	8	F－5	4	
92	524	8			注記不明
	525	8	H－11	4	
	526	8	J－14		
	527	8			注記不明
	528	8	E－7	4	
	529	8	M－13	4	
	530	8	E－9	4	
	531	8	G－9	3	
	532	8	F－8	4	
	533	8			後世の Pit 内に混在
	534	8	D－9，10，11		後世の遺構に混在
	535	8	N－14	4	
	536	8	E－9	4	
	537	8	K－5		後世の遺構に混在
	538	8	L－10		後世の Pit 内に混在
	539	8	D－8	4	
	540	8	J－3	4	
	541	8	L－6		後世の Pit 内に混在
95	542	9	H－13	4	
	543	9	N－16	4	
	544	9	N－12	4	
	545	9	F－18	4	
	546	9			A 区調査区
	547	9	F－11	4	
96	548	9	E－8		22号集石
	549	9	K－13	4	
	550	9	G－8	4	
	551	9	M－16		後世の Pit 内に混在
	552	9	P－11	4	
	553	9	M－13	4	
	554	9	J－5	4	
97	555	9	E－9		
	556	9	F－9	4	
	557	9	K－14		9号土坑
98	558	10	K－13	3	
	559	10	H－11	4	
	560	10	K－9	4	
	561	10	G－6		後世の遺構に混在
	562	10	G－8	4	
	563	10	G－9		28号土坑
99	564	10	P－16	3	
101	565		F－7	4	
	566		K－12	4	
	567		G－10	4	
	568		G－11	4	
	569		G－10	4	
	570		H－10	3	
	571		J－11	3	
	572		J－10		後世の遺構に混在
	573		J－10		後世の遺構に混在
	574		G－10	4	
	575		N－11	3	
	576		P－13	3	
	577		E－2	4	
	578		H－13	4	
	579		J－12	3	
	580		L－10		後世の遺構に混在
	581		P－13	3	
	582		M－14、15		撹乱（横転層）
	583		H－9		後世の Pit 内に混在
	584		G－8	4	
	585		G－8	4	
102	586			3	
	587			3	
	588		F－9	4	

第Ⅵ章　遺 物（石 器）

第１節　旧 石 器 時 代

第２節　旧石器時代以降

第Ⅵ章　遺 物（石 器）

第１節　旧石器時代の遺物（第104図　1～6）

本遺跡では、縄文時代の石器とはやや異なる在地産の頁岩やチャートを用いる石器が６点ほど出土しているが、流れ込みや表採が主であるため。従って、分布範囲や出土層位を検討するものの明確に縄文時代早期の遺物とは分離できないため、ここでは表面採集石器と合わせて明らかに旧石器時代の定形石器と認定できるものについて図示し、説明を行いたい。

１・２はナイフ形石器である。**1** は黒色硬質頁岩製である。縦長剥片を素材とし、打点部を基部側に置いている。素材剥片の剥出は、表裏両面とも打面側から同一方向に行われている。一側縁に腹面側からの連続した調整加工を施して整形している。先端部及び基部が欠損しており、調整がもう一側縁にまで及ぶのかは不明である。刃部は左位に設定されており、使用痕とおぼしき微細な剥離痕が観察される。

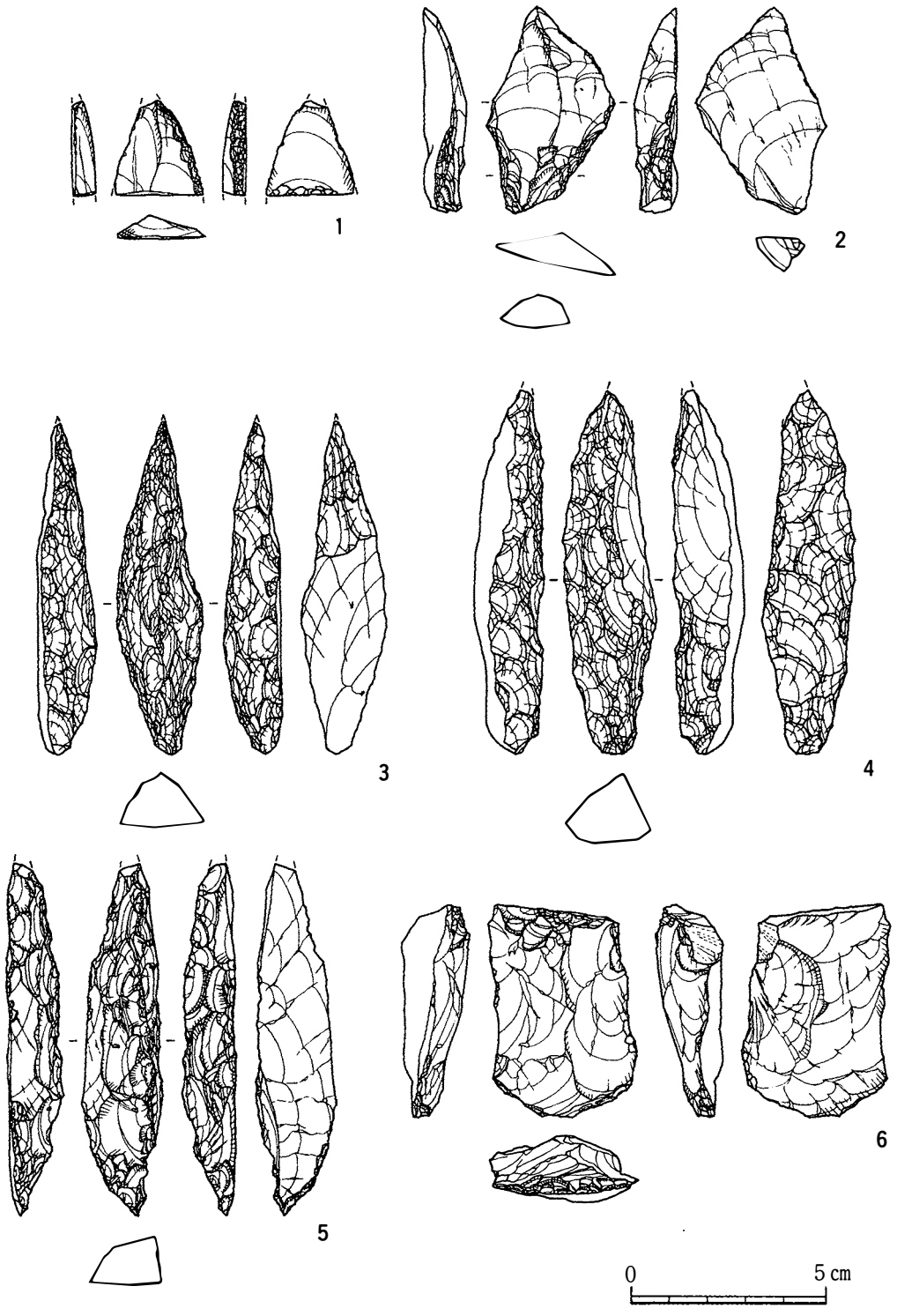
2 はやや透明がかり黒色の線が縦横に多く入るチャート製である。やや幅広の逆「ノ」の字状を呈する剥片を素材とし、打点部を基部側に置いている。打面及び打点部は残置される。背面に素材剥片剥出前の剥片石核時の主要剥離面が残存する。基部両側縁に腹面側から調整加工を施し整形するが、左側縁は素材となる剥片の打瘤の厚みを減じるように急角度な調整がなされ、やや内湾状を呈している。刃部には、使用痕とおぼしき微細な剥離痕が観察される。完形品である。

３～５は三稜尖頭器である。**3** はシルト質頁岩製である。厚みのある幅広の剥片を素材とし、横位に用いている。両側縁に腹面側から調整加工を全周に施し、後に背面の稜上より調整を加え、断面が三角形をなすように整形している。腹面にも一部両側縁から調整を入れ、尖鋭な先端部を形作っている。先端部をわずかに欠損するほかはほぼ完形に近い。

4 はシルト質頁岩製である。厚みのある幅広の剥片を素材とする。両側縁に腹面側から調整加工を施すが、そのうち右側縁先端部付近は一枚の大きな剥離によって形成されている。背面の稜上からも調整がなされる。また腹面は全面に両側縁から平坦調整が施されており、断面形は逆扇形を呈している。これら三種類の調整は、その施される剥離面の切り合い関係を観察しても順番に規則性が認められず､粗い加工による整形である。先端部をわずかに欠損する。

5 は黒色硬質頁岩製である。厚みのある幅広の剥片を素材とし、横位に用いている。両側縁に腹面側から調整加工を施し、後に背面の稜上より調整を加え整形している。左側縁側に比べ、右側縁側の調整は急角度であり、ほぼ垂直方向に近い。調整は全周に及ばず、左側縁中央部には素材となる剥片の素材面が一部残存している。腹面は一部基部側に細かな調整が施されている。先端部をわずかに欠損する。

6 はエンドスクレイパーである。白青色を呈する節理が多いチャート製である。節理で割れた面を打面とする幅広の剥片を素材として、縦位に用いている。剥片の末端部に腹面側から急角度の調整加工を施し、刃部作出している。左側縁部を節理によりわずかに欠損する。



第104図　旧石器実測図

（単位cm　　g　　残存）

番号	グリッド	備考	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1	F−11	4層	ナイフ形石器	黒色硬質頁岩	2.4	2.3	0.6	3.1
2	F−11	4層	ナイフ形石器	チャート	5.3	3.4	1.1	13.0
3		後世の遺構に混在	三稜尖頭器	シルト質頁岩	8.5	2.3	1.5	25.2
4		D区表採	三稜尖頭器	シルト質頁岩	9.4	2.4	1.8	38.6
5		B区撹乱	三稜尖頭器	黒色硬質頁岩	9.0	2.1	1.4	26.2
6		B区表採	エンドスクレイパー	チャート	5.5	3.9	1.7	33.6

第10表　旧石器観察表

第２節　旧石器時代以降の遺物

本遺跡の遺物は、層位では基本土層第４層と３層の入り乱れが見られ、これらの遺物が層の中から出土する状況が芳しくないということがあり、また同一層でも縄文早期と前期以降のが明確に分離できず、それらを時期ごとに分離することが困難であった。従って今回は時期を限定せずあえて石器のみの節を設定し、観察表に提示した出土層を参考とされたい。また各遺物の図化されたものだけでなく全体の石材利用を％で提示した。

１　尖頭器　（第105図　１～２）

尖頭器は２点出土。２点共に木葉形の尖頭器で石材はチャートである。従って石材利用率はチャート100％。

２　石鏃　（第105～111図　３～128）

石鏃は200点出土、126点を図化した。石鏃の形態により二等辺三角形（１類）、正三角形（２類）、二等辺三角形でやや大型のもの（３類）に大別し、さらに基部形状により直線的なもの（Ａ類）、浅く抉れるもの（Ｂ類）、Ｖ字状に抉れるもの（Ｃ類）、Ｕ字状に抉れるもの（Ｄ類）に細分化できた（参考木崎1987）。従ってこれらの組合せから、１類は二等辺三角形を呈し、基部が直線的１Ａ類（３～５）、基部が浅い抉りをもつ１Ｂ類（６～19）、基部がＶ字状の抉りをもつ１Ｃ類（20～67）、基部がＵ字状の抉りを持つ１Ｄ類（68～103）に分類できる。また２類は正三角形を呈し、基部が直線的２Ａ類（104、105）、基部が浅い抉りをもつ２Ｂ類（106～109）、基部がＶ字状の抉りをもつ２Ｃ類（110～121）、基部がＵ字状の抉りを持つ２Ｄ類（122～126）である。また３類は大型の二等辺三角形を呈し、基部が直線的３Ａ類（127）浅く抉れるもの３Ｂ類（128）に分類とした。その石材利用は黒耀石24.5％　サヌカイト15.5％　チャート56％　安山岩４％である。

３　石匙　（第112～117図　129～168）

石匙は57点出土、40点を図化した。石匙はつまみ状の突起に対する刃部に位置によって分類した。横型（129～144・148～151）は刃部がつまみと反対の縁辺に位置し、主に横長剥片を素材としている。刃部は直刃状に作り出されているが、円刃状（129・137・139・140・141・143・144・149）も見られる。縦型（152～168）は長軸の側縁に刃部を持つ型と規格し166をその素形としたが、片刃（152・153・155・156・159・161）両刃（154・157・160・162～168）に分類できる。この横型と縦型の中間に一形式設け、スプーン状の剥片に刃部が巡る傾向があり、これを中間型とした（145～147）。その石材利用は黒耀石1.8％　サヌカイト33％　チャート49％　安山岩3.5％　頁岩７％　砂岩3.5％　変岩1.8％である。

３　削器　（第117～120図　169～186）

削器は51点出土、18点を図化した。剥片に規則性はあまり見られないが、片刃（169～174・176・181）、両刃（175・177～180・182～186）が存在し両刃は縦長の剥片を使用し器種として大型の傾向が見られる。その石材利用は黒耀石４％　サヌカイト18％　チャート69％　安山岩２％　頁岩６％　流紋岩２％である。

４　楔形　（第121図　187～189）

楔形石器は７点出土、その３点を図化した。187・189は錯交剥離が観察される資料である。188は母指状削器状を呈している。その石材利用は黒耀石43％　チャート57％である。

５　石錐　（第121図　190～192）

石錐は３点出土、その３点を図化した。いずれも尖端部を欠失しているが。190は幅広いつまみ部を持ち全体はＴ字形・191・192はＩ字形を呈すると思われ、つまみ部と錐部の明確な境界を持たない形態である。その石材利用はチャート67％　安山岩34％である。

６　石斧　（第122～124図　193～213）

石斧は磨製13点・打製39点、計52点出土、磨製３点・打製18点を図化した。磨製石斧は193～195で193・194は円刃、195は直刃の蛤刃である。打製石斧はその形態から刃部に対し基端が短いナデ型（196～199）・基部に抉りの入るバチ型（200～202）・長方

形の短冊型（**203～213**）に分類した。その石材利用は磨製石斧で安山岩61％　砂石15％　変岩８％　流紋岩８％　材質不明８％で、打製石斧で砂岩82％　安山岩13％　粘板岩2.5％　頁岩2.5％である。

７　石錘　（第124図　**214～216**）

石錘は３点出土、その３点を図化した。自然礫の両端を打ち掻いだもので、点数としても小数である。これが漁網錘での使用か否かは別として３点とも均一した形状である。その石材利用はチャート67％　安山岩34％である。

８　石核　（第125～128図　**217～227**）

石核は18点出土、11点を図化した。円礫（**217・222・223**）、転礫（**219・225・226**）が観察される。石材は円礫はサヌカイト１点・チャート２点。転礫は黒耀石である。また **225**は復元により原石は５㎝強程の資料であろう。従ってその剥片から製作される石器は限られたものとなり、本遺跡では石鏃が主であろうか。石核全体の石材利用は黒耀石22％　サヌカイト11％　チャート56％　安山岩5.5％である。

８　摺石・叩石　（第128～133図　**228～253**）

摺石・叩石は242点出土、23点を図化した。ここでは同じ石で両方の用途を成すものもあり摺石・叩石を一括して取り扱う。その形態により以下のように分類した。１類　表面摺り･側面摺り＋叩き（**228～231　238**）２類　表面摺り･側面叩き（**233･235･240**）３類　側面摺り＋叩き（**232･237**）４類　表面摺り＋叩き・側面摺り＋叩き（**239**）５類　表面摺り＋叩き・側面叩き（**236**）６類　表面叩き・側面摺り＋叩き（**241**）７類　表面叩き･側面叩き（**242･246**）８類　側面叩き（**234　243～245**）９類端部叩き（**247～250**）10類　表面凹み（**251～253**）。10類は表面に凹みが観察されるグループで摺石・叩石とは用途的な性格上別類であることも想定されるが､端部に叩きが確認されることから､整理上ここに分類した。**234･239･244･245**は集石遺構の構成礫に包括されていた摺石･叩石である。摺石･叩石の全体の石材利用は安山岩４％　砂岩67％　花崗岩29％である。

９　石皿・台石　（第133～135図　**254～256**）

石皿・台石は113点出土、４点を図化した。**254**は50.4×37.5×9.6(㎝)の法量を持つ本遺跡最大の遺物である。長軸方向に凹みを持つ。**254**は半壊しているが椀状の凹みを呈するものだと思われる。石材は加久藤凝結凝灰岩の火受石で風化が激しく脆い。石皿・台石の全体の石材利用は安山岩3.5％　砂岩80.5％　花崗岩15％　凝灰岩0.9％である。

10　有孔石製品　（第135～136図　**257～263**）

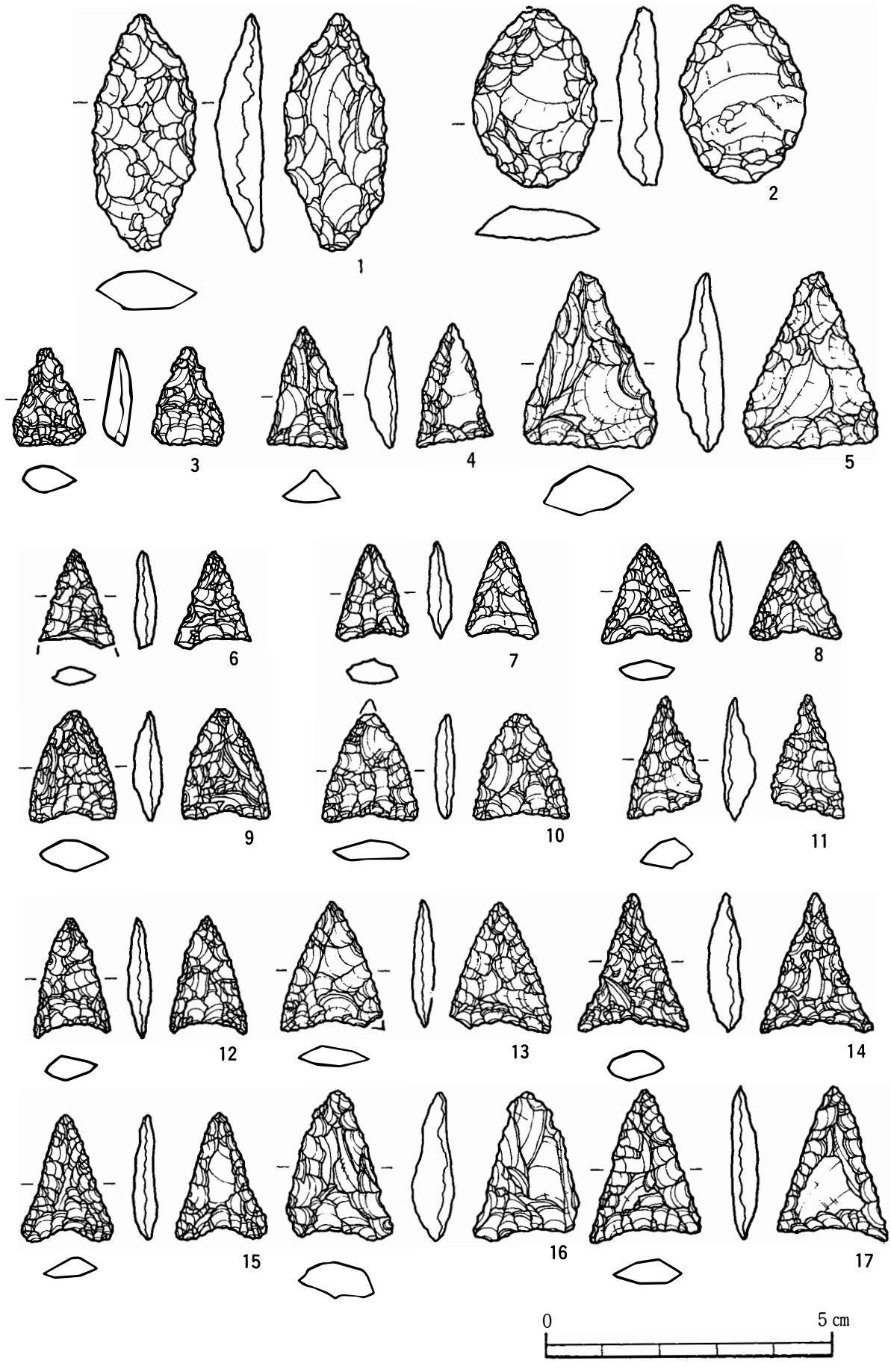
有孔石製品は12点出土、７点を図化した。孔を持つ石器類で中央にこれを窺うが **258**は端部に寄る。**257**は端部に２孔が存在し全体は石包丁の形態に類似する。またこの２孔間直線上に孔製作跡が確認される。**259～261**までは均一した形状が認められるが、**262**はやや小型、**263**は指先大である。**263**は実用的の道具ではなく装飾の一種か。有孔石製品の全体の石材利用は粘板岩42％　砂岩16％　砂岩16％　変岩42％である。

11　異形石器　（第137～138図　**264～275**）

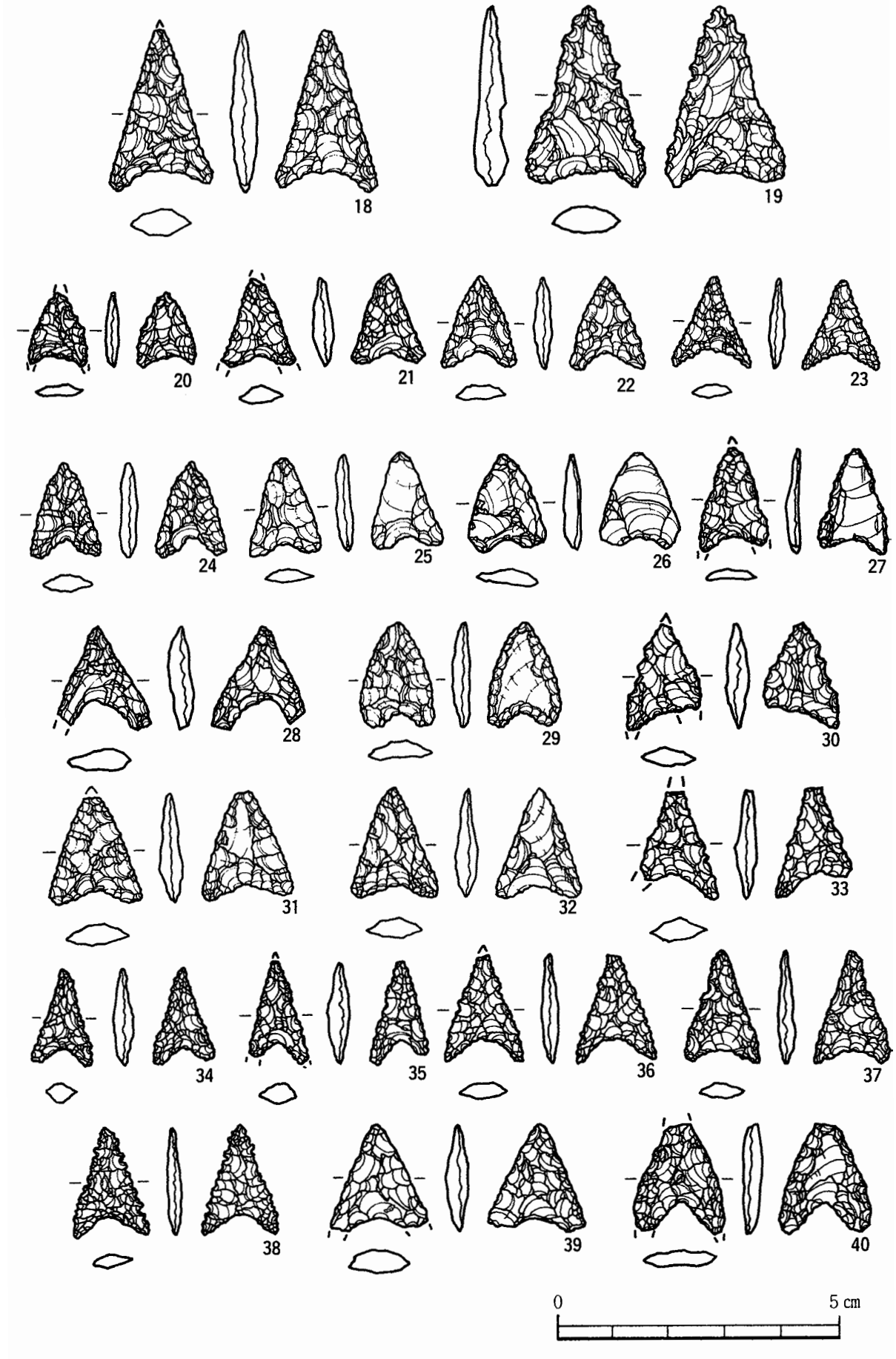
異形石器として13点を図化した。**264～267**までは異形石鏃として提示した。これらは実用品として考えにくいがその形状が石鏃と類似しているため異形石鏃と仮称しておく。**268～270**までは類似する形状が見当たらず仮称もできなかった。**271**は石鏃の形状であるが表面を磨く、いわゆるトロトロ石器である。**272**は形状から魚形石器と仮称した。**273～275**は中央に抉りが入る石器でその形状により糸巻形石器または分銅形石製品と呼ばれるものである。小型を糸巻形石器、大型を分銅形石製品とした。これらの異形石器は本来の使用形態は不明であるため図版掲示の天地等は仮設とした。

12　砥石　（第138図　**276**）

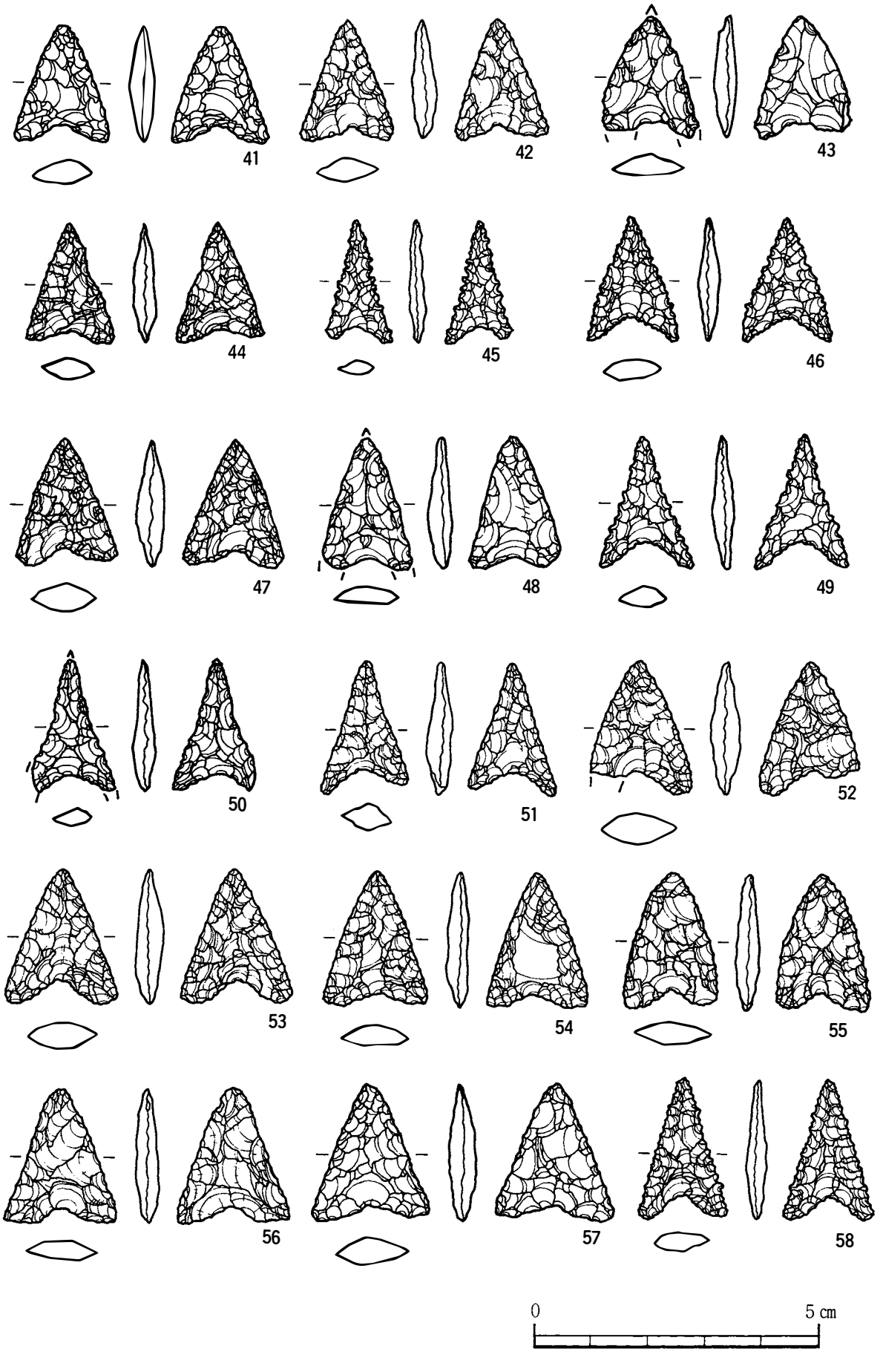
276は敲打技法により製作された磨製石斧の基部に１条の彫刻溝を持つ。石斧破損後砥石に転用したものか。中世の柱穴より出土し、製作時期については明確でないがここに仮置しておく。



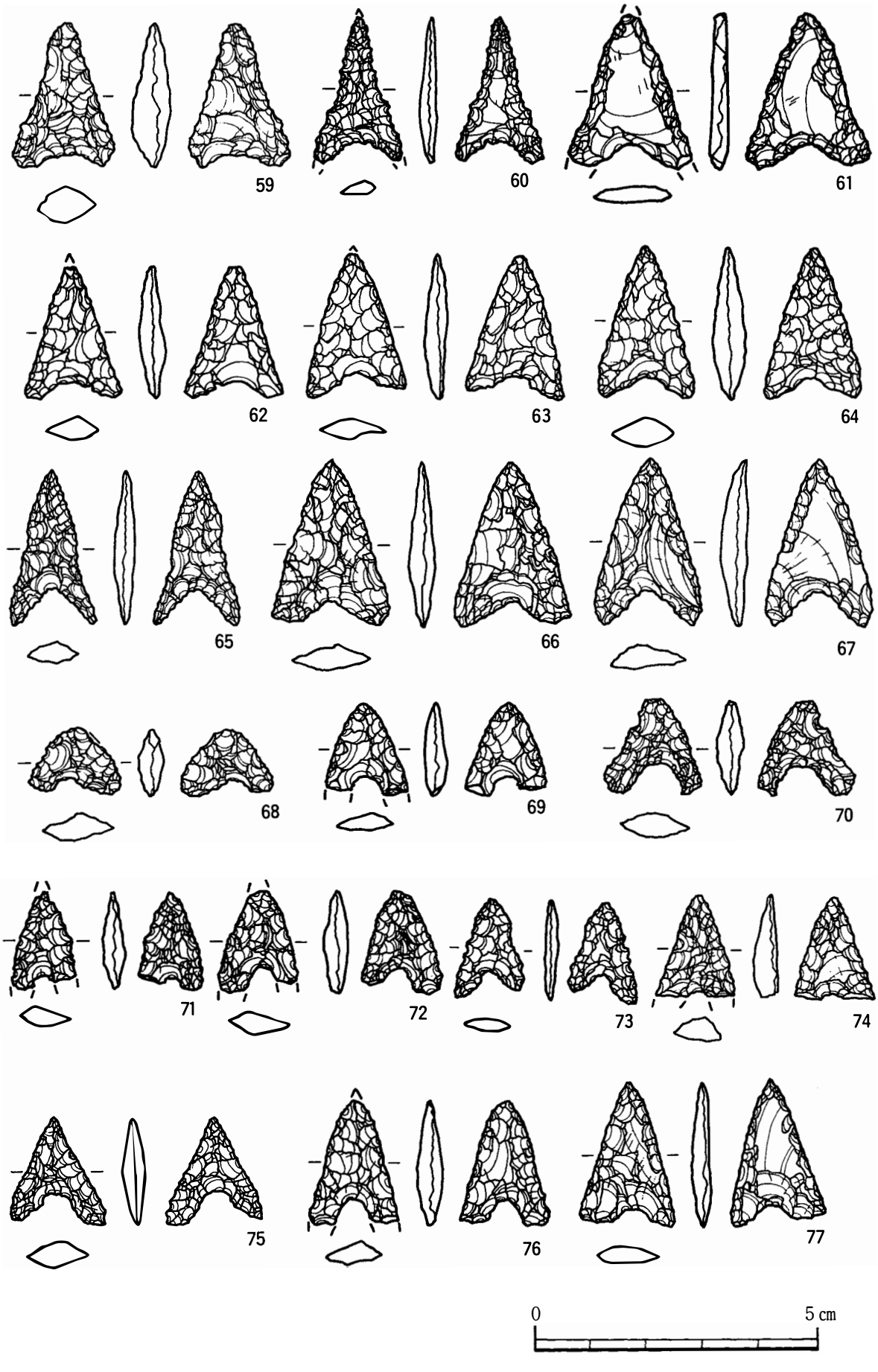
第105図　石器実測図（１）



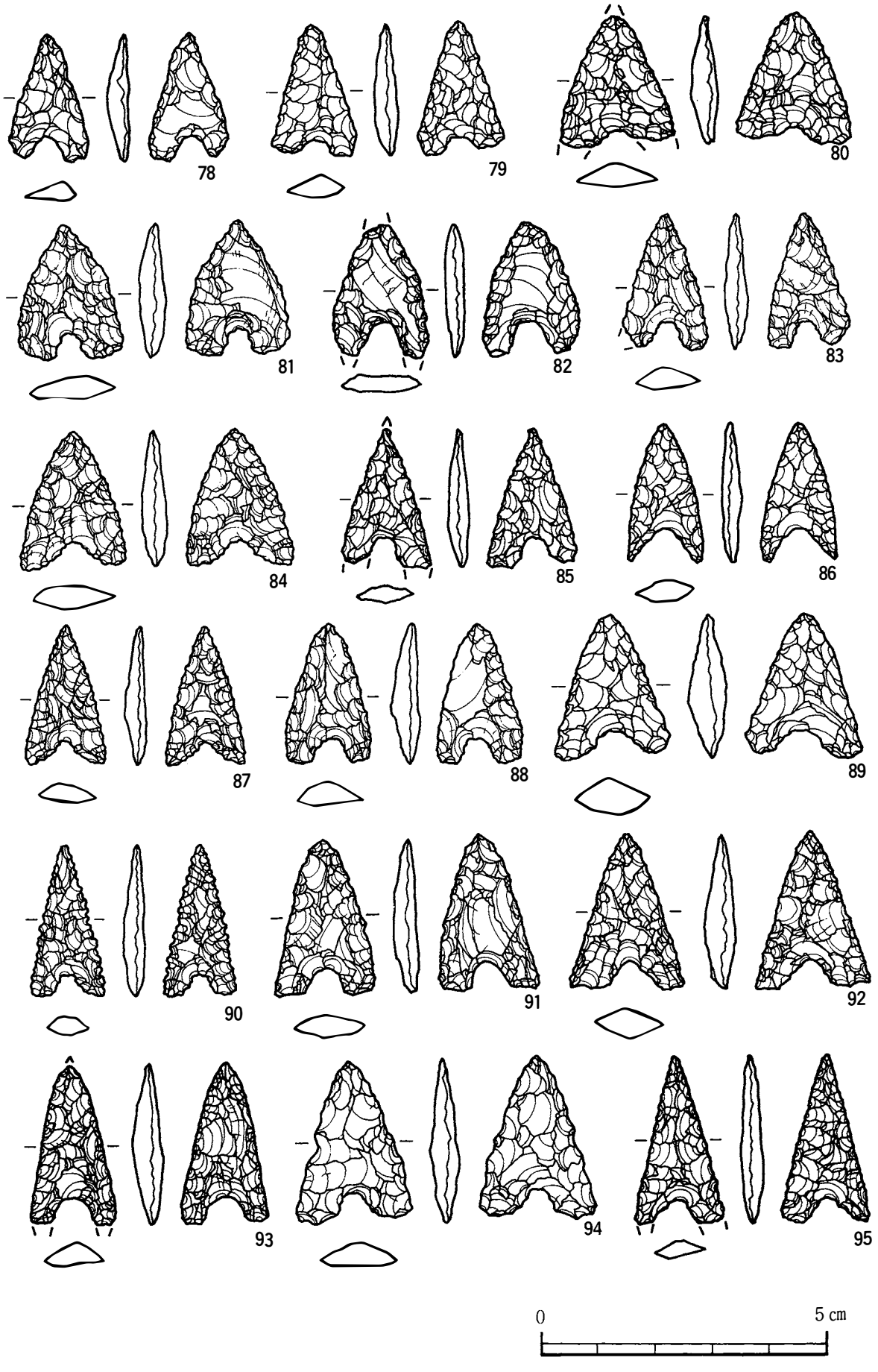
第106図　石器実測図（２）



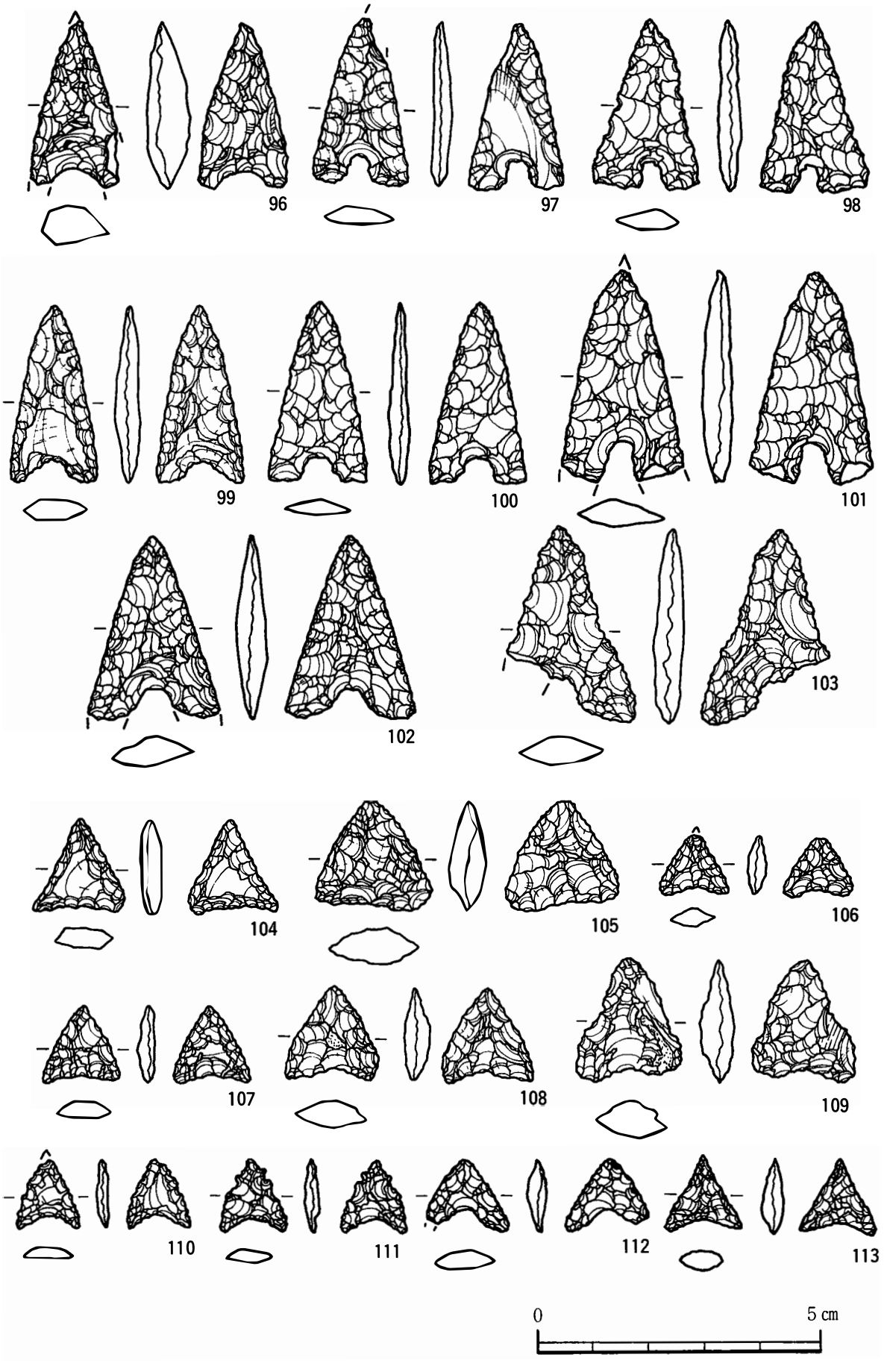
第107図　石器実測図（３）



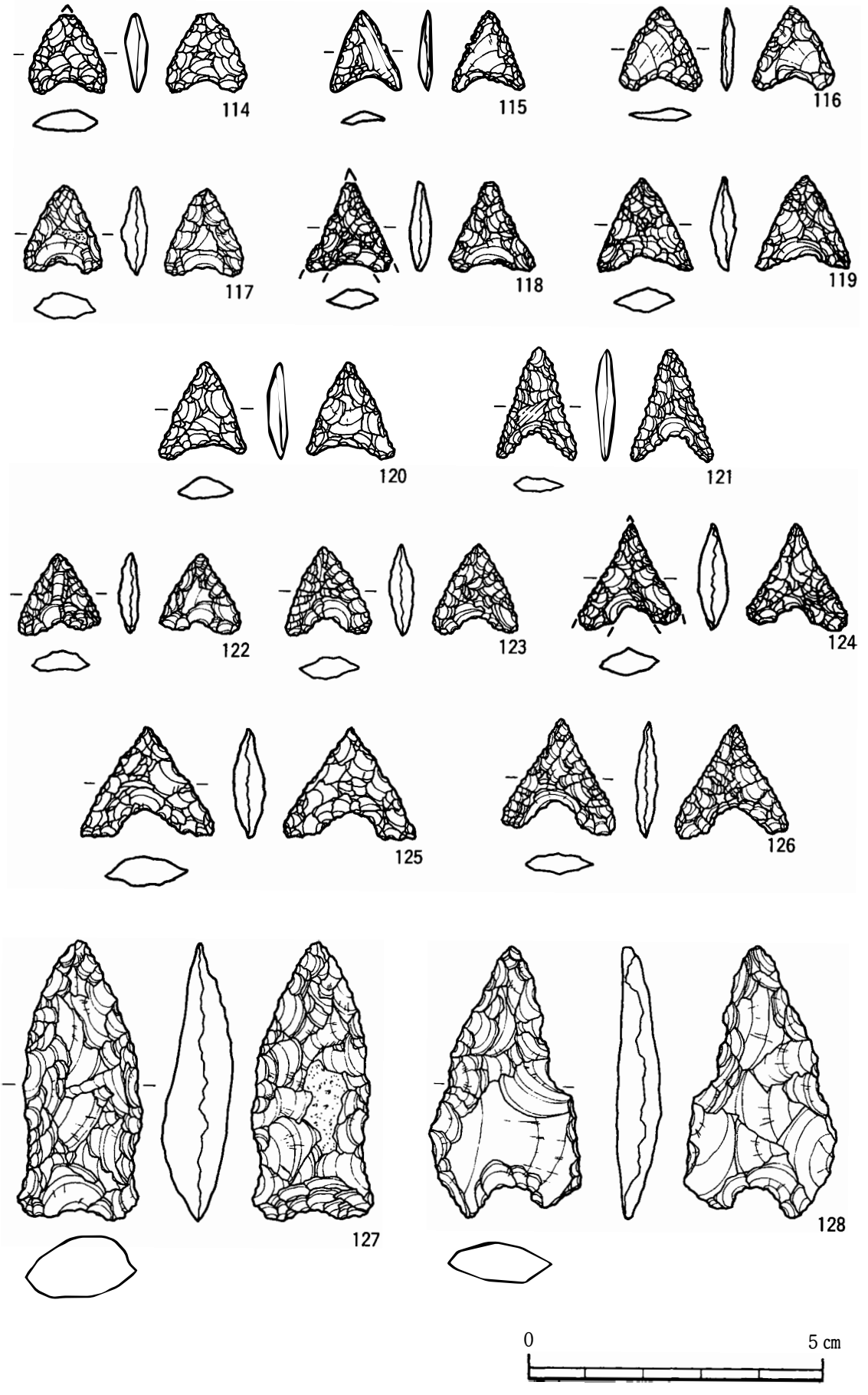
第108図　石器実測図（４）



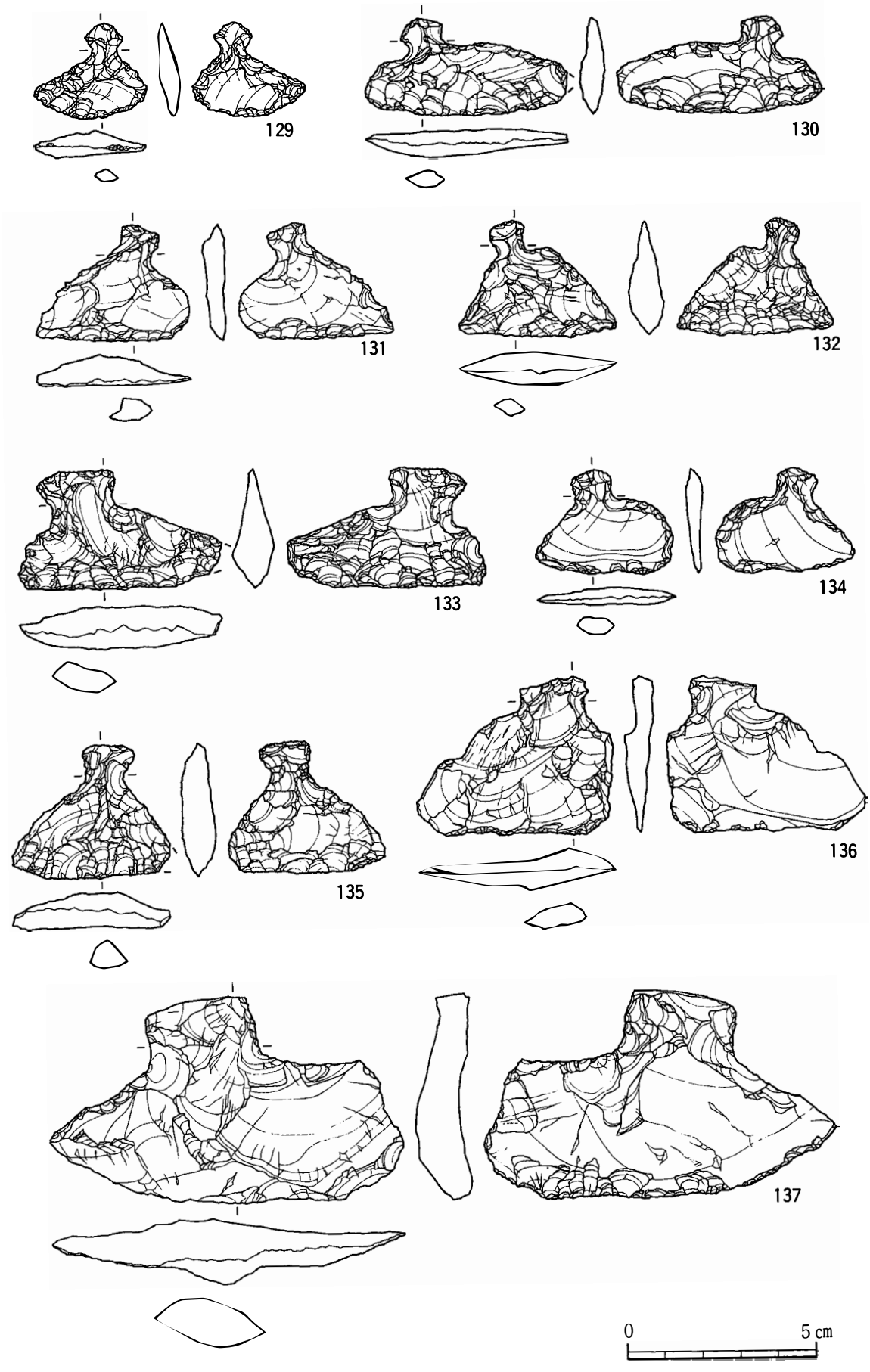
第109図　石器実測図（５）



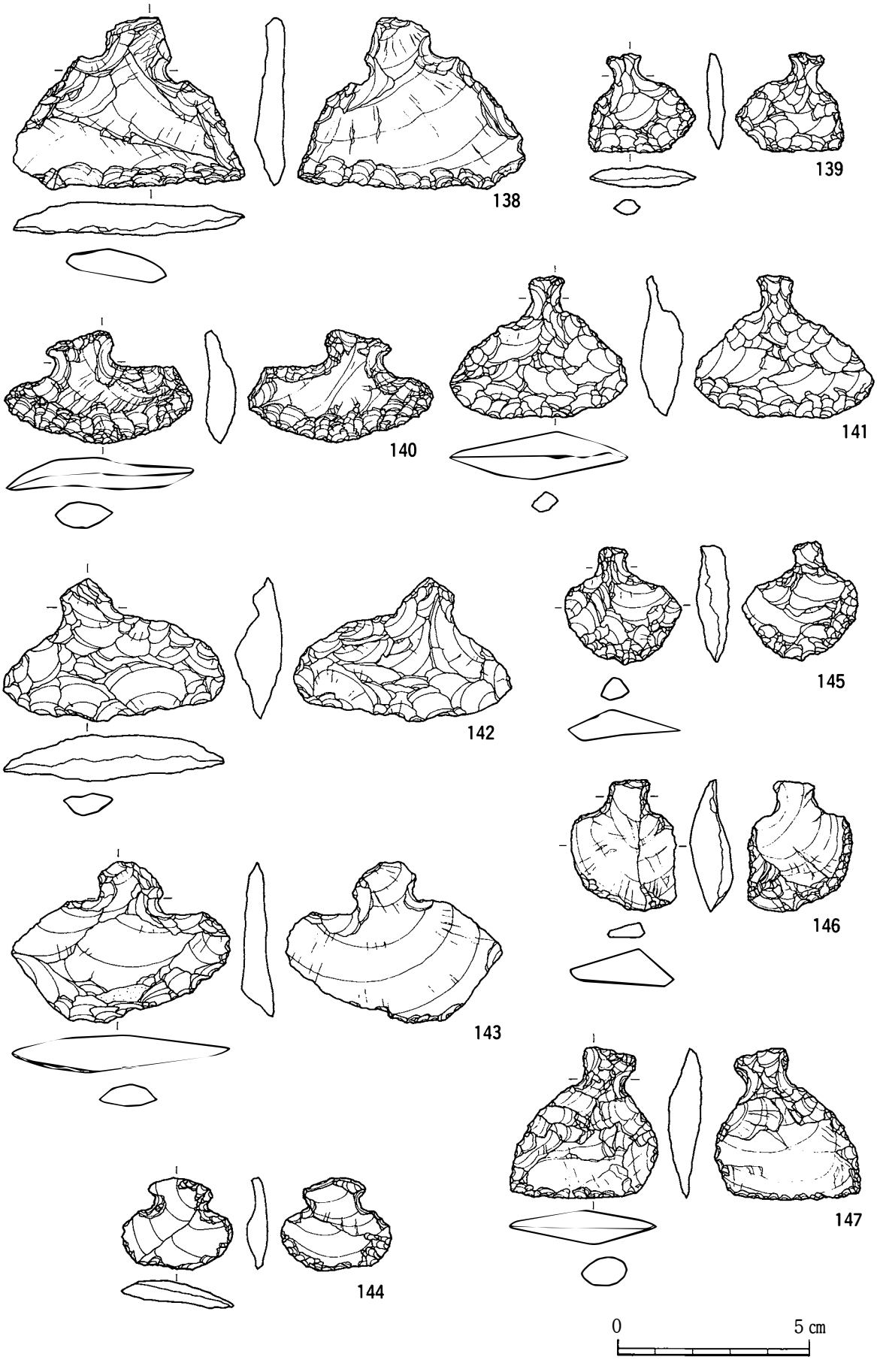
第110図　石器実測図（６）



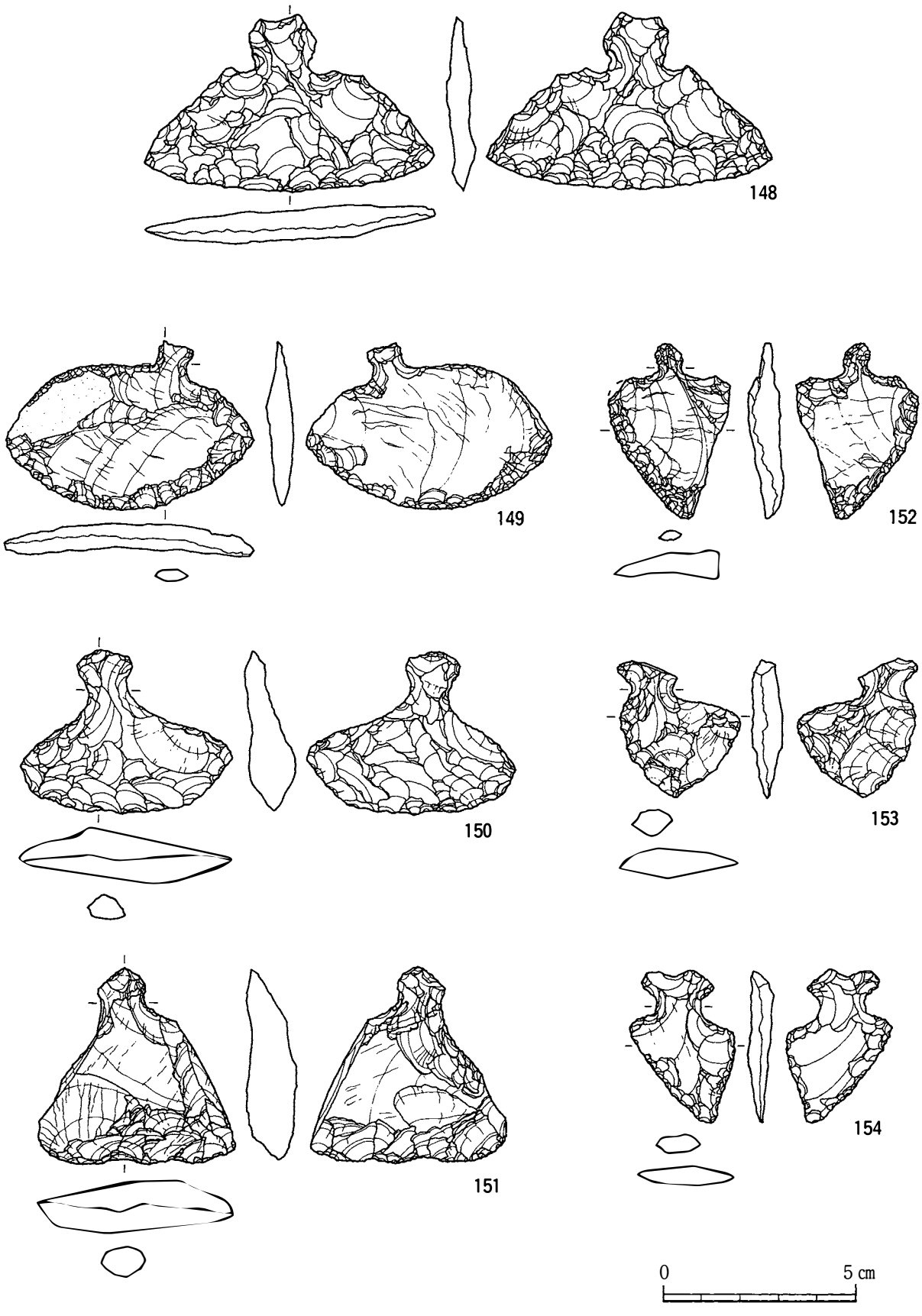
第111図　石器実測図（７）



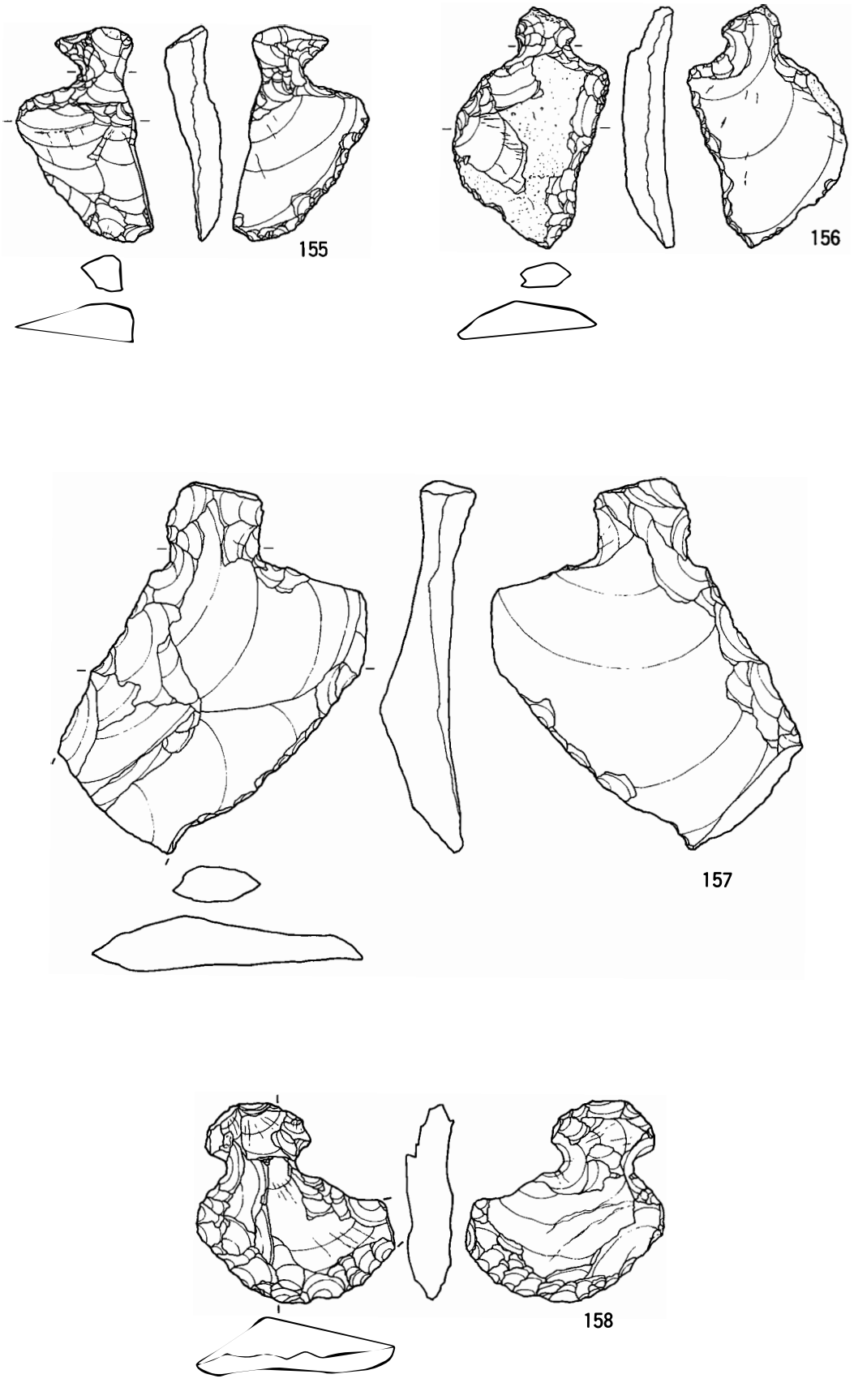
第112図　石器実測図（８）



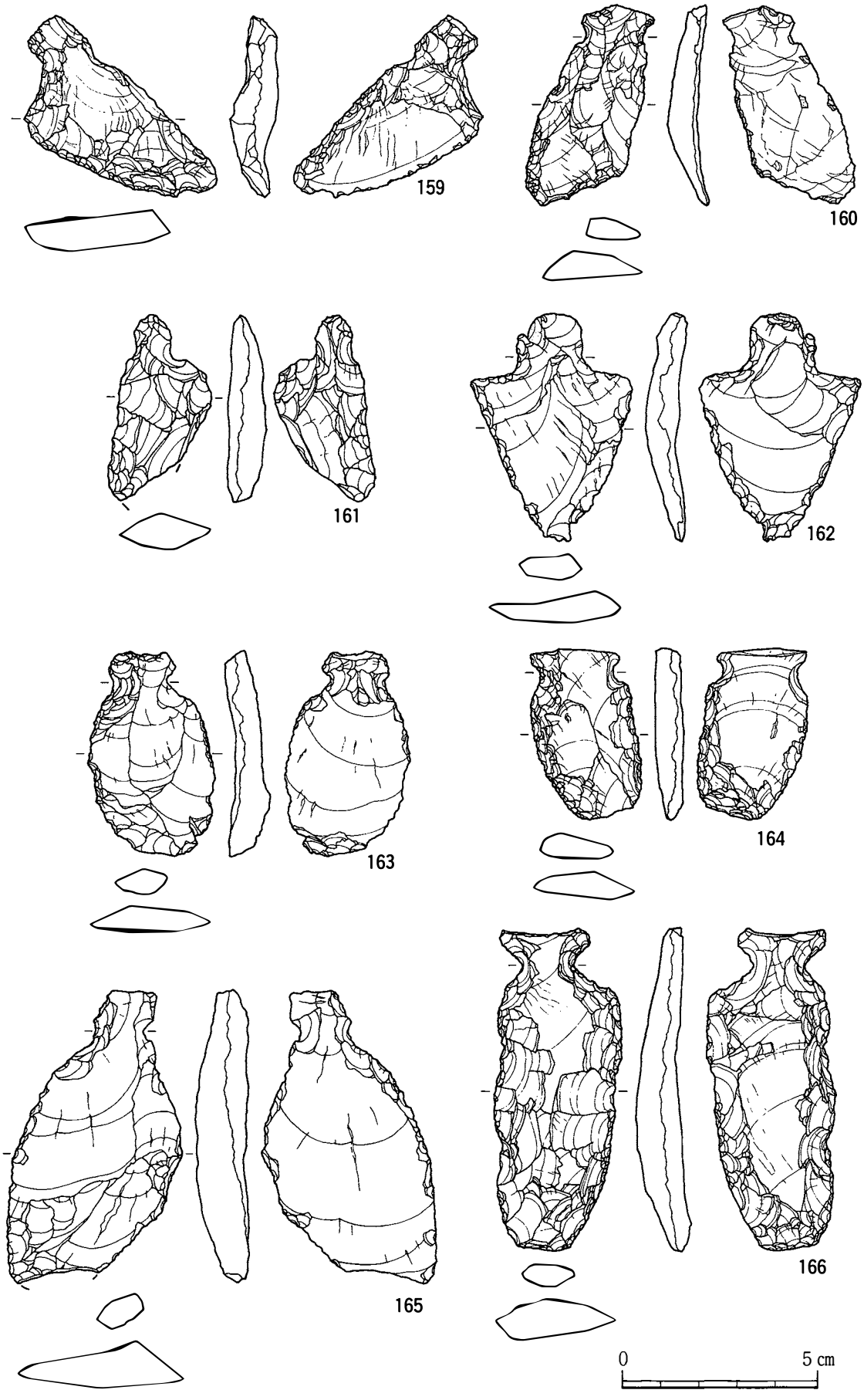
第113図　石器実測図（９）



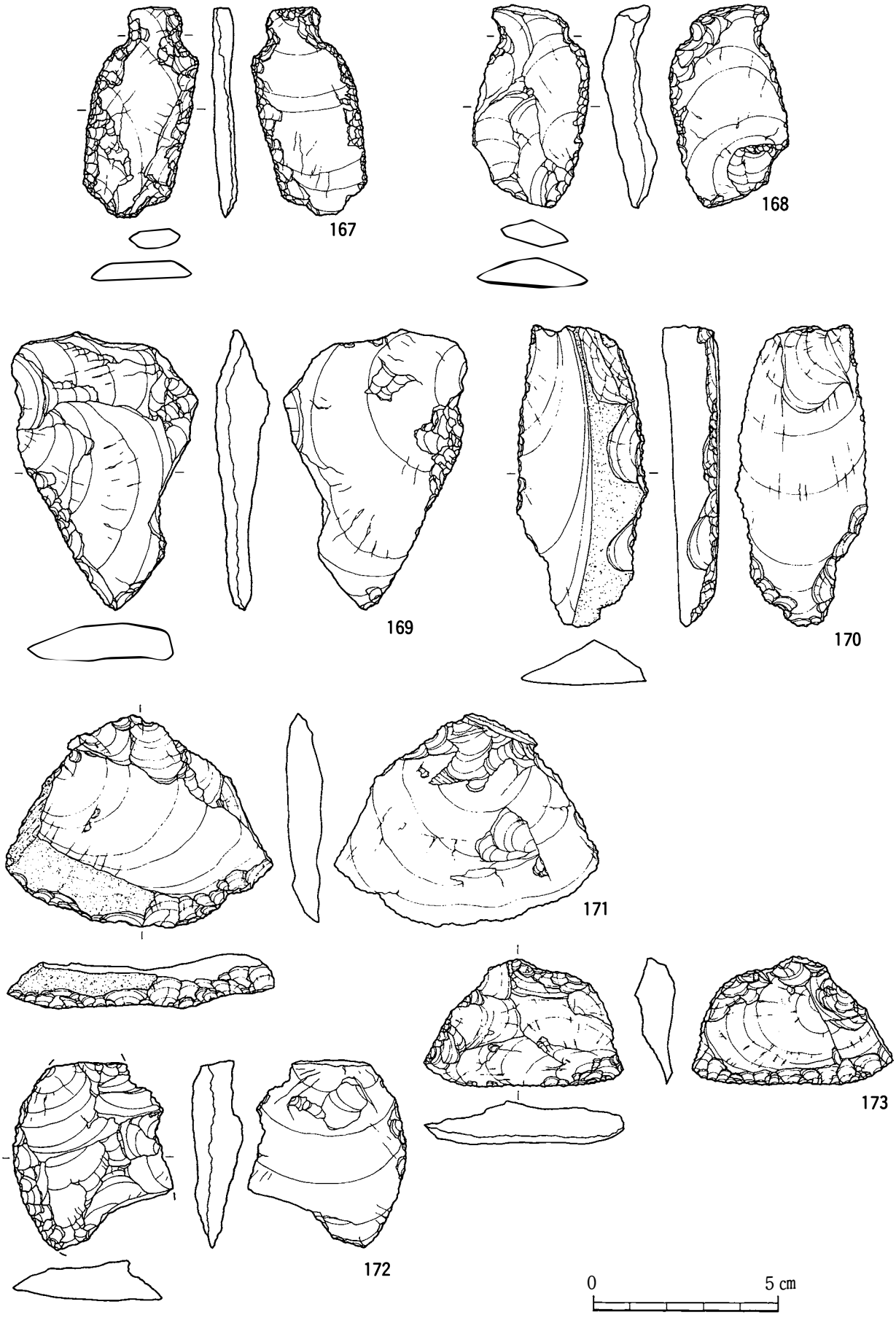
第114図　石器実測図（10）



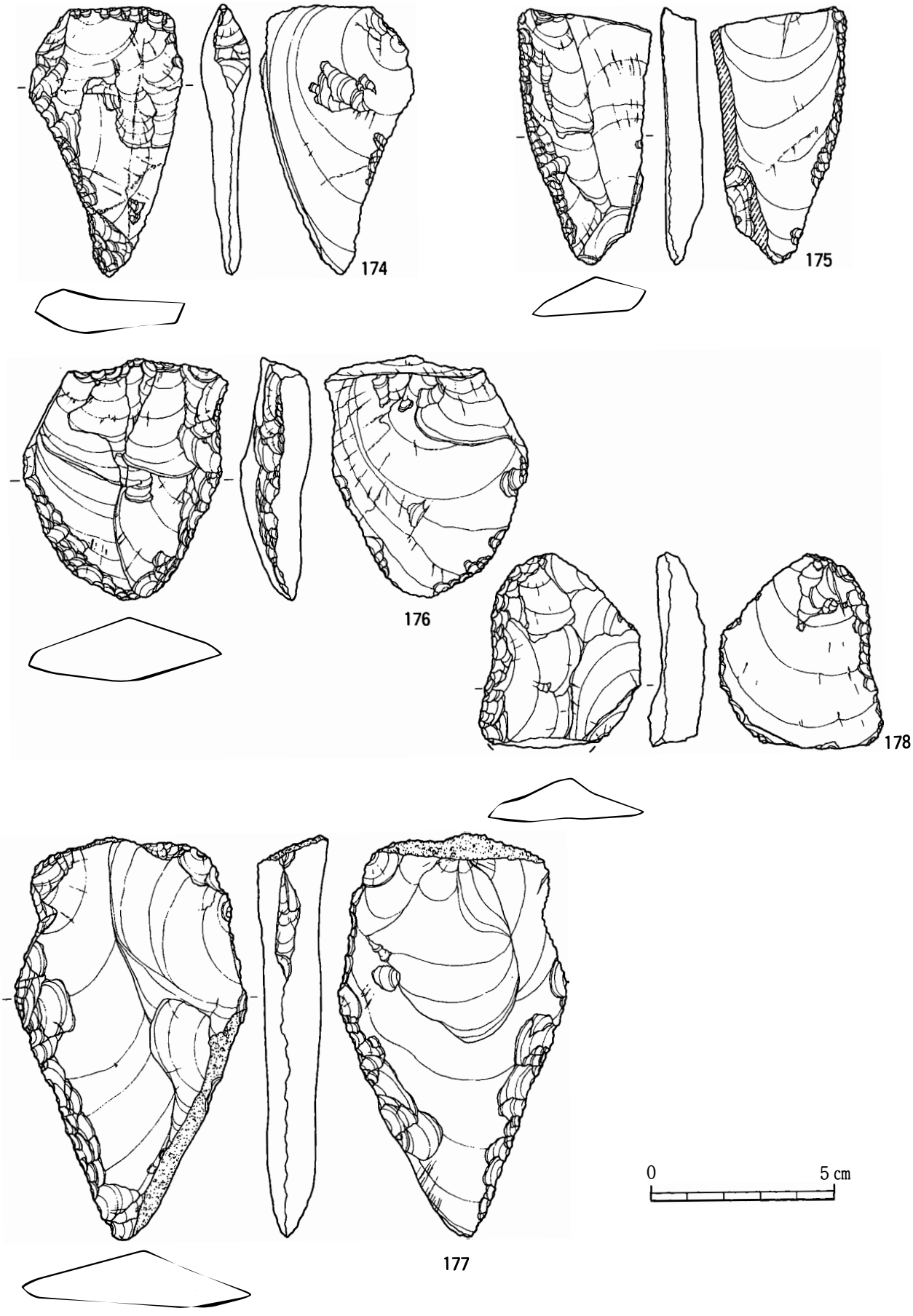
第115図　石器実測図（11）



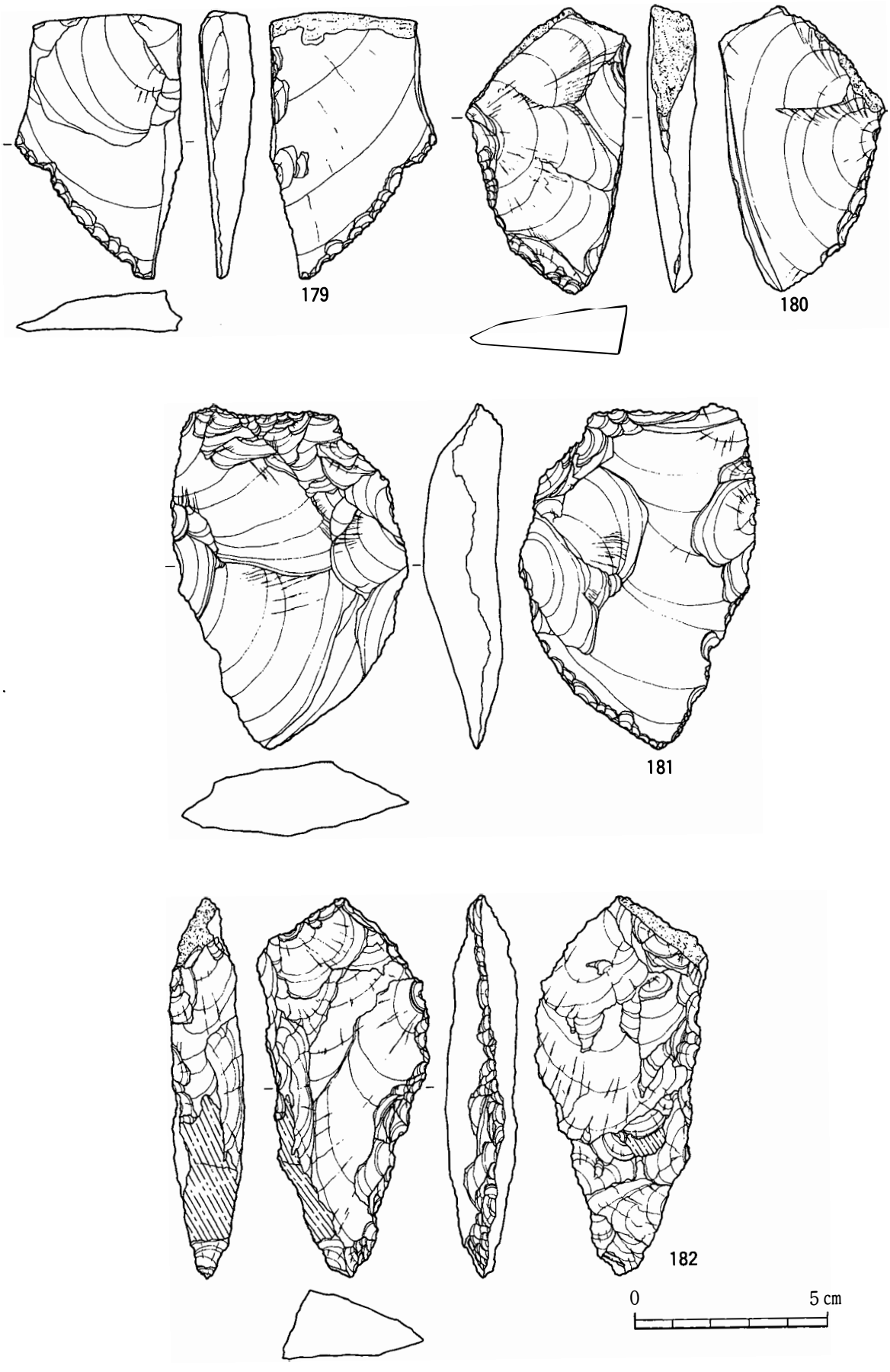
第116図　石器実測図（12）



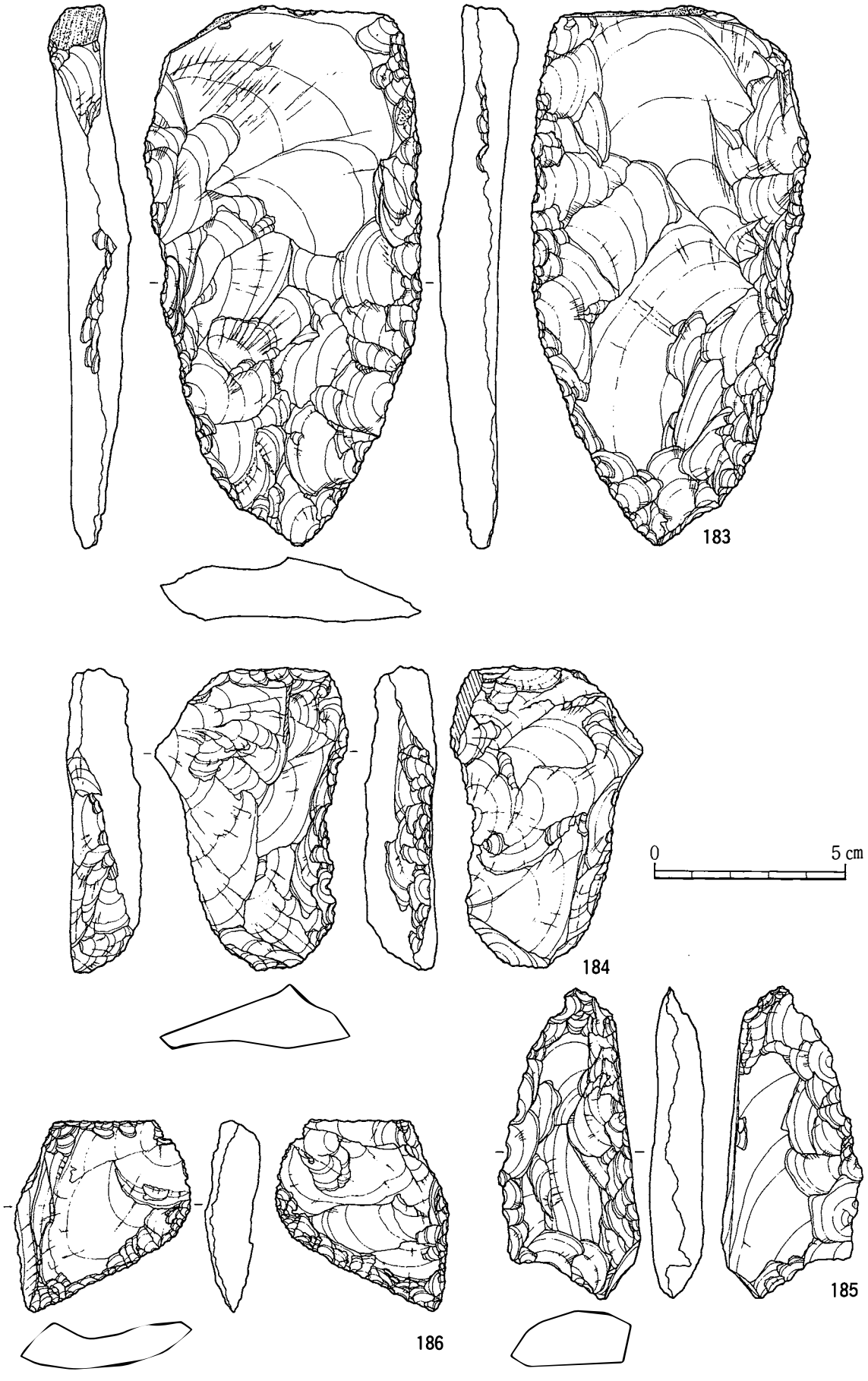
第117図　石器実測図（13）



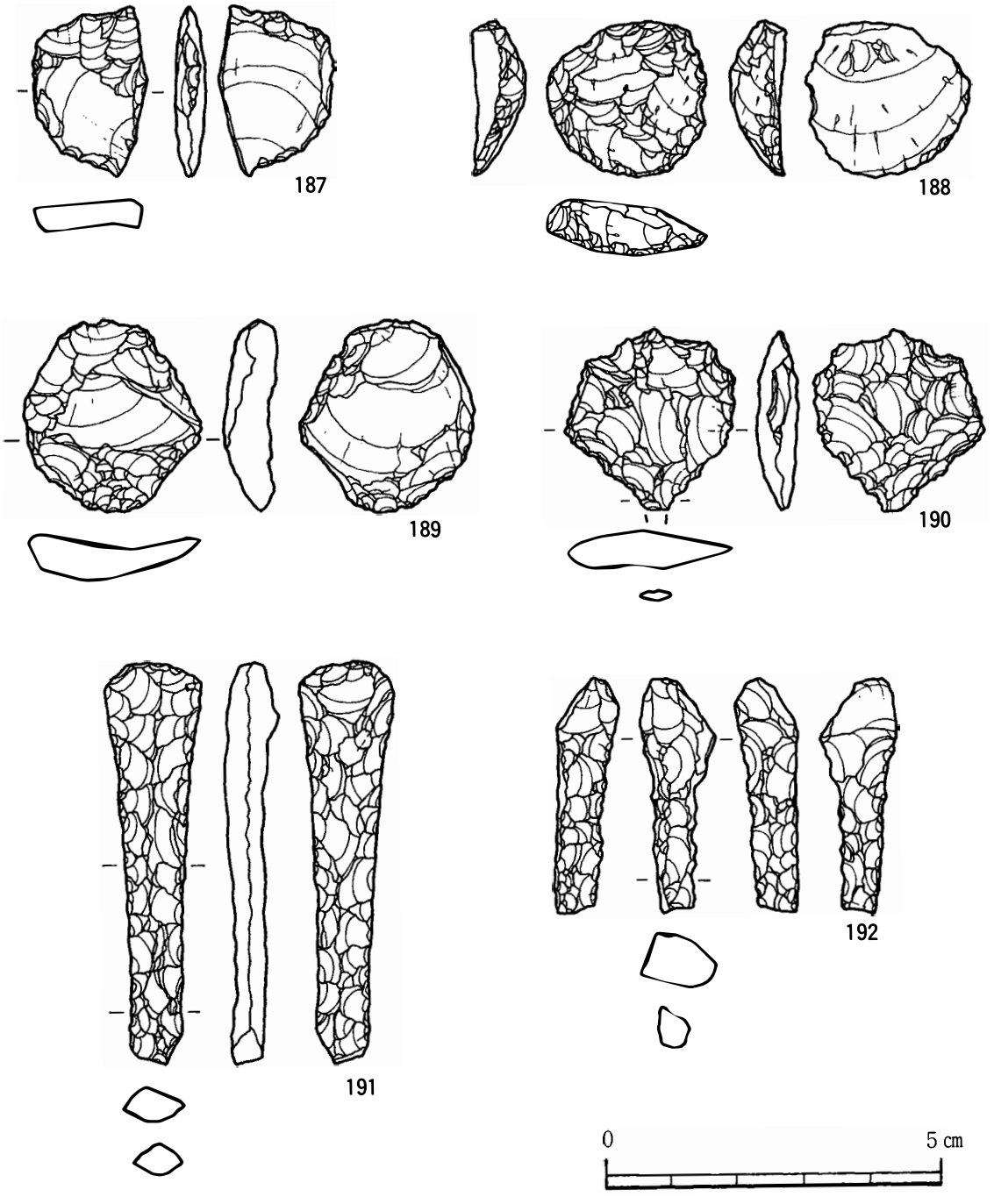
第118図　石器実測図（14）



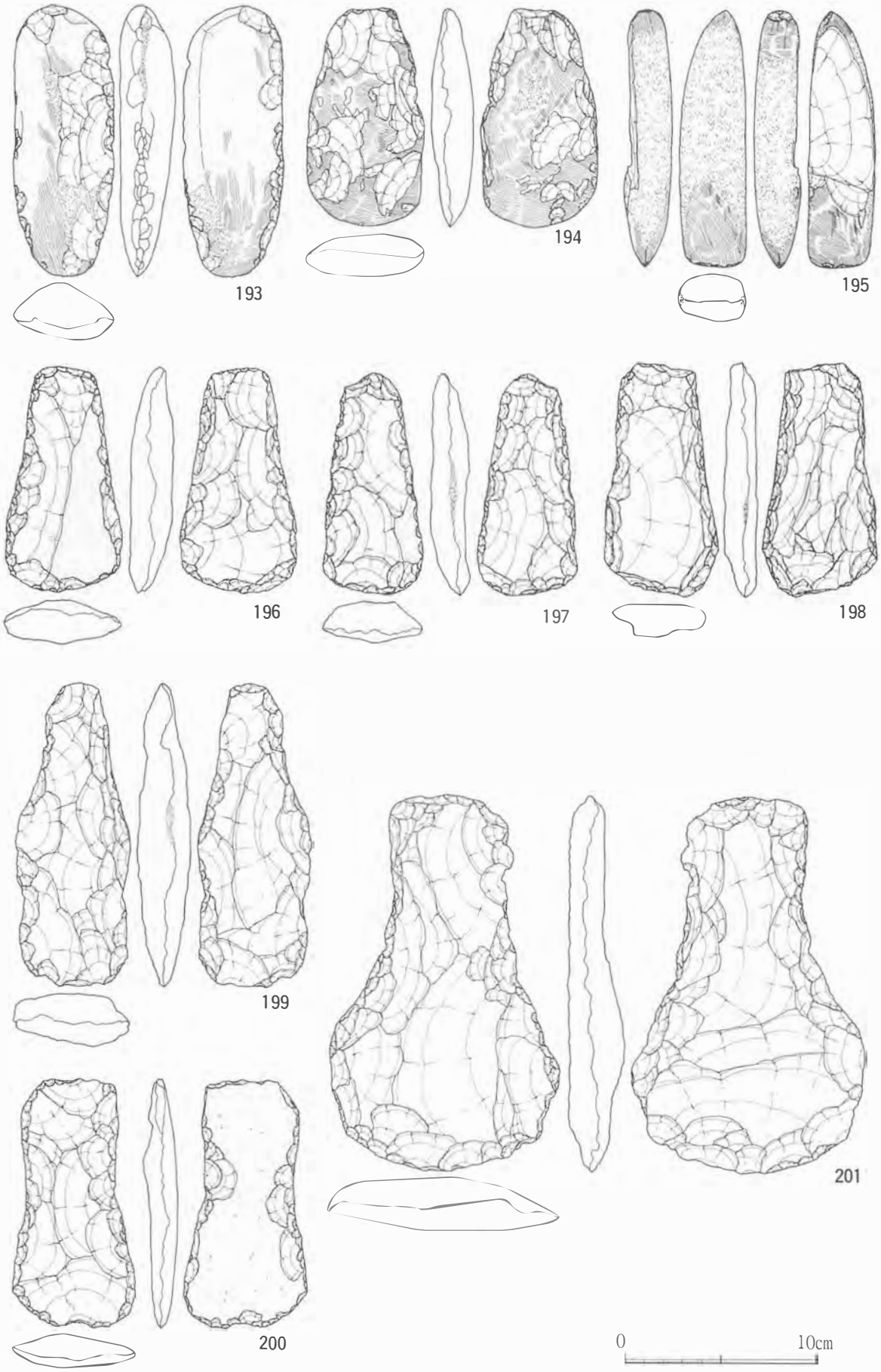
第119図　石器実測図（15）



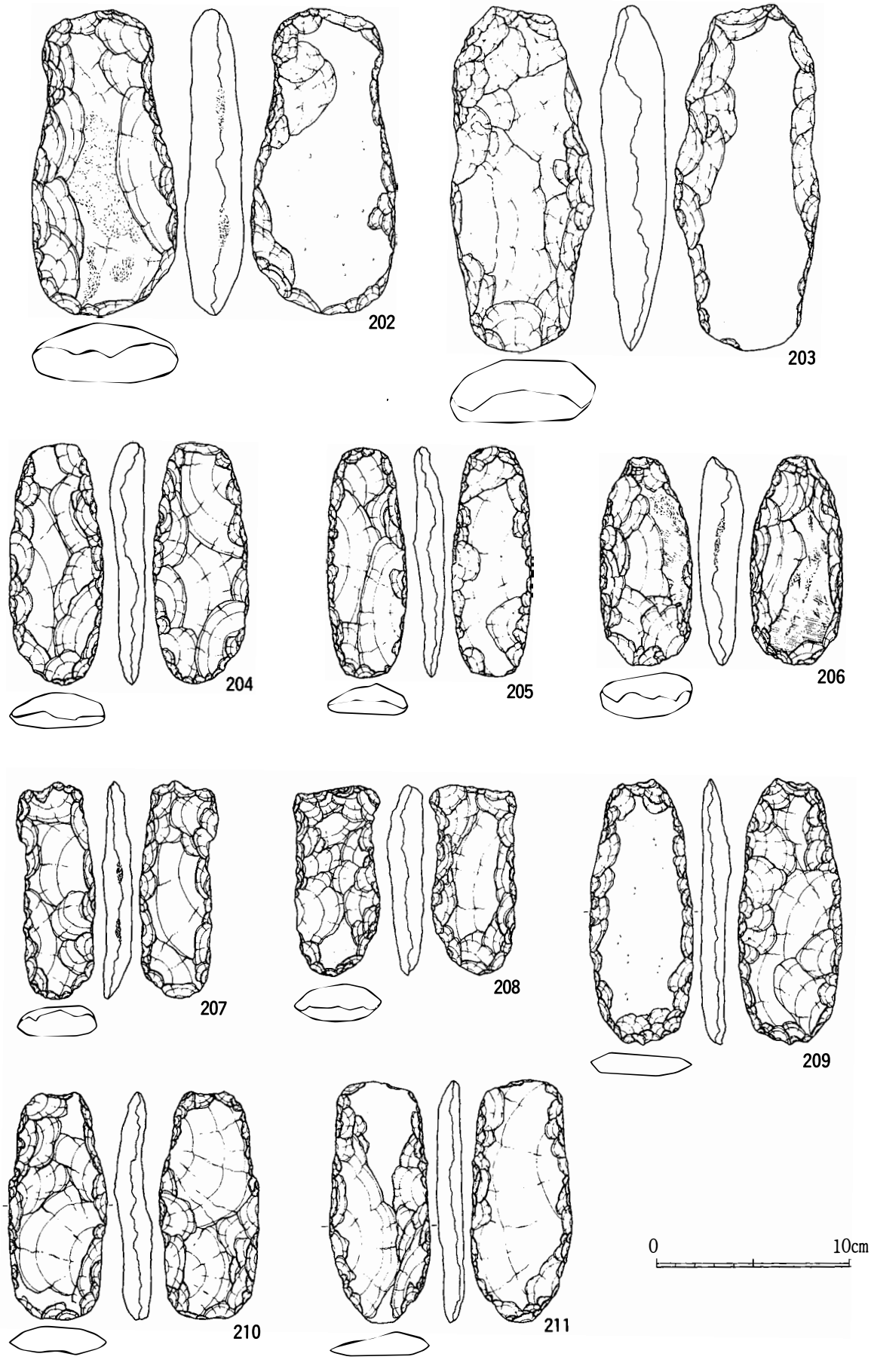
第120図　石器実測図（16）



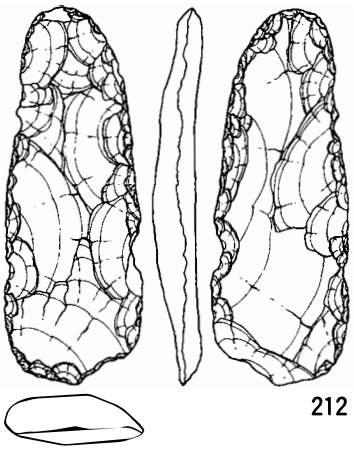
第121図　石器実測図（17）

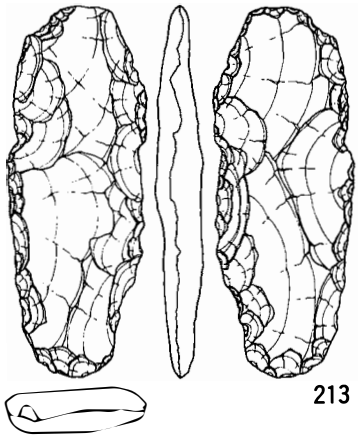


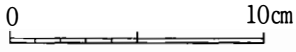
第122図　石器実測図（18）

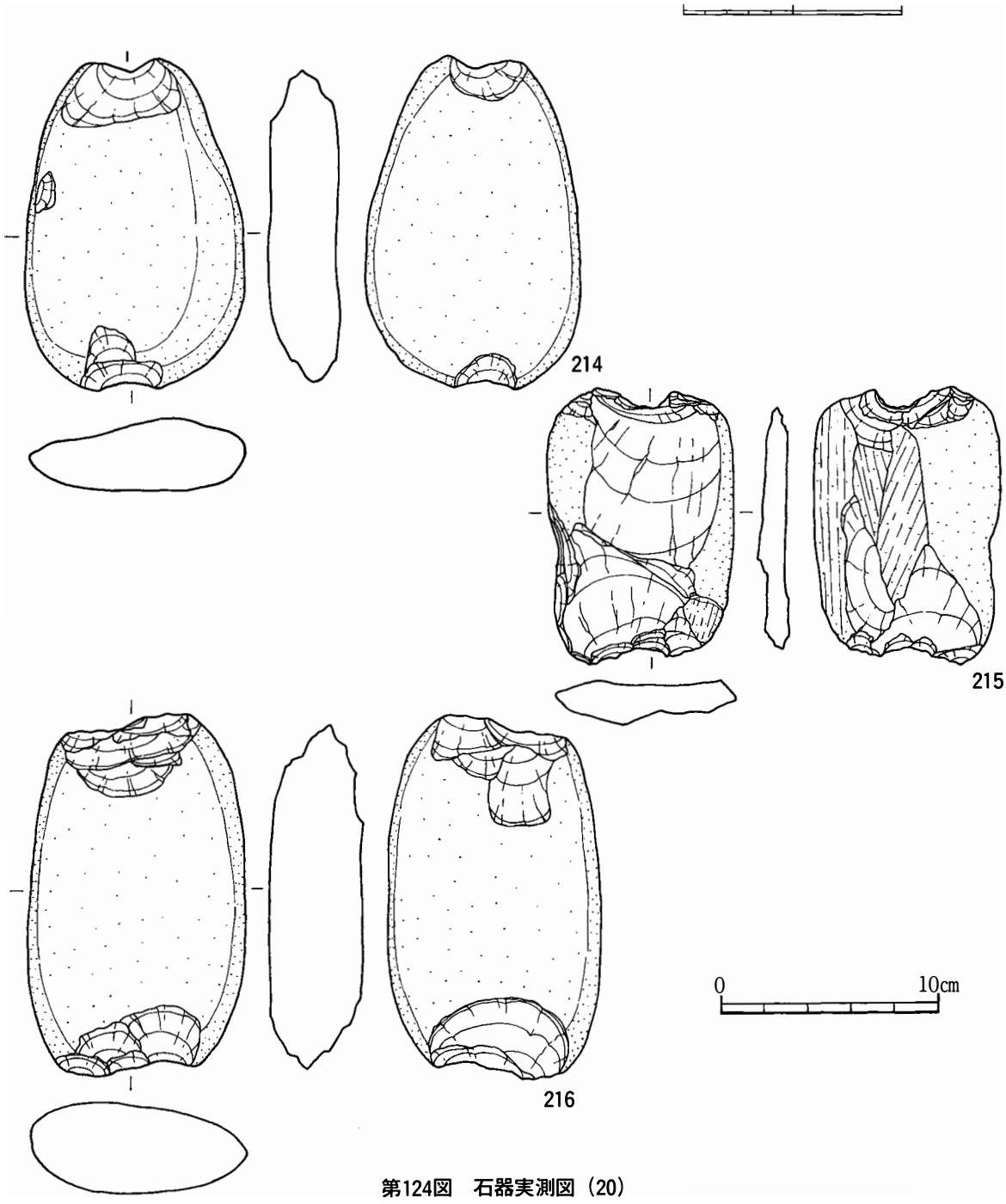


第123図　石器実測図（19）

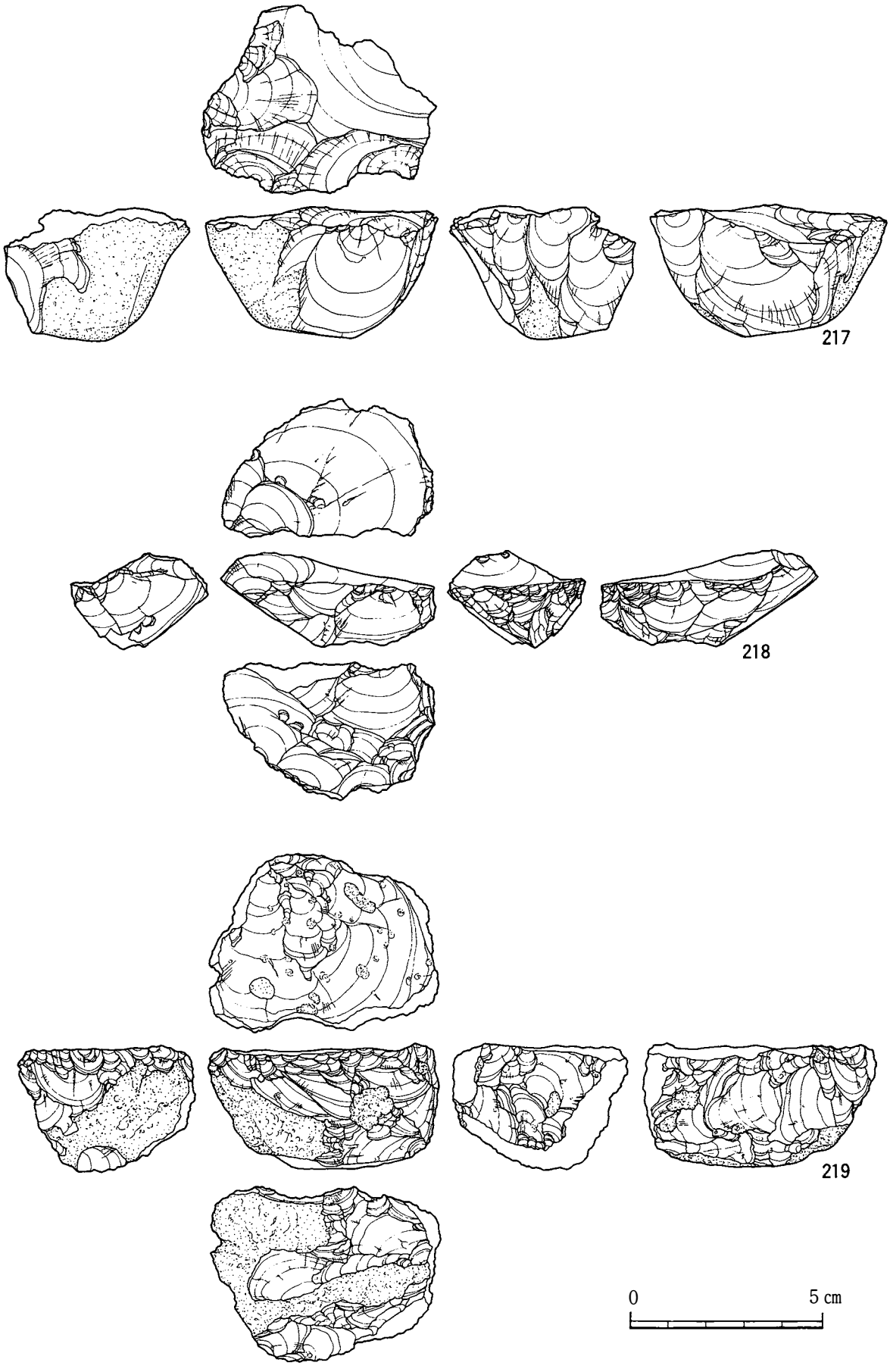




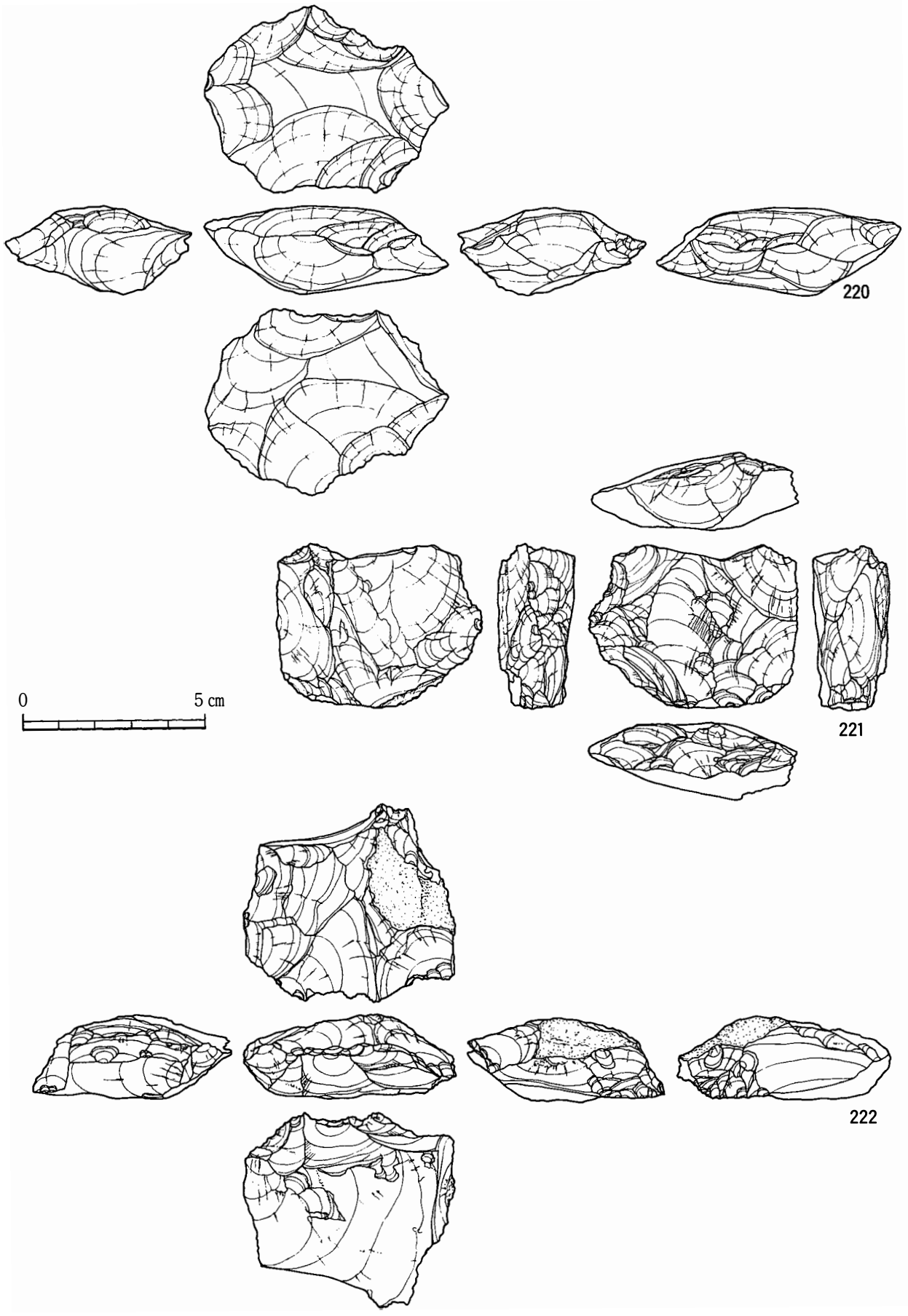




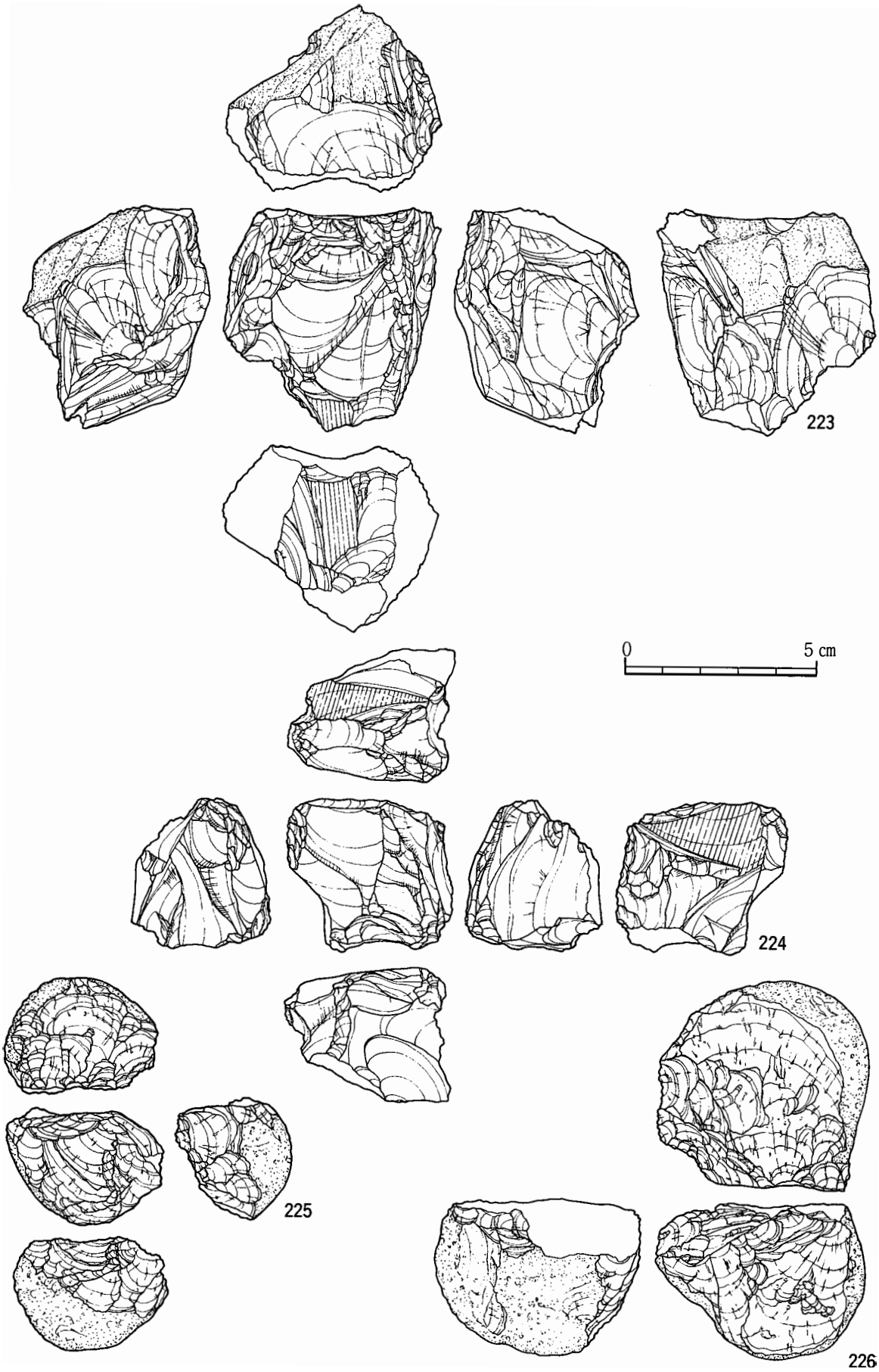
第124図　石器実測図（20）



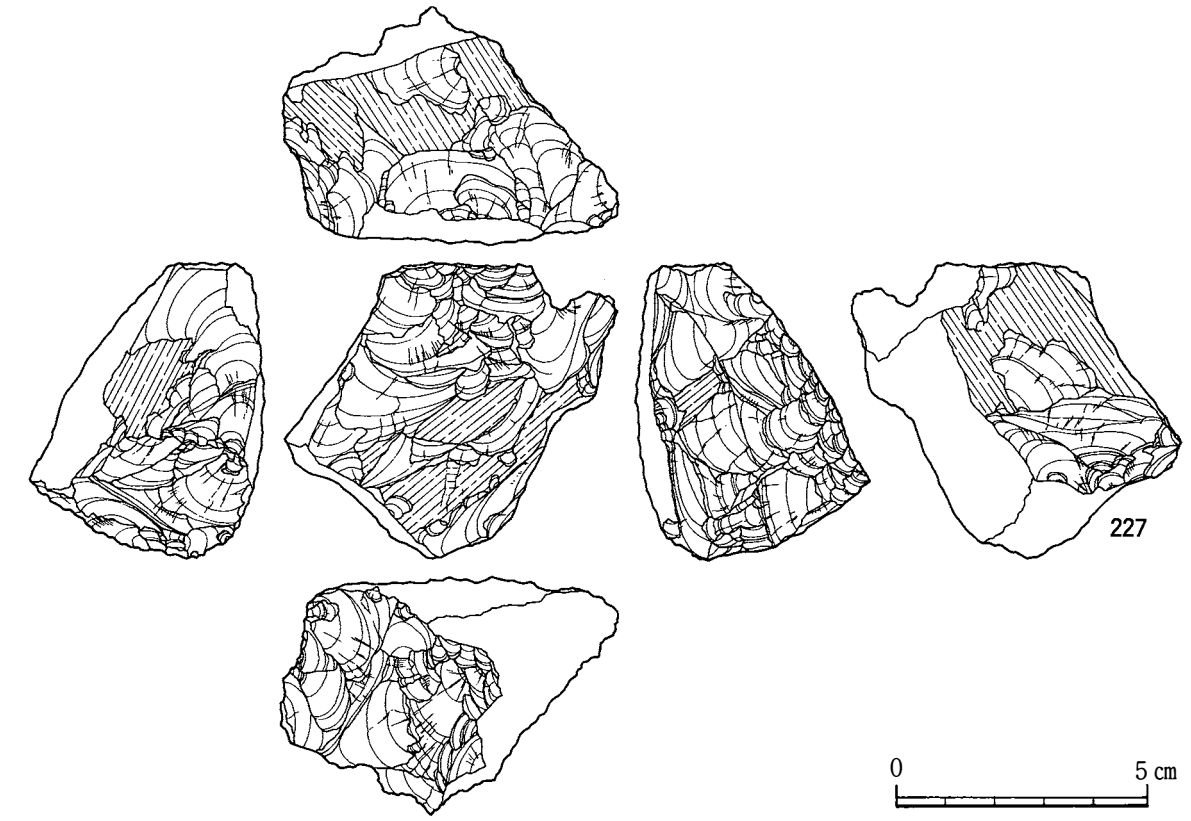
第125図　石器実測図（21）

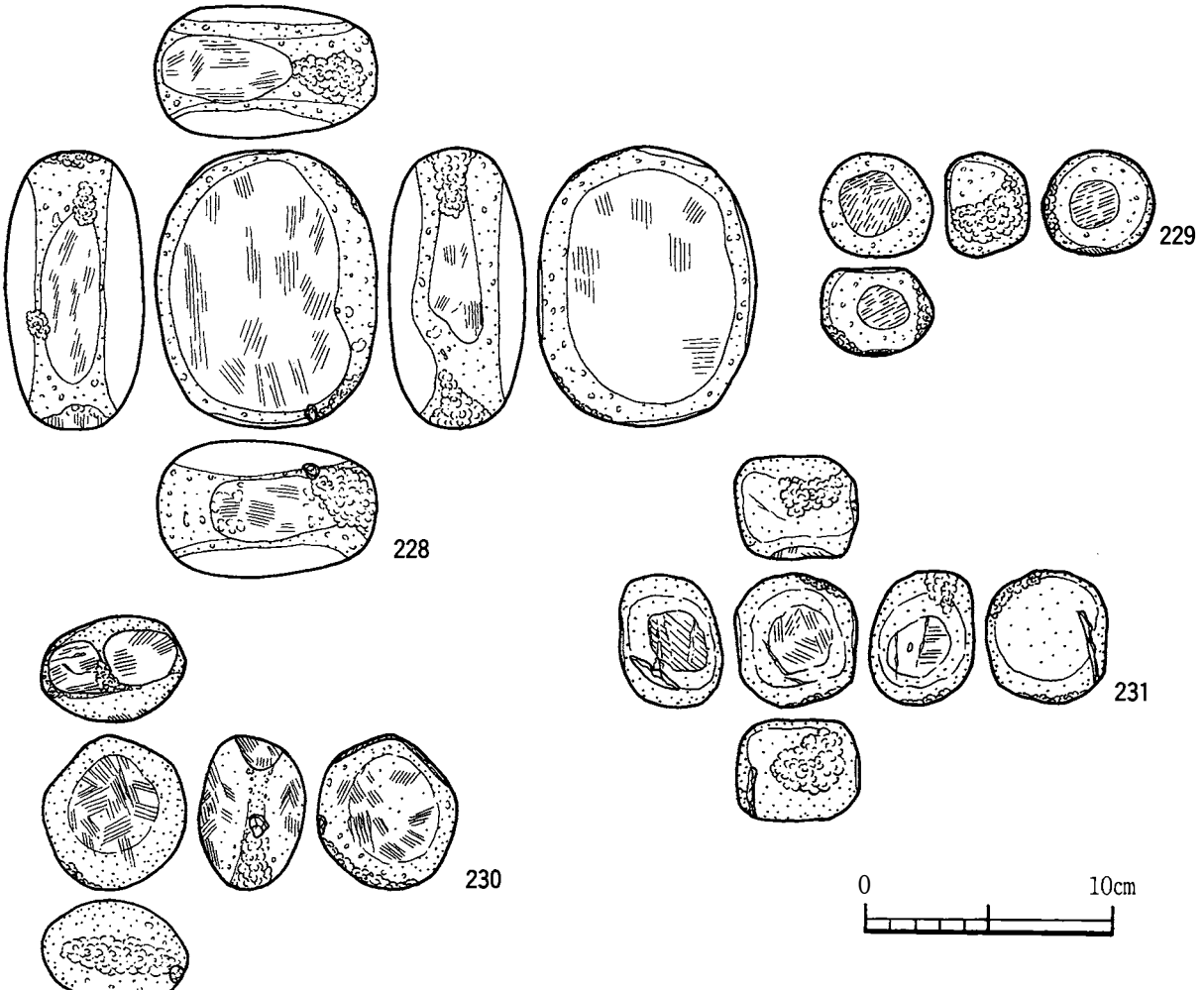


第126図　石器実測図（22）

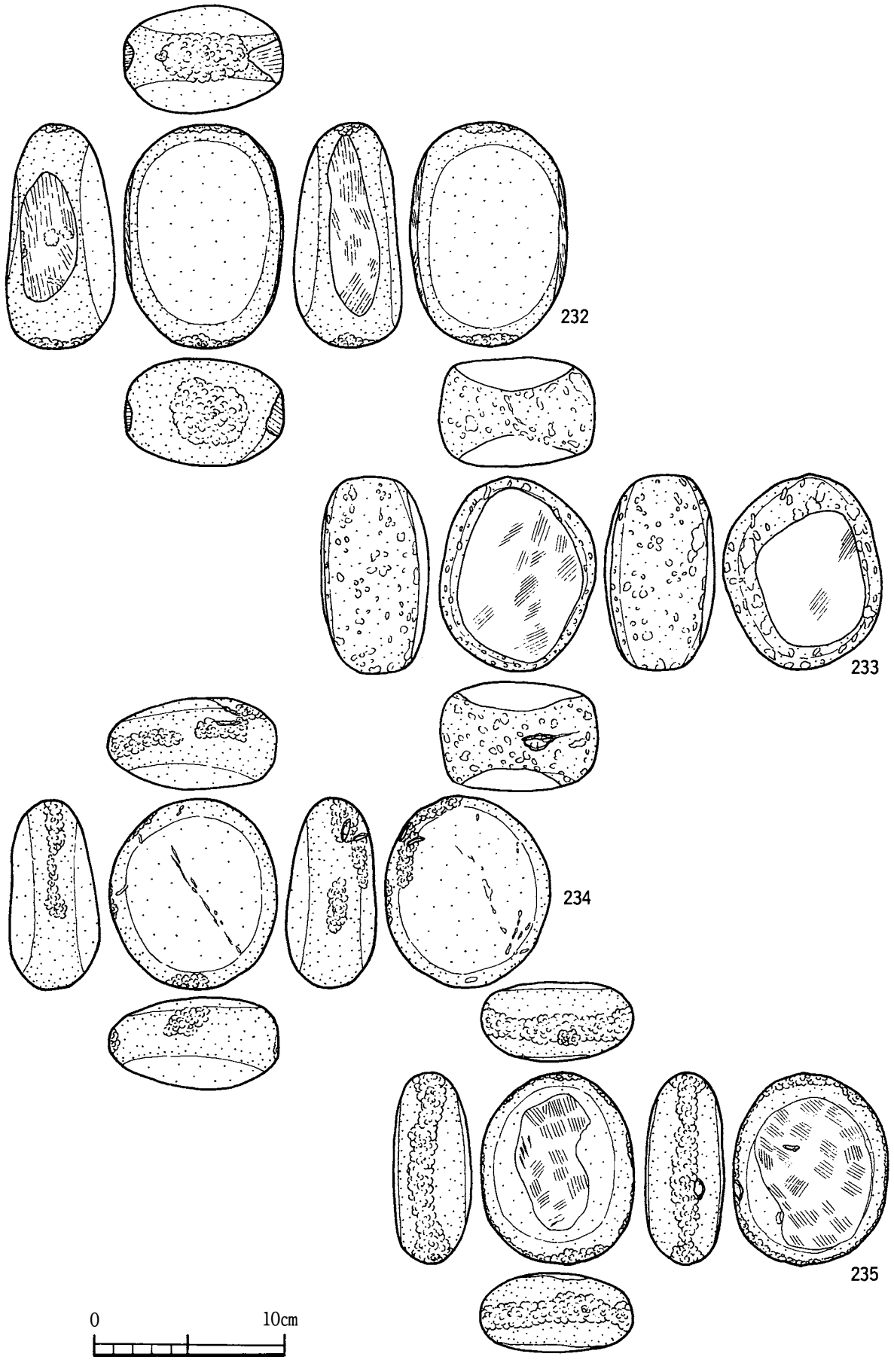


第127図　石器実測図（23）

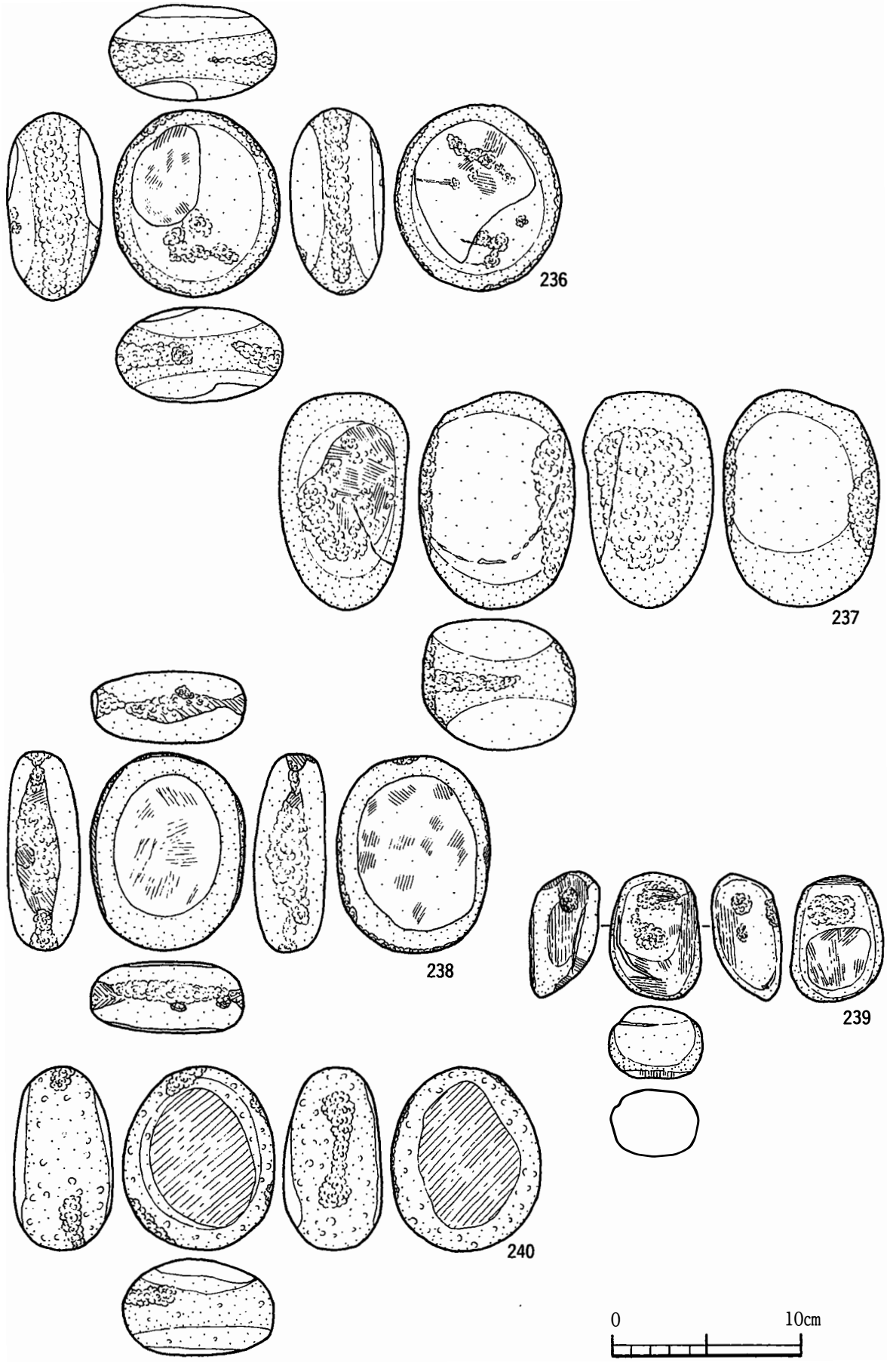




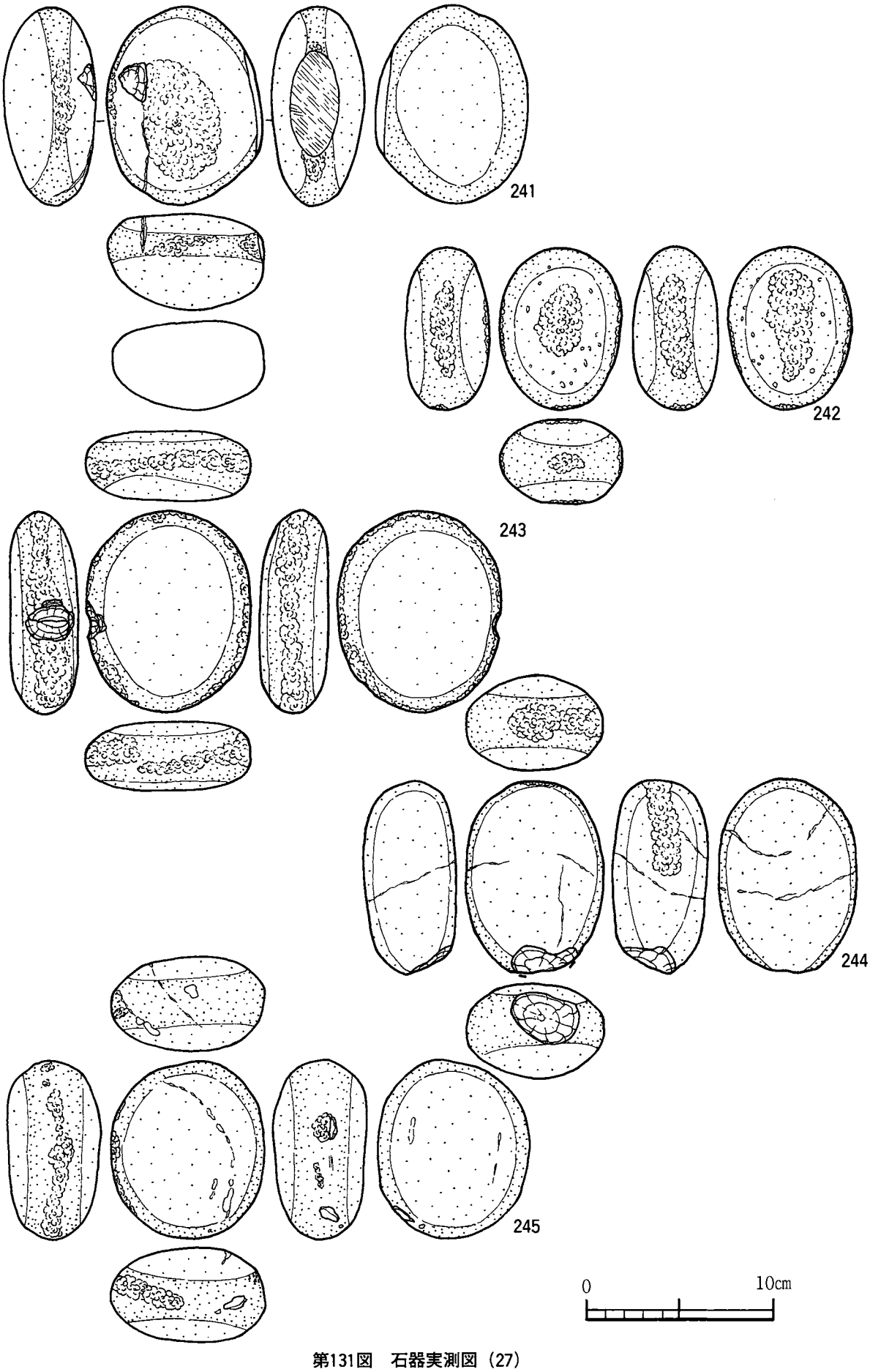
第128図　石器実測図（24）



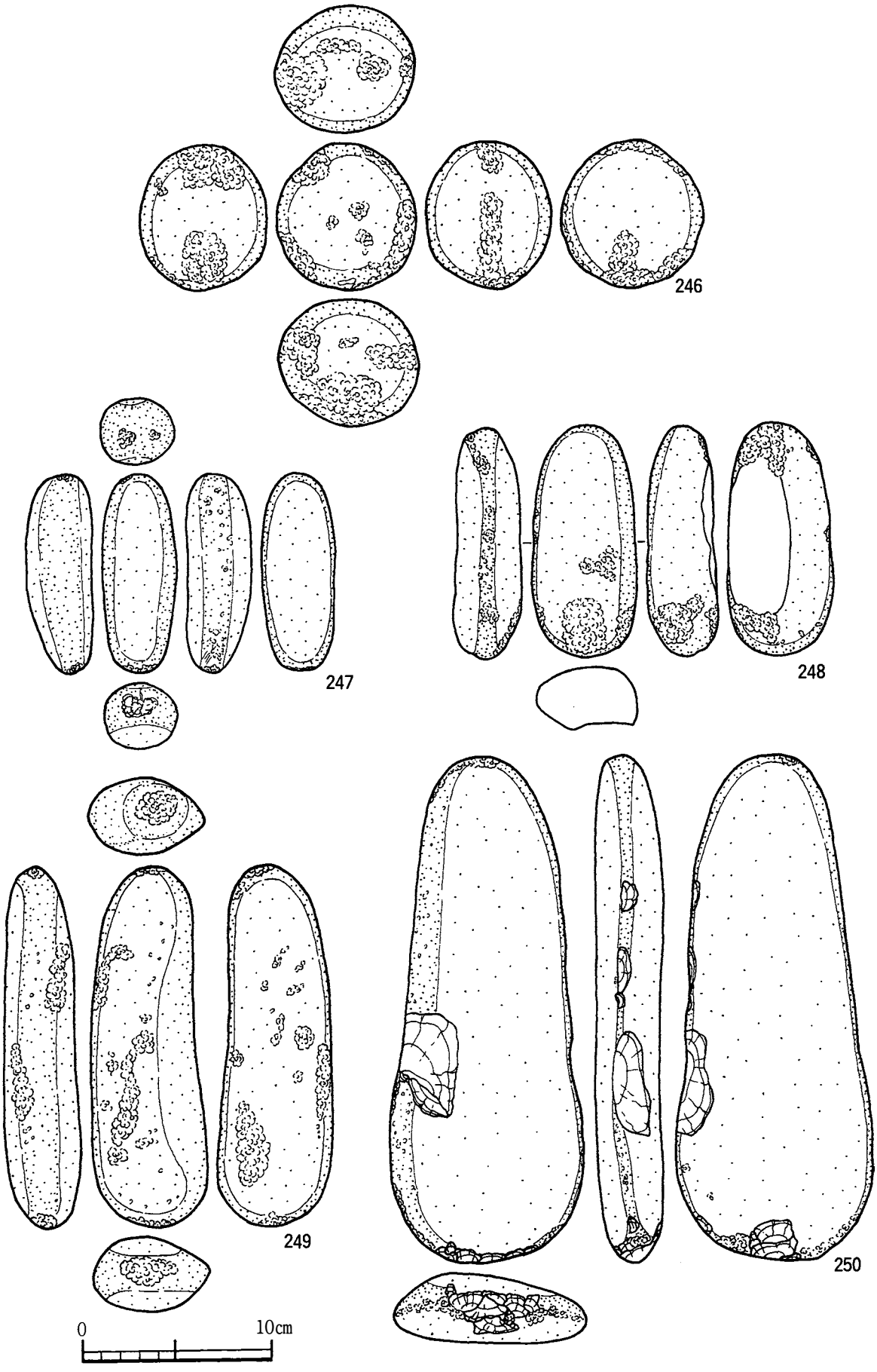
第129図　石器実測図（25）



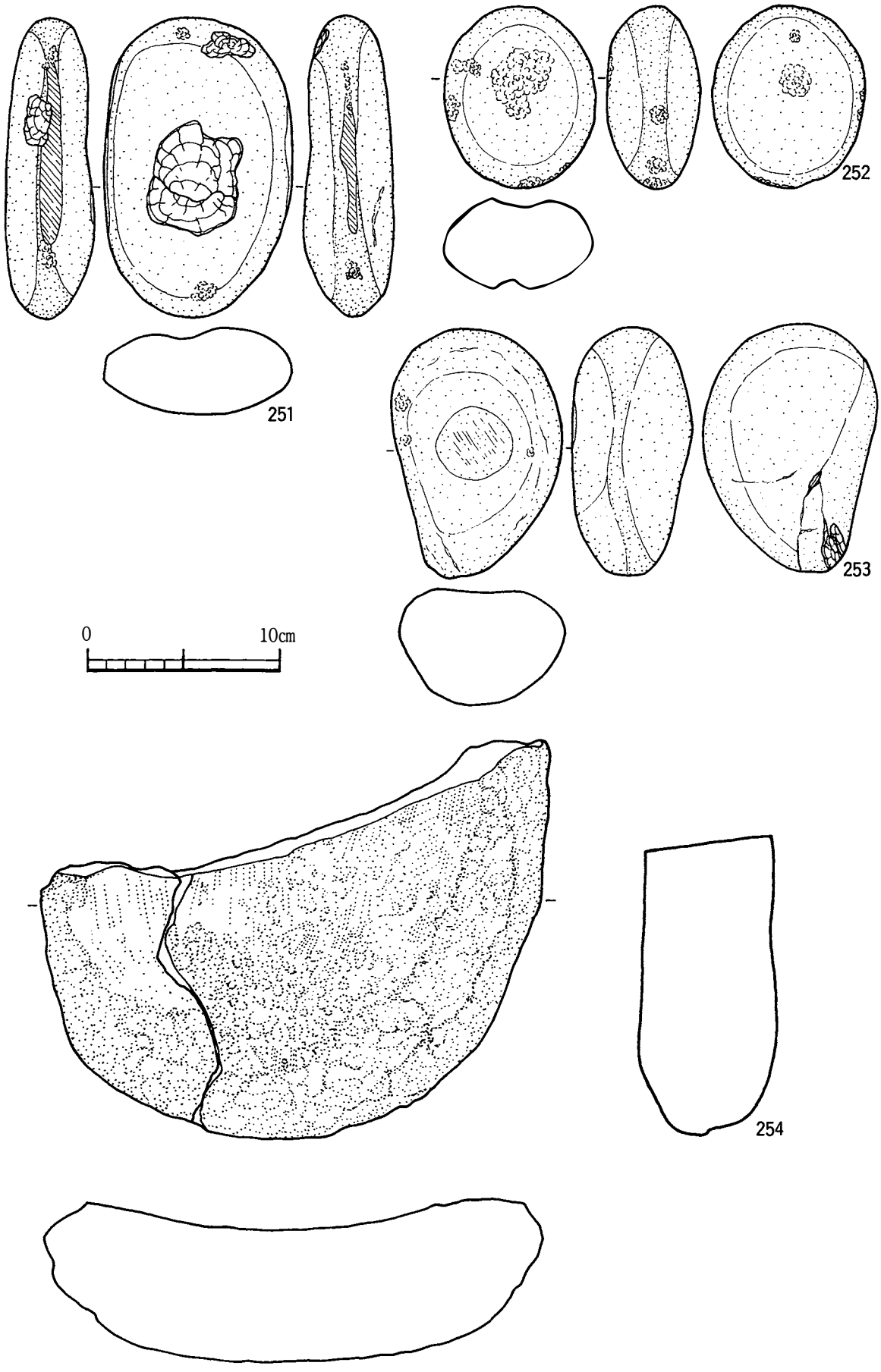
第130図　石器実測図（26）



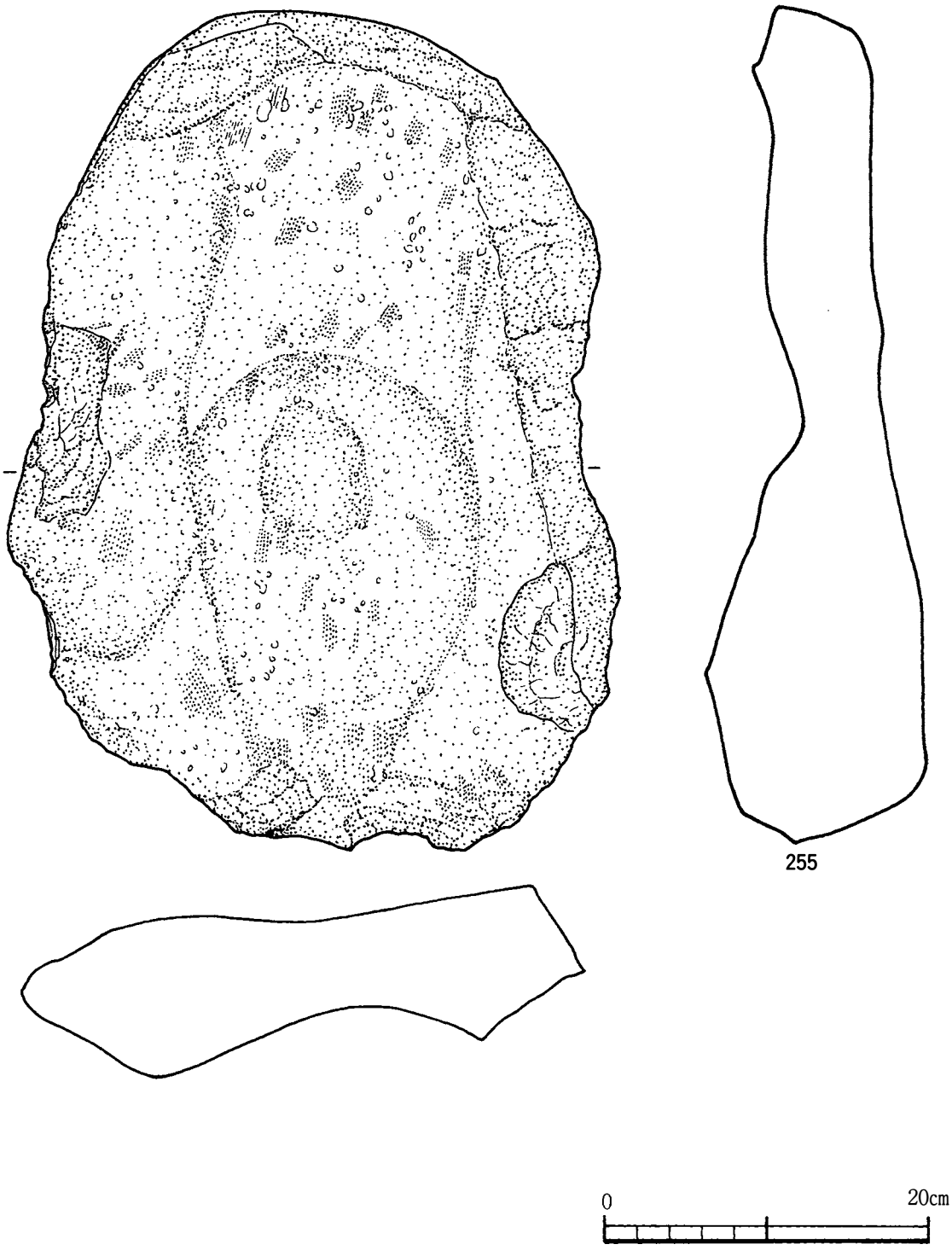
第131図　石器実測図（27）



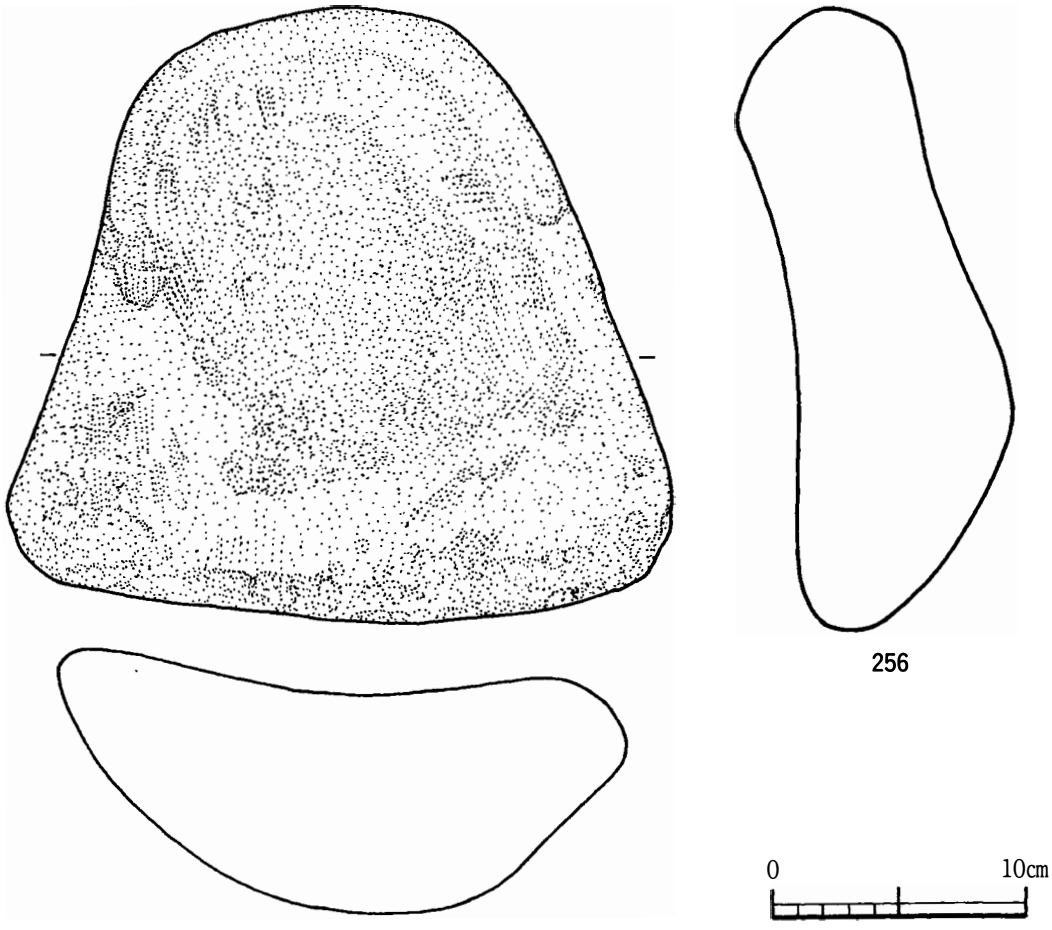
第132図　石器実測図（28）

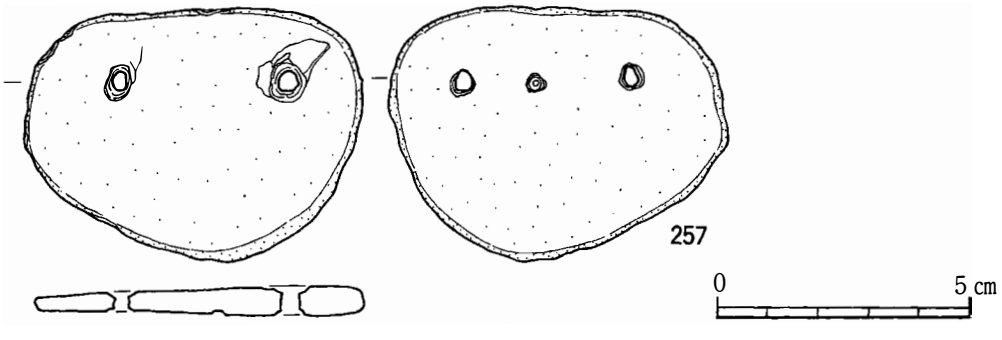


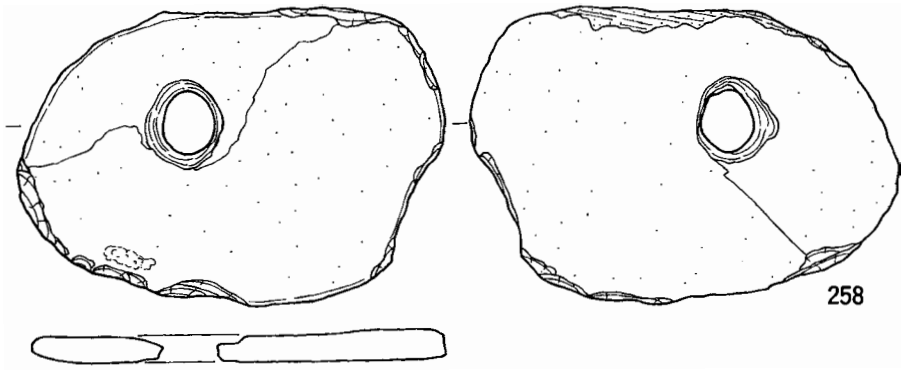
第133図　石器実測図（29）



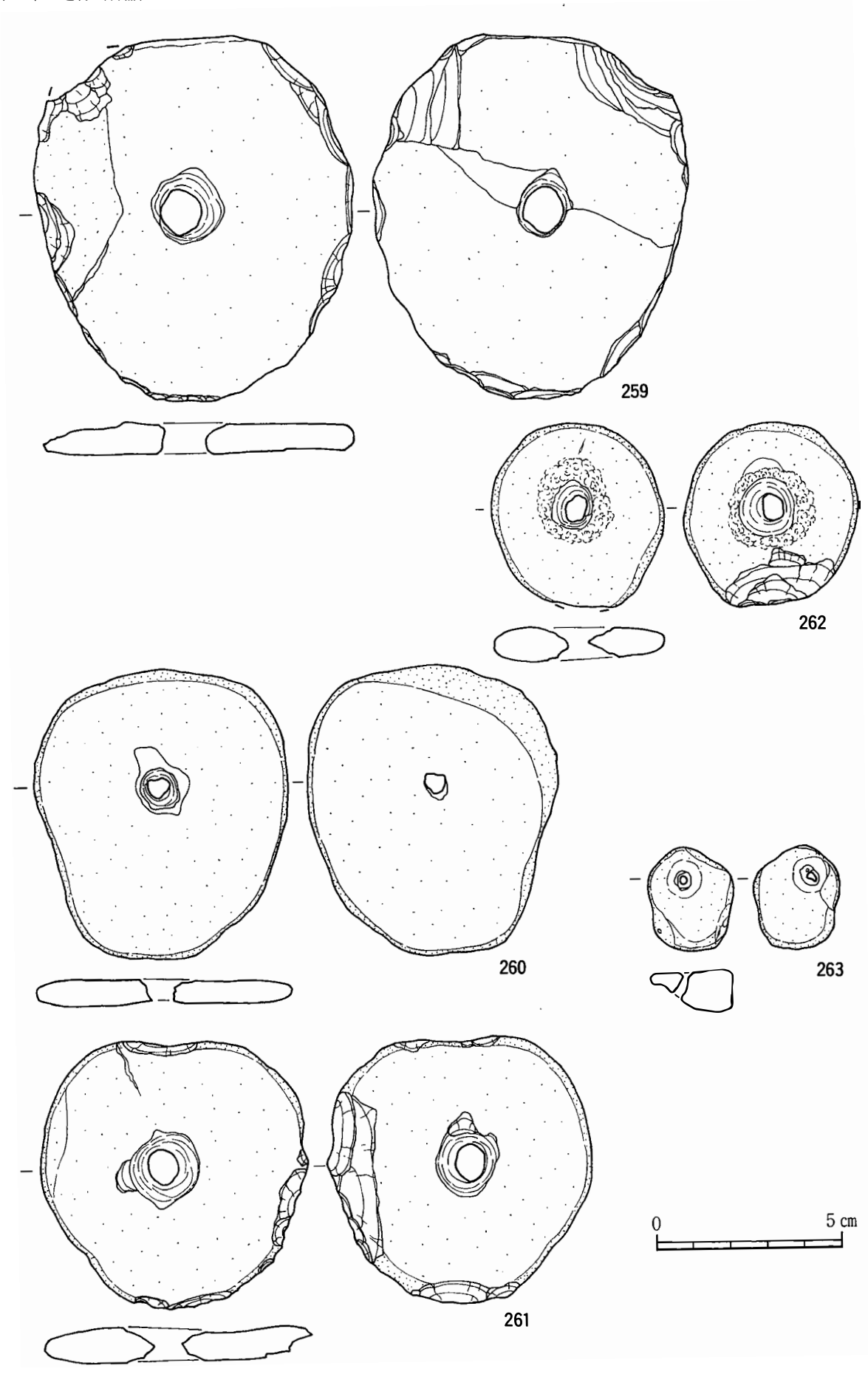
第134図　石器実測図（30）



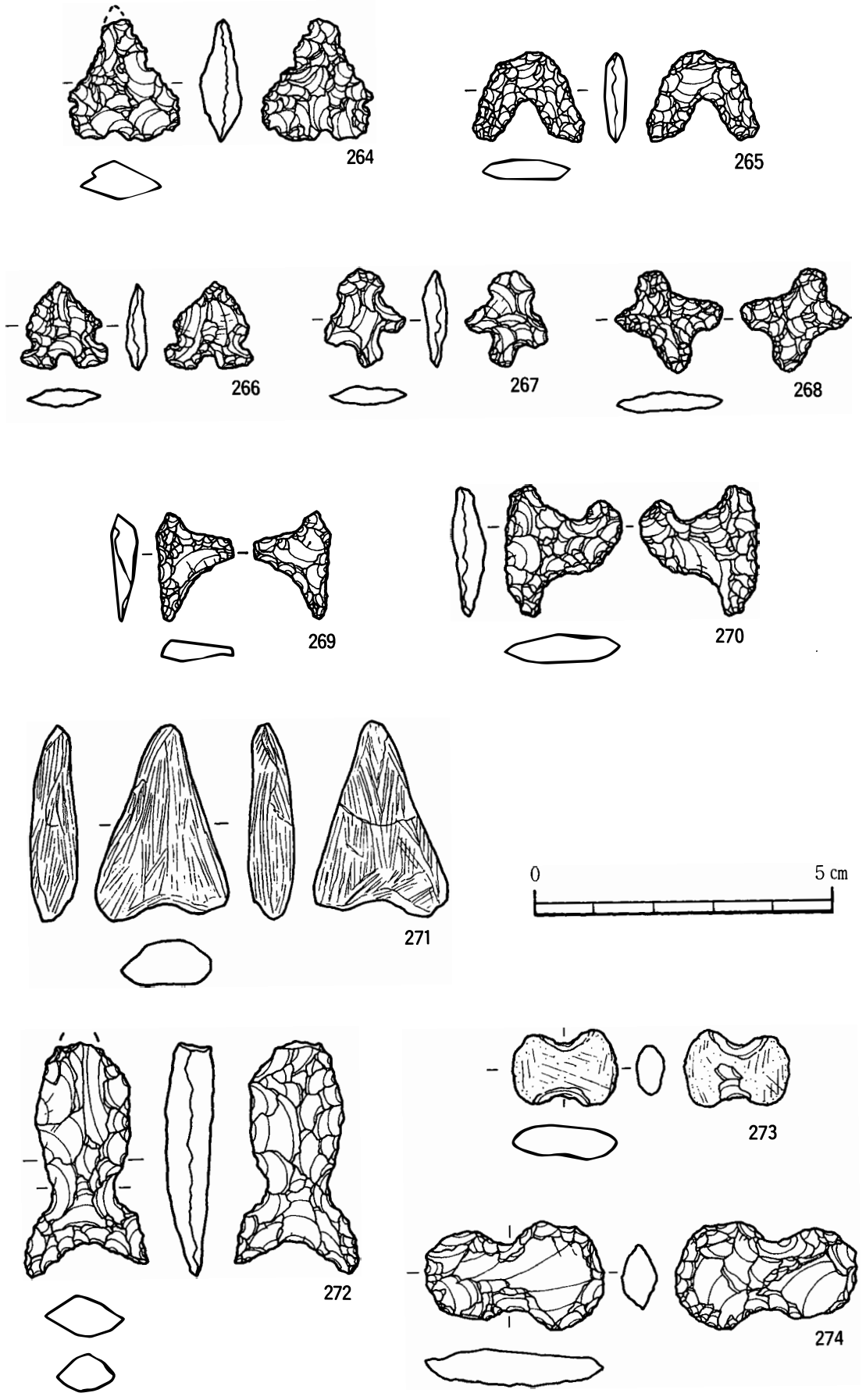




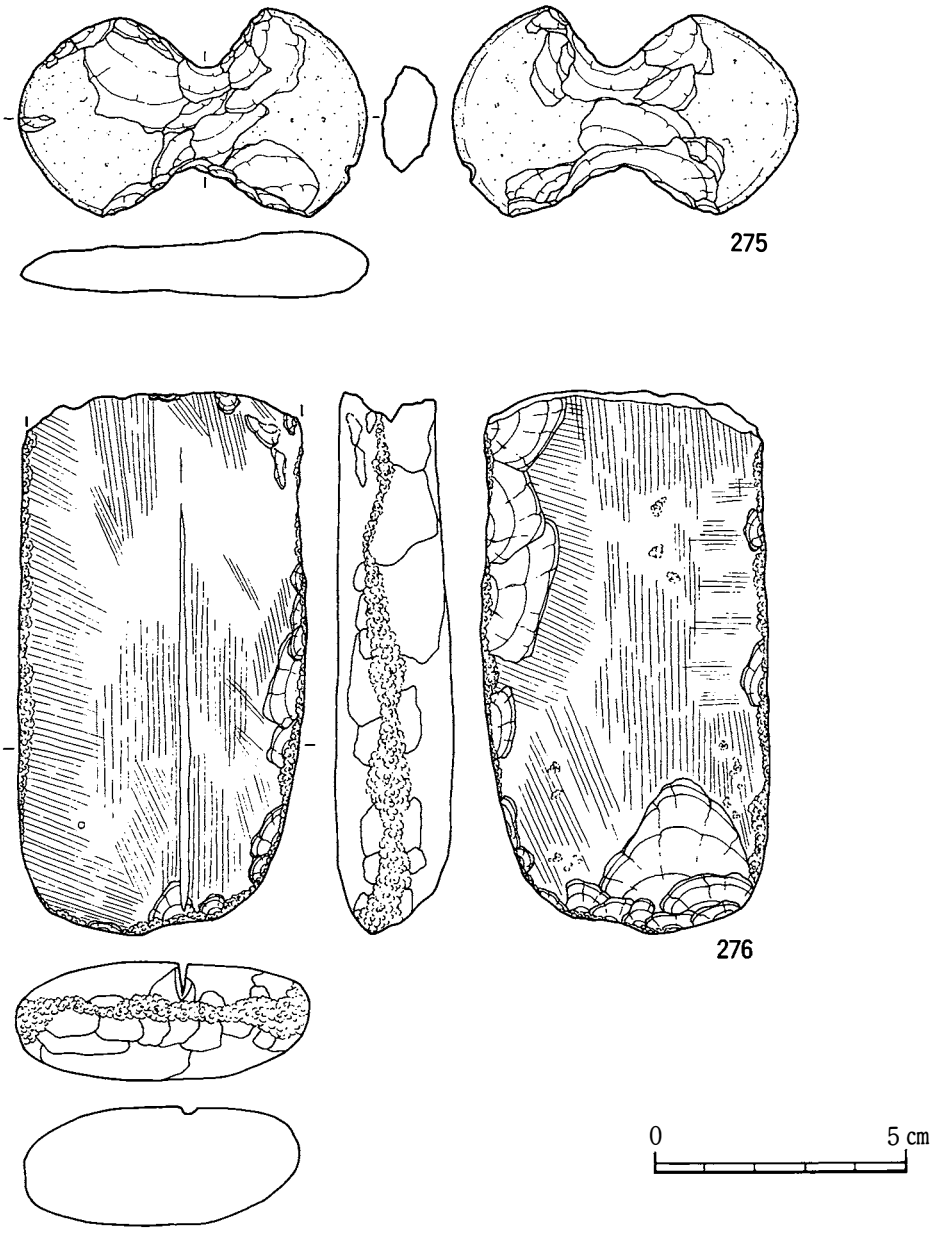
第135図　石器実測図（31）



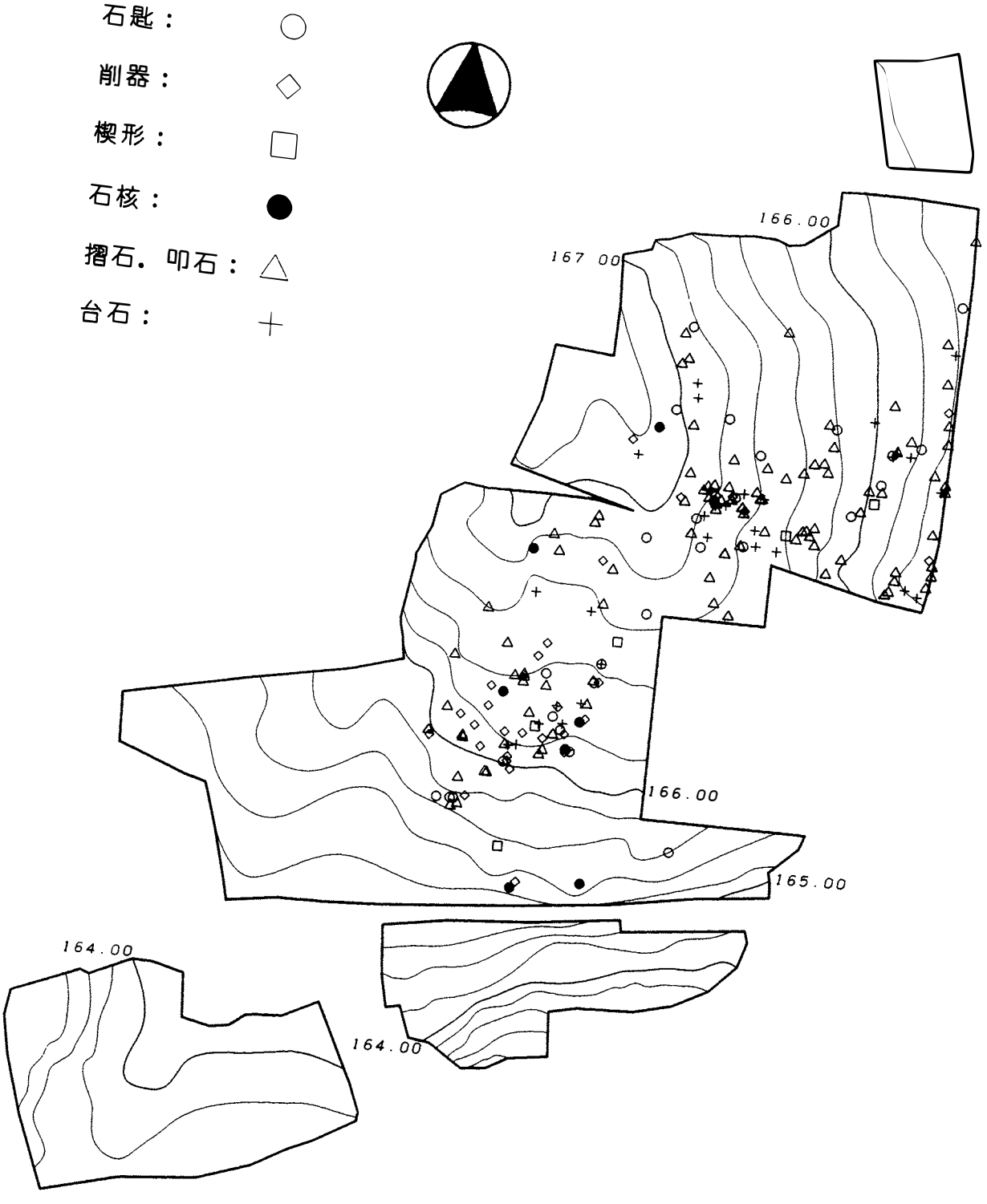
第136図　石器実測図（32）



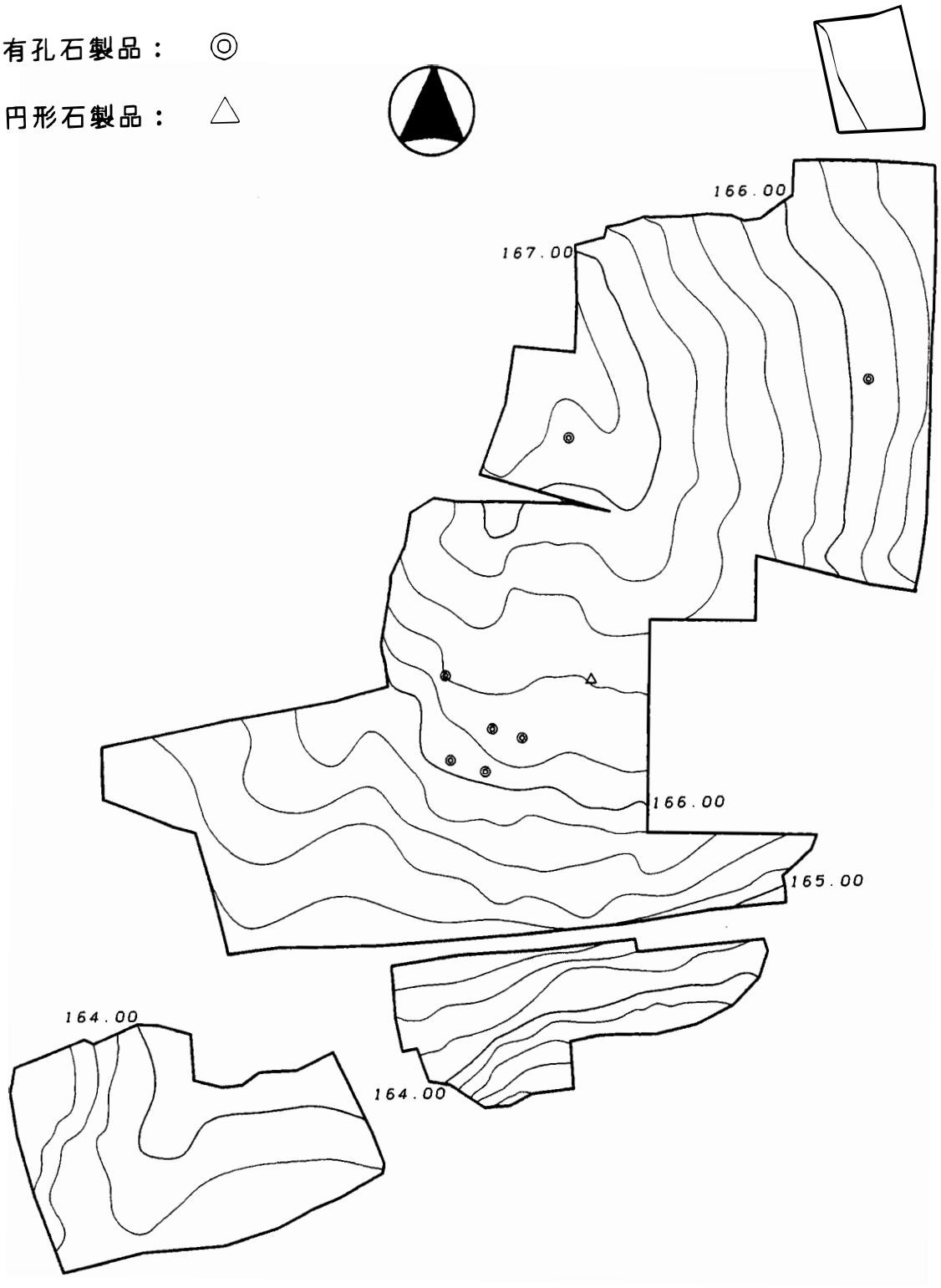
第137図　石器実測図（33）



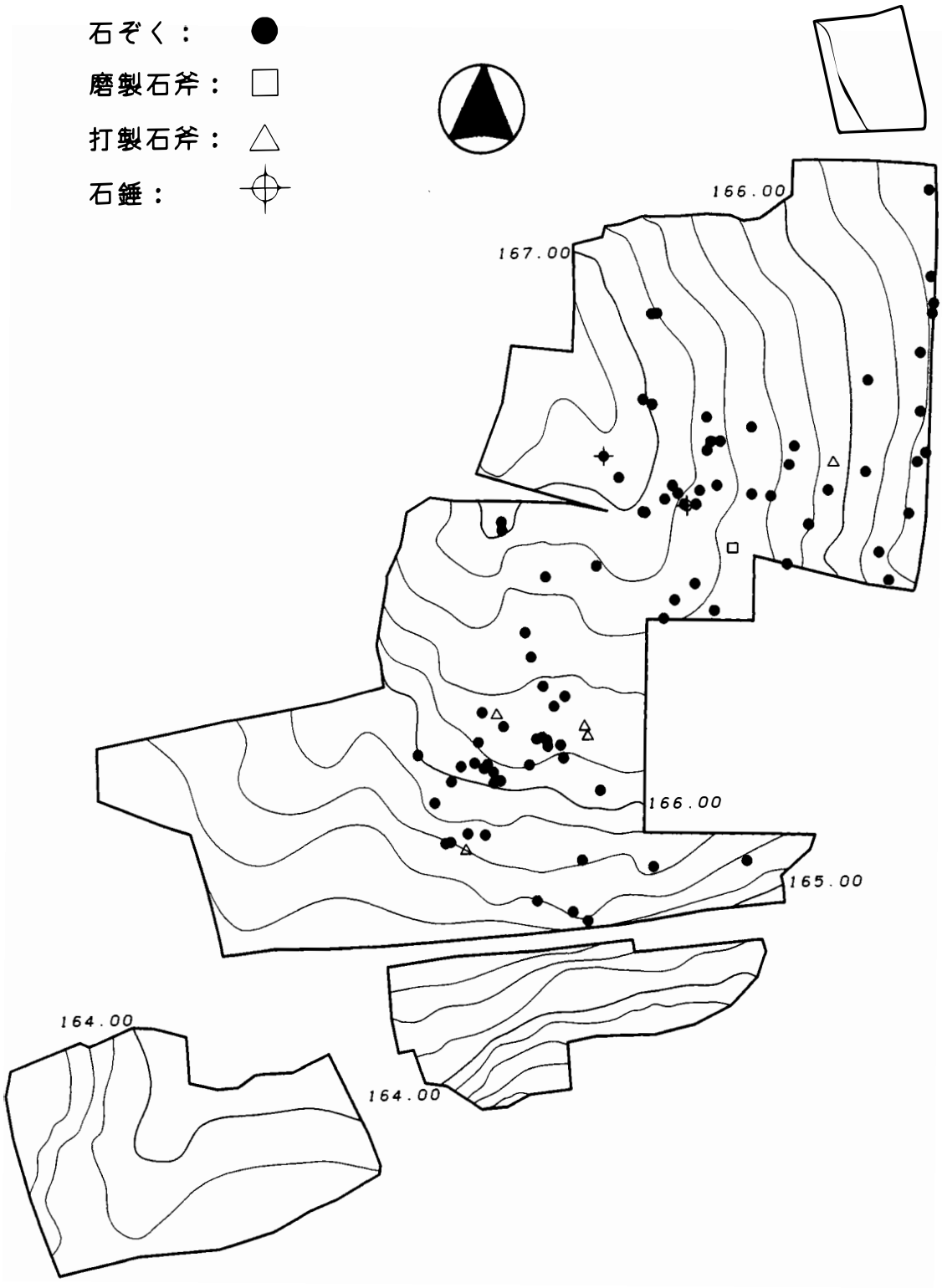
第138図　石器実測図（34）



第139図　石器分布図（１）



第140図　石器分布図（２）



第141図　石器分布図（３）

第11表　石器観察表（１）

（単位：cm、g）

挿図番号	番号	グリット	備考	層	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	形態	備考
105	1	N−13	横転層		尖頭器	チャート	4.2	1.9	8.0	6.0		
	2	N−20		3	尖頭器	チャート	3.2	2.2	0.8	5.6		
	3		表採		石鏃	黒耀石	1.7	1.3	4.5	0.9	1a	
	4	C・D区	C−D調査区		石鏃	黒耀石	2.2	1.4	0.6	1.0	1a	
	5	F−12		4	石鏃	サヌカイト	3.1	2.4	0.8	4.4	1a	
	6	K−13		4	石鏃	チャート	1.7	1.4	0.4	0.9	1b	
	7	H−15		3下	石鏃	サヌカイト	1.7	1.3	0.4	0.7	1b	
	8	M−14		4	石鏃	チャート	1.8	1.6	0.4	0.8	1b	
	9	N−11		4	石鏃	チャート	2.0	1.5	0.5	1.3	1b	
	10	M・N−14	後世の遺構内に混在		石鏃	黒耀石	1.9	1.7	0.4	0.9	1b	
	11	D−6		3	石鏃	チャート	2.2	1.3	0.6	1.1	1b	基部欠損
	12	L−13		3下	石鏃	チャート	2.1	1.4	0.4	0.9	1b	
	13	P−14	後世の遺構内に混在		石鏃	サヌカイト	2.3	1.8	0.4	1.3	1b	基部欠損
	14	K−13		4上	石鏃	チャート	2.5	2.0	0.6	1.7	1b	
	15		B区調査区		石鏃	チャート	2.2	1.6	0.5	1.1	1b	
	16	E−3		4	石鏃	チャート	2.7	1.9	0.8	2.9	1b	
	17	H−10		4	石鏃	チャート	2.7	1.9	0.5	1.8	1b	
106	18	F−9	52号集石		石鏃	チャート	2.9	1.9	0.5	1.4	1b	
	19	M−13		3	石鏃	チャート	3.2	2.1	0.6	0.8	1b	
	20	H−1		3	石鏃	黒耀石	1.3	1.0	0.3	0.3	1c	
	21	L−9	後世の遺構内に混在		石鏃	黒耀石	1.6	1.4	0.4	0.4	1c	尖端部、基部欠損
	22	F−9		3	石鏃	黒耀石	1.6	1.4	0.4	0.4	1c	
	23	F−8		3	石鏃	黒耀石	1.6	1.4	0.3	0.3	1c	
	24	F−6	後世のPit内に混在		石鏃	チャート	1.7	1.3	0.4	0.6	1c	尖端部再生
	25	K−11	後世の遺構内に混在		石鏃	サヌカイト	1.7	1.3	0.3	0.4	1c	
	26	P−17		4	石鏃	サヌカイト	1.8	1.4	0.3	1.0	1c	
	27	K−11		3	石鏃	チャート	1.9	1.2	0.3	0.4	1c	尖端部欠損
	28	H−16		4	石鏃	チャート	1.8	1.6	0.4	0.9	1c	
	29	E−8		4	石鏃	サヌカイト	1.9	1.3	0.3	0.7	1c	
	30	L−11	後世のPit内に混在		石鏃	チャート	1.9	1.3	0.4	0.7	1c	基部欠損
	31	G−6	調査区		石鏃	チャート	1.9	1.7	0.5	1.0	1c	
	32	G−12	撹乱		石鏃	チャート	2.0	1.5	0.4	0.8	1c	
	33	E−8	後世の遺構内に混在		石鏃	チャート	1.9	1.4	0.4	0.6	1c	尖端部、基部欠損
	34	K−13		3	石鏃	黒耀石	1.7	1.1	0.4	0.4	1c	
	35	J−13		3	石鏃	黒耀石	1.8	1.1	0.4	0.5	1c	尖端部、基部欠損
	36	K−14		3	石鏃	チャート	1.9	1.4	0.3	0.5	1c	尖端部欠損
	37	J−13		3	石鏃	黒耀石	2.0	1.4	0.3	0.5	1c	
	38		B区調査		石鏃	黒耀石	2.0	1.4	0.3	0.4	1c	
	39	M−12		4	石鏃	黒耀石	1.9	1.8	0.4	1.0	1c	基部欠損
	40	H−10		4	石鏃	チャート	2.0	1.6	0.4	1.0	1c	尖端部欠損
107	41	L−13		4	石鏃	チャート	2.1	1.7	0.5	1.2	1c	
	42	F−7		4	石鏃	サヌカイト	2.1	1.7	0.5	1.0	1c	
	43	G−9		4	石鏃	サヌカイト	2.2	1.7	0.4	1.2	1c	基部欠損
	44	N−16		3	石鏃	チャート	2.1	1.6	0.4	1.0	1c	
	45	M−12		3	石鏃	チャート	2.2	1.2	0.3	0.4	1c	
	46	J−13		3	石鏃	チャート	2.2	1.6	0.4	0.9	1c	
	47	N−16		4	石鏃	チャート	2.3	1.8	0.5	1.5	1c	
	48	J−14	後世の遺構内に混在		石鏃	サヌカイト	2.3	1.6	0.4	1.0	1c	尖端部欠損
	49	M−12		3	石鏃	サヌカイト	2.4	1.7	0.4	0.7	1c	
	50	L−9	後世の遺構内に混在		石鏃	チャート	2.4	1.4	0.4	0.8	1c	尖端部欠損
	51	F−9		3	石鏃	チャート	2.4	1.6	0.5	0.9	1c	
	52	H−10	後世の遺構内に混在		石鏃	黒耀石	2.4	1.8	0.6	1.4	1c	
	53	D−5		4	石鏃	チャート	2.4	2.0	0.5	1.5	1c	
	54	E−6	後世の遺構内に混在		石鏃	チャート	2.4	1.9	0.4	1.4	1c	
	55	L−8		3	石鏃	チャート	2.4	1.7	0.5	1.5	1c	
	56	C−8	後世の遺構内に混在		石鏃	サヌカイト	2.4	2.0	0.4	1.4	1c	
	57	L−12		4	石鏃	チャート	2.5	2.1	0.5	1.7	1c	
	58	G−11		3	石鏃	チャート	2.5	1.6	0.4	0.8	1c	
108	59	F−7		3	石鏃	チャート	2.6	1.8	0.7	2.3	1c	
	60		撹乱		石鏃	チャート	2.6	1.6	0.3	0.8	1c	
	61	F−5		3	石鏃	チャート	2.8	2.2	0.4	1.7	1c	尖端部欠損
	62	H−14	横転層		石鏃	サヌカイト	2.3	1.7	0.4	1.0	1c	尖端部欠損
	63		横転層		石鏃	サヌカイト	2.6	1.8	0.4	1.2	1c	尖端部欠損
	64	K−13		4	石鏃	サヌカイト	2.7	1.7	0.6	1.9	1c	
	65		C区調査区		石鏃	黒耀石	2.8	1.6	0.4	0.8	1c	
	66	P−16		3	石鏃	チャート	2.9	2.1	0.5	2.2	1c	
	67	F−7		4	石鏃	サヌカイト	3.0	1.9	0.5	1.8	1c	
	68	L−14		4	石鏃	黒耀石	1.2	1.7	0.5	0.5	1d	尖端部再生
	69	N−10	後世のPit内に混在		石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.4	0.7	1d	基部欠損
	70	N−15		3	石鏃	黒耀石	1.7	1.7	0.5	0.7	1d	
	71	F−12		3	石鏃	黒耀石	1.7	1.1	0.4	0.5	1d	尖端部再生
	72	K−13		4	石鏃	安山岩	1.8	1.4	0.4	0.8	1d	尖端部欠損
	73	L−12		3	石鏃	チャート	1.8	1.3	0.2	0.4	1d	基部欠損
	74	G−8		4	石鏃	チャート	1.8	1.4	0.4	1.3	1d	基部欠損
	75	N−18	横転層		石鏃	チャート	1.9	1.7	0.4	0.8	1d	
	76	G−9		3	石鏃	チャート	2.2	1.6	0.5	1.1	1d	尖端部、基部欠損
	77	P−16		4	石鏃	サヌカイト	2.6	1.7	0.3	1.1	1d	
109	78	K−13		4	石鏃	チャート	2.3	1.4	0.4	0.9	1d	
	79	L−13		3	石鏃	サヌカイト	2.3	1.6	0.4	1.0	1d	
	80	C−8	後世のPit内に混在		石鏃	チャート	2.3	2.0	0.5	1.5	1d	尖端部欠損
	81		C.D調査区		石鏃	サヌカイト	2.3	1.9	0.5	1.6	1d	
	82	J−11	撹乱		石鏃	チャート	2.4	1.7	0.4	1.3	1d	尖端部、基部欠損
	83	G−5・6	後世の遺構内に混在		石鏃	サヌカイト	2.4	1.5	0.6	1.0	1d	基部欠
	84	G−8		4	石鏃	チャート	2.4	1.9	0.5	1.5	1d	
	85	L−9	後世のPit内に混在		石鏃	チャート	2.5	1.6	0.4	1.0	1d	尖端部、基部欠損
	86	G−14	横転層		石鏃	チャート	2.5	1.4	0.4	0.7	1d	
	87	F−7		4	石鏃	チャート	2.5	1.4	0.4	0.9	1d	
	88	G−7	後世の遺構内に混在		石鏃	サヌカイト	2.5	1.5	0.6	1.3	1d	
	89	P−14		4	石鏃	サヌカイト	2.6	2.1	0.7	2.0	1d	
	90		後世の遺構内に混在		石鏃	チャート	2.7	1.3	0.4	0.9	1d	
	91	J−16	表採		石鏃	サヌカイト	2.7	1.8	0.4	1.7	1d	
	92	H−17	撹乱		石鏃	チャート	2.7	2.0	0.6	2.1	1d	
	93	L−11	撹乱		石鏃	チャート	2.9	1.5	0.6	1.6	1d	尖端部欠損
	94	K−13		4	石鏃	サヌカイト	2.9	2.1	0.5	2.0	1d	
	95	H−11		3	石鏃	チャート	2.9	1.5	0.4	1.2	1d	基部欠損

第12表　石器観察表（２）

（単位：cm、g）

挿図番号	番号	グリット	備考	層	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	形態	備考
110	96	K−11		4	石鏃	チャート	2.9	1.6	0.8	3.0	1d	尖端部欠損
	97		F区調査区		石鏃	チャート	2.9	1.7	0.4	0.6	1d	尖端部欠損
	98	K−13		3	石鏃	チャート	3.0	1.9	0.4	1.7	1d	
	99	E−6		3	石鏃	サヌカイト	3.1	1.6	0.5	1.6	1d	
	100	K−13		4	石鏃	サヌカイト	3.2	1.8	0.4	1.5	1d	
	101	J−12		3	石鏃	チャート	3.7	2.2	0.6	3.4	1d	尖端部、基部欠損
	102	P−16		3	石鏃	チャート	3.2	2.4	0.6	2.7	1d	尖端部、基部欠損
	103	H−11	27号土坑	3	石鏃	チャート	3.4	2.4	0.6	2.5	1d	基部欠損
	104	H−8	後世の遺構内に混在		石鏃	チャート	1.7	1.6	0.4	1.0	2a	
	105	L−6		4	石鏃	黒耀石	1.9	2.1	0.7	2.2	2a	
	106	F−8		3	石鏃	チャート	1.0	1.2	0.4	0.3	2b	尖端部欠損
	107	G−8		4	石鏃	黒耀石	1.4	1.4	0.3	0.5	2b	
	108	B−1	後世の遺構内に混在		石鏃	サヌカイト	1.7	1.7	0.5	0.9	2b	
	109		B区調査区		石鏃	チャート	2.2	1.9	0.6	1.7	2b	
	110	L−14		3	石鏃	チャート	1.3	1.1	0.2	0.2	2c	尖端部欠損
	111	K−13		3	石鏃	黒耀石	1.3	1.2	0.3	0.3	2c	
	112	N−12		4	石鏃	チャート	1.3	1.5	0.4	0.5	2c	基部欠損
	113	P−18		4	石鏃	黒耀石	1.4	1.4	0.4	0.4	2c	
111	114	M−12		4	石鏃	チャート	1.4	1.4	0.4	0.6	2c	尖端部欠損
	115	K−13		4	石鏃	黒耀石	1.4	1.3	0.2	0.2	2c	
	116	H−16		4	石鏃	サヌカイト	1.4	1.4	0.2	0.3	2c	
	117	F−10		4	石鏃	安山岩	1.5	1.4	0.4	0.6	2c	
	118	M−9		3	石鏃	黒耀石	1.5	1.5	0.4	0.5	2c	尖端部欠損
	119	L−8	後世のPit内に混在		石鏃	チャート	1.6	1.7	0.4	0.7	2c	
	120	P−14		4	石鏃	チャート	1.7	1.5	0.4	0.6	2c	
	121	G−9	24号土坑		石鏃	チャート	1.9	1.4	0.4	0.5	2c	
	122	G−12		4	石鏃	チャート	1.4	1.4	0.4	0.5	2d	
	123	F−7	22号土坑		石鏃	チャート	1.6	1.5	0.4	0.7	2d	
	124	H−12	横転層		石鏃	チャート	1.8	1.7	0.5	1.0	2d	
	125	L−13		3	石鏃	チャート	1.9	2.5	0.5	1.4	2d	
	126	E−7			石鏃	黒耀石	2.0	2.0	0.4	0.8	2d	
	127	P−16	後世の遺構内に混在		石鏃	サヌカイト	4.8	2.2	1.2	10.6	3a	
	128	E−8		3	石鏃	チャート	4.4	2.1	7.5	7.3	3b	
112	129	H−13	横転層		石匙	チャート	2.5	3.0	0.6	3.1	横型	
	130	H−15		3	石匙	サヌカイト	2.6	5.4	0.7	8.2	横型	
	131		C区調査区		石匙	サヌカイト	3.1	4.1	0.6	6.9	横型	
	132		C区調査区		石匙	サヌカイト	3.0	4.2	0.9	8.4	横型	
	133	G−9		3	石匙	チャート	3.1	5.5	1.1	17.2	横型	
	134	J−16		4	石匙	サヌカイト	2.8	3.7	0.4	3.7	横型	
	135	N−14		3	石匙	チャート	3.5	4.2	0.9	11.4	横型	
	136	M−11		4	石匙	チャート	4.1	5.2	0.7	13.8	横型	
	137	J−13		4	石匙	チャート	5.4	9.4	1.3	53.1	横型	
113	138	K−13		4	石匙	サヌカイト	4.5	6.1	0.8	20.0	横型	
	139	J−6		3	石匙	頁岩	2.7	2.7	0.6	3.8	横型	
	140	P−16		3	石匙	チャート	3.0	5.0	0.8	10.1	横型	
	141	L−9		3	石匙	チャート	3.8	4.7	1.2	16.4	横型	
	142	G−9		3	石匙	サヌカイト	3.8	5.8	1.2	19.2	横型	
	143	G−9		4	石匙	サヌカイト	4.3	5.8	0.9	15.7	横型	
	144	E−6	15号集石		石匙	チャート	2.5	2.9	0.6	3.5	横型	
	145	E−7		4	石匙	頁岩	3.1	3.0	0.9	5.8	中間型	
	146	M−14		4	石匙	チャート	3.5	2.8	1.0	8.5	中間型	
	147	M−13		3	石匙	サヌカイト	4.0	3.9	0.9	11.4	中間型	
114	148	E−6	24号集石		石匙	チャート	4.5	7.6	0.6	23.3	横型	
	149		表採		石匙	チャート	4.3	6.5	0.7	18.8	横型	
	150	F−7		3	石匙	サヌカイト	4.3	5.5	1.3	20.1	横型	
	151	H−12		3	石匙	サヌカイト	5.1	5.1	1.3	32.1	横型	
	152	H−16	後世の遺構内に混在		石匙	チャート	4.6	3.2	0.8	9.3	縦型	
	153		後世の遺構内に混在		石匙	サヌカイト	3.6	3.1	0.8	6.4	縦型	
	154	L−10	後世の遺構内に混在		石匙	サヌカイト	4.0	2.8	0.6	4.7	縦型	
115	155	F−9		4	石匙	チャート	5.3	3.0	1.0	13.6	縦型	
	156	L−13		4	石匙	頁岩	5.9	3.5	1.0	20.0	縦型	
	157	G−8	後世の遺構内に混在		石匙	砂岩	9.1	6.6	1.8	78.2	縦型	
	158	M−11	7号集石		石匙	サヌカイト	4.9	4.9	1.2	23.2	縦型	
116	159	N−14		3	石匙	サヌカイト	4.7	4.9	1.2	14.4	縦型	
	160	L−14		3	石匙	チャート	5.2	2.6	0.8	10.9	縦型	
	161	G−9	28号土坑		石匙	サヌカイト	5.2	2.4	1.0	10.8	縦型	
	162		C区調査区		石匙	サヌカイト	5.9	4.2	0.9	13.7	縦型	
	163	K−8	後世のPit内に混在		石匙	チャート	5.3	3.3	1.0	14.7	縦型	
	164	L−12		3	石匙	サヌカイト	4.4	2.7	0.7	11.2	縦型	
	165	G−14	横転層		石匙	チャート	7.5	4.3	1.3	34.4	縦型	
	166	E−7		3	石匙	頁岩	8.5	3.2	0.9	33.6	縦型	
117	167	K−13		3	石匙	チャート	5.7	2.8	0.6	11.2	縦型	
	168	J−12		4	石匙	チャート	5.5	3.0	1.0	18.3	縦型	
	168	J−12		4	石匙	チャート	5.5	3.0	1.0	18.3	縦型	
	169	M−18		4	削器	チャート	7.6	5.1	1.5	45.3		
	170	F−5		4	削器	頁岩	8.2	3.6	1.5	42.2		
	171	F−8		4	削器	チャート	5.8	7.3	1.5	50.5		
	172	P−18		4	削器	チャート	5.1	4.4	1.3	27.0		
	173	E−9		4	削器	チャート	3.5	5.5	1.2	17.4		
118	174	P−15		4	削器	チャート	7.4	4.2	1.4	29.7		
	175	E−8		4	削器	チャート	7.0	3.7	1.1	28.3		
	176	G−15	後世の遺構内に混在		削器	チャート	6.6	5.7	2.0	66.9		
	177	G−11		4	削器	サヌカイト	11.0	6.4	2.0	111.1		
119	178		C区調査区		削器	チャート	5.3	4.0	1.4	30.9		
	179	G−9		4	削器	頁岩	7.0	4.4	1.3	40.9		
	180		P−16−3層		削器	サヌカイト	7.5	4.3	1.4	41.2		
	181	P−12		3	削器	サヌカイト	9.0	6.2	2.1	96.0		
	182	E−5		3	削器	チャート	9.9	4.5	1.9	73.9		
120	183		調査区		削器	頁岩	14.1	7.4	2.2	177.9		
	184	Z−6		3	削器	チャート	7.9	5.1	2.0	73.3		
	185	G−8		3	削器	サヌカイト	8.2	3.7	1.5	44.7		
	186	F−7		4	削器	チャート	5.0	4.6	1.5	25.7		
121	187	L−6	後世のPit内に混在		楔形	チャート	2.6	1.8	0.5	2.5		
	188	F−8		4	楔形	黒耀石	2.3	2.4	0.8	3.7		
	189	L−12		4	楔形	チャート	2.9	2.7	0.8	5.9		

第13表　石器観察表（３）

（単位：cm、g）

挿図番号	番号	グリット	備考	層	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	形態	備考
121	190	J−13		4	石錐	チャート	2.7	2.6	0.7	4.4		
	191	G−13		3	石錐	安山岩	6.0	1.5	0.8	4.9		
	192		後世の遺構内に混在		石錐	チャート	3.5	1.2	0.9	3.1		
122	193	G−13	調査区		石斧	砂岩	14.1	2.9	3.0	263.8		
	194	G・H−8	後世の遺構内に混在		石斧	流紋岩	13.4	2.3	2.3	228.3		
	195	D−8		3	石斧	砂岩	13.9	2.5	2.5	180.2		
	196	W−1	後世の遺構内に混在		石斧	砂岩	12.1	2.3	2.3	176.3	ナデ型有肩	
	197		後世の遺構内に混在		石斧	砂岩	11.5	2.5	2.2	137.5	ナデ型有肩	
	198	N−12	後世の遺構内に混在		石斧	粘板岩	12.2	1.8	1.7	154.0	ナデ型有肩	
	199		B区調査区		石斧	砂岩	15.9	2.8	2.7	256.4	ナデ型有肩	
	200	E−5	後世の遺構内に混在		石斧	砂岩	13.0	1.8	1.8	156.7	バチ型	
	201	L−10	後世の遺構内に混在		石斧	砂岩	19.5	12.1	2.9	571.1	バチ型	
123	202	J−13		4	石斧	安山岩	15.9	3.1	3.2	485.5	バチ型	
	203	M−15	横転層		石斧	砂岩	18.0	3.4	3.4	571.2	丹柵型	
	204	N−14		3	石斧	砂岩	12.6	1.9	1.9	130.5	丹柵型	
	205	N−21	後世の遺構内に混在		石斧	砂岩	12.0	1.7	1.7	82.7	丹柵型	
	206		B区調査区		石斧	頁岩	10.8	2.3	2.4	156.3	丹柵型	
	207		後世の遺構内に混在		石斧	砂岩	11.3	1.6	1.6	87.6	丹柵型	
	208		B区調査区		石斧	砂岩	10.0	2.0	2.0	101.7	丹柵型	
	209		後世の遺構内に混在		石斧	砂岩	14.0	1.7	1.2	131.1	丹柵型	
	210	F−9		3	石斧	砂岩	11.9	2.0	1.5	117.9	丹柵型	
	211	B−0	後世の遺構内に混在		石斧	安山岩	11.7	1.5	1.3	117.0	丹柵型	
124	212		C区調査区		石斧	砂岩	14.9	2.0	2.0	142.1	丹柵型	
	213	L−15	後世の Pit 内に混在		石斧	砂岩	14.6	1.9	1.9	150.0	丹柵型	
	214		後世の遺構内に混在		石錘	砂岩	7.5	4.9	1.7	33.3		
	215	P−13		3	石錘	安山岩	6.3	4.3	1.0	139.4		
	216	N−13	A区調査区		石錘	砂岩	7.9	5.0	2.1	91.6		
125	217		A区調査区	4	石核	サヌカイト	3.4	6.2	4.9	94.4		
	218	J−16	後世の遺構内に混在		石核	チャート	2.6	5.6	2.6	43.0		
	219	J−16	後世の遺構内に混在		石核	黒耀石	3.3	6.1	4.7	104.2		
126	220		B区調査区		石核	安山岩	2.5	6.7	5.1	73.8		
	221	G−8		3	石核	チャート	4.5	5.7	2.1	65.2		
	222	G−11	29号土坑		石核	チャート	2.2	5.9	5.5	73.0		
127	223	F−9		4	石核	チャート	5.9	5.8	5.0	34.2		
	224		撹乱(横転層)		石核	サヌカイト	4.1	4.5	3.7	144.3		
	225	L−13		4	石核	黒耀石	3.2	4.2	3.1	74.4		
	226	J−12		4	石核	黒耀石	4.2	5.5	5.5	149.1		
128	227	G−9	27号土坑		石核	流紋岩	5.9	6.7	4.7	144.8		
	228	K−12		4	摺石・叩石	砂岩	11.2	8.9	5.4	990.0	第1類	表面摺り偏面摺り・叩き
	229	F−16		4	摺石・叩石	砂岩	4.1	4.5	3.4	88.1	第1類	表面摺り偏面摺り・叩き
	230	M−15	横転層		摺石・叩石	砂岩	6.2	5.7	4.2	213.7	第1類	表面摺り偏面摺り・叩き
129	231	N−12		4	摺石・叩石	砂岩	5.3	4.9	4.1	165.6	第1類	表面摺り偏面摺り・叩き
	232	J−13		3	摺石・叩石	砂岩	11.9	8.3	5.7	880.0	第1類	表面摺り偏面摺り・叩き
	233	H−15		3	摺石・叩石	砂岩	10.3	8.4	5.7	770.0	第1類	表面摺り偏面摺り・叩き
	234	F−9	52号集石		摺石・叩石	砂岩	10.1	8.9	4.7	610.0	第2類	表面摺り側面叩き
	235	N−12	横転層		摺石・叩石	砂岩	10.2	8.0	4.1	550.6	第2類	表面摺り側面叩き
130	236	J−13		4	摺石・叩石	砂岩	9.8	8.9	5.0	610.0	第2類	表面摺り側面叩き
	237	M−8		4	摺石・叩石	砂岩	11.3	8.2	6.9	1000.0	第3類	側面摺り・叩き
	238	J−13		4	摺石・叩石	砂岩	10.5	8.1	3.8	510.9	第3類	側面摺り・叩き
	239	M−12	20号集石		摺石・叩石	砂岩	9.7	8.0	5.2	180.0	第3類	表面摺り・叩き
	240	L−12		4	摺石・叩石	砂岩	6.6	4.6	3.5	610.0	第4類	表面摺り・叩き、偏面叩き
131	241	J−11		4	摺石・叩石	砂岩	10.8	8.3	5.0	670.0	第5類	表面叩き、偏面摺り・叩き
	242	N−11		4	摺石・叩石	砂岩	8.9	6.7	4.6	383.7	第5類	表面叩き、偏面摺り・叩き
	243	L−13		4	摺石・叩石	砂岩	11.0	8.9	3.7	520.8	第6類	全面叩き
	244	H−14	4号集石		摺石・叩石	砂岩	10.5	7.5	5.1	680.0	第7類	一部叩き
	245	E−7	30号集石		摺石・叩石	砂岩	9.7	8.3	5.2	620.0	第7類	一部叩き
132	246	L−6		4	摺石・叩石	砂岩	7.7	7.4	6.7	481.9	第7類	一部叩き
	247	P−16	後世の遺構内に混在		摺石・叩石	砂岩	10.5	3.9	3.4	213.7	第8類	一部叩き、棒状
	248	N−12		4	摺石・叩石	砂岩	12.3	5.3	3.3	376.2	第8類	一部叩き、棒状
	249	P−16		4	摺石・叩石	砂岩	19.0	6.1	4.0	810.0	第8類	一部叩き、棒状
	250	G−12		4	摺石・叩石	砂岩	26.7	10.4	3.5	1500.0	第8類	一部叩き、棒状
133	251	P−15		4	凹石	砂岩	15.6	9.6	4.5	1100.0	第9類	
	252	A−0		3	凹石	砂岩	9.3	7.8	4.8	484.9	第9類	
	253	L−12		4	凹石	砂岩	12.9	8.7	5.7	990.0	第9類	
	254	K−12		4	石皿・台石	凝灰岩	34.8	17.4	8.1	4200.0		
134	255	M−13	横転層		石皿・台石	砂岩	50.4	34.8	9.6	294000.0		
135	256		横転層		石皿・台石	砂岩	24.0	22.5	8.7	7340.0		
	257	E−8		3	有孔石製品	千枚岩	4.5	6.7	0.6	28.5		
	258	F−8		4	有孔石製品	千枚岩	5.8	8.5	0.6	45.6		
136	259	J−9	後世の Pit 内に混在		有孔石製品	千枚岩	4.8	4.7	0.8	116.1		
	260	E−8		4	有孔石製品	千枚岩	7.7	6.8	0.6	54.2		
	261	F−3		4	有孔石製品	砂岩	7.1	7.1	0.9	70.7		
137	262	M−14		4	有孔石製品	千枚岩	9.7	8.3	0.9	30.3		
	263	E−8		4	有孔石製品	砂岩	2.7	2.1	1.0	9.4		
	264		B区調査区		異形石器	黒耀石	2.0	1.9	0.7	1.8		
	265	J−15		3	異形石器	チャート	1.5	1.9	0.4	1.0		異形石鏃
	266	N−15		4	異形石器	黒耀石	1.5	1.5	0.4	0.5		異形石鏃
	267	J−12			異形石器	サヌカイト	1.6	1.4	0.4	0.6		異形石鏃
	268	Z−5		4	異形石器	黒耀石	1.7	1.8	0.4	0.6		異形石鏃
	269		B区調査区		異形石器	黒耀石	1.8	1.3	0.4	0.6		異形石鏃
	270	H−8		4	異形石器	チャート	2.2	2.0	0.5	1.7		異形石鏃
	271		後世の遺構内に混在		異形石器	チャート	3.4	2.3	0.7	0.6		トロトロ石器
	272	F−7		3	異形石器	安山岩	4.0	2.1	0.9	4.4		魚形石器
	273	N−16		4	異形石器	黒耀石	1.3	1.8	0.5	1.8		糸巻形石器
	274	K−11		3	異形石器	黒耀石	1.9	3.0	0.6	3.8		糸巻形石器
138	275	L−14	後世の Pit 内に混在		異形石器	砂岩	4.2	7.0	1.3	44.9		分銅形石製品
	276	H−16	後世の Pit 内に混在		砥石							砥石線刻型(石斧転用)

第Ⅶ章　科 学 分 析

第Ⅶ章　科 学 分 析

灰塚遺跡出土の耳栓に塗彩された赤色顔料について

鹿児島県立埋蔵文化財センター　大久保 浩二

灰塚遺跡の縄文時代早期包含層から出土した耳栓に、赤色顔料と考えられる物質が塗彩されていた。耳栓は縄文時代後・晩期に盛行し赤色顔料が塗彩されたものが多いが、縄文時代早期の耳栓としては、鹿児島県上野原遺跡出土の耳栓と並んで貴重な資料である。今回その赤色顔料について粒子の形状の観察と成分の分析を行い、顔料の種類の同定を試みたのでここに報告する。

縄文時代の赤色顔料には、ベンガラと水銀朱が考えられる。ベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3）、水銀朱は硫化水銀（HgS）であり、粒子の形状に特徴がある。今回は主にＥＤＳによるＸ線分析（成分分析）で検出される元素をもとに、赤色顔料の種類の同定を試みた。

分析に使用した機器は、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡（低真空タイプ・5300ＬＶ）とエネルギー分散型Ｘ線分析装置（ＥＤＳ・ＪＥＤ－2001）である。

１．観察対象

灰塚遺跡出土の耳栓２点（第98図 **558・559**）に塗彩された赤色顔料（試料１・２）と、押型文土器１点（第98図 **562**)(試料４）・条痕文土器１点（第98図 **563**)(試料３）に認められる赤色顔料状物質。

耳栓は２点とも、耳栓を焼成後に赤色顔料を塗彩したものである。押型文土器に認められる赤色の部分は胎土に同化しており、焼成前に施されているものである。特に試料４を採取した土器は、断面で観察すると表面に薄い土の層があり、その下に赤色の層が存在している。

実体顕微鏡で顔料の付着状況を観察した後、ごく微量を針先でサンプリングし試料とした。

２．電子顕微鏡像の観察

耳栓から採取した試料１・２を電子顕微鏡で拡大すると、長さ５～10μmで太さ１μm程の細長い円筒形をした粒子が密集しているのが観察された（写真１・２)。これらはベンガラの粒子にみられるもので、これまでパイプ状粒子またはパイプ状ベンガラと呼ばれていたものである。

土器から採取した試料３については、特定の粒子を捉えることはできなかった。

試料４では、特にＦｅのピークが高い部分に粉末状の微粒子が観察された（写真３)。前述のパイプ状とは異なっているが、試料４においてはこれが赤色物質の粒子であると考えられる。

３．Ｘ線分析

Ｘ線分析はＥＤＳにより加速電圧20ｋＶ、有効時間100秒、取り出し角度20.2°、作動距離20.0㎜の測定条件で行った。その結果、試料１・２・４からはＦｅが顕著なピークとして検出された（第１・３図)。Ａｌ・Ｓｉのピークも検出されたが、これらは土壌等の汚染であると考えられる。試料３は他に比べてＦｅのピークが低く、Ａｌ・Ｓｉの高いピークが認められる（第２図)。

４．分析結果

以上の分析結果を総合して判断したものを下記の表に示す。

耳栓に塗彩されている試料１・２はパイプ状ベンガラであると考えられる。試料３はＦｅのピークも低く、明確な粒子も確認できないことから、いわゆるベンガラとは異なるようである。赤土のようなものではないかと考えられる。試料４はＦｅのピークが高く検出されることからベンガラであると考えられるが、粒子の形状や塗彩の状況に疑問が残り、即断することはためらわれる。

(試料)	(器種)	(遺物番号)	(X線分析)	(粒子の形状)	(顔料の種類)
1	耳栓	558	Feの高ピーク	パイプ状	ベンガラ
2	耳栓	559	Feの高ピーク	パイプ状	ベンガラ
3	条痕文土器	563	Al·Si·Feのピーク	不明	赤土？
4	押型文土器	562	Feの高ピーク	微粒子	ベンガラ？

5．考察

灰塚遺跡出土の耳栓に塗彩されていたのはパイプ状ベンガラであることが判明した。赤彩された耳栓の類例をあげると鹿児島県国分市上野原遺跡 1)と福山町城ケ尾遺跡 2)しかなく、南九州の縄文早期の特殊性とその広がりを示す好資料となった。

また耳栓は2点とも滑車状のタイプであるが、塗彩状況を観察すると片側の平坦面から中空の部分のみにベンガラが塗彩されている。ピアス式に耳に装着した場合、外から見える部分にのみ赤色塗彩を施し、耳にはまる部分や外から見えない内側には塗彩されていない状況が伺える。ベンガラが貴重であったとも考えられるし、「見えるところだけでよい」という装飾に対する縄文人の意識の一端とも受け取ることができる興味深い資料である。

押型文土器と条痕文土器の赤色については、明確にベンガラ（酸化第二鉄）と判断できるものではなかった。しかし見かけ上赤く見える「赤土」等を、彩色を意図して塗彩したものであれば、本田光子氏のいう「広義のベンガラ」3)と捉えることができる。今回の資料は部分的であったため、意図したものかどうか見極めは困難であった。

ベンガラによる赤色塗彩は縄文早期前葉の岩本式土器まで遡る 4)が、押型文の赤彩土器は大分県の川原田岩陰遺跡から胴部内面にベンガラが塗彩されているものが1例報告されている 5)のみである。筆者は実見していないが、焼成前に塗彩し、焼成により器面に固着させたものであるとのことである。類例が少なく今後の資料の増加を待ちたい。

参考文献

1）大久保浩二　「南九州の赤色顔料」　奈良国立文化財研究所　保存科学研究集会発表　　要旨集
1997

2）鹿児島県立埋蔵文化財センター発行　「埋文だより　第18号」

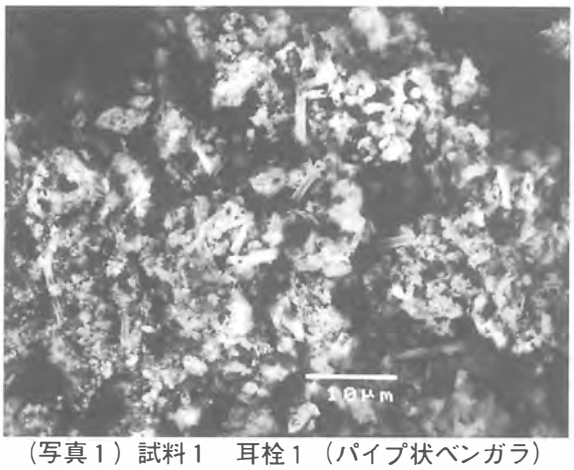
3）本田　光子　「出土ベンガラの多様性について」　日本文化財科学会　第14回大会　研究発表要旨集
1997

4）大久保浩二　「南九州における縄文時代の赤色顔料について－日本最古級の赤彩土器－」
日本文化財科学会　第15回　大会研究発表要旨集　1998

・稿了後、宮崎県・塚原遺跡から、縄文時代草創期の隆帯文土器内面にベンガラが塗彩されたものが出土したと発表された。

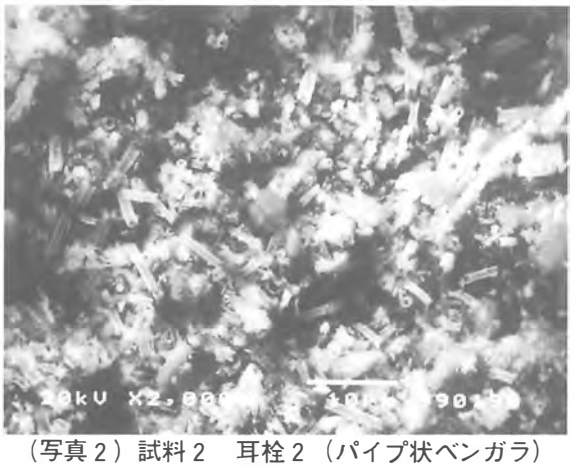
5）永嶋　正春　「川原田岩陰出土の赤色顔料」　おおいた考古第9・10集　1998

電子顕微鏡像（SEM像）



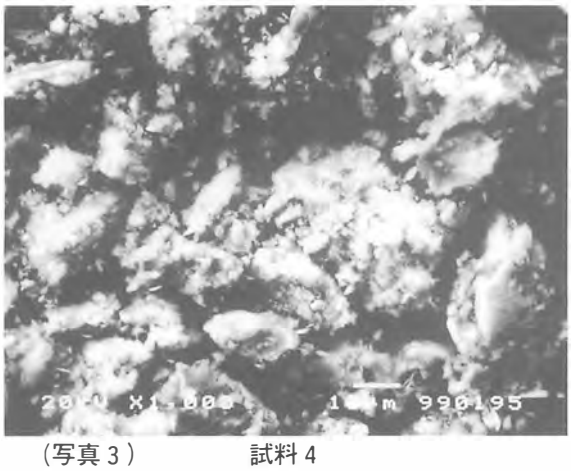
（写真１）試料１　耳栓１（パイプ状ベンガラ）

558



（写真２）試料２　耳栓２（パイプ状ベンガラ）

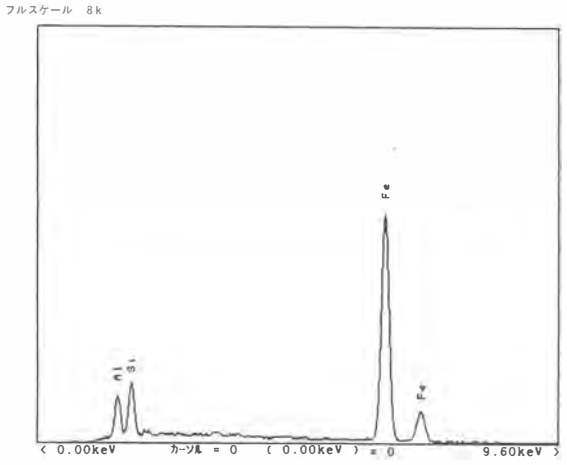
559



（写真３）　　試料４

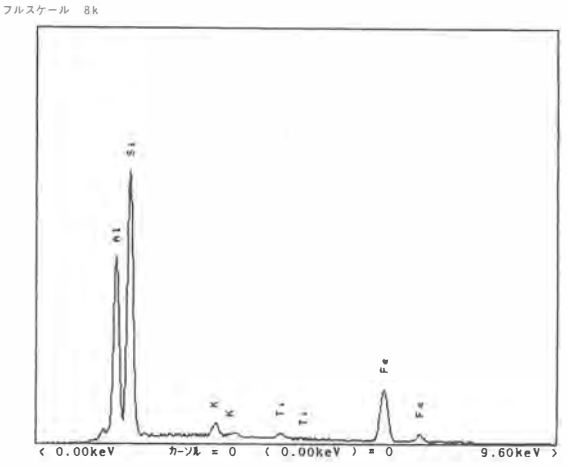
562

X線スペクトル図



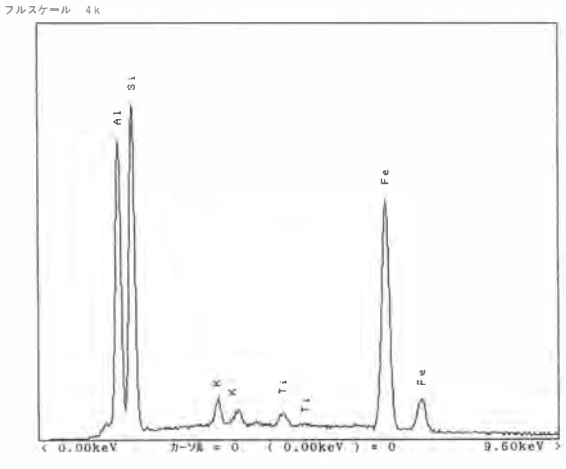
（図１）　試料１　耳栓

558



（図２）　　試料３

563



（図３）　　試料４

562

第142図　赤色顔料の SEM 像と X 線スペクトル図

第Ⅷ章　総　括

第Ⅷ章 総 括

本報告書は一部に第３層出土の遺物を含んでいるが主に基本土層第４層出土の遺構・遺物を中心とした報告である。以下、遺構・遺物を中心に述べていきたい。

１ 遺 構

本遺跡の遺構として集石・土坑があり、その出土層と遺物から縄文早期に比定される。集石は68基・土坑は35基が検出され、集石と土坑を同一地形図上で配置（第143図）した。

（１）集石

集石は現場での肉眼観察であるが火受石で構成されていることが多いことから、なんらかの火気使用事例を想定できるが本遺跡において集石は本来の目的について不明な点が多く、本稿ではその形態を６に分類するに留めた。その割合はＡ類16％・Ｂ類15％・Ｂ－１類９％・Ｃ類13％・Ｄ類26％・Ｅ類21％である。全体の1/4を占めるＤ類は土坑を伴わない集石で、遺跡中央部よりやや西に集中区が見られ遺構「土坑」間に挟まれた状態で存在している。土坑を伴う集石は遺構「土坑」との区別困難であったが出土礫の状態で区別した。

（２）土坑

土坑はその性格が想定される遺構として、火気使用の可能性が想定される仮称「燃焼土坑」がある。燃焼土坑は９基検出され、検出土坑中1/4を占める。遺跡中央部から西側に集中区が見られる。遺構は隅丸楕円または不定形状を呈し、また焼土面は床直上で検出され、遺構の中で端部や突出した部分に見られる。またこの焼土面は遺構北側に位置する傾向がみられ、遺跡は台地上に形成されている。風は台地を吹き抜け、特に冬期の北風には閉口した。焼土面方向と風を結びつけるのはあまりにも短絡的であるが、自然条件の一つとして提示しておきたい。

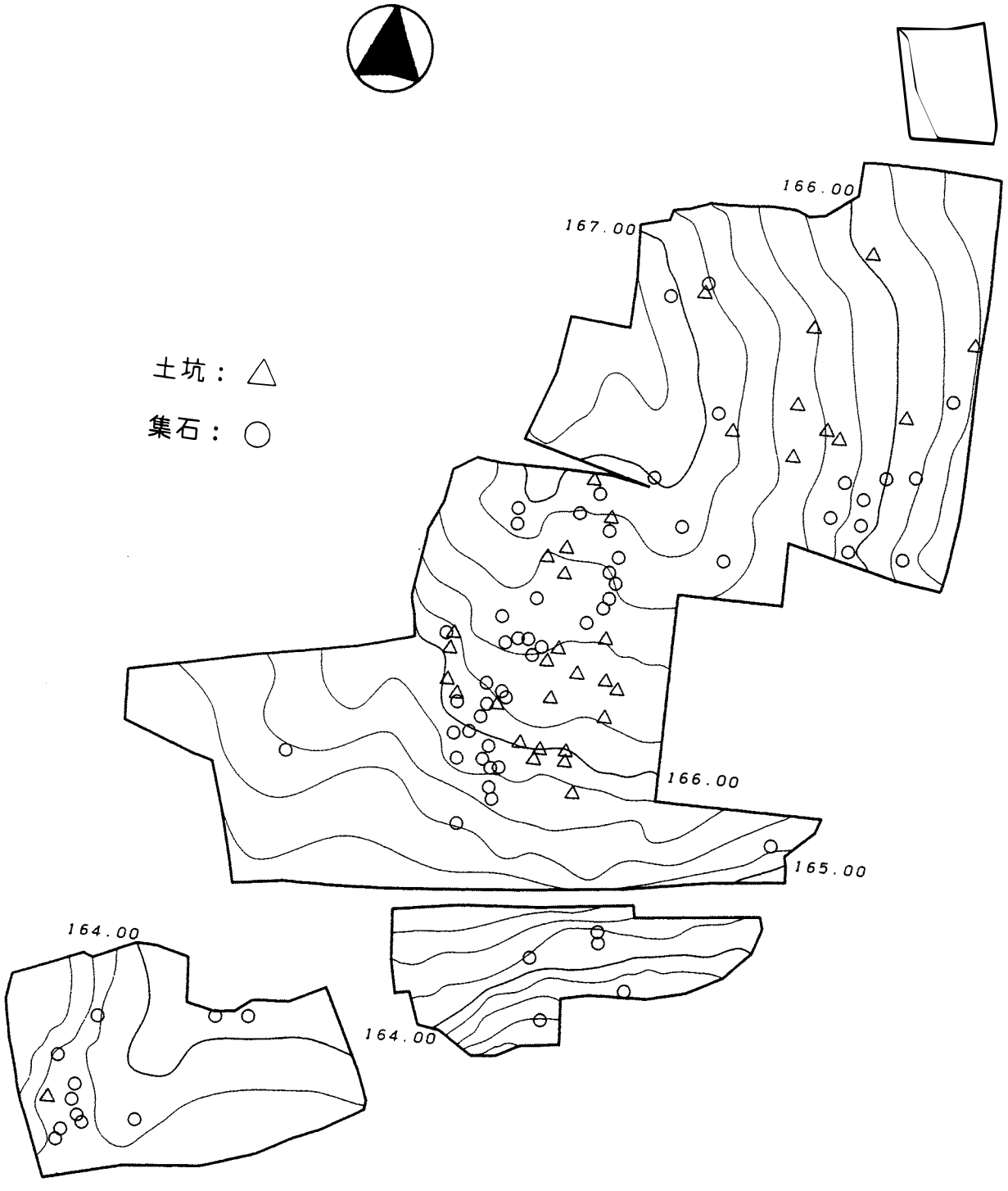
配置図（第143図）から遺跡中央と北東に標高167～165.6ｍ・幅50～60ｍの範囲に遺構の集中区が見られる。また両集中区に挟まれるように東側に未調査区があるが、ここに遺構の存在が想定されると、その全体は馬蹄形を呈している遺構群が形成される。

２ 遺 物

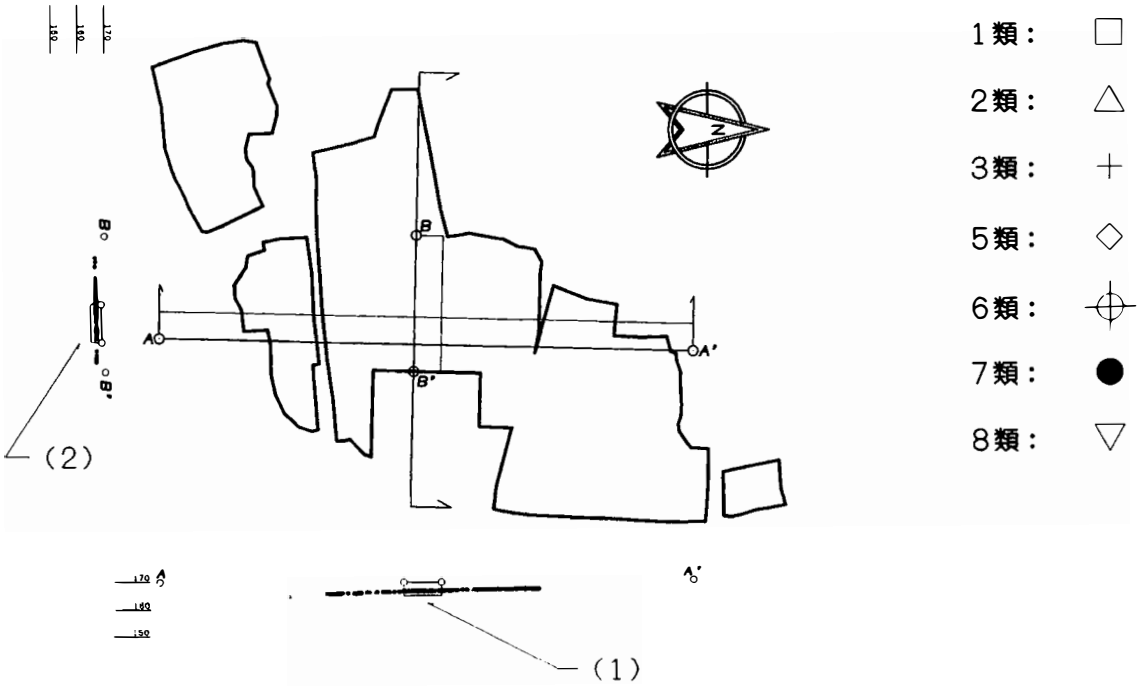
（１）土器

出土土器は縄文早期と後・晩期にピークが認められる。層の入り乱れにより３層に早期土器の出土も見れる。早期土器は10類に分類した。

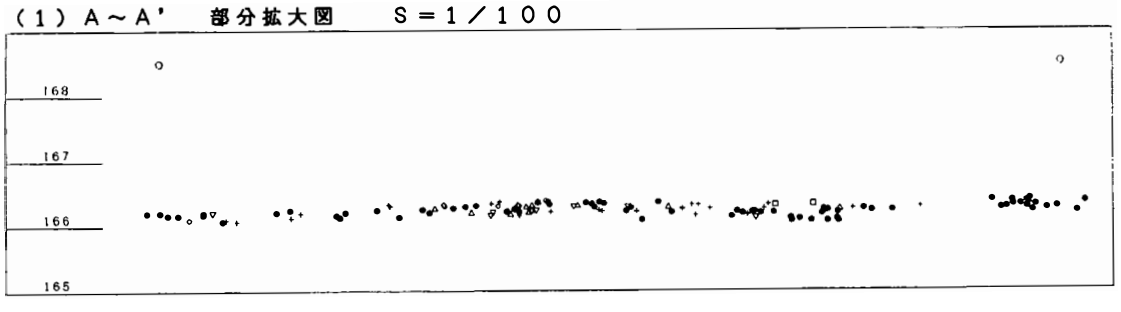
第１類は条痕を持つ土器群で円筒形を呈する器形と想定される。第２類は楕円文と山形文の押型文を持つ土器群で山形文の底部は平底を呈することから高山寺押型文系であろう。第３類は胴部形状から二形式が存在し、屈曲の強い胴部を持つ（２）型は鹿児島県大口市手向山遺跡出土資料を標式とする手向山式土器にあたり、ゆるやかな胴部の（１）型は田村・ヤトコロ式で人吉市岩清水遺跡出土資料を標式とする石清水式土器に相当するか。この３類の小型が第４類であり、３類の系譜を示唆するのが第５類の土器群で（第76図参照）、第５類は人吉市天道ヶ尾遺跡出土資料を標式とする天道ヶ尾式土器群である。天道ヶ尾遺跡は本遺跡に近在しており、直線距離にして11㎞程である。台地上に形成されていることなどは本遺跡に類似した遺跡である。第６類は出土数40点と少数であったため、分布図での傾向でも不明な点が多いが、鹿児島県国分市平栫遺跡出土資料を標式とする平栫形式の土器である。第７類は塞の神式系土器類で第３類土器に次いだ出土数である。その文様から２分類し、その分布では貝殻系は遺跡中央部に、撚糸系は中央部と北東部に分布傾向が見られる。第８類は壺型土器で壺の特長が理解できる口縁部と胴部資料で判別を行い484点が確認された。やや浮いた状態ではあるが27・28・34号土坑から壺型土器が出土し、27・34は本遺跡で仮称した燃焼土坑である。また29号土坑から出土の壺型土器 **16**は完形に近い資料で遺構中央部でほぼ床直での出土で、土化粧の痕跡も見られる。壺の出土が土坑から見られた事例からその用途を想定する資料提示となるか。第９類及び10類については直接的な生活具と考えに



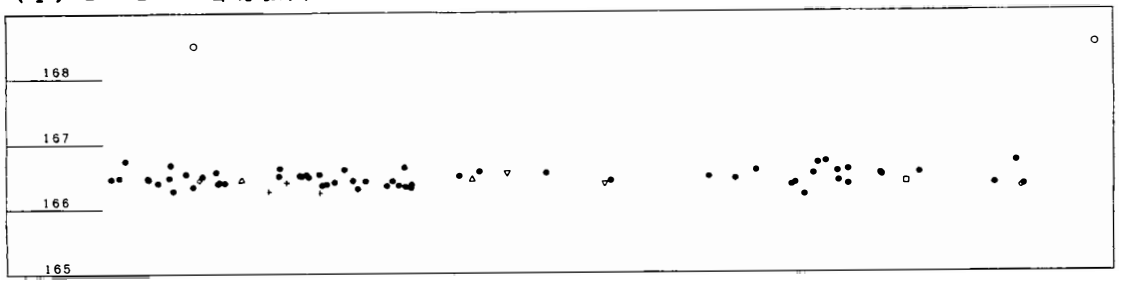
第143図　遺構配置図



（1）A～A'　部分拡大図　　S＝1／100

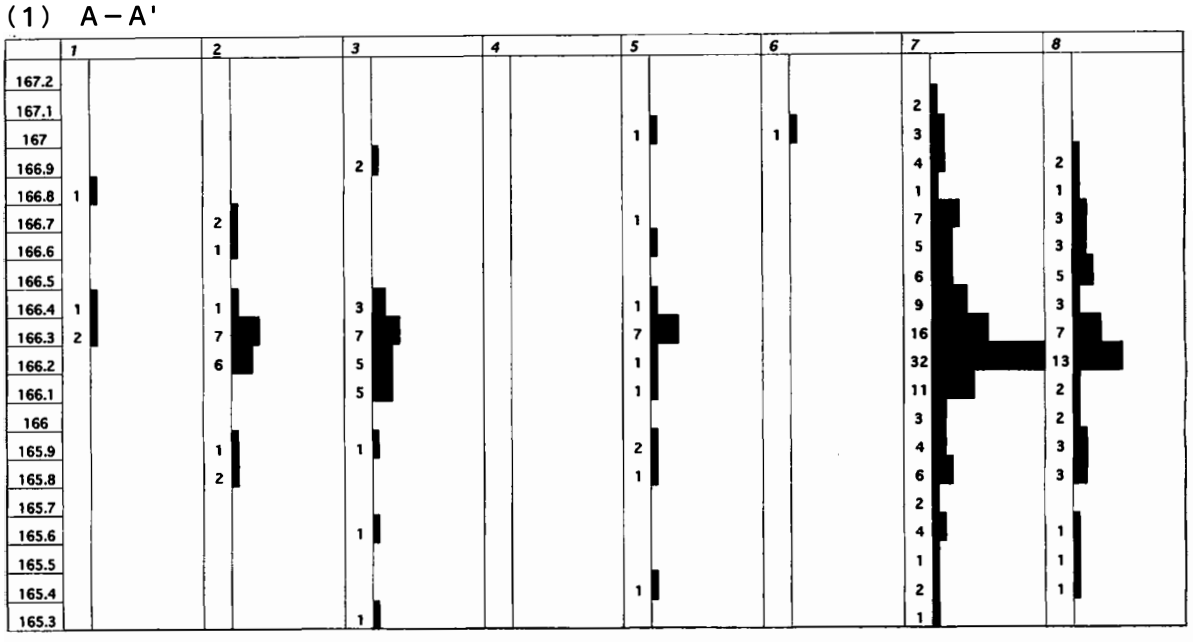


（1）B～B'　部分拡大図　　S＝1／100



第144図　早期土器分布断面図（1）

（1）　A－A'



（2）　B－B'

第145図　早期土器分布断面図（２）

くい遺物類で、特に耳栓は断片資料であるが４個体が出土し、内３個体に赤彩色が見られる。出土数からでも特異な遺物であり、また彩色が見られることから日常生活とは異なる「ハレ」的な要素を持つものか。

もう一つのピークの後・晩期は遺物資料だけであるが、土器分布図（第103図）が遺跡中央と北東側に集中が見られ、早期遺構・遺物の分布の状況と類似していることから両時期はほぼ同じ領域を示している。

第144・145図について

第144・145図は早期土器の堆積状況把握のため４層断面を数値化したものである。遺跡の南北軸Ａ－Ａ´ライン・東西軸Ｂ－Ｂ´ラインから10mの範囲に出土した土器の一部の出土状態（約15m）を図化したものが144図の（１）Ａ－Ａ´・（２）Ｂ－Ｂ´の部分拡大図である。この（１）Ａ－Ａ´・（２）Ｂ－Ｂ´での出土土器を類別に数値化したものが第145図で縦軸は出土レベル値・横軸を土器類別を示している。（１）Ａ－Ａ´では１～８類土器は標高166.1～166.4m

間に集中している。細分化すると第３類土器は166.1～166.3mにピークがあり第５類は166.3mにピークを持つことから、レベル値からでは第３類土器と第５類土器は同レベルか第５類土器がやや上位に位置する。また（１）Ａ－Ａ´では１類から６類まではゆるやかな右上がりの傾向が見られる。（２）Ｂ－Ｂ´は（１）Ａ－Ａ´ほどレベル幅はないが各166.5mを中心としてピークが見られる。

以上ことから、第77図で第３類土器と第５類土器の変遷を試みたことも踏まえ、第３類土器（手向山式）⇨第５類土器（天道ヶ尾式）と考えてみたい。また第７・８類は幅広いレベルでの出土であるためその存在期間は他の土器群に比べ長期化の様相を呈する。従ってレベル値からでは早期土器は短期型の押型文系譜の２～５類までのグループと長期型の第７・８類のグループと大きく２系統の傾向がある。２断面の資料であるため全体像の把握までは困難であるが、飽くまで実験的な試みとして捉えた。

（２）石器

旧石器は６点が確認された。殆どが撹乱中であり、一部に４層出土の遺物も見られ、旧石器の包含層の可能性も想定されることから、可能な限り本遺跡内での旧石器包含層の確認に努めたがこれを捉えることができなかった。

異形石器は使用目的が不明であり、また出土数も僅かであることから生産的な道具とは考えにくい。この傾向は土器では早期土器第９類の異形土器・第10類の耳栓を含む彩色土器がこれに該当するか。

早期と後・晩期の時代区分がうまくできなかったが、土器分布図から両時代はほぼ同じ領域にある。石器は出土物組成率を一応の参考としたい。尖頭器0.3%・石鏃18%・石匙８%・削器14%・楔型１%・石錐0.5%・石斧７%・石核21%・摺石叩石凹石28%・有孔石製品２%・異形石器２%・砥石0.1%・である。石器分布図は石器（１）(第139図)「生産に関与するもの」(尖頭器・石鏃・石斧・石錘）・石器（２)(第140図）２「加工等に関与するもの」(石匙・削器・楔形・石核・摺石 叩石 凹石・台石）・石器（３)(第141図）３「目的不明」(有孔石製品・異形石器）に大別した。

参考文献

『遺跡』熊本県文化財調査報告書第集
大田　幸博　1994　「原始」『深田村誌』熊本県深田村
大田　幸博　1990　『城馬場・高城跡Ⅶ郭遺跡』熊本県文化財調査報告書第110集
木崎　康弘　1998　「中九州西部押型文土器の編年」『九州の押型文土器』
木崎　康弘　1986　『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県文化財調査報告書第80集
木崎　康弘　1987　『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告書第90集
木崎　康弘・古城史雄・木村元治　1997『堂園・中尾・別府遺跡』熊本県文化財調査報告書第159集
木崎　康弘　1995　「原始」『須恵村誌』熊本県須恵村
九州縄文研究会編　1998　『九州縄文土器編年の諸問題』
新東　晃一　1981　『中尾田遺跡』　鹿児島県文化財調査報告書第15集
鶴嶋　俊彦　1988　『村山・闇谷遺跡』　人吉市教育委員会
土肥　　孝　1997　「№369　縄文時代の装身具」『日本の美術２』
西住欣一郎　1988　『鼓ヶ峰遺跡』熊本県文化財調査報告書第96集
西住欣一郎・本山千絵　1990　『天道ヶ尾遺跡（Ⅱ)』熊本県文化財調査報告書第111集
宮坂　孝宏　1993　『白鳥平Ａ遺跡』　熊本県文化財調査報告書第127集
宮坂　孝宏　1994　『白鳥平Ｂ遺跡』　熊本県文化財調査報告書第142集
横手浩二郎　1998　「手向山式土器の細分と編年試案」『九州の押型文土器』

写 真 図 版

遺跡空中写真（南東方向より）

第10類　耳栓・彩色土器

図版１　遺跡空中写真・第10類　耳栓・彩色土器

A型集石（60号集石）

B型集石（67号集石）

B－1型集石（21号集石）

図版2　集石

C型集石（3号集石）

D型集石（26号集石）

E型集石（63号集石）

図版3　集石

土坑 1 ・19号土坑焼土面

土坑 2 ・27号土坑遺物出土状況

土坑 3 ・29号土坑遺物出土状況

図版 4　土坑

第 3 類土器(1)型

第 3 類土器(2)型

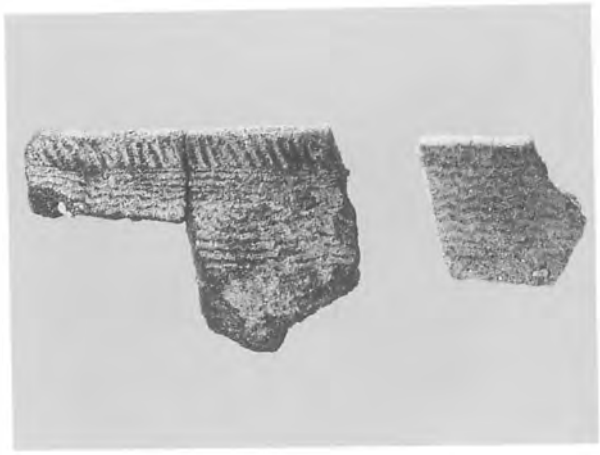
第 7 類土器

第 8 類土器

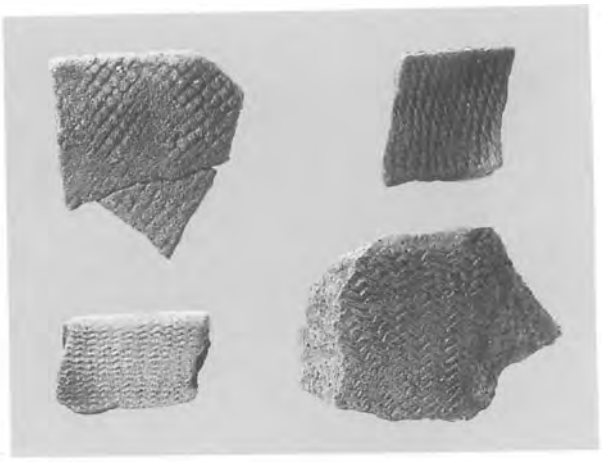
第 7 類土器

第 8 類土器

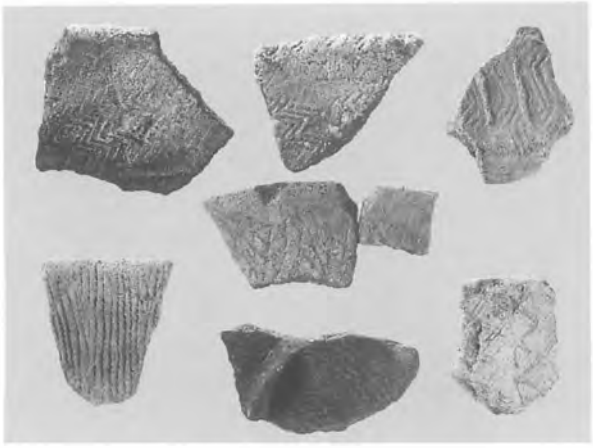
図版 5　縄文時代早期土器（1）



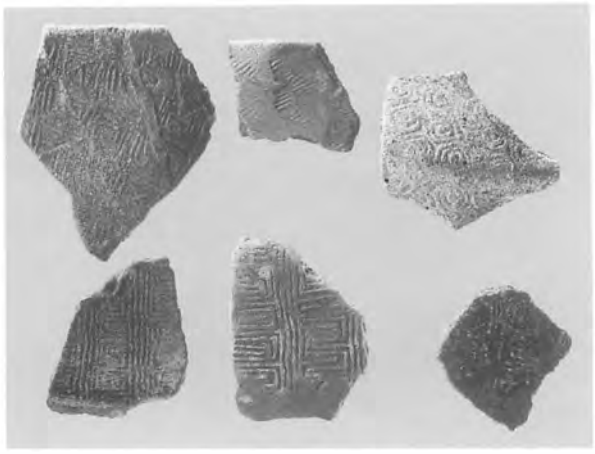
第 1 類土器



第 2 類土器



第 3 類土器

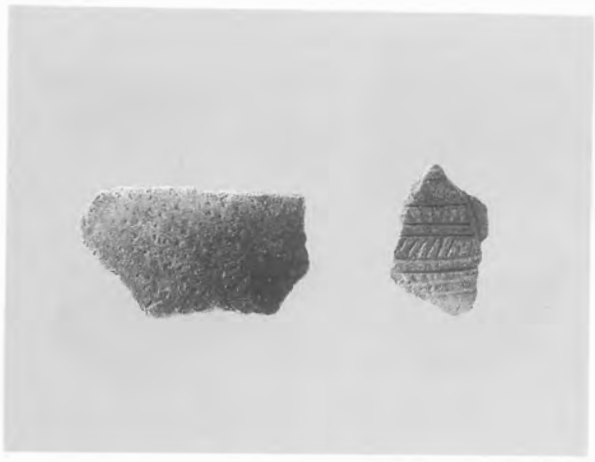


第 3 類土器

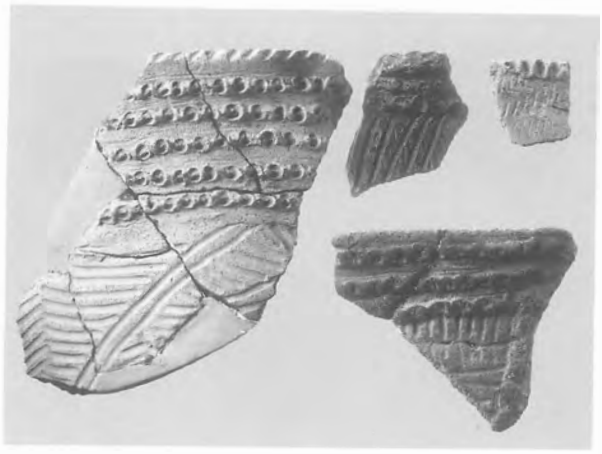
第 3 類土器

第 3 類土器

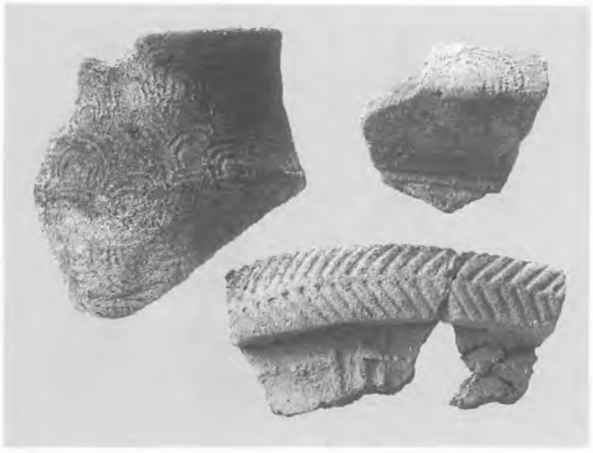
図版 6　縄文時代早期土器（２）



第 3 類土器



第 5 類土器



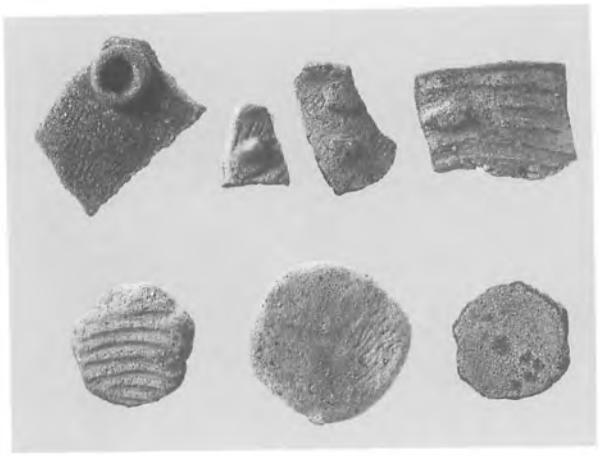
第 4 ・ 6 類土器

第 7 類土器

第 7 類土器

第 8 類土器

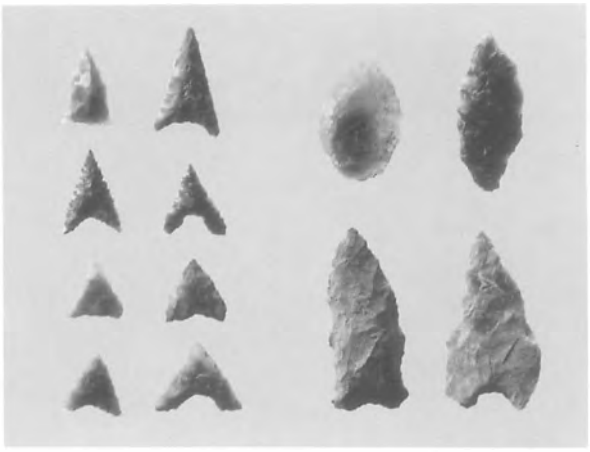
図版 7　縄文時代早期土器（ 3 ）



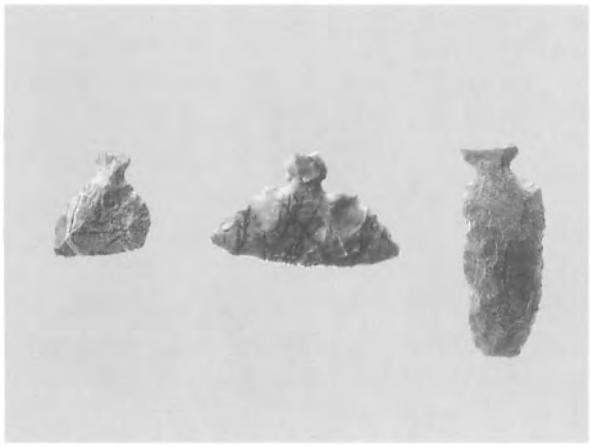
第 9 類土器（異形土器）

縄文時代前期～後・晩期

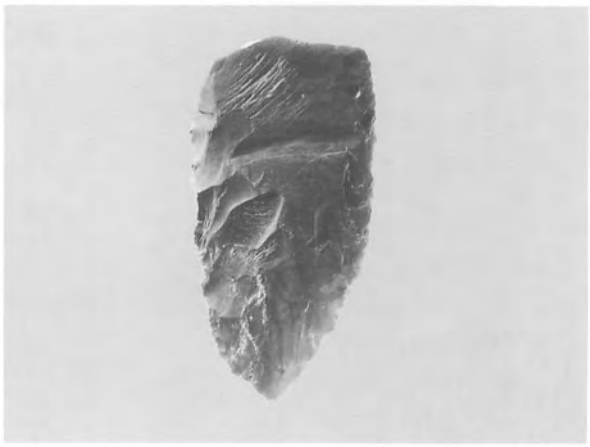
旧石器



石鏃・尖頭器



石匙



削器

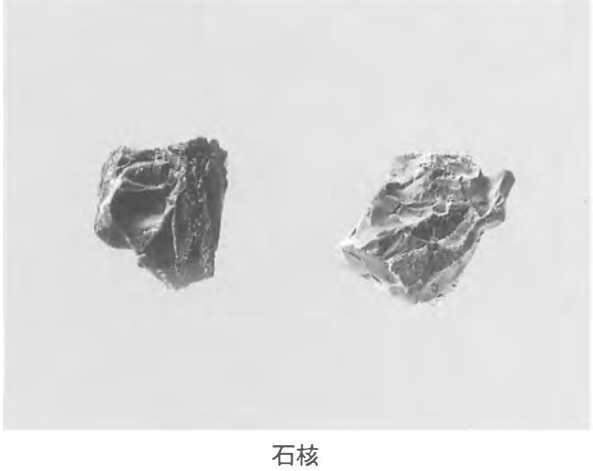
図版 8　異形土器・縄文時代前～後・晩期土器・石器（１）

楔形　　石錐

石斧

石斧

石錘　　砥石



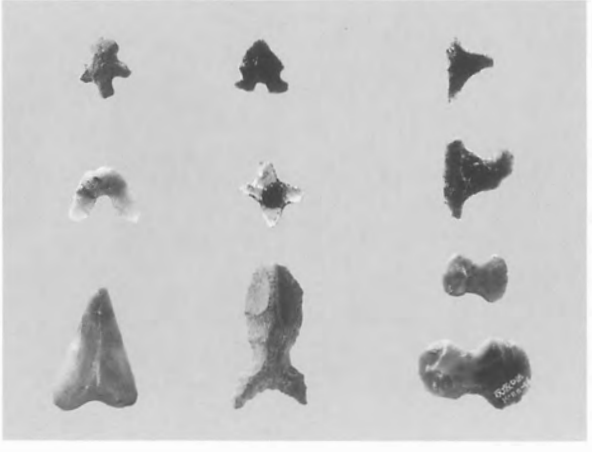
石核

擦石・叩石

図版 9　石器（2）

叩石

有孔石製品



異形石器

図版10　石器（３）

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ハイ ヅカ
書 名	灰 塚 遺 跡
副 書 名	球磨郡深田村大字灰塚所在の遺跡
巻 次	Ⅰ
シ リ ー ズ 名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第187集
編 集 者	山下 義満
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所 在 地	〒862－8609 熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号
発 行 年	2000年３月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ハイヅカ 灰 塚	クマグンフカダムラオオアザ 球磨郡深田村大字 ハイヅカ 灰塚		509－026	32°15′10″	130°53′42″	1993.8. ～ 1997.8.	20,000m²	県営畑地帯 整備事業

所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物
灰塚	包含地	旧石器時代		三稜尖頭器 削器他
	集落	縄文時代	集石・土坑	押型文土器 耳栓 石鏃 石匙 削器他

編　集　後　記

本報告書は足かけ５年に渡る調査の第１巻である。調査では球磨盆地のほぼ中央の丘陵に位置した本遺跡で、この地方の独特の四季の移り変わりを充分に感じることができる調査でもあった。整理作業中では同僚の後ろに位置した時など、スリッパの足形を見て、「あぁ、山形文だな。ピッチ幅が狭いな。」と独り言を呟いていた。数万点に及ぶ遺物と検出した遺構から様々な情報がそこに提示されていたのであるが、力不足の感は拭えない。しかし私の拙い調査と整理から、本報告書の刊行に至るまで多くの方々に助けを頂いた。ここに記して感謝申し上げたい。

現場作業員

愛甲和孝　愛甲雅也　秋丸康幸　東克幸　泉田俊彦　稲田フヂ子　今坂ノブ子　岩永京子　岩水清人
岩水秀子　岩水秀幸　上村勝典　上村シズミ　梅田博史　大塚貴博　長船アイ子　落合敬喜　落合武子
落合武士　落合美喜　落合康子　久保田真路　久保田千草　久保田マサ子　久保田美帆　倉元知明
黒木えり　桑原カズヨ　古賀トキエ　五島悦子　五島正敏　笹野正治　沢村修一　清水尚心　清水繭子
須崎研博　諏訪原イツカ　高田光子　高田ミヨ子　田山恒文　田山裕康　田山泰広　田山勇一　恒松伴司
恒松リツ　冨田清文　富永清子　中村賢二　中村規子　中山優子　鍋田耕作　西シズ子　西セイ子　西秀宗
西秀幸　西嶋ひとみ　野田晃仙　橋口幸枝　橋口スマ子　橋口千代美　橋爪亮彦　浜口健吾　濱口敏行
林裕也　別府真也　松延徹　松山求　万東輝　万江剛　溝口裕介　溝辺琢磨　溝辺美代子　簑田サカエ
簑田裕子　村上晃勇　村崎さとみ　村崎さゆり　山本リキ子　吉田キク　吉村征二　和田渓

整理作業員

荒牧陽子　今福英子　上田律子　尾方マサミ　大塚トシ子　大畑康子　緒方千代子　可児真由美　境美恵子
陶山千鶴子　瀬口絹代　乗富祐子　田中洋子　平岡真紀子　山下千栄子　山切律子　山野孝子　吉本清子
米倉五月

熊本県文化財報告書　第187集

灰塚遺跡（Ⅰ）

平成12年３月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
熊本市水前寺６－18－１
〒860－8570　☎096－381－9211

印刷　印刷協業組合　サン・カラー
熊本市御領２丁目19－13
〒862－0935　☎096－381－8131

11 教 教文
② 004

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 187 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：灰塚遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日